読了
昭和二三、八、二七、

アララギ叢書
第七篇

齋藤茂吉著

童馬漫語

齋藤書店刊行

自序

明治四十三年から大正七年に至る、足かけ九年の間に、をりにふれて書いたはかない漫筆をあつめて、この一巻をつくつた。かつて『童牛不服。童馬不馳』の句を見つけて喜んだことがある。しかし僕は今、嘗て書いた文章を振返つてみて、羞恥と寂寥とを感ぜざることを得ない。そして僕は未だ僕の目ざす境への初途にあるのに、すでに凡ての事物に對する心の競ひが失せかかつてゐる。大正八年六月十七日。長崎にて記す。

目次

目次

獨語と論爭

2

童馬漫語

童馬漫語

1 獨詠歌と對詠歌

『かへりけるひと來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて』この歌は、直接對者にむかつてもの云つてゐるのであるから、いまこれを『對詠歌』と名づける。併し『對詠歌』は對者にむかつてものいふのであるから、對者に對する其の情調が表はれてゐなければならぬといふのは無論であるが、いま予の云はうとするのは、もつと細かいのである。予の謂ふこの『對詠歌』は、いかにも直截に緊密に對者にむかつてゐて、餘所餘所しくないといふことである。つまり對者にむかつて物言ふに、餘所見をしない、對者以外の第三者に色目を使はないといふことである。色目を使ふとは例へばかうである。今ここに二人が談笑してゐる。そしてまた第三者が側で默つ

て聽いてゐるとする。前の話する一人が直接關係なき第三者には少しも顧慮することなく、自分の對者にのみ熱心に話してゐると、對者との關係も密接であつて、相互に躍動するのであるが、これに反して對者にむかつて談笑して居るのに、折々第三者にむかつて色目を使ふ。この擧止は厭味であると予の友が云つたことがある。それを『對詠歌』の論に應用するのである。このことは『對詠歌』として極めて大切な事であるにも拘はらず、鑑賞者は無論、作者も餘り注意しない。それゆゑ、色目を使つた餘所餘所しい歌が出來るのである。對者に關係のない餘計な技巧までも弄するに至るのである。予はこの事に氣付いた。『いつはりも似つきてぞする何時よりか見ぬ人戀ふに人の死にせし』。この歌も予の謂ゆる『對詠歌』の一つの好例であつて、そして作者の女が對者の男に向つて、思ふ存分いひたいことを云つてゐて、第三者などに少しも顧慮してゐない。それであるから、ひとりでに讀者の胸にひしひしとこたへる力が出來てゐるのである。

『おもはぬに至らば妹がうれしみと笑まむ眉曳おもほゆるかも』この歌は、對者たる女を念中に有つてはゐるが、直接女にむかつて物言つてゐるのではない。謂はば獨語の色調を帶びたものである。作者がただ獨りで喜んでゐるところである。この種の歌を予は『獨詠歌』と名づける。獨語そのものの性質はすでに面白いのであるが、この場合も他に顧慮などをすれば面白くない。

飽くまで獨語でなければならぬ。李紳の詩に『鋤禾日當午。汗滴禾下土』といふ句があるが、予の『獨詠歌』はこの農人の額から滴る汗のやうなものである。この獨語的歌については、誰ひとり突つめては言及しなかつた。それゆゑ一般讀者などを眼中に置いて、ことわり過ぎたり、說明し過ぎたり、端書にしてよいところを無理に歌に詠み込まうとしたりした。いはゆる新派の歌にはこの弊が多いのである。然るにいま予の言は之に及ぶ。予はだんだん目ざめるのである。如上の二つの區別は、作歌に際しての心の据ゑ方から出發してゐるのであつて、單純な分類と訓詁の目から觀ると、すこしく勝手がちがふのである。（明治四十三年十月二十八日）

2 感と歌

淚をながして感じた事も、いざ歌になつて見ればその感じとは餘程かけ離れたものの出來ることは度々經驗するところである。出來あがつた歌を讀み返して見、感じを內省して見るとき、出來あがつた歌は如何にも虛僞のやうな氣がして不滿足を感ずるのであるが、それでも吾等は弱い。出來そこなひの歌でも直ぐ安心してしまひがちである。

この感じと、出來た歌とのかけ離れる事には、一つ二つの原因を考へる事が出來る。まづ第一に、歌の形式から來る拘束であるが、これは或程度までは成行に任せてもよいと思ふ。和歌には矢張り何處までも和歌らしい處がなければならぬといふのは自然の約束であるらしい。これは狹いながらも予の經驗によつて結論したのであるが、今までいろいろと破壞運動を試み、人も試みたのであるけれども、矢張り佳作を吟味して見れば、和歌本來の形式の有する面白味と親しい關係があるやうに思はれる。第二に、自分の腕に油が乘つて居る時は、腕に任せてその方に都合のよい樣にばかり作歌してしまつて、大切な感じなどは何處かに行つてゐる。この事は餘程注意する價があると思ふ。競作などの場合には大概これであつて、夜の十二時ごろからは神經も過敏になり、觀念聯合作用が活潑になつてくるために、後から見てどうしてこんな奇拔な事がいへたかと不思議がり、人も褒めて呉れるから、よい氣になつてしまふけれども、その奇拔といふのは存外表面的なのが多いのであつて、まことにあぶないのである。『感動』などいふことも、その自稱感動に甘えて、おぼれるとあぶないのである。第三に、流行を追ふといふ事が自らの感じに忠實でないのは言ふ迄もないけれども、また反對に他は盡く顧みないで、何だ異趣味か、などと頭から概念的な趣味で片付けてしまふのもあぶないに極まつてゐる。予は予の周圍の先輩諸同人か

ら『異趣味者』の名稱はもらつても、願はくは予の直接の感に忠實であり專念でありたいのである。

（明治四十三年十一月）

3 漫筆

電車に乘つて、後ろの方を見てゐると、長い線路があらはれて來る。このとき何かしらん心よいやうに感ずる。そして遠く細くなる線路を見ると、微かなさびしさがわく。電車の進む方を見てゐると、線路がだんだんと消えてゆく。さうして少しも物足らぬやうな氣がしない。ぼくは毎日この心持を味つてゐる。

茶番でも落語でも、諧謔で腹の皮をよらせるが、とくに骨折らねばならぬところになると、一寸咳拂ひをして咽を清める。その咳がいかにも眞面目で、それにつゞく滑稽語と少しも調和しない。調和をやぶるとはこの種の咳である。折角笑つたのも急にいやになつてしまふ。

停車場の入口に人力車がずらりと竝んでゐる。袢天のなかから手拭をとほして兩手で脊中の汗をふいてゐたひとりの車夫が、『けふは女種（をんなだね）ひとりも乘つけねえ……』といふのが耳にはひつた。

あとの言葉は分からない。そこを通つて、往還に出て角をまがらうとするとそこにも車夫がゐる。『楠木正成の馬みたやうに筋ばつてな……』かうひとりのいふのがきこえる。あとは分からない。僕は通り過ぎてしまふからである。

ぼくが熱を病んだときのことである。病院のベツトのうへに目をつぶりながら、あの魚卵に似たはうき草の實が食べたい食べたいとそのことばかり思つてゐた。親も師も友も、ぼくが死にはしまいかと心配してゐてくれた頃である。

ぼくが十になるとき、墓場につゞいて杉林があつた。そこに死人を燒く石垣のかこひがあつた。あるゆふべ人が燒けてゐた。ぼくの兄さんと兄さんの二人の友だちが、竹槍をこしらへた。竹槍をもつて燒けてゐる死人にねらひをつけた。竹槍があかい炎をくぐつて死人の腹あたりを突きとほした。竹槍をそのままにして、みんなが畠だの田だのを越えて一もくさんに逃げた。

4　いのちのあらはれ

漫然おもひを凝らしても、直ぐ歌にはならぬ。ただ玆にいふのは、漫然と思ひを凝らす場合で

あつても、夜も更け世界が靜まり行いて、すこしく空腹をおぼえる頃は、氣も澄みわたつて來て、不思議なほど歌が澤山出來ることがある。從來のいはゆる『奇拔な歌』や『天分の豐かな歌』はかかる場合に出來ることが多いのである。從來の一部の評家はかういふ歌に向つて讃嘆の詞を惜しまなかつた。そして、眞に天來の聲である。天馬空をゆく底の奔放極まりなき、常俗を超越した豐かにして華やかなる詩人的詞想であると讃した。このやうな時は作者も得意である。評家も安心して寢るのである。しかしこの事實は今まですこし作歌に苦勞したわたくしには悲しむべき事實である。心靜に省ると、このやうな歌ほど『自己』を離れてゐるのは少ないのである。奇拔だと見えるのは單に本心を遠ざかつた手先きの淺い運動に過ぎない。自己のやみがたい『生』に根ざした調ではなくて、手の先きの運動を基としたその加速度運動に過ぎないことが多いのである。觀念聯合の敏活であるやうに見えるのは、おぼろげな過去の今の自己に直接でない印象か、さなくば讀書などから盲目的にとり入れた事柄、ほかのひとの作物などから這入つた語句などの再現による、不緊密な聯合に過ぎない場合が多い。短歌は直ちに『生のあらはれ』でなければならぬ。從つてまことの短歌は自己さながらのものでなければならぬ。一首を詠ずればすなはち自己が一首の短歌として生れたのである。まことの歌人は一首を詠ずるのに身の細るをもいとはぬ

であらう。から信じてわたくしは、從來の意味に於ける自己を遠ざかつた一切の『奇拔な歌』『豐かな空想歌』を否定しようと思ふのである。

世にはひとしき人はなく、抽象を約束する單元的意識の感覺に於てすでに、感覺の情調(ゲフユールストーン)に於てすでに個人特有のものがあるに相違ない。わたくしは自己をいとほしまねばならぬ。自己の『いのちのあらはれ』なる短歌はこの意味に於ていとほしいのである。されば作歌の際は飽くまでこの『いのち』をいとしみ、ふみ据ゑて、その表現に際して嚴かでなければならぬ。わたくしの、作歌に苦勞するといふのは、この嚴肅な表現と親しい關係に立つのであつて、流俗の歌を模倣しひとの作物の一句二句を取つて補綴して安住するやうな腐心ではないのである。發聲言語はその高さ強さ特に音色に於て個人特有である。國民のあひだの通有な詞語も、切に『いのち』から滲みいづるに及んでは、すでにおのがものとなるのである。わたくしが手の先きの淺き運動からなる『空想歌』を排し、流行の歌を排し、作歌の態度に於て『側目をふるな』としばしばいつたのは、このことわりに外ならぬ。

『歌は眞(まこと)をのぶるものなれば、必ずおのがものならむやうにこそあらまほしけれ』と村田春海は云つてゐる。おもふに私の經驗・結論も發明もこの言を出でない。この言を見つけてありがた

くもうれしく思うた。憾むらくは春海はこの言の幾分だも實行して吳れなかつた。この言をほんたうに實行して吳れる歌人は誰であらう。（明治四十四年四月十六日）

5　短歌の形式

短歌の形式は抒情詩の形式である。これは既成の短歌から歸納した論で、これは世人も云うてゐる。ただまことにこの境を味ふ歌人は幾たりゐるであらう。短歌の形式は詠歎の形式である。この境を切に體驗する予は正にこの事實の發明者である。この結論のもとに、いはゆる『詞書』の效用を論じた、從つて、新詩社及び歌壇一般の、事實上の『詞書廢止論』を否定する。

（四四・四）

6　アララギに對する評

「詩歌」六月號に載つた、『五月の歌壇』は、尾山篤氏の筆になつたものである。「アララギ」

の歌に對して、矢張り『祝言のやうな』などと云つてゐるが、もつと突きつめた、强烈な進撃の爲方がないものか。古語云々といふことは、例の分からず屋の香川景樹が、遠の昔に言つた寢言と思つてゐたのに、明治になつてから與謝野寛氏が、自分の爲事をはじめる便利な言分として、『擬古』といふことをよく云つたものだ。そして僕等の先進の歌を難じたものだ。そのうち何時の間にか知らん振して萬葉調の歌を詠んだり、『かも』を使つたりしたものだ。それから「帝國文學」記者なども、『死語』とか何とか云つて、上の空で喋々したものだ。今の進步した歌壇に、あらためて尾山氏から、『オールドラングエジ』云々の評を聞かうとは、思ひもうけぬことであつた。今頃になつて、古語だの死語だのといふのは時代後れである。（四四・六）

いつぞや、「文章世界」の記者から、『この派の人々はその聲が餘り大きすぎる爲めに、自分の歌を隱蔽するといふ怨みが無いでも無い』といふ注意を受けたことがある。これは適評である。僕らは今のところ、所謂『歌壇』になどは游泳してゐない。從つて彼等は僕らの歌を默殺してゐる。けれども僕らは、褒め競をして、利益交換してゐるのをいさぎよしとしない。僕らは力で行く。そのうち、知らん振して僕らの歌を褒める時期が來るに極まつてゐる。そして僕らの歌を褒めることが流行になるであらう。僕らは實は流行に趨る餓鬼が可笑しくてたまらんのだ。

7　笠女郎の歌一首

『相おもはぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づくごとし』この戯れの、小氣の利いた、あまいところがよいのである。この歌には沈痛の響などはない。それがおのづからなのである。そして、此歌は作者が獨り思に堪へがたくて詠歎したといふよりも、矢張り予の謂ふ『對詠歌』である。つまり笠女郎が家持に對つて、こんな事をいつてゐるのである。そこで此歌のよいところは、言方の奇拔などの點にあるのではなく、作者が戀人にむかつて眞にこんな事を言つた、其のおもかげや音聲までが活きてくる樣に感ぜらるゝ點にあるのである。いままで、森田義郎（萬葉私刪上卷）、佐佐木信綱（歌學論叢）、與謝野寛（明星歌話）、三井甲之（アカネ收大伴家持）等の諸氏が此歌に言及したけれども、ここ迄は行かなかつた。さうして、褒めるものは、此歌の言方の奇拔な點を褒め、褒めないものは、此歌は單に機智の歌であつて沈痛な深いものがないといふのである。これらは、『對詠歌』について突つめた理解を未だもつてゐない。

ちなみに云。笠女郎が家持に贈つた歌廿四首一所に載つてゐるが、必ずしも同一情調ではない。おもふに一時に作つたものではあるまい。そこで『餓鬼のしりへに』を味ふには、おなじところに載つてゐる廿四首中の、『君に戀ひいたも術なみ楢山の小松がもとに立ちなげくかも』『わが宿のゆふかげ草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも』『朝霧のおほに相見しひとゆゑにいのち死ぬべく戀ひわたるかも』などとは、區別して味ふべきである。どう區別するかといふに、これらの三つの如きは、對詠的であつても、『餓鬼のしりへに』の歌ほど距離が密接でなく、獨詠的の分子を含んでゐるのである。つゝましい心などを要求するならば、これらの歌に要求する方がよい。『餓鬼のしりへに』の歌の本質は、沈痛やつゝましさなどにあるのではないからである。

（四四・六）

8　食血餓鬼

青山の梅窓院境内を拔けて裏手の墓地の凹いところに、うら枯れる草を縫うて細い水が流れてゐる。杉の木に黄色い小鳥がとまつて鳴いてゐる。遠くの方で女の子のじやんけんをする聲が聞

える。眼のもとには法號のない（何某長女）といふ小さい木の墓標がある。いま、鷗外作「百物語」を染々と讀み終へた。己が十五六年前、はじめて淺草三筋町に來たころ、東京に一人の若い女が居た。女の寫眞は勸工場で賣つてゐた。その女は藏前の煙突よりも、かをり佳い西洋煙草よりも、孫太郎蟲の疳藥よりも、この世に美しい人がゐると、山國から出て來た少年の己の心に染みた都會印象の一つであつた。その女は今この物語の中におとなしく坐つてゐるのだと思つた。さうすると、三筋町を中心とした己の少年の頃の過去相の一聯がおぼろおぼろと浮んで來る。己は眼を閉ぢて飽くまで柔いあどけない思出に耽つて居る。左手の甲が癢いと思つて見ると蟆子が一つ血を吸つてゐる。見つめて居ると、紅く膨れた尻が重た相に飛んで行つた。手の甲は血の滲んだ小點を中心にしてぽつりと腫れて居た。たしか小泉八雲とおもふ、かの食血餓鬼になつて印度の言葉で書いてある、寂びた墓標のほとりの青い水に轉生したなら、小さい諷刺のうたを歌ひながら知人の手を刺すと詠歎した墓場の蚊蟲ももう亡び潛む霜近い秋のゆふべに、いま人間の血を食つて腹がふくれたひとつの小さい食血餓鬼に堪へ難い『あはれ』を感じた。己は一つの小さな疵を手の甲に得て墓の木立を出た。紅い日が落ちかかつてゐる。（明治四十四年十一月）

9　漫語

炎口(えんく)を思へば深いあはれはあるであらう。

たゞ己は遠い國の Décadence と Pandemische Erotik の末の滴りが東海の國に飛んだ時、わめき寄つた黄顔細鼻の餓鬼群の臭き息吹きには、もはや堪へ難くなつた。己は彼等が末徒の象徴なる暗赤色な皮膚の爛れに觸れんよりは、うつろふ沙羅樹の花の悲しみにしみじみとして思ひ入りたい。

Vae Victis! こんな事を叫び立てゝ己の瞑想の邪魔をする人と、試みに連れ立つて、豚の Coitus を眺めて見たい。（四四・一一）

10　短歌の特質に就いての考察

短歌の特質に就いて考へて見たところが次の樣なものになつた。人から笑はれるかも知れない。

（一）短歌の形式は『詠歎』の形式である。抒情詩である。西洋詩學の言葉を借りていへば、『リイド』と見るべきものである。されば短歌は話すべきものといふよりは歌ふべき性質のものである。これは眞淵や宣長や景樹等の說と一致する。そして言語の表象的要素と音樂的要素、リツプスのいふ" Formale u. musikalische Elemente der Sprachsymbolik " が渾然として融合し一首を透して作者の心持が染々と味はれる底のものでなければならぬ、吾等は意味の奇拔とか複雜な內容などよりも情調（スチンムング）のふるひや情緖（ストレモル）のうごきが如何に表現されてゐるかを顧慮するがゆゑに從而言葉の響（クラング）とその節奏（リトムス）に重きを置くのである。この第一特質條件の根柢に立つて吾等は、尾上柴舟氏が『吾々は「である」また「だ」と感ずる。決して「なり」また「なりけり」とは感じない』の如くにして短歌を論じようとしたのを愚論だと思ふ。同時に彼は「感ずる（フユーレン）」ことに對しての內省能力のなきものだと斷ずる。吾等が短歌の言語に對して廣汎な考を持つて居ること（例へば古語を用ゐる如き）及び枕詞・序歌の如き技巧法をも否定しないのは、この短歌の第一特質を明らめてゐるからである。從來の謂ゆる敍景歌、たとへば、次のやうなものでも矢張り『リイド』とみるのである。

春がすみ流るゝなべに靑柳の枝啄ひ持ちて鶯なくも

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕影に黄鳥なくも

我が宿のいさゝ群竹吹く風の音の微けき此ゆふべかも

（二）短歌が假りに第一句から第五句迄の五句から成立つとせば、是等の五つの句は連續的であるといふのは短歌形式特質の第二條件である。ゆゑに短歌では句切の場合でもその休止は甚だ小である。『我背子はいづくゆくらむ（句切）おきつ藻の名張の山を今日か越ゆらむ』『苦しくも降りくる雨か（句切）みわの崎佐野の渡に家もあらなくに』等の句切の處では、心の運動が一時一寸そこで低徊するが、西洋の詩や新體詩の句などに於ける如く別行に分けて書くほど休止が大ではない。この第二條件は短歌形式特質の重大な部分を占めて居るものであると思ふと共に、盡くの短歌を三行に分けて書くなどは短歌を無視したものである。連續性であるといふ論は、（イ）一般の約束によれば短歌は三十一音に限定せられたる短詩であつて、而してその一首中に統一した情調を要求せざるべからざる事實がある。（ロ）限定せられたる短詩形であるからその詩形に盛るべき心的運動に著しい休止のあるは稀であり、若しあつても相互の結合が比較的密なるべき性質である。（ハ）第一句から第五句まで讀過するに要する時間の小なるため强ひて休止せしめんとするは（例へば强ひて別行に書く等）比較的效果少なきか或は一首の價値を削減する

といふ傾向がある。この論は句切は第二句第四句第五句に於て最も多かるべく、第一句第三句切れは特殊な場合であるといふ結論につゞくのである。

（三）一般から見て短歌は意味の連續性を要求する。これは第二條件と相俟つべきもので、意味に於て一見連絡なき樣な場合でも句の（音の）連續性が充分働かねばならぬといふ事になる。これは短歌の第三特質である。この事は短歌の成句相互間に直接の意味の聯絡がない場合に讀者に意味の補充をゆるす暇が無い爲である。

（四）春海が『古の短歌は單心なるものなり』といつたのは卓見であると思ふ。單心なるは純を意味し深きを意味し印象的なるを意味する。短歌は個性的の性質のものであつて、現代にあつてはすでに一般謠（ゲマインシャフツリイド）や民謠（フオルクスリード）として論ずべきものでは無いと思ふ。短歌を生むべき個人の思想を文明史の上からは今は論じない。それ等は一般の文藝批評家も論じて居るし、もつと深い學問が要るからである。（明治四十四年十二月）

11 「よ」どめの結句

世の中の、いはゆる新派の歌に、『よ』といふ助辭をもつて止めた結句がなかなかあつた。しかし予はそれが甚く嫌ひであつた。遒勁重厚の心を欲した予には、いかにも輕薄にひびいたからである。根本に於て予の心と調和しなかつたからである。しかし、古歌に見えた『よ』止めの歌は厭ではない。たとへば、「書紀」收の、

沖つ藻はへには寄れどもさ寢床もあたはぬかもよ濱つ千鳥よ

などは、一首の調べが、このやうな特殊な音樂的なものであるから、讀過の際いふにいはれぬ快感を覺えるのである。然るに謂ゆる新派の歌では、一首の調について理解がないから、西洋の詩ならば、『!』であらはすところに『よ』を用ゐた、リードルの直譯みたやうなのもあつた。正岡子規が落合直文の、『舞姫が底にうつして繪扇の影見てをるよ加茂の河水』の『よ』を評して、『見てをるよといふは少しいかがはしき言葉にて、さうかよと惡洒落でもいひ度くなるなり』と云つたが、比々として皆この類であつた。ことに其が結句のしまひに來てゐるのだからなほ輕薄

なのである。ところが、おなじ『よ』どめの歌でも、「東歌」のは、いやではない。

ま悲しみぬらくしまらくさぬらくは伊豆の高嶺の鳴澤なすよ

武藏野の小岨の雉子立ちわかれ往にし夜より夫に逢はなふよ

鈴が音の早馬うまやの堤井の水を賜へな妹が直手よ

三つのうち、最後の歌の『よ』は意味がちがふのであるが、音調のうへからは同樣に觀てよい。此等の歌には、特有の節奏があるために、語感をやぶつて輕薄にひびかないのである。このやうな節奏を理解して、模したのは本居宣長である。宣長の歌に、

家の妹に見せむともひて雲のゐるねろの櫻を手折りて來ぬよ

今はよ寢なむともへばあしびきの山の木の間よ月いで來もよ

眉引の横やまへろのさくらばな咲きのさかりはにぬ雲なすよ

といふのがある。特殊の節奏と諧調とが、われ等の心を牽付ける。重く鈍く強い心のあらはれでなくて、輕快清爽の調べである。予はかういふのも亦好むのである。なほ、「東歌」には、この『よ』にかよふ歎助辭の、『も』どめの歌で、特殊なのがあるから、あつめて書いておく。かういふ調べは、わざと出來るものではなく、おのづからにして然なつたのである。

逢へらくは玉の緒しけや戀ふらくは富士の高嶺に降る雪なすも
馬來田のねろの篠葉の露じものぬれて吾來なば汝は戀ふばそも
伊香保夫よ奈可中次下放毛比度路久麻許曾之都等忘れせなふも
たくぶすま白山風のねなへども子ろが襲著の有ろこそ善きも
水久君沼に鴨の匍ほ如す兒等が上にことおろはへて未だ寢なふも
岸崩邊から駒の行こ如す危はども人妻ころをま行かせらふも
松が浦に騷ゑうら立ち眞他言おもほすなもろ我が思ほのすも
金門田を新搔きまゆみ日が照れば雨を待と如す君をと待とも

おなじ『も』でも、意味から謂つて違つてゐるのがあつても、予は今それらを顧慮せずに集めて見たのである。或は謂ふかも知れん。これらの『よ』『も』、また一首の節奏に快感を覺えて厭味を感じないのは。古語に馴れないところから來る一種の錯感に過ぎなく、實はこれらも現代の俗謠に流るゝ一種の節奏と根本に於て異るものではないと。予云。あるひはさうかも知れぬ。ただ予の心は、そんな概論には不承知なのである。（四四・一二）

12　萬葉の數首

蟲ももう澄みゆいて、夜はいたく靜かである。「萬葉集」の短歌を、漫讀して、一寸氣づいた數首を、覺えのため書きつける。

我園に梅の花ちるひさかたの天より雪のながれ來るかも

み園生の百樹の梅のちる花の天に飛びあがり雪とふりけむ

「古今集」以下の歌集を讀むと、これらの歌の類想が多い。しかし皆駄目である。それは、このやうな稚い單純な想像を表はすのに、いかにも物體ぶつて、賢しく理窟をつけるから惡いのである。この歌のやうに、直截に無邪氣に、『天より雪のながれ來るかも』といひ、『天に飛びあがり雪と降りけむ』といふから、童幼語の可哀らしいがごとく厭味を感ずる餘裕がない。彼等は兒童が專心に遊んでゐるやうな態度で此等の歌を詠んだのであらう。村田春海が、『古の歌は、あるがまゝをいひ出で、幼くはかなきが如くにして心深し』といつたのは、その意は當つてをるとおもふ。

吾が背子を吾が戀ひ居れば吾が宿の草さへ思ひうらがれにけり

この歌も一寸かはつてゐる。一句から三句迄は目ざはりがするし、誠に下手であり、わざとらしい。併し予には其處が面白いと感じた。じれつたいと思ひながら詠んだといつた調子である。四句と五句が、いかにも稚くはかない詠歎であるから、なほよいと思ふ。疊み句はもつと精細に分類し比較して見るとおもしろいとおもふ。

馬の音のとどともすれば松陰に出でてぞ見つる若しも君かと

かへりける人來れりといひしかば殆と死にき君かとおもひて

この樣な、やさしい、女らしい、そして一向な言葉が、予には堪へがたく快くひびくのである。對話的の言葉がそのまゝ出てゐる。そこがよいのである。

たまくしげ三諸戸山を行きしかば面白くして古へおもほゆ

うば玉の夜わたる月を面白み吾がゐる袖に露ぞおきにける

この『面白い』といふ言葉は、我等が餘り普通に用ゐるところから、其後また近ごろ歌に用ゐたのは比較的少ないやうである。かういふ關係から、却つて我等の耳に現在快く響くのかも知れない。平賀元義の歌に、『鏡山雪に朝日の照るを見てあな面白とうたひけるかも』といふのがある。

能登のうみに釣ずる海人の漁火の光にい往く月待ちがてら

現代の吾等でも歌ひ相な處を、然かもこの樣な表現法でやつてゐる。

13　井上文雄の歌

森田義郎氏は、いたく井上文雄を尊敬してゐる、予も氏から氏の編輯に繋る「調鶴集抄」を借りて一讀した。文雄の歌風を一貫するのは輕妙の二字である。そして品の好い清新の歌が多い。新らしい材料で一寸他の歌人などの氣のつかないやうな細かなところを巧みに詠んでゐる。曙覽よりも輕いが才はある。歌の爲めに入牢したなどとは思へない程な歌ばかりである。熱心な勤王家だと聞いたが、何處かに品のよいやさしいところがあつた人であらう。今少しく歌を抄出する。

（四四・一二）

山河の岸の小草の薄もえ黄おしひたしたる春のみづかな

遠山は霞こめたり遠山はいよいよ遠くかすみこめたり

打かすむゆく手の道の朝じめりしめじめ雨になりにけるかな

隅田川中洲をこゆる潮先きに霞ながれて春雨の降る
うち霞む汐瀬の舟は動くとも行くともなしに遠ざかりぬる
もくづたく伏屋の門の鹽尻に白くも花の散りかかりけり
水鷄なく蘆間に浮ぶ水の沫の動くも見ゆる月の影かな
秋またぬ籬の草の一本にうつくしよしと蟬のなくなる
日盛のわら屋の庭は鳥も來ず山繭（やままゆ）かふこ薄（うと）ねぶりして
水淺き野澤の岸のなびき藻に靡きあひたる秋萩の花
み佛に水そそぐ日と里の子が寺田の畦にうつぎ折るなり
ひむがしに流れてここに法のみづ今日は佛にそそぐなりけり
霞みつゝたなゐの水にやどりくる月ふみ濁し蛙なくなり
岡越の道の小寺のつうじ垣ほろほろ散りて人影もなし

14　『熱田津に』の歌

『熱田津に船のりせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎいでな』（萬葉一 額田王）の歌について、少しく書きたい。（１）『今は漕ぎいでな』といふ言葉は、呼びかけた相對語であるに相違ない。或る一人に呼びかけた確定した意味でなくとも、又舟人らに向つて命令的に呼びかけた言葉でなくとも、とにかく相對語であるに相違ない。あるひは女王が獨語的に詠んだ言葉であると假定しても、矢張り、呼び掛の言葉である。（２）然るに、『熱田津に舟のりせむと月待てば』は記述的であり、獨詠的である。若しくは遠い友にでも云ひ贈るやうな態度である。（３）以上の二つの調和融合は、奈何の理由で我等に出來るのであるか。以上の予の疑問は、この一首の調べの優れてゐるのを度外において、意味の上での疑問である。すなはち、『いざ子どもはやも大和へ大伴のみ津の濱松待ち戀ひぬらむ』や、『月夜よし河の音清しいざここにゆくも行かぬも遊びてゆかな』などの歌ならば、意味の上からいつて、對詠歌の表はし方であるから、些少の疑問も起らぬのであるが、『熱田津に』の歌では、『舟のりせむと月待てば』のところが對詠的になつてゐないといふのである。もつとも予が今までかかる疑問を起さなかつたのは、一首の調べが自然で活々としてゐたがためであらう。誰かの解明を要望する。（四四・一二）

15　作歌の態度

君は近ごろ短歌の形式論などばかり書いて威張りくさつて居るが、一體あんな事を考へながら短歌を作るのか。成程。實は己が歌を詠むときは些ともあんな事は考へてゐない。併しあの形式論も己から出たのだから、つまりは己の作物と合致しなければならんわけだ。

こんな問答から、『作歌の態度說』のやうなものを云ふ氣になつたのである。ただ予の作歌態度の說は、予の作歌經驗から得た斷片記述に過ぎない。態度說の如きは自己の經驗を云ふより他に行き途はないであらう。從つて說はおのづから單ならざるを得ない。又論としてつまらぬものとなるのが通例である。予は二三度作歌の態度に就いて簡單にいつてゐる。併しそれはつまらぬ。それよりも古來既成の短歌を誦し味つて、一つの弖爾乎波の分類を完成しただけでも、論としては興味あり有益であると思ふ。予がこれまで書いたものゝ多くは、既成の短歌をば一作物と觀ての論である。從つて論が客觀的になり、表現法や形式などに就いて云々するに至るのは自然の行方である。予を目して單純な技巧論者と做すのは見の淺なるものである。

予が短歌を作るのは、作りたくなるからである。何かを吐出したいといふ變な心になるからである。この內部急迫（Drang）から予の歌が出る。如是內部急迫の狀態を古人は『歌ごころ』と稱へた。この『せずに居らゝぬ』とは大きな力である。同時に悲しき事實である。方便でなく職業でない。かの大劫運のなかに、有情生來し死去するが如き不可抗力である。予が『作歌の際は出鱈目に詠む』と云つたのはこの理にほかならぬ。

予は嘗て、『短歌は直ちに「生のあらはれ」でなければならぬ。まことの短歌は、自己さながらのものでなければならぬ。一首を詠ずれば卽ち自己が一首の短歌として生れたのである。まことの歌人は一首を詠ずるのに身の細るをもいとはぬであらう』と云つたことがある。少し氣が引けるが、その後作歌當時のことを省みると、是等の言も盡くは妄でないやうである。一首なり連作數首なりを詠歎してしまつた後の心は、やみ難い心の搖ぎを吐き出してしまつた後の心は、恰もかの Ejakulation の後のやうに一種の疲れをおぼえる。

透徹した自己客觀は鈍根の堪ふるところでない。それゆゑ予はおのれの分身をつくづくとながめて、かの淨玻璃にむかふが如く淚を落さねばならぬ。予の歌は予の分身なれば、時たま自らの歌を讀返して、なるほど此は自分かとなつかしむことがある。いとしけれども醜さの暴露である。

予は萬人に示さむがために歌は作りたくない。作歌の際は願はくは他人を眼中におきたくない。『無常の世の短き生涯に、願はくはまことの己の一部を殘したい』おのれに親まむがためである。

（明治四十五年一月）

16　歌ことば

短歌に於ける言語の調は、吾等の內的節奏さながらであるときはじめて意義をもつ。その言語には古語・現代語などの外的差別は要らぬ。かくの如き論は既に陳腐である。それにも拘はらず、歌人のもろもろは此點を體驗してゐない。そこで吾等に向つて、『古典に沒頭した頭には近代語の自然と之に伴ふ新しき聲調の響とは解し得られまい』などといふに至るのである。

吾はもや安見子得たり皆人の得がてにすとふ安見子得たり

思はぬに至らば妹がうれしみと笑まむ眉引おもほゆるかも

この二つは、共に男の歌であつて、ともに嬉しい情緒を歌つた戀歌である。しかも作者の感情の調によつて、表現された一首には、各おのづからなる特殊の調がある。短歌に於ける言語の調

は、概念を離れて刹那刹那の流轉動律の調たるべきことは、この二つの短歌を味うても分かる。

足引の山がはの瀬の鳴るなべにゆつきが岳に雲たちわたる

我が宿のいささむら竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも

ともに天然を詠じた歌である。しかも作者が天然と相抱化し、天然と同じ鼓動を打つに及んで、表現されたる一首には、各おのづから特殊の調がある。

短歌の詞語に、古語とか死語とか近代語とかを云々するのは無用である。そんな暇あらば國語を勉強せよ。そして汝の內的流轉に最も親しき直接なる國語をもつて表現せよ。必ずしも日本語のみとは謂はない。それ以外の一切は無意義である。吾等の短歌の詞語は必ずしも現代の口語ではない。それが吾等には眞實にして直截である。吾等が血脈の中には祖先の血がリヅムを打つて流れてゐる。祖先が想に堪へずして吐露した詞語が、祖先の分身たる吾等に親しくないとは吾等にとつて虛僞である。おもふに汝にとつても虛僞であるに相違ない。その虛僞をも敢てして、なほ近代語・現代語などいふ外的差別見に囚はれてゐる汝が業因のありさまは、恰も乞食の斷食に相似のものである。（四五・一）

17　連作

『短歌連作論』の最初の唱道者は、伊藤左千夫氏であるけれども、連作の實例は「萬葉集」からある。連作のおこるのはおのづからの現象であつて、人工的拘束ではない。從つて短歌は連作でなければならぬといふ如き單純な理窟はない。それにも拘はらず人は空論を好む。吾等は、もつと深く、連作のおこる必然的狀態、連作全體と各首との關係、その表現の法、單獨歌との比較などに就いて味ひ考へねばならぬ。又單獨もしくは二三首の歌に詞書のある作物と連作との比較連作と詞書との關係などについて、もつと根本の研究が欲しいやうな氣がする。（四五・二）

18　歌の鑑賞

短歌の鑑賞について、いろいろな用意が大切であるが、ここに書くのは、一首を吟味するに際して、作者はなぜかういふことを言はずに居られなかつたか、如何なる內部急迫から、このやう

な表現をしなければならなかつたかを吟味することである。（四五・二）

19　子規の書簡

予は前に短歌形式の根本特質を論じて、『短歌の形式は詠歎の形式である。この境を切に體驗してゐる予は、正にこの事實の發明者である。』などと云つた。なぜ『發明』などと云つたか。少しく心中忸怩たるものがある。しかし當時の予にとつては僞ではなかつたのである。當時の歌壇には、象徵歌、印象歌、生活歌などをいふ人があつても、短歌形式の根本特質については何等の說も出なかつた。それで、短歌の形式の事を云々すると、すぐ『形式論者』の一語を以て排し去つたものである。その時に當つて、予は既成短歌の分類と、予の作歌經驗から、如上の結論を得たのであるから、實際嬉しかつたに相違ない。そして、短歌は抒情詩であると論じた人が幾らもあつたに拘はらず、予の結論は、もつと深い處まで達したやうに思つたのである。をかしいやうな話である。ところが今から十二三年前に、正岡子規が歌の事を論じて、『歌に繪の如きが爲めに面白きものと、繪の如くならざるが面白きものと二種あり』といひ、そのつゞきに、

『右の如き意見は、一昨年も今年も少しも變り申さず候。只一昨年と今年と少しく考の變りたるは、短歌は俳句の如く客觀を自在に詠みこなすことの難き事。又短歌は俳句と違ひて、主觀を自在に詠みこなし得る事。此の二事に候、一昨年頃は、俳句に詠み得る景色は、何にても三十一文字に入れ得べきやうに信じ候へしかども、實際經驗を積むに從ひ、短歌は俳句の如く輕快なる微細なる景色を詠み難きを發明致候(下略)』(明治三十三年四月「心の華」第三卷第四號。坂井久良岐氏宛書信)などと云つてゐる。當時、「明星」の第二號か第三號かで、與謝野鐵幹氏が、此言を暗に冷笑してゐるし、服部躬治氏も、今頃になつて短歌が主觀を詠ずるに適するなどといふのは遲い。俺などは最初から歌は主觀に始まつて主觀に終るものだと信じてゐた、といふやうなことを云つた。子規は飽くまで實際經驗から得た結論でなければ承知が出來なかつたのである。それゆゑ、『發明』といふやうな語も子規にとつては眞實であつたのである。この事は予にとつて極めて興味ふかい。なほ井上文雄も『歌は人々本性の風體ありといふは予はじめて心附きたる』などと云つてゐるが、こんな明白なことでも本人にとつては、『發明』であつたのである。おもふに歌の道は悟入であるから、「短歌作法」などを鵜呑にしても實は分からないのである。悟入は個人的なものであつて、人に強ふることは必ずしも出來ない。悟入は心の跳躍である Sprung である。予は

予の自負言を今は少しく離れて見てゐる。しかも自身予の前言を嘲笑することを欲しない。（四五・三）

20 結句の考察

短歌形式の根本特質と結句との關係について、『短歌の結句は、詠歎の語もしくは詠歎的餘情を含む語を以て結ぶのは自然の行方（ゆきかた）である』といふことを許容するならば、先づ研究しなければならぬのは、次のやうなものである。（1）詠歎の助辭・助動詞と、一首及び結句との關係をみること。（2）特別の詠歎語と謂はれてゐない動詞・助動詞・助辭にして、詠歎的餘情を含み得る場合の、一首及び結句との關係をみること。第一の場合は、『善きかも』『行くかな』『悲しかりけり』『出でな』『結びてな』『刈らさね』『悲しも』などの類であつて、第二の場合は、『らむ』『べし』『よ』（よりに　かよふ）などや、動詞の終止形・連體形・將然形などの場合である。（四五・三）

21 叫びの歌、其他に對する感想

力に滿ちた、內性命に直接な叫びの歌は尊い。この種の歌を吟味するに際して、吾等は先づ、作者が如何なる『衝迫』（前言の「內部急迫」の語を、鷗外先生作「灰燼」のなかのこの熟語を以て更へる）から詠んだのであるかに留意する。第二に、表はされた言語の直接性と、從而それに伴ふ力と純と單（Einfachheit）とに留意する。手ぢかな例でいへば、『吾はもや安見子得たり……』とか、『……燒きほろぼさむ天の火もが』とか、『……火にも水にも吾なけなくに』とかは、直接な叫びの歌であると思ふ。短歌は唱和から始まつて居る。即ち予の謂ふ對詠歌である。そして自らの思を叫ぶのに、樂な直接な親しい言葉をもつてゐた古人が、比較的多くこの種の歌を殘したのは偶然ではない。それにも拘はらず、この種の歌の少ないのは稍注意する値があるのではあるまいか。吾等はこの種の歌を尊く思ふ。けれども吾等はたやすくはこの種の歌を詠み得ない。この種の歌を詠まねばならぬ程の衝迫に會し得ない凡下な淡い生活をしてゐるからである。吾等とても、嬉しさに堪へないことも泣きたいこともいきどほろしいこともある。しかし斯る際に歌詠む心持になり得ずに終るのは稀でない。叫

喚の歌は尊い。さうして叫喚の歌を易々と詠み得る歌人は幸福である。兒童の全體が聲となつて叫ぶ程の力を吾等はもはや失つてゐるのを悲しく思ふ。ただ强ひて叫ばむとして聲を張上げる讃美歌のやうな歌は作りたくないのである。

それから、『わが背子はいづく行くらむ……』といつたやうな、思を深く抑へて詠歎する歌、滲み出でてくる歌、稚げな柔い思の息吹き、zarter Hauch といつたやうな歌は、現在の吾等にとつてなつかしいものである。日毎に荒みゆく心の暗がりに、かすかなりともこの滋味光を希ふの念が斷えない。しかし今の歌壇はたやすくは吾等のこの希求を滿たして呉れぬ。さうして、上辷りな憧憬歌と、涙の爲めの涙歌と、行かゝり上の手の先のうつとり歌が多いに過ぎない。深く高く内部觀照の歌に憧れても、實際吾等はその力の貧しきに思至つて戰(をのの)かねばならないほど不徹底者の集團である。また、思想的抒情詩と立派に銘を打つてある作例を見れば、こり固まつた概念歌や道歌の變型に逢著するに過ぎないのである。さうして、ものゝ核心(ケルンプンクト)に突きいつた歌を欲すると謂つても徒勞にをはるのである。

ナイイヴな新鮮な感覺とか、デリケエトな官能とか、西人がいつた絹糸のやうな神經とか、feinnervig とか feinsinnig とかいふ語は、西の國でも我國でももはや陳套の語となつてしまつ

た。しかし短歌などの作物と結付けると、まだまだ陳套ではないやうな氣がする。また是等の言葉の起りは、內的動亂の直接な表現に對したものではなく、外象を受容れる見方なり感じ方なり、及びそれに伴ふ氣分に對した言葉であるらしく思ふ。そこで新鮮とかナイィヴとかいふことは、氣分とそれに關聯してゐる事象をいかに微細に如何に新鮮に結付けるかによつて、その意義がきまるのである。同時に短歌本來の形式と如何に緊密に融合してゐるかによつて價値がきまる。嗅覺とか味覺とか觸覺とかの珍らしい感覺の連發であるから敏感だとは必ずしもいはれない。憧憬氣分とか異國情調とか、象徵的技巧といふので、官能の錯誤や擬人のやうな、譬喩のやうなものをこてこて竝べても作が優秀だとは謂はれない。作者の『いのち』と離れた手先ものには力はないのである。そして、短歌でいかなる技巧を用ゐようともその根本調は矢張り詠歎であるとは予の說である。

（四五・五）

22　氣　分

普通文藝批評家などのいふ氣分といふ語は、『スティムムング』や『ムード』の意味であると

聞いた。又一方には同一の意味で、情調といふ語を用ゐてゐる。岩野泡鳴氏はこの情調といふ語の發明者であるといはれたが、氏以前にも用ゐた例があるやうである。のみならず一派の心理學者は、感覺乃至觀念の屬性と考へてゐる、かの Gefühlston の譯語として情調の語を用ゐ來つてゐる。

『スティムムング』を單に『情』『感』『感雰』といふやうな意味にも用ゐてゐる文藝批評上の慣用例はしばらく措いて、この『氣分』といふ語について、試みに心理書を繰ると、チーヘンは、一定の時間に經驗した感覺または觀念に屬する、同じやうな情調(グフュールストン)の平均總和を氣分(スティムムング)と名づけると云つてゐる。またヴントは、感動の柔いほんのりした弱い狀態をいつてゐる。一方リップスなどは、氣分は感情ではない、氣分は飽くまで氣分であつて、ich bin so oder so gestimmt といふまでである。その氣分に伴ふ感情は氣分感情 Stimmungsgefühl といふべしと說いてゐる。

(四五・五)

23　子規の歌一つ

『瓶にさす藤の花房みじかければ疊の上にとどかざりけり』は竹の里人の作である。世の中はコロンブスの卵の譬喩で、この歌を見てから、何にこれしきの歌がと息卷く人があるかも知れぬ。それにしても技巧歌人や空想歌人のともがらには先づ先づこの樣な歌は詠めないと斷定するのは早まり過ぎるかどうか。おほよその歌人の十が十までは、このやうな稚い表はし方では物足りなく、つまらないと感ずるに相違ない。そこで歌を詠む段になつていろいろな感じを急拵へする。而して如何にも深さうに悟つた樣に天分の豐かな詩人らしい樣に表はす。それらはまだよい。それ以下になれば、このやうな印象すらもてんで起らない程感覺が鈍い。そしてゐて如何にも深さうな詩人らしい歌を作つてゐる。まことの自己の印象から出發しないで、上の空で歌を作つてゐる。それでは此歌の妙味は分からぬ。以上は鑑賞の一面である。しかし單にそれだけでは未だものの足らぬ。何ゆゑに此作者はかういふことに力瘤をいれて『みじかければ』といひ『疊の上にとどかざりけり』と詠歎して居るかを味ふことになる。こゝで再び事柄が、歌の餘情問題・背景問

題に觸れて來る。先づこの歌は連作十首中の一首である。そして作者は晩年の正岡子規である。そして『夕餉したゝめ了りて、仰向に寢ながら左の方を見れば、机の上に藤を活けたる、いとよく水をあげて、花は今を盛りの有樣なり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝ、そぞろに物語の昔などしぬばるるにつけて、あやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆をとりて』といふ長い詞書がある。それ等を同時に合せ味つて、はじめてこの歌の佳作である事を心から感得したといふことになる。漫然として此歌をつまらないといふ人々を誠になさけ無いと今でも思ふ。予は近頃「金槐集」を二三度通讀したが、雜の部になると詞書のある歌が多い。而して詞書(ことばがき)を合せ讀んで始めて歌の心持が分かると思ふ場合が多い。

（四五・六）

24　『安見子得たり』の歌

『われはもや安見子得たりみな人の得がてにすとふ安見子得たり』（藤原鎌足）は、萬葉集卷二にある歌で『内大臣采女安見子をつまどひ給ふとき』と詞書の樣な編者の語が述べてある。この歌は

第一句からして『われはもや』といふ樣な相對語を用ゐてゐる。いかにも嬉しい得意の心である。第二句に『安見子』といふ固有名詞をよんでゐる。さうしてその名が二度も繰り返されてゐる。要するに彼には此名が親しくて堪らんのだ。『得たり』と直線的にいつたのは純な僞らざる感情の迸りである。『みな人の得がてにすとふ』といふのは、單純な言葉でゐながら無量の味のある語の樣に思はれる。この語によつて、安見子は美しい而して何となく心の豐かな女であつた樣に思はれる。『すとふ』といふのは、この場合は『いはゆる』とか『筈になつてゐた』などの概念的な意味の言葉では決してない。世の現身が、現に口からさう言つてゐるといふのであつて、血の通つた言葉である。予は今迄この樣に自分勝手な解釋もし評もして來た。それはこの歌は字句もむづかしくなし一首の意味もむづかしくないと思つたからである。予はこの一首を味つて前號で述べた樣に表はされた言葉の直接性と純と單とにより、まことに力ある歌だと感じ來つた。從つて「古義」でどう云つてゐるか「代匠記」でどう云つてゐるか「略解」や「考」でどう云つてゐるかも顧慮しないでゐた。ところが、此頃「萬葉緊要」を讀むと、次の樣に解してゐる。

『此歌は、天皇を安見知し吾大君と申し馴て、皇子を安見す御子と申す事のあるに、此采女が名を安見子と云につきて今吾れ安見子を得て既に、天皇の位を得たりと戲れ給へる也。

されば皆人の得がてにすと云も采女が事のみにはあらず。天皇の御位の凡人に得がたき方を、かけ給へる御詞也。又得たりと、言を再びかへし給へるも、其御戯れの旨を慥かに聞せんとてなり。然るにかやうなるをなほざりに見過して、萬葉などは何の巧も風情もなきものと思ひ過めるは、實はおのれ解くことの得ざるよりのあやまりなるぞかし』

予はこの解を讀んだ時驚いた。そして成程さう云はれて見ればそんな氣もすると思つた。併し段々味つて見るに矢張り予の解の方がよい樣である。或は此歌の作者は守部の說の樣なつもりで詠んだのだかも知れぬ。それは後代の予等には分からぬ。ただ予等は歌の上に表はれた言葉によつて判斷するより爲方がない。そこで守部の說に從へば、この歌に餘程洒落や機智の分子が這入つて來る事になる。併し『戯れ給へる也』とか、『戯れの旨を聞せんとてなり』などいふ樣な調が一首の上にあるかどうかは甚だ疑問である。ことに安見子の名を『安見知し』や『安見す』に是非關聯せしめねばならぬといふ事も後代の予等には誠に受取がたい。又『皆人の得がてにすといふも采女の事のみにはあらず。天皇の御位の凡人に得がたき方をかけ給へる御詞なり』といふ樣な概念的な意味が何處から感じ得られるかも甚だ疑問である。『天皇の御位の凡人に得がたき』などの極り切つた上の空の言葉では無い。縱し一步讓つて守部の解釋が正當だと假定しても、そ

れならば此歌は甚だ凡下な歌であるべきである。然るに守部は此歌を稱揚してゐるのだから、守部は鑑賞家として存外分からぬ男だと言つてしまひたい處であるが、守部は歌學者中の卓見家なることを知るが故に、漫然としてその說を否定するのは予の堪へ難い處である。しばらく守部の說を記してなほ深く考へようと思ふ。（四五・六）

25 言語の順直

短歌に於ける言語の順直・平明といふ事は、言語の調べが、心の動きさながらといふ樣に解すべきであつて、單に調子がよいとか、解り易いとか、なだらかだとかいふ、單純な意味ではあるまい。この事は口でこそ容易であるが實際ではなかなか思ふやうに行かぬ。しみじみと自分の力の足りない事を嘆ずる場合が多い。この場合吾等は言葉について勉强修練するより他に途は無い。それには古人の作物を讀み味ふのは一番便利である。そして現在の吾等には急務の一つである。言葉を勉强しなくも、どんどん佳い歌が詠めるなら、そんな面倒臭い事する必要はないが中々さう旨くは行かぬ。たゞ古人の作を讀む際に知らず識らず古人の影響を受ける。これはどうも致し

方が無いが、注意のしやうによつてそれが忽ち無くなる樣にする事が出來る。處が面白いのは何時迄もその影響から脫する事の出來ない人がある。それに就いて橘守部の言は味ひ深い。（萬葉緊要卷一參照）

『たゞ古言をもてよむを、かしこきわざと心得めれば、先づ詞よりおもひよりて、心を古人に委ぬるゆゑに、多くはふる歌の口まねびとゝなりて、むげに聞べき所のなきが多かり。又そのまねぶ歌も、よきはまねびあへずして、あやにくにわろきをまねび出めるぞすべなき』

これならば致し方がなからう。たゞ吾等の歌に『けるかも』がある故に『ふる歌の口まねびと』と許し去る論者があつたら嘸面白からうと思つてゐたが、『古典に沒頭した頭』などゝわれ等の歌に向つて臆面もなく云つた論者が現出したので、面白いどころか論者が可哀相でならなかつた。『心を古人に委ぬる』事は詩人としてつまらぬ事である。それでもロダンがいつた樣な『盜心』者流の多い現代歌人に比して、どこかに愛すべき點があるやうである。（四五・六）

26　作歌の過程の一つ

事象にぶつつかつて、變な心持になつて歌でも作らうとすると、其心持といふのは取留のないぼんやりしたもので、如何表はしてよいか分からぬ。それを無理に表はさうとすると、飛んでも無い自分の心持とかけ離れたつまらぬ歌が出來る場合が多い。その時その心持をぢつと把持して三四日經つと、朝霧が晴れて美しい太陽が見えて來る樣に、心持の核點とでも云ふ樣なものが偶然心に浮んで樂に歌が詠める場合が多い。予の衝迫といふのはその詠みたくなる變な心持をいふのである。衝迫があつたから直ぐ歌が出來るとは限らぬ。（四五・六）

27　連作論者の弊

『短歌の連作』を主張し『連作論』をする吾等は、稍ともすればその主張に囚はれてしまつて單獨な一首を味ふ能力が漸々減じて行つて居る。これもつまらぬ事である。單獨歌に向つては、

「歌日記」の著者が云つた樣に『ひと時にひと歌を見よ。わすれてもふたつな見そね』の心がけと、態度が大切である。（四五・六）

28 夏日偶語

暑い暑い。おれの心は饐えるかも知れないな。礬紅で塗つた憲兵屯所の門に柔かい雨が降つてゐる。猫柳は銀いろをしてゐる。石の間から水が湧いて水綿がゆらいでゐる。腹の赤いゐもりが幾つもゐる。霜が降つて豆柿がだんだん黒くなつてきた。山のはざまの川原が白じろと見える。酸をふいた鹽膚子（ぬるで）が食べたいな。酸いさうでござりますと或る和尚が云つて呉れたつけが、菴摩羅の果を食べた可哀い少女の眉寄せが見たいな。とりとめもないことが頭のなかで廻轉する。

眞夏の日光だけが少しまばゆいと歌つた女歌人がゐたことを覺えてゐるだらう。おそろしい女だとおもふのもよいが、その女にもまだ生殖細胞が生きてゐたことを思つてくれたまへ。蚊やり香をもらつて來た。香をたくと蚊の奴らがぽたりぽたりと落ちるのだ。わかい精神病學者が這入つて來た。鼻の穴を一寸ほぢらうとしたがやめた。さうして、『君、Analtypus といふことを知

つてをるかい』といつた。

小石川柳町の電車停留所のところの紙屋の暖簾は眞赤である。市ヶ谷見付から頤鬚の限局性に生えた男が二人いつしよに電車に乘つた。兄弟かとおもつてよく見るとさうでもない。おれは四谷見付まで其鬚が大江千里か柹の村人の鬚に似てゐるやうだとおもつてきたが、よく見るとその頤鬚の周圍が綺麗に剃つてあつた。これはどうしても今までの日本流でない。

おれは毎日二時間づゝも電車に乘つて、大ぶ年を經たが何一つ覺えたやうにも思はれない。何かおぼえたさうなものだと考へてゐると、『おれは到底運轉手にはなれない』といふことが心に浮んで來た。足拍子をとつて浪花節をうたふ位はまだしもだが、綺麗な女と見たらどんな場合でも一瞥をのがさない程の餘裕が出來て居る運轉手が多いのである。(四五・七)

29　子規の歌二つ

『四年まへ寫しゝ吾にくらぶればいまの寫眞は年老いにけり』これは正岡子規子の歌である。病の枕邊に自分の寫眞をいろいろと取り出してながめながら詠まれた八首中の一首である。

一寸をかしい樣な歌である。竹の里歌の中には無論採錄しては無い。『おやぢは己より年上だ』といつた樣に一寸聞える。そこが味のあるところではないか。いひざまのはかない稚いところに純な悲しいところがあるやうだ。さうしてこれは子規の歌だからいいのだ。男根のつよ過ぎるものがこんな歌詠んだとて、それは駄目だ。

『御やしろの藤の花ふさながき日をはりこづくりの龜が首ふる』これは車で龜井戸に詣でた時の作である。是も竹の里歌には無い。第四句第五句の音調の工合がまことによい。これは明治三十二年四月頃の作だ。第四五句は我々は到底及ばないと思ふ。（大正元年九月）

30 アララギ

「アララギ」が賣れたといふ通知が來た。東京堂で三十幾册賣れたのである。己は一時に不可思議國へ這入つたやうな氣がした。過去も現在も未來も賣れないと極めてしまつて、ひとりさびしく歩まうとした「アララギ」に神明が戲れをしたまうたやうな氣がした。しかし戲れではないと御仰るみ聲が聞えるやうな氣もした。その瞬間に、張りに張つてゐた己の心に、これまでに爲

盡したいろいろな苦勞やら心配やらが一時によみがへつて來て、胸がつまるやうな氣持もする。通知の端書をつくづくとながめながら、己は巡禮の子をおもひ出した。（大正元年十月）

「アララギ」は市に賣れたり茂吉われ直に嬉しく飯食しにけり

巡禮の子はたらちねの母たづね國ゆきしかば殺されにけり

巡禮の子の柄杓もつあはれさを泣きて心におもほゆるかも

31　寸言

僕等の考へた事が遠の昔に先進が云つて呉れて居る事がよくある。其場合には先進の言を尊重せねばならぬ。僕等は短歌の單純性に就いて考へ付いた。然し村田春海がすでに『古の短歌は單心なるものなり。そは短歌はしかよむべき姿のものなればなり』（歌がたり）と云つたならば其れを尊重せねばならぬ。

ワシレウスキーがマレースの繪を論じたなかに『感覺の充實と健康』といふ言葉がある。この『健康』といふ語は面白いと思つてゐる。賀茂眞淵の『丈夫ぶり』といふ語も畢竟はここ迄行

ぐべき筈のものであつたのだ。景樹から打たれる程淺いものではなかつたのだ。月花のあはれ以上に出なかつたのに對して注意した言葉であつたのであらう。近ごろの樣に單調に陷つた歌界に、もつと新鮮な健康な血の流れてゐる作物が欲しいとも空想する。

小供の言葉に思ひ入れよ。而してさにづらふ少女の頰に思ひ入れよ。歌人などの言葉には小供の言葉ほどの力と張りとが無い。歌人などの感じ方には少女の頰の『さにづらひ（シアーム）』が無い。

（大正二年一月）

32 短歌の朗吟

加茂眞淵の「にひまなび」に『いにしへの歌は調をもはらとせり。うたふ物なればなり』とあるやうに、古代の歌は實際聲に出してうたうたものであるらしい。縱ひ複雜した節を付けてうたはないで極平凡な聲で歌つても、當時の聽者は一首を流るゝ歌としての節奏や諧調の美妙を感じ得たに相違ない。後代になると歌は文字に書かれる樣になつて、鑑賞者は聽くよりも讀む樣になつてゐる。それでも昔から歌會の席上などでは讀み上げがあつた。今から餘程以前に與謝野鐵幹、

平木白星の諸氏が韻文朗讀會といふのをやつた事がある。つまり韻文は餘程音樂的なものであるから、視覺から受け入れるよりも聽覺から受容れる方が、眞に其美妙な點が分かるといふ意見に本づいたものであらう。近頃になつて與謝野寛氏の短歌の朗吟も聽いた事がある。若山牧水氏の朗吟も聽いた事がある。さういふものを聽くのはいゝ心持である。然しそれでゐて歌其自身の美妙な點は矢張り分からない。優秀な歌も凡下な歌もさう大した差違が無い樣に聞えて、たゞ聲のよいのに感服するだけである。それは後代の我等は、視覺から受容れて味ふ事に習慣されてゐる爲めに、刹那刹那に進行してゆく聲の連續からは、歌に於ける微細な節奏や旋律や諧調を感得する事が困難な點と、歌は純音樂でなく表象的要素として名詞や動詞や助辭などの連續がある點と、朗吟する節は大凡きまつてゐて、漢詩の朗吟の節を一寸改良した樣なものであるから、矢張り微妙な點は音樂的に表はし得ない等の諸點に由因すると思ふ。そこで、今行はれてゐる朗吟の節から云へば、朗吟し易い調子の歌と朗吟し難い調子の歌とを標準として、歌の優秀凡下を定める事が出來ない。富田碎花氏の「悲しき愛」の曲譜は從前の朗吟の節などから見て數段の進歩である。けれども猶ほ歌そのものとの關係が全く融合されてゐるとは思はれない、玆に於て吾等の短歌を味ふのは、少なくも現今に於ては聽覺の方面からよりも視覺の方面から受容れなければならない。

而して歌の意味と融合して流れる節奏なり旋律なりは、之を心で聽かなければならない樣になつてゐる。ここで『ねばならぬ』と云つたのは、斯くあるのは自然の行き方であるといふ意味である。文字を讀んで（默讀でも現今の吾等は足らふ樣になつてゐる）心で聽くのであるから、ゆつくりと聽き味ふ事が出來る。又一首のあらゆる音樂的要素は一首一首に特有な微細な點まで聽く事が出來る。ロイテツクンはその「詩學」に於て、“innerlich hoeren”といふ語を用ゐてゐるが、矢張り心で聞くといふ意味であると思ふ。

この樣に我等は歌を味ふのに先づ視覺から受容れる樣になつてゐるから、文字の排列の工合なども或意味を有つ樣になつて來てゐる。一語に二三の概念をも含み得る漢字なども單に讀み易いと云ふ點ばかりではなく、もつと、或種の意味がある。又漢字の熟語でも假名で書くと工合のよい事もある。歌は聽くべきものであるから、漢字特に字音のある歌はいかぬとか、純な日本語卽ち所謂やまと言葉でなければ短歌では感情に直接でないからいかぬなど云つて仕舞へば至極無造作であるが、それでは矢張りもの足らない。もつと細かく敎へて貰ひたいやうな氣がするのである。（大正二年二月）

33　偶語

茫々たる大劫運のなかに流れ、旋火輪の流轉より解脫し得ざるわれ、なほ雪ふれる竹林にしみじみと放尿しゐたることをよろこぶ。こよひも更けたり。明日の勤めより我が心圓かに離れて小野五平翁の將棋の話讀みゐたることをよろこぶ。泰西人の書ける瘋癲學を讀めば、一枚半にして腹の底より大きなる欠伸出でたり。微かなる我が歌よ、この欠伸の如かれ。

予は奧州の山村に生れて十五まで居た。太陽は山から上つて山に落つる。月は山から上つて山に入る。今でこそ赤き入日とか綠金の斜陽とか云はれても平氣であるが、赤銅のいろして出づる月や、紅團々として落つる太陽などは全く東京に來てから我目に入つたのである。明治廿九年淺草に住んでゐた頃は、歡喜と讃歎とを以てこの天中の二物に對したものである。その時の心持を何とかして表現して見たくて耐らなかつた事のあるのを今でも覺えてゐる。その後、露伴ものに讀み耽つた事があつたところが偶然にも、『日輪すでに赤し』の句を發見して、ひどく喜んだ事を今でも覺えて居る。それから高等學校を卒業する頃から短歌の雜誌などを讀み初めた。「馬醉木」

に左千夫先生の、『あめつちはねむりにしづみさ夜ふけて海ばらとほく月紅に出づ』を發見して非常に嬉しがつた事を覺えてゐる。その時分予は、無暗に紅い太陽の歌を詠んでゐた。

つちに居れば天中にあつて交合し得ず淨妙のをみな地にあらはれよ。壁畫の寫眞版をつくづくと見てゐる時、こんな心持になつた。この『交合』といふ語の音調がよいと云つたら、親鸞も、『交合因緣』といふ話を書いたと友は云つた。（大正二年二月）

34 ひとりごとの歌

獨り居の寂しさに堪へぬ人々にいはう。縱ひ獨語するときにも、公けの前にゐるごとく、つゝましくなくば、矢張り其は不行儀なともがらである。

これはニイチエの「曉紅」のなかの言葉である。さはれ、吾等のやうに氣の弱い、はにかみ勝のともがらは、ひとり言の間ぐらゐは我儘でありたい。物をいぢり遊びながら、獨り物いふ童幼の如く、公けにかゝはりなき吾等の „Selbstgesprächen" を人知れず尊重したい。この日ごろは、獨りゐて靜寂を味ふ暇すらもなき吾等である。

嘗て便利のため、既成の短歌をば、『對詠歌』と『獨詠歌』とに分かつた。これは主として作歌態度論の必要から出でたのである。言語發生の因は吾等の孤獨ならざることに出發してゐる。「古事記」の歌は矢張り『對詠歌』から始まつてゐる。古人の歌に優秀な對詠歌のあるのは偶然でない。而して、廣い意味に云へば盡くの短歌は對詠歌の性質を帶びたものである。茲でいはうとするのはもつと深くもつと狹義にしたものである。末世に生きてゐる現在の吾等は、獨語の色調を帶びた歌を詠む場合が多い。そして少しも苦痛を感じない境地にゐるのだ。しみじみと戀をした事もないゆゑに、縱しまたあつても古人の樣に對者にのみ示すやうな幸福を感じ得る世とは大分遠く隔つてゐる。獨語の色調を帶ぶるのはおのづからである。從うて、獨語本來の性質たる、無顧慮と純正とを希ふのである。

『瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊のうへにとどかざりけり』この無邪氣さを希ふのである。われ等の歌の大部分は、ひとり言の性質を帶びたものである。歌ごころの動いたたまゆらは、願はくは、公けの前に立つ時の赤面とはにかみの苦痛から脱して琥珀いろの水飴のとろとろと垂るごとくに、心のゆらぎを垂れしめたい。空向いて歩む傲岸なる公衆の世から離れて、獸の死なむとする山の峽の石のもとに住したい。拓殖博覽會のギヤマンの瓶のなかの穀物のやうに、我等の

微小な作物は活版され校正までされて、歌壇の遊びのなかに漂動しようとも、おのづからなる心もて稔り果てたる穀物の、おのづからなる心を希ふのである。（大正二年二月八日）

35　歌の形式と歌壇

われ等の微小なる歌は活版されて『歌壇』のなかに漂動してゐる。歌壇とは一つの遊戯現象（ルビ：スピール）である。をさなごの石蹴り遊びである。そこにおのづからなる約束がある。短歌の形式は即ち一つの約束である。最もプリミチーブな自然的約束である。生物發達に知られたる限りの理法あるごとく、短歌の發達にもおぼろげながら一定の理法がある。それは古事記から萬葉集にかけて通讀すれば歸納する事が出來る。萬葉集になれば、もう約束が成立つてゐる。『かういふ形式にしてお互に遊ばうではないか』と誰いふとなく云つてゐる。

それであるから、短歌形式の發達史を貫くものは、群集暗指の理法であつて、不自然なる拘束の結果では無い。自然的約束と前言したのはこれが爲めである。約束は絶待自由ではない。ところが群集はおのづからして其約束に投ずるのは、奇妙といはうよりは止みがたき嚴肅である。わ

れ等は便宜のため、「Psychotaxis」なる語をもつてこれを説明しようと思ふ。

三十一音詩形は我國語の性質と關係してゐる。國語の性質を鮮明にする事が出來たならば、三十一字をばもつと力強く説明し得るであらうが、今は出來ない。芳賀矢一博士の『日本文學と和歌』（心の花一月號）は一寸この點に觸れてゐるが、要するに分からない。

現代のわれ等は一般に約束などを面倒臭がつて、獨りでどんどん歩まうとしてゐる。さういふともがらは顧慮せずにどんどん歩むがよい。短歌などを後へに置いてどんどん進むがよい。たゞさういふともがらとは一緒に遊ばないといふに過ぎないのである。

短歌の形式は不自由である。そこに自由な心を盛るのは虚僞に陷るといふ。一應明白な理である。ところが實はその虚僞なところより力が湧いて來るのだ。虚僞の生ぜんとする刹那に其と鬪ふ力から光明が放射するのである。力は障礙にぶつかつて生ずるのである。短歌の形式をいとほしむ心は力に憬るゝ心である。短小なる短歌の形式に紅血を流通せしめんとする努力はまさに障礙に向ふ多力者の意力である。『多力に向ふ（ウイルレツール）意志（マハト）』である。

おのれが程度の眞力を出したいのである。小さいながら短歌形式の不自由な抵抗にぶつつかつて、力を出すのである。作歌態度の純平たらん事を願ふ。いつも短歌の形式を念々に意識してゐ

る。而して此の二つの間に少しも矛盾の無い所以である。抵抗に衝突して苦闘した揚句に、西方の人が云つて呉れた ,, Feldapotheke der Seele ,, の妙歡喜を味ふのだ。これまでわれ等が短歌の形式に執着して來たのはこの爲めである。

而して短歌形式の不自由は我等の力に相當したものである。鬼ごつこが童男童女に相當するごとくに、されば今後若しもつと多力者たらしめて呉れるなら、もつと大きな障礙に向つてぶつつかるかも知れない。（大正二年二月八日）

36 模倣の歌

言葉は概念的なものである。それに獨自の血を通はせるやうにするには大力を要する。短歌は形式が短いだけ特に困難のやうである。又形式が短いだけ、『暗示に對する敏感』（阿部氏）が著しく目立つ。甲に對して眞物か乙に對して眞物か分からなくなる。一體模倣の出來ない短歌などはあるかどうかは疑はしい。器用なものは直ぐ他の作物と區別のつかない樣なものを作るやうになる。僕は以前晶子女史の盛な時分に此の現象をつくづく眺めてゐた。然し署名しないでも明か

に誰の歌であるか分かるといふ様な歌は實際は稀である。特に他の作物を讀む場合が多ければ、知らず識らず影響を受けてゐるのだから更にさういふものは少い。

然し同じ影響を受けても自分の血を一旦通すとすれば、矢張り自分のにほひが出なければならぬ。そこで畢竟は眞に自分に執着して苦惱裏から生れた作物ならば、何かの特色があるわけである。特色の多寡と作物の優劣とは無論並行しない。たゞがらにもない歌を詠むより自分の平凡相當の歌の方が、第一自分にとつて氣持がよい訣である。それは先づ第一の根柢だ。（二月八日）

37　『雁かへるなり』の結句

嶺こえて秋こし道やまよふらむ霞の北にかりかへるなり（土御門院）

をしむべき花の都をふり棄てゝ鈴鹿のせきを雁かへるなり（爲忠）

さゞなみの比良の山べに花咲けば堅田に群れし雁かへるなり（宗武）

この結句の同じな三つを並べて見ると、矢張り一番大切なのは感じ方である、畢竟作者の如何といふ事に歸著する。感じ方に就いて云へば、第一も第二も大人の感じ方である。大人といつて

も一寸一句ひねらうといふものの感じ方である。殆ど百人中の九十八迄は大凡かういふ感じを持つてゐる。第三だけは小供の感じに近い。萬葉あたりの上代人の感じよりも稚い。宗武は、縱ひ萬葉を耽讀したとしても、この樣な感じ方をするといふ事は實際不思議なほどである。この人はまことに恐るべき天禀を持つてゐたやうに思ふ。時代もよし、周圍もよし師匠もよかつた爲めでもあり、又年もとつてゐた爲めでもあらうが、實朝よりも圓熟してゐるところがある。純な、そのまゝに圓熟したのが面白い。（二月八日）

38 東歌一首

『うべ兒汝は我に戀ふなも立と月のぬがなへ行けば戀ふしかるなも』これは萬葉巻十四、東歌中の一首である。この歌で特有なのは音調である。この樣な音調の歌は東歌には大約十首はあらうと思ふ。而して同じ萬葉集でも他の巻には一首もないと謂つてよい位である。

奈行の音と良行の音、奈行麻行の音、さういふ工合にいかにも快き音の組合せである。當時にあつても東國の地方語であるから現代のぼく等には意味を解する事は面倒臭いが、それでゐて一

種特有な快い音調を感得する事が出來る。かういふ地方語を用ゐないで一般の日本語で此音調が出せたなら、ぼく等の或心持を表はすのに便利であらうと思つてゐる。然し其は勉強によつて全然不可能では無いと思ふ。すでに本居宣長は東歌にならつて『今はよ寢なむともへば足引の山の木の間よ月いで來もよ』のやうな音調のよい歌をつくつてゐるからである。（二月十六日夜）

39　奧州南部の古謠一つ

『むだあの。へんづれこに。づうろくへつあ。へんでだあ。めらあすあ。もんぞくねえが。めえのものあ。もんぞおい。』これは藤根常吉さんからきいた奧州南部の古唄の一つである。熊本の唄にある、『ほれちよるばつてん』などとは又違つて、いかにも呑氣な音調が面白い。意味が分からなくとも、音調の工合が何だか面白い。僕には別して懷しい。飜すと、『村のはづれに。十六七の娘が死んでゐた。その娘は。別にむごくは無いが。まへのものが。むごい。』書き替へると面白味が減る。

40　似而非悟り歌

四月以來かなしい心に住してゐた。短歌の事からしばらく心が離れてゐた。郷里に歸つて母上を火に葬つた。山腹の酸つぱい溫泉に身を浸した。山深く入つて通草の花のほのかに散るのを見た。あわたゞしく歸つて來て床の上に仰向になつて天井を見つめてゐると、身も心も疲れてゐる。

いつぞやの僕の短歌雜論が、端なくも細谷明氏の目に留まつて、「東北」といふ雜誌の上で僕が叱られてゐた事を思ひ出した。そしてもう一度讀んで見た。今ごろ根岸短歌會といへば正岡子規を聯想するに過ぎなかつたと自白された程、吾等の運動に關して智識の淺い氏の言論であつて見れば、別に答へる必要もない程のものである。然し又時々大切な問題に觸れてゐないでも無いから、こゝに少しく漫言を書かうと思ふ。

細谷氏は僕と中村憲吉・古泉千樫の歌を評して居る。その中で、『省察の足りない事から來る種々な缺點の多いこと』と云つたり、『作の上に眞正の顧慮がない力のうすいものである』と云つたり、『スケツチなのであらう』などと云つてゐる。この省察とか顧慮とかいふ言葉は、恥し

いが僕には意味が分からない。かういふ熟語の意味は分かつても僕等の歌との關聯が分からないからである。僕は最初此等の言葉の意味をば『自分の既成の歌がほんたうに自分の心持を表はしてゐるかどうかを省察し顧慮する』事であると思つた。然し其ならば、氏の注意を待つ迄もなく僕等は出來るだけの省察をして來てゐる。既成の作物に就いて云々するのは好いが、其以外に氏は寸毫も僕等を批評すべき權力を有たないと謂はねばならぬ。次に飜つて思へば、省察とか顧慮とかいふ言葉は、『措辭の技巧末』や、『皮相の感觸』や、單純な『スケツチ』や、『詠物記錄』などに止まらないで、もつと深い內心の動搖を詠めといふのであるらしく思はれた。

若しさうだとせば、概論としてはよいものである。けれども今は概論をして居るのでは無い。僕等の作物と關聯して論じてゐるのである。そこで僕等の歌は全然省察が足りなく、眞正の顧慮が無く、單なるスケツチに止まつてゐて內心の動搖が表はれてゐるかゐないかが問題なのである。然し細谷氏は明白に僕等の歌には『皮相の感觸』があるばかりで『內心の動搖』が無いと斷定し去つたのであるから、細谷氏に對する僕の答は單簡で濟む。『細谷氏は少くも現在は吾人と大分離れて居る。換言すれば緣なきの有情である。

これで答が濟んだから、內心の動搖云々に關する僕の感想を書かうと思ふ。此頃一部の短歌鑑

賞家の中にはいろいろな心的狀態をば露はに而して誇張して、如何にも所謂詩人らしく勿體ぶつて、表はしてゐなければ皮相の感觸だ位にしか感じ得られないものがゐる。であるから似て非なる哲學者の語錄のやうな短歌が如何にも難有く如何にも深く、最も人間の生命に觸れたものだとしてゐる。然し僕等にはさういふ物の一切がつまらない。短歌製作に際しての吾等が生命の活動は直觀的である。吾等が念々の焚燒するに方つては、彼等の所謂『省察』も『顧慮』もあつたものではない。萬有に向つて吾人の生命が能動的に進む場合でも、甚深靜肅に內觀する場合であつても亦同樣である。吾等が念々を概念化するだけの暇あらば、何を苦しんで短歌の形式などに走るものぞ。短歌に於ける表現は吾等が念々の表現である。されば一個の動詞も一個の『テニヲハ』も吾等にとつては盡く我ものでないものはない。悟つたやうな歌と我等のいふ內心の動搖とは一致しない所以である。悟つたやうな歌よ、彼等のいはゆる『思想歌』よ、われ等は汝等とは緣の遠いものである。

外界の動運の相に吾等の生命を見出す場合には、吾等は其生命さながらを詠ずる。一部の評家が吾等の歌を『詠物記錄』だとするのは此種の歌であらう。それから吾等自身を直接に詠む場合には、飽くまでも五尺五寸幾分の人間を詠む。紫の小鳥になつたり、白い熊になつて海を泳がば

やなどの藝當をする暇がないからである。

德川の世の昔に歌學者が輩出した。『ただ言歌』を唱道したものもあつたが、實行して見ると、眞のただ言では無かつた。『ことわり足らず』とか云つて何か悟つたやうな露骨な主觀や見え透いた照應がなければ歌でないやうに思つてゐた短歌の墮落時代があつた。大正の今は『思想歌』や『省察歌』や『顧慮歌』が尊いものになつてゐる。ゆくものは行くが儘に行かしめよ。われは之を流轉の一相として眺めよう。絕緣すべき玻璃板を置いて之を眺めよう。（大正二年六月十二日夜）

41　細谷明氏に對す

細谷明氏は予の歌を評したとき、『北原白秋氏に似た調子は恐らく其音律のみを憬仰した結果知らず識らず措辭の技巧末に走つて模倣に陷つたものらしく思はれた』と云つた。予の歌調が白秋氏のに似てゐるといふのならばよい。恐らく云々以下の空想は氏の無智不用意を暴露するに過ぎ無い。予の短歌の變化の結果に就いて云々するのはよい。變化に至る動因迄も氏は何に據つて知り得たか借問しようと思ふ。模倣といふ言葉は全然所働的(ペツシーブ)な意味の言葉である位は氏も知つて

居よう。賢明なる氏は一般文壇に於ける評論界・小說界・戲曲界・長詩界・俳句界・繪畫界に於ける運動の如何を知つて居よう。「アララギ」所載の木下杢太郎氏の詩を殊に面白く讀んだと自告した氏は、今まで杢太郎氏はどういふ詩を作られたか位は知つて居よう。もつと具體的にいへば、北原氏が予の歌を模倣したことはあつても、予は北原氏の歌の模倣などはしないのだ。それを氏は魯鈍で鑑別がつかないのだ。

それから予おもふに短歌は短歌の形式を離れては存在し得ない。便利の爲めに短歌の形式を論ずるのは卽ち短歌の生命を論ずるのである。しかるに、細谷氏は予が短歌論の一部を目して『小供でも知る技巧上の快感の講釋である』と斷じ去つた。予の言は盡く實行問題から出發してゐる。短歌製作のむづかしい事をしみじみと感得しての言である。その予の言を目して、小供でも知ると公言する偉大なる細谷氏よ。願はくは十方を照す大歌論を公表してあはれむべき予等を遍照したまへ。

予が阿部次郎氏の『暗示に對する敏感』といふ句を借りて歎聲を漏らしてゐるのに對し、細谷氏は『つまり模倣を認容してゐるのだ』と憤慨した。「文章世界」に載つた阿部氏の言は讀賣紙上で相馬御風氏が評し阿部氏の答論があつた位であるから細谷氏も讀んだ事と思ふ。それにして

はあんまり氏は魯鈍である。

若山牧水氏の、『焚火、焚火、焚火に限るやうになつた。寂しい生活に最もふさはしい焚火』といふ歌を予が批難したのに對して、細谷氏は『淺間しい言論である』と云はれたのは氏としては當然の言であらう。又焚火の一首の評釋をしてくれた事も、短歌に對する氏の意の存する所を明かにして貰つたやうな氣がした。而して『アララギの歌の樣に口のさきばかりの調子の歌で無い』と云つたのもおもしろかつた。而して矢張り緣なき有情である事を知つた。たゞ氏は、予が牧水氏の歌を難じたに就いて、『私は茂吉氏がどれだけ牧水氏と親しい間だか知らない』云々と云つて、作物を難ずるのには、先づ第一の條件として流俗の親類つき合をして居なければならぬ樣な口吻を漏らして居る。氏等の考へてゐる歌壇といふものが實際左樣なものだとすれば、無論予は氏等の所謂歌壇の人では無いのだ。予が牧水氏の歌を難じたのは痛切な衝迫から出でたものである。その予の批評に對して、先づ親戚つき合から仕遂げ來れと强ひられたのは、近頃以て迷惑の次第である。（大正二年六月十二日夜）

42 「赤光」編輯の時

死んだ望月光男が、僕のことを猪のやうだと云つたことのあつたのは君も知つてゐる。その猪の僕が、明治三十八年ごろからの自分の作を初めて通讀して見た。「赤光」を編まうと思つて讀んで見たのだ。而して何とも云へぬ厭な氣持になつて身ぶるひした。これはもう度々先輩から注意された事であるが、僕の歌には一種妙な習癖があつて其が何時までも纏つて來てゐる。それから不思議なのは想像的の歌の多い事である。この二つが明治四十一年頃極端に達してゐる。日本新聞に出た『蟲』や『猿』の歌や、其前後の歌などは實にひどいものだ。自分の醜い有様をつくづくと見た。厭で堪らなかつたけれども非常に爲めになつた。最初は「赤光」はゆつくり時を費して纏める考であつたが、此樣な有樣であるから一刻も早く葬つて仕舞ひたい。而して其の厭な歌も皆兎に角集めて見るつもりだ。（千樫への私信

僕の今までの歌を見て、僕が如何に長い間低徊して居たかを歎ぜざることを得ない。それ相應に勉强はして居たと自分には思ふが、矢張り何かに囚はれて居たのだと思ふ。君も長い間ぐづぐづ

づして居た事は僕と同様であるが、君の歌には厭味が無いのは實に氣味が善い。その點は矢張り君が僕より一歩先に目ざめて居るからだと思ふ。又正岡先生は『自分が十年でやつた程のことは今の人は半年で達するやうになつてをる』と歎ぜられたが、ほかの雜誌を見ても「アララギ」を見ても歌を詠み初めてから一二年で僕等のよりずつと活々した歌を詠まれる人は幾らもある。今迄苦勞して來て、もう駄目かと思ふ時は、一寸悲しいではないか。この事を中村にも話したところが、今までの苦勞は決して無駄では無い。實際僕等はこれからだと勵まして呉れた。さう云はれれば又嬉しいやうな氣もする。今僕の歌集を出したところで工合が惡いものに相違ない。

（千樫への私信、大正二年七月）

43　歌の推敲・改作

短歌を詠むとき、一氣に吐き出すとか、叫ぶとか、いふ事を先輩などから聞いて、其をまた自分でも考へて見る事がある。而して詠む場合に字を消して見たり、直して見たり、幾度も幾度も爲る事が、何となく不純な小細工に墮して居るのではあるまいかなどと思ふ事もある。其時には

一氣呵成とか天衣無縫とかいふ文字が只訣もなく尊いものの樣に思へる。それで居てやつぱり短歌を詠む場合には、直したり消したりして自分の力の及ぶだけの事をする。それでなほ氣に喰はないで一週間もほうり投げて置いて、また消したり直したりする事がある。觀方によれば矢張り小細工のやうなものである。それを正直のところ何時もやつて居るのだ。かういふ爲方は必ずしも紙に書いて見ない場合がある。その場合は心の中で消したり直したりして居る。併し直すのがいいか直さないのがいいか、そんな事は予は問題にしない。要するにどうでもいい。直さないで自己の『いのち』を表はし得るものは直す必要は無い。直さずに自己の『いのち』を表はし得ないものは直さずには居られぬ。直す直さぬなどの問題は予は眼中に置かない。予が嘗て自分の歌を直すといふ事を云つたに就いて、或る人は冷笑したと聞いた。或る人は作歌の態度といふものをそんな處に置いて考へて居るものと見える。予等はもうそんな中途に物ぐさ喰つて居られないのだ。短歌などの場合には全體の言葉すらも、ぶち破つて直す事が出來る。幾重の殼を破り、磨きに磨いてほんたうの『いのち』の表現に達する事が出來る。直すとは其境に到達せんとする意力のあらはれである。

44 『繪の線』問答

「青年日本」十二月號を讀んだ。津田青楓氏の『思つた儘を』といふ漫言がある。畫の非常に好きだといふ一人の牧師が青楓氏に向つて『西洋畫は鉛筆で何度も何度も描いたり消したりしますがあれでいゝものですか』と聞いた。氏は『いゝんですとも』と答へた。牧師は首をかたむけて稍々考へる樣子だつたが、『それなら私にも出來さうですが、さう云ふ汚い事をせずに思ふ形がスーと一遍で手際よく描ければいゝと思ふんですが』といふ。氏は『手品ぢやあるまいし、さう一遍で手際よくは何時迄たつたつて出來やしないのですよ、出來なくつたてかまひませんよ』と云つた。牧師猶腑に落ちぬ風にて『然し日本畫ではそれが中々手際よくいつてゐる樣ぢやありませんか』と云ふ。『何手際よくなんかは一つもいつてやしないのですよ。誤魔化して居るんですよ、手際がいゝと思つてゐる人は誤魔化されて居る人ですよ』と氏は云ふ。予には非常に面白い問答である。歌の事で常々思つてゐた事が矢張り繪の方でもこんな問答があるのかと思へば非常に面白いのである。

45　動く動かぬ

根岸短歌會の方では歌の論をする時に、『動く動かぬ』といふ事を頻りに云つて居た。それは俳句の論からの布衍であつたのだ。それで主に配合の動不動に限局してゐた。あれは今少し注意しなければ駄目だ。短歌の言葉はあやふやであつてはいけない。これも『動く動かぬ論』の一つの內容になる。短歌の言葉はあやふやであつてはいけない。

46　古語の問題

短歌の言葉が現代語であるべきか、古語であるべきか、この問題もどうでもいゝ。ぼく等はもうそんな中途にぶらついて居られない。ぼくの『けるかも』は柿本人麿の『けるかも』では無い。要するに生命の問題である。ぼく等の歌に古調の多いのは、古調が直ちにぼく等の生命になるが故である。新古今や桂園の歌を流れてゐる様な言葉に、僕等の命は托すに足りないからである。

かくいふ事は單に僕等の問題であつて他人に關する問題では無い。」

47　萬葉調

僕は今、ざつくばらんに『萬葉調』といふ事を云つて置く。一つの流派でも立てようとするにはもつと氣の利いた宣言は必要である。つまり香川景樹が宣言した樣な言葉は一番門人を集めるのに大切である。景樹の僕よりも偉い點はちやんと其の呼吸を呑み込んで居た點にある。さうして忽然として湧いて來たか、天からでも降つて來た樣な顔つきをして居て、古今や新古今に御世話になつた事は知らぬ顔をして居る點にある。さうして或る時は平氣で古今集を讀めなどと門人に教へて居る點にある。

48　和歌入門書

親切に歌を教へてゐる有樣を側から見て居て、その教へて居る人の態度を無暗に癪に觸る人が

居る。さういふ人は矢張り忽然として湧いて來た樣な顏付をして居るだらうと思つて居るが、僕の心持は少し違ふ。一體人に敎へるといふ事は一とほりの事で出來るものでは無い。一々體得してからでなければ出來るものでは無い。かう僕は信じて居る。それゆゑに僕は賀茂眞淵の「にひ學び」は好きである。何にまれ、入門書は好きである。短歌作法などいふ書は好きである。窪田空穗氏の「短歌作法」は好きである。古來の歌學書も槪して好きなのはこの爲めである。

49　翠溪歌集

「翠溪歌集」をもらつた。作者の前田翠溪氏は明治新派歌壇の急先鋒の一人であつた。而して肺結核になつて貧乏をして困つて困つて死んでしまつた。世の中には悲慘な事は多い。さう思ふが、死ぬ今の今まで短歌を作つて、これで三十一音に纏まつたと、悲しい命を吐き出して居たかと思ふと、僕も實は讀んで居て堪らなくなる。『胸の上の氷嚢のきしる音くやしさをわがかみしむる音』たゞ一首かういふ歌のある事を書いて置く。『氷嚢』は『こほりぶくろ』と讀む。この『くやしさ』の一語が如何に作者の全生命を托してゐるか、もうせつぱつまつての言葉であつて、

あやふやな言葉では無い。僕は短歌を讀んでも落涙する。かういふ歌に落涙するのだ。もつと煎じつめれば、この『くやしさ』に落涙するのだ。

50　怨敵

心せまり來て、歌をなさむことを欲しても、それは未だ混沌の衝迫で結象整頓の境でない。それゆゑいかにしてこれを歌になさむとするかを知らない。はりつめて心に把持することしばらくにして結象おのづからにしてなつてくる。この心力の集注、性命の醞釀、群肝の清澄はうれしいとおもふ。兩眼に涙を湛へ眞實を歌ひあげんとして心張るとき散亂の心一所に凝つてあまねく環境の動搖をさへ忘れるにいたる。けれども時に半途にして此性命醞釀を誤魔化し去つて、手馴れな安易境にすべつていつてしまふことがある。これは予の大きな怨敵であるに相違ない。予は自身に住むこの怨敵を斬り棄てなければならない。（大正二・一二・一〇）

51　白秋の歌一首

今の世に中澤臨川氏のやうな一定の權威を有つ評論家が、短歌評に筆を染められるやうになつた事について、われわれの心は歡喜と感謝とをもつ。予は此歡喜と感謝とを空しくせざらんが爲めに、こよひは、氏の短歌評に對する予の感想を書く。

中澤氏の短歌評といふのは「中央公論」二月號で氏が白秋氏の歌一首を論評せられたのを指すのである。氏は、『海に來てわれがこの世のうつそみの愛惜しき魔羅を悲しみにけり』といふ白秋氏の短歌一首に就いて次のやうに論じた。『私にはこの歌の意味が解らない。若しそれが私の解するやうな意味のものであるとすれば、甚だ卑俗なものである。苟も眞面目な第一流の詩人と云はれる人から斯樣な作を示されることは私にとつては憤慨の至である。——たとひ些末な一つの短歌にしても』

氏は『私にはこの歌の意味が解らない』と云つた。其の意味を考へて見ると、（一）作者の表はさうとした眞當の意味は作者に聞いて見なければ解らないといふ事であらうか。若し實際さう

だとすれば氏の言も一應の理はある。然しわれわれは短歌の意味を解するのに一々作者に聞き得ない場合が多い。古歌を味ふ場合の如きは全然作者たる本人から意味を聞く樣な事は無い。さういふ場合には鑑賞者は銘々に表現された一首に頼てのみ意味を求めるのである。――詞書のある場合、連作中の一首の場合、作者の生活が明かな背景となつてゐる場合などは勿論それらのものが一首の意味を解く上に於て必要である。――またそれより致し方がないのである。（二）氏が書いた文字どほりに解して、『私にはこの歌の意味が解らない』といふのならば、氏は全然その一首を論ずる資格は無いのである。ところが臨川氏は、『私にはこの歌の意味が解らない』と斷定的に云つて居りながら『若しそれが私の解するやうな意味のものであるとすれば』と云つて居るところを見ると、矢張り氏は一首の文字を辿つて自分だけの意味の解釋をして居るのが分かる。さうすれば論の初に於て『私にはこの歌の意味が解らない』などと云ふ曖昧な事は云はない方がよいと予には思へる。

次に、氏はこの一首は『甚だ卑俗なものである』『私にとつては憤慨の至である』と斷じ結論してゐる以上はその結論の前提として『私の解するやうな意味』を細かに明言して置かなければならない。さうで無いと氏の結論は甚だ力のないものになつてしまふ。又短歌を勉強しようとし

て居る予等にとつては斯る大切な場合に單に結論だけを示されても少しの有益をも覺えない。予は白秋氏の此一首を讀んで少しも甚だ卑俗だとも感じないし、又憤慨の至だとも感じない事を記して置きたい。而して此歌に對して次のやうな心の歌と思つてゐる事を記して置きたい。

予の知つてゐる此歌の作者は、「邪宗門」「おもひで」「桐の花」「東京景物詩」の著者である。そして近い過去において『東京、東京、その名の何すればしかく哀しく美くしきや。われら今高華なる都會の喧騷より逃れて漸く田園の風光に就く。やさしき粗野と原始的單純はわが前にあり。新生來らんとす。顧みて今復東京のために更に哀別の涙をそそぐ』と云つた如く都會のあらゆる技巧から遠離して遠く三崎の濱に生きた人である。一日小舟に乘つて海上はるかに出た。裸體のまゝ只一人舟の中にゐる。かんかんと照る海光を思ふ存分浴びてゐる。大劫運の流のなかに一人ぽつちの裸形のしみじみと愛惜しい事を感じた。あ、ここに己の摩羅もある。悲しくもいとほしい。

ざつとこんな意味であらう。『悲しみにけり』の『かなし』は萬葉集あたりの歌人が用ゐたと同じ樣な語感の調があるのだと予は解してゐる。『摩羅』は我國の古書でいへば、紀の『雄元之處』『陽元之處』などと同樣に解してゐる。無常の世にわが身體髮膚は尊くもいとしい。特に

『摩羅』は尊くもいとほしい。最も遲く目ざめて最も早く眠るこの『摩羅』はいとほしい。印度語のこの語の意味、古事記の『蕃登』『富登』を『陰』と書くのや、書紀に『不淨』と書て『ホトドコロ』と訓ませたのや、是等は卑俗だといふよりも尊いものである事を暗に指示してゐるものだと予は釋してゐる。狂者の Exhibitionismus を氣の毒におもふ心は大正の現世に八咫の鏡をぶらさげて淺草の藏前どほりを練るを見る心に通ふと思ふ。mons pubis のほんのりと黑いのを „dunkle Dreieck der Goettin" というたものも、單の洒落とは感じられない。モリス・ドニーの裸體習作の陰阜が縱しんば黑くとも、果敢ない青年少女をして舊約聖書の Onan といふ男から始つたといふ極めて罪のない手法に誘導するぐらゐに過ぎまい。短歌などの場合では直接法にジンリヒに表現されたものに大惡業の因となるやうな場合は斷じて無い。それを避けて『たくらみの技巧』に墮してゐるものこそ却つて淫凡卑俗惡業の因となるのである。彼の鷗外作『キタ・セクスアリス』が莊嚴の氣の漲つて居るに反し、或國人竝びに現代日本人の書く戀愛小說に著しく淫劣下凡の臭氣あるのは無邪氣ならざる『たくらみの技巧』があるからである。

予の崇敬して居る歌人平賀元義の一首に、『五番町石橋の上で我が摩羅を手ぐさにとりし我妹子あはれ』といふのがある。見たまへ、この歌に少しも淫凡卑俗の氣のないのはどういふ訣か。

『たくらみの技巧』に墮してゐないからである。『摩羅』がどうのかうのといふのは此場合第二義第三義である。忙しい我等は實際自分の『富登』をしみじみと見入る事は希有である。この點から云つても白秋氏の一首に同感する事が出來る。詠まんとした際の刹那のこの作者の心はすでに純一不二の原人の心に歸してゐる。この歌を卑俗だと云ふ心も、好奇心にかられて是等の歌を模倣せんとする心も、若しありとせば盡く末世不淨心のあらはれとして悲しまねばならぬ。さうだと祕かに思つてゐる。一般の短歌鑑賞家はもつと宏大の心を持し、言葉などに對してもつと尊敬の心を持ちながら鑑賞して行きたいと思ふ。（大正三年二月十四日夜半）

52　正岡子規の語

短歌や俳句やは形に於てすでに微小である。縱ひ優秀な短歌や俳句であつても、他の評論、小說、戲曲、長詩などの佳いものに比べて、到底比較にならないほど微かな果敢ないものであるに相違ない。この事は予の如きものも常々思つて居る。そこで評論も小說も長詩も何もかも作りたいのは、予の僞のない心であるがそれは到底出來ないのである。ひとりゐて、朝念、暮念、念々

不離短歌などと心に思ふのは、短歌萬能を主張するのでは無く自ら祕かに慰めて居るのである。『短歌は短歌の形式を無視しては存在し得ない』と云ひ、『短歌には短歌特有の光といのちがある』と云うたのも短歌萬能說を唱ふるのとは違ふ。

この樣な短い短歌でも、作るとなると四時行き詰まり行き詰まりして苦まねばならぬ。自分の思ふ樣に作れる場合などは近ごろは殆ど無い。到底駄目かと作つて居る度每に思ふ。その時は正岡先生の云はれた文句を思ひ出す。先生は俳句に於ては非常に苦勞された人であるが、『俳句をやり始めてから十餘年の間每年每年斯ういふ感じがする。して見ると十七字だと思うて馬鹿にしてをつた俳句もなかなか我等の力には及ばんといふ事がわかつて來た……』と云つて居る。つくづく此文句を讀み返して居ると心が慰んで來る。而してわれわれの勉强が未だ未だ足りないのだと思ふ。

53　短歌の形式、破調の說

俳句や短歌のやうな短い形式のものになると、鑑賞する場合におのづから『比較』といふ事が

頭の中に浮んでゐるやうである。十七字ならば十七字同志、三十一字ならば三十一字同志といふ工合に、一定の狹い型に居て、其を獨立せしめて比較しながら鑑賞して居るやうである。そこに又犯すべからざる面白味があると思うてゐる。自由な形式の所謂『破調』とか、三行や四行に書き下す短い歌は矢張り長詩の一種として味ふべきものであるに相違ない。又短歌は矢張り一行に書き下すべき性質のものであるらしい。そこで微細な處に苦心もするし、又微細な處に妙味も出て來る。予は曾て短歌の形式の性質の一つとして『調べの連續性』を數へたのは其と關聯してゐる。三行に書き下して面白いものでも、其を一行に書き下せば面白くなくなるやうな實例も少なくない。この事に就いて考へるといろいろの興味ある問題に觸れて來るやうである。又短歌のやうな短いもので尙ほ獨立して存在し得る處を見ると、何處かに特殊な――主として形式から來る――犯すべからざる力がなければならない。予等は其を發見し其を尊重したいのである。正岡先生は曾て落合直文氏の歌を評した末に『こんな些細な事を論ずる歌よみの氣が知れずなどいふ大文學者もあるべし。されどかかる微細なる處に妙味の存在無くば短歌や俳句やは長い詩の一句に過ぎざるべし』と云はれたが、如何にも難有い言葉である。然しこれも短歌萬能說とは違ふ

54　寫生の歌

正岡先生は俳句にも文章にも短歌にも、『寫生の味』の妙である事を力說した。正岡先生の門人である長塚節氏は、『寫生の歌』を唱へた。その後アララギの歌風も幾變遷を經過した。このごろ長塚氏に會つた時『君の歌は面白いが、寫生風の歌になるとどうも駄目だと思ふ』と云はれた。此言は誠に味ふべき言である。縱し寫生する手法が、長塚氏の『寫生の歌』當時の手法に異るにしても、矢張り根本に於て、眞實な寫生の味が貫いてゐて、其が土臺になつてゐたい樣な氣がする。正岡先生の云はれた『捉へどころ』といふ事も單に輪廓だけの急所でなく、もつと深い生命の急所にまで突込んで捉へる樣に努力したいのである。

55　寫生

檐から短い氷柱（つらら）が一列に竝んでさがつてゐる。それから白い光が滴つてゐる。それを一首の短歌

にしようと思つた時、ふいと比喩にするといふ思が浮んで、『鬼の子の角ほどの垂氷』と云つた。段々讀み返して見るとどうも厭味である。それは鬼の子では餘り目立ち過ぎていけないのだと思つた。それならば、『山羊の子の角の垂氷の一並び』かと思つたが、どうも落付かない。『めすの犬の乳首のやう』とも思つたが、どうもいけない。とどのつまり、『ひさしより短か垂氷の一並び』といふ平凡な寫生にして仕舞つた。比喩の句法では晶子女史は名手であるが、短歌に比喩の句法を用ゐるといふ事は餘ほど大きな力を有つ作者でなければ駄目だと思つた。奇拔な比喩などは存外樂なものであるが、短歌では奇拔なほど厭味に陥るやうである。『ごとく』とか『なす』とか『の』などゝ連續せしめないで、一首を貫いて象徴にまで進むのである。

56 話の斷片

向うから勞働者の連れが來る。年寄の夫婦が來る。學校歸りの娘が連れ立つて來る。僕が此方から向うへ行くと擦れちがふ。その通りすがりばなに話の斷片が僕の耳に入る。それに非常に面白いのがある事を發見してゐる。曾て二三寫生した事があつたが、水道橋から小石川橋迄の間に電

車の中にゐて、電車の工合で耳に入つたのを書くと、僕の前に十五ぐらゐの娘が二人何か話してゐる。『私の體(からだ)を玩具にするなんて、あんまりしどいわ……一人でぐんぐん暴れてやるわ……』といふのが聞える。其前後は分からない。忽ち僕の後ろから男の聲で『そりやア君ナポレオンだつて二度ワイフ持つたぢやないか、ハハハ』と聞える。その前後は分からない。かういふ短句は聽手がいろいろ補充して味ふから面白いのだとも思ふ。和歌や俳句などを味ふ場合もさうだかも知れない。（二月十五日記）

57 『作歌炎』

「文學評論しがらみ草紙」第一號の發兌は明治二十二年十月廿五日である。巻頭に載つてゐる、『しがらみ草紙の本領を論ず』といふ文中に、『あゝ明治の天地は小說の天地となり「小說熱」の語は近代西人の所謂「作詩炎(ポエチツシユーポス)」に好對を與へたり』とある。予は『作詩炎』といふ、醫語に通ずる此語彙に偶然興味をおぼえた。かかる語彙の暗に指示する心持には諷刺諧謔の分子が含まれて居る。けれども少なくも予の現在は此語の心を諧謔だと感じてはならない。予が『作詩炎』す

なはち『作歌炎』に染んだ時、人は予をあぶないと觀じた。幾たびも戰いた擧句に予は、決してもうたぢろぐまいと思つた。十年來『作歌炎』に染み來つた予に、何といふ事なしに一種の力と光とが、潛（ポテンチエル）處のかたちで藏されてゐるに相違ないといふ心が湧いたからである。さうして予は人知れずこの潛める力と光とを尊重し愛護しなければならないと思うたからである。今は予の心を笑ふ事の出來ない嚴肅と悲痛とが領してゐる。（四月四日）

58　『命なりけり』といふ結句

『あかあかと一本の道とほりたり玉きはる我がいのちなりけり』（茂吉）『山のうへに朝あけの光ひらめけりよみがへり來る命なりけり』（千樫）予の歌は「詩歌」一月號に發表された歌である。千樫氏のは「アララギ」三月號に發表された歌である。予が上記の歌を詠んだ時は予の心持を割合によく表はし得た歌だと思ふのは別として、一首全體の調子、特に第三句の終音が『り』であつて又結句が『命なりけり』である所が今まであつた世の歌以上に一歩を進めたやうな氣がしたのである。二ケ月經て古泉千樫氏の歌を讀んだ時予は氏の歌の句法が如何にも予の歌の句法に似

てゐると思つた。然し氏はどういふ止み難い内部衝迫から斯る句法を生んだかを明かにしない。從つて氏の歌は予の歌の模倣だとは現在の予は斷言し得ない。只予の歌の句法はどういふ苦心から成立したか、どういふ點が古人の句法以外に特殊の點であるかを記述したいと思ふのである。

予の歌は秋の一日代々木の原で出來た歌である。左千夫先生追悼號の終の方に予は『秋の一日代々木の原を見わたすと、遠く遠く一本の道が見えてゐる。赤い太陽が圓々として轉がると一ぽん道を照りつけた。僕らはこの一ぽん道を歩まねばならぬ。』と記してゐる。このやうな心を出來るだけ單純に一本調子に直線的に端的に表現しようと思つたのである。いろいろと作り直してとどのつまり斯る句法になつたのであるが、然らば他の作物から得た暗指は無いかと今自問自答して見ると、西行法師の歌が暗々裏に予の頭の中にあつたやうだ。西行の歌といふのは、「新古今」巻十の歌で、『東の方にまかりけるによみ侍りける。年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさ夜のなかやま』といふのである。この歌は有名な歌であるから予も覺えて居たのであるが、『命なりけり』の意味が予の歌の場合とちがふ。予の歌の場合は『生命である』といつて一命をなげかけた狀態である。西行の場合は、『年たけて又此山を越ゆるのも存命のゆゑである』といふ意味である。そこが違ふ點であり、又結句に『いのちなりけり』としたのが予の歌の新ら

しい點であると思つた。正直をいへば作歌當時は、『命なりけり』といふ結句の歌が古來から無いと思つて居た。それから暫時して、「しがらみ草紙」の第一號に井上通泰氏の歌で、『夏野ゆくいのちなりけりくさ川のつつみにさけるひめゆりの花』といふのが載つてゐるのを發見した。この歌の場合は予の歌の心と似通つた『命なりけり』であるやうに感じた。それから此事を書かうと思つて、試みに「國歌大觀」を見たところが、『命なりけり』といふ結句の歌が十數首ある事を發見して、非常に嬉しくもあり、又意外でもあつたが、同時に予の歌の句法のやうなのが無い事を發見した。結句に『命なりけり』と置いたのは新しい點であると思つたのは全く無學の爲めの自惚に過ぎなかつたと覺つたと同時に、依然として一首全體が矢張り新らしいといふ自信を更に強めたのである。

『春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり』（古今集卷二）萬葉集には斯る結句の歌が一首も無くて、古今集に入つて初めて見當る。此歌の場合も『存命のゆゑである』の意で西行の歌の場合と同じである。『命なりけり』の意味の解釋法として斯ういふのは當時にあつては一つ慣例であつたかも知れない。次手に『命なりけり』の結句の歌數首をおぼえの爲めに書きつけて置く。（四月廿日）

今ははや戀ひ死なましを相みむと頼めし事ぞいのちなりける（古今集卷十二）
戀死なばかひなからまし存へて逢ふを限りもいのちなりけり（新後拾遺集）
存へて世に住むかひはなけれども憂にかへたる命なりけり（新古今集卷十八）
うしと見し人よりも猶つれなきは忘らるる身の命なりけり（後拾遺集卷十六）

59 ほとほと死にき

かつて萬葉卷十五の『歸りける人來れりといひしかばほとほとしにき君かと思ひて』の『ほとほとしにき』を『殆と死にき』と解して獨りで讃歎して居た事があつた。その『ほとほと』に就いて賀茂眞淵の「縣居雜錄」には、

萬葉は家持歌吾屋戶乃一村芽子乎念兒爾不令見殆令散都類香聞　是らの如き萬葉に三四首もありてこのほとほとはあやふき心としては聞えがたし。あやふき意なるもあれど本の言にあらず。轉じてさ聞ゆるなり。（眞淵全集卷三、四〇五八丁）

とある。眞淵の是文中の『あやふき意なるもあれど』といふのは『ほとほとしにき』の歌の場合

かどうか明瞭では無いが、「殆」をあやふしの意に取るのは本の言で無いと眞淵が云つて呉れたのは、予の讀み方に一つの味ひを得たものである。

次に、『ほとほと爲にき』と讀まないで、『ほとほと死にき』と讀むに就いて、感情に一寸不自然な樣な所も無いでは無い。それは從來の歌よみなどの類型的凡下な感情を標準として論じての語であるが、普通人間の感情を標準として論ずれば少しも不自然では無い。例へば予の愛讀する書のなかに、ひとりの女人が感きはまつて、『あゝ、死にます死にます』と言つてゐる。

（四月廿日）

60 甘露往生

死はいかなる場合でも嚴肅である。生き殘つた者は死人の菩提をとむらつてやらねばならぬ。年のやや傾いた人が、交合のもなかに忽然として死んで行くことがある。獨逸國の人々は斯る死者の菩提をとむらふ爲めに、かかる死にやうを Süsser Tod と稱へた。決して笑ふ事が出來ない。

（四月廿日）

61　虛子の俳話より

俳句を勉強しようと思つて此頃高濱虛子氏の『俳句入門』（ホトトギス所載）と『俳句の作りやう』（ホトトギス所載）を讀んだ。俳句を味ひ俳句を作る上に於ては速成的悟入が出來なかつたが、文中の名句を短歌に應用すると、予にとつては大に爲めになるものになる。予は自分ひとりの爲めに其等の句をば摘錄して置かうと思ふ。

（1）我等は複雜な思想の上に立つて簡單な句を作ることを忘れてはならぬ。（第十五卷十一號）

（2）句は萬斛の憂を胸に藏して僅かに一言を洩したやうなものでありたい。（第十五卷十二號）

（3）必竟は多く解し、味ひ、悟り、而して少しく言ふの謂である。（第十五卷第十二號）

如上の言は、まさしく予が短歌の句法に於ける單純化を考へてゐるのと一致する。單純化は粗雜化（フエルグレーベルング）ではない。どんなに深い複雜な思想なり感情なりを有する者でも短歌作者となる爲めには、換言すれば一首の短歌を作り得る爲めには、其の深い複雜な思想なり感情なりも一たびは單純化といふ淨火の中を潜つて來なければならぬ。虛子氏の文は、這般の呼吸を心にくい迄に平淡に言

ひ現はしてゐると思ふ。單純化といふ淨火の中を潛つて來たものは、凡俗の目には案外つまらなく平凡に見えるに相違ない。然しそこが尊い所以である事を思ふ。

（4）若し形式に囚はれるのを好まぬなら、ずつと俳句を離れて了ふがいゝ。……俳句は形式を先にして生まるる文學である。（第十五卷第十二號）

此言は予の『短歌は短歌の形式を離れては存在し得ない』といふ言に通ふものである。予は主觀的には既成の短歌の形式を尊重し、自分の命（いのち）をのりうつす者であるが、やや客觀的に觀て短歌の形式を云々する場合でも、短歌の形式をば單に外的の形骸であるなどとは考へてゐない。嘗てウエルヴォルン教授の細胞生理學を漫讀した時、單細胞動物の體型の如きも要するに內力の表現に外ならない事を知つた。人類の體型、犬屬の體型、喩ふればかゝる形式も忽然として湧き來るものでは無い。煎じつめれば生ける內力の表現に外ならない。また一方から觀れば人類は人類體の形式を離れては存在し得ない如く、犬屬は犬屬體の形式を離れては存在し得ない。水晶があの樣な結晶型を取る心、短歌が三十一音に限局せられたる心、かういふ事を考へるのは決して類推法（アナロギー）の戲れでは無いと信ずる。予は既成の短歌の形式をばかくの如く尊ぶがゆゑに、短歌の形式打破、破調云々の理論から離れて、短歌の形式を獨立せしめて考ふるに堪へる。予は短歌の形式を尊

重する。然し我國短歌の形式の價値は萬葉集等の既成短歌と切離しては存在し得ないものである。またロダン翁の漫言は翁の藝術と切離して考へる事が出來ない如く、予の『短歌形式尊重論』も予の作れる乃至これから作る短歌と切離すべきものではあるまい。特に單に問題のみが強く自分の心に住んでゐながら其の理論を精妙に開展して行く事を得ない、果敢ない獨語に類する此『短歌雜論』の如きは、制作の實行と離れては價値と力との薄いものであらう。（四月廿三日）

62　單純化

上で『單純化』のことを云つたが、それを單に技巧の點として解すると間違ふのであつて、抒情詩で短い形を有つて居る短歌の本來性質はおのづからそれを要求してゐるのである。ことばを換へていへばそれが人類の自然なのである。與謝野氏等の新派の歌は『複雜』を誇りとして知らず識らず陷つた弊は、人類の自然と短歌の本質とに眞に觀入しなかつたためであり、萬葉の優秀な短歌の性命はこの人類の自然に根ざしてゐるがためである。賀茂眞淵は萬葉を心讀して、『なほくひたぶるなるものは、ことば多からず』と云つたのは正に云ふべきことを云つたのであつて、

また後進の予の言もこれに過ぎないのである。いや予は自ら悟入したやうな面持をしようより先進の蹤跡をさぐりそこに共鳴の魂を得るのを樂しむのである。ひとり日本國とは限らない。die echte Lyrik muss ein Abdruck des kernhaften, innersten Empfindens einer kraftvoller Persönlichkeit sein といふ獨逸人のことばもそのなかの „kernhaft" の語の如きもおなじく共鳴の魂であるに相違ない。直截にして剛健な、生命直寫の短歌をおもふこと切なれば切なほど、三十一文字不自由說、不自然說などに顧慮せなくなつて來てゐる。それを不自然だと論らふのはそれは短歌制作に經驗を置かない閑人の空理論に過ぎないのである。三十一文字に不自然を感じないのはそれは迷蒙習慣に過ぎないと謂ふごときは、それはあべこべなのである。（四月二十三日）

63　酒糟の歌よりの聯想

今夜ねむり藥の積りで曙覽の歌を漫讀してゐると、

　たのしみは雪ふるよさり酒の糟あぶりて食て火にあたる時（獨樂吟）

といふのが見當つた。この歌は予が數年前左千夫先生の唯眞閣の茶室で詠んだ歌と似てゐる。さ

うして此歌が機縁となつていろいろの思出が頭のなかに浮んで來た。興味深い事であるから、記憶を辿つて書きつけて置かうとおもふ。予の歌といふのは、

酒の糟あぶりて室に食むこゝろ腎虚のくすり尋ね行くこゝろ（アララギ五の二所載のもので、歌集赤光のなかにも多分收めてある筈である）

といふのである。明治四十五年正月半ばの事である。予は根岸へまはつて、それから左千夫先生を訪うた。靜かな一日も夜になり、其夜もだんだん更けて行つたころ、先生は平たい酒の糟を取出して來て火にあぶりながら、一つ食べて見たまへ、さう工合の悪いもので無いと言つた。其時古泉千樫も居合せた。緑茶と菓子のあひまに、ぽつりぽつりと酒の糟を食べたが、妙な氣持になつて、由來 Impotenz といふ事には可なり強い同情を有つてゐた予は、しづかな妙な氣持で此歌を作つたのだと思ひ出される。夜が大分更け渡つたころ、先生は一本の手紙を出して、『齋藤君また女の同人が一人殖えたぜ』と言つた。手紙の封筒を見ると、澤村ちよのといふ名前で、消印は赤坂局である。中を見ると誠に下手な平假名で歌が三首書いてある。

いにしえのをみなよなれとうちざれてゐませしきみがかげにたつかも

わがせこがきまさむよひをかきくもりゆきげにさむくなりてきにつゝ

まちかたはまださわがしくよひなれどわれはさぶしゑ一人にてをれば

いかにもおぼつかない平假名を辿つて讀んだ三首の歌は、なかなかうまいものである。予は心より嬉しく思つた。而して、これは偉いものですねと言つた所が、先生は如何にも滿足した樣な顏付をして居た。『知つてゐる女ですか』と言へば、『いや知らない女だ』と言つてゐる。其時側に見て居た千樫はくすくす笑ひ出した。千樫は腕組をしながら『どうも先生は面白い』と笑つてゐる。予はあつけに取られてゐたが、忽然として勘付いて來た。くわしく話を聞かうと思つたが、『齋藤君なんかが種々鎌をかけて僕に話させようとしてもさう旨くは行かんよ』と言つた。聯想もこれでしまひである。（四月二十五日）

64 象徵と短歌

現今我國の詩壇の一部に特別に象徵詩だと銘を打つて出てゐるものがある。其等の象徵詩は表現法が大分むづかしいもので、時によると摩訶不思議のものさへある。然し己は詩に關しては深い信念が無い所から只何となく、さういふ詩が偉いものの樣な氣がして讀み味つて居た。ところ

が其うち『象徴歌』を唱道し實行した人が出來た。其を讀んで予は直ちに頭を振つた。こんなものが象徴歌ならば、象徴歌といふものは下らないものだと思つた。

その後象徴詩に關する議論を幾つか集めて心を潛めて讀んで見た。一々皆もつともである。かういふ立派な議論があるならば、立派な象徴歌だとて出來ない事はあるまい。今まで象徴歌の下らないのは、中途半ぱにぶら付いてゐるからだらうと思つた。

予は服部嘉香氏の詩論は餘程以前から尊敬して讀んでゐた。ところが氏は「詩歌」の三月號で、象徴を短歌に關聯せしめて論じた末に、『私は眞の象徴は短歌に有り得ないのではないかと思つてゐる』と結論した。さうして、短歌とても第二義的な淺い象徴はあるであらうが、作者と作品とを一元とし、作品のリズムに直ちに作者の生活靈性を彷彿せしめるやうな象徴は、三十一音律の約束がある以上短歌に盛らるべきものでは無い。どんなに微細なリズムが内在しようとも五七五七七の調子では駄目だと云ふのである。

一應もつともの說である。これで己はほつと安心した。象徴詩に關しては有力な力說者である服部氏の象徴歌（多分さういつてよからう）が如何にも己にとつて感心し難いものであつた時、これは服部氏は未だ歌人として多力者で無い爲めだと思つて居た。然るに服部氏は其罪を短歌形

式に着せて居る。かく罪を着せられた短歌形式の側に立つて見れば、服部氏と永い訣をするのが至當であらう。

そこで予は思つた。短歌は獨立の藝術である。度々いつた如く、短歌は決して長詩の一部分でなく長詩中の一句では無い。象徵歌を作る場合でも是非とも現今の所謂象徵詩にあるやうな、あゝいふ表現法を取らねばならんといふ理窟はあるまい。幾ら象徵歌の技巧が全然在來の技巧から脫却せねばならぬと言つた所で、あの樣な、ねちねちした面倒臭い、煮え切らない表現法でなければ象徵歌と稱へられないといふ法はあるまい。西洋の所謂象徵詩をば、おぼつかない修練の足りない日本語で直譯して、そんな所から出發したつて駄目だ。

象徵歌といふものが尊いものである事を信じたならば、目ざめたる歌人は決して現代の象徵詩人などの模倣者であつてはならない。みづからの象徵歌を創造しみづからの命に立脚して、ひたぶるに一本の道を步まねばならぬ。歌壇にあつて此大道を切り開き光明をかゝげて進む多力者は誰ぞ。（四月廿五日）

65　二たび短歌と象徴

服部嘉香君。予の『象徴歌』とは無論『象徴短歌』の意である。この場合に予は『歌』の概念を本居宣長や貴君の如く廣義にしない。又その象徴といふ事に就いても、今更に予に向つて其の概念を問ふ必要は無い。貴君が業に已に實行してゐる如く、象徴といふ語が文藝史上に一定の意義をもたらした以來のあらゆる西洋の書物を讀めばよい。又我國にあつて鷗外博士の著書以來の象徴を論じたあらゆる書物を讀めばよい。象徴主義の概念及び形容詞になつた場合の象徴主義的なる概念は、此語の初生以來幾變遷を經來つたとは云へ、論の場合にさう得手勝手に意味づけることは象徴といふ語の存在を無意義にする所以である。但し短歌制作の際の態度に就いてはこの前に言つた通りでなければならん。今は繰返さぬ。

貴君の論を待つ迄もなく、作者と作品とは渾一體でなければならない。詩の體に於てもさうである。句の體に於ける芭蕉の如く、短歌の體に於ける人麿の如く、詩の體と作者の生活靈性が渾一體となるに及んで初めて詩の體に命がある。短歌の體を單に束縛されたる因襲形式としか外見

する事が出來なければ、短歌の體に命の無いのは無論である。予は短歌の體を愛敬し交合し渾一體に化する心願を有つてゐる。予の苦惱も信念もそこにある。

貴君の言の如く短歌の體は五七五七七の三十一音律だといふのに向つては大體に於て異論は無いが、其の三十一音律は二三四五等の音列の連續だと予は考へてゐる。結句の七音ですら三四、四三、二五、五二、三二二、二二三、などの場合がある。貴君は是等の一々の場合を如何に解釋して居るかを聞きたい。

短歌の體は忽然として湧いたものでは無い。又その變遷史は多種多樣である。予の作る短歌には因襲もイルージョン（もつと眼を清明にすれば其實イルージョンではないのである。）もあつて其因緣ふかくして遠い。予は予等の祖先の命を尊び味ひ常に感謝してゐるものである。予が創造などいふ語を用ゐて予の信念を表はすに當つても常に此深大深遠なる因緣の上に立脚しての論である。此點は貴君と違ふのである。

『時としてそれが五七五七七に排列されてゐやうとも短歌としてのあらゆるトラディションとイリユジヤンとを拭ひ去つたものならば已に短歌的音律を忘れたものになる。それが肝腎な問題である』といふ貴君の言は正しく短歌の體の存在を全然否定したものである。それならば『力な

き夜の足音息すれば息ぞかなしくをぐらき灯かな』といふ貴君の作は偶然に期せずして全然我國の短歌的音律を忘れて出來たものかどうか、母より日本の言葉を教はつた以來、百人一首を覺えた以來、古代今代の短歌を讀み覺えた以來のあらゆる其等の短歌的音律を忘却して出來たものかどうか。次に貴君の此作は『作者と作品とを一元とし作品のリヅムに直ちに作者の生活靈性を彷彿せしめるやうな象徴』になつてゐるかどうか。貴君自身そのつもりか。

若しそのつもりで無いとせば、なぜ貴君はかういふ作をするのか、予の觀方によれば貴君の此作は短歌の體だと思ふが、短歌的音律を忘れて自由になれと叫ぶ貴君が何を思つて此作をしたか。いゝ加減なものだと思つて、短歌の體を弄品の如く思惟して試みに製造して見たのか。短歌の音律などは至極お安いもので其リヅムも作者と一元たるを得ないものだと諦めて仕舞つての作か、予の不思議に思ふのは其處である。

人麿の、あしびきのやまがはのせのなるなべにゆつきがたけにくもたちわたる、といふ一首に就いて考へて見る。此一首は無論その來れる因の遠い三十一音律の短歌である。然し西洋人特に近代佛獨の象徴派詩人の發明に係る象徴主義的（ジンボリスチツシユ）なる語を直接この一首に冠らせ得るかどうかは知らない。たゞ作品と作者とを一元とするリヅムを有する點に於て、又この作は作者と離すべから

ざる、いひ得べくんば象徴的(ジンボリツシユ)なる點に於て、貴君の『力なき夜の足音』の歌よりも優秀であると予は思ふ。貴君は此點に就いてどう思考せられるか。

66 交合歡喜

ニイツチエは Rausch といつた。予は交合歡喜といふ。ここに受胎(ボフルフツング)がはじまる。それより初生に至るまで一定の發育が要る。短歌を生む場合に於ても如是である。ゆくりなくもウエルネルはその著「抒情詩及び抒情詩人」のなかに於て受胎といふ語を使つてゐる。

67 曠野集より

「曠野集」員外の部より、予の面白いと思つた句を手帳に書きつけ置く。銘々の句を各獨立したものと假りに定めて置く、是等の一句一句を讀むと、予の歌と流通してゐる所が多い。予は今更ながら予等の祖先の居た事をありがたく思ふの餘り、之を友に示す。

(1) 山の端に松と樅とのかすかなる　野水
(2) 袋より經とりいだす草の上　荷兮
(3) 冬の日のてかてかとしてかきくもり　越人
(4) さゝやくことの皆きこえつる　荷兮
(5) 大根きざみてほすにいそがし　荷兮
(6) 百足の懼る藥たきたり　野水
(7) 心やすげに土もらふなり　龜洞
(8) うた歌うたる聲のほそほそ　舟泉
(9) 水しほはゆき安房の小湊　龜洞
(10) 柳のうらのかまきりの卵　松芳
(11) 馬のとほれば馬のいななく　冬文
(12) あかつきふかく提婆品讀む　荷兮
(13) 花の賀にこらへかねたる涙落つ　傘下
(14) たゞしづかなる雨のふり出し　越人

（15）理をはなれたる秋のゆふぐれ　越人

（16）あとなかりける金二萬兩　越人

（17）念者法師は秋のあきかぜ　越人

（18）賤を遠から見るべかりけり　野水

（19）はづかしといやがる馬にかき乘せて　落梧

（20）かかる府中を飴ねぶりゆく　野水

（21）寂しき秋を女夫居りけり　落梧

以上の一つ一つは無論、一首短歌、一句俳諧の如く纏まり獨立しては居ない。そこに又特殊の面白味もある。丁度通りすがりに耳に入る行人の談話の斷片のやうなものである。又洒落れた所もある。かかる一つ一つは萬人に通じて面白いといふものではあるまい。

68　若山牧水氏の言

このごろ若山牧水氏が予の歌風（詠みぶり）を評して『北原君のと、長塚氏のとの作風のどつ

ちつかずの所に同氏の詠みぶりはあるのではないかと思はれた』と言つてゐる。けれども氏の思方は下凡である。それから牧水氏の『甘言苦語』といふものを讀むと、ひとり高座にのぼつてをん弟子を眼下に見おろし、『三省して欲しいものです』とか『失はぬ樣にと祈らるる』とか『心の紐を解き放して御らんなさい』とか言つてゐるところ、ふかき興味をおぼえる。けれども斯る態度で茂吉の歌を觀ると間違ふ。

長塚節氏の歌、北原白秋氏の歌を注意してゐる點に於て予は必ずしも人後に落ちないと信ずる。又兩氏の歌と予の歌との間におのづから深い交流のある事も予は識り感じてゐる。予の歌風とい ひ得べきものに就いて惟ふにその因縁ふかくして遠い。初生以來予の命は幾ばくの流轉生長を經來つてゐる。予の歌風の發育史を論ずるならば、牧水氏の如く不用意で、かつ不謹愼であつてはならない。

予は常に、予の歌風が今忽然として湧いて來たやうな顏付はしない。小澤蘆庵の如く『無法無師』などいふ事を唱へる程づうづうしくは無いからである。又今まで喰ひ來つたものを全然忘却するほどの放漫を欲しないからである。それにも拘はらず予は予の歌風の獨立性を自ら認容しその認容を固執する事を羞恥とも偏執とも思はない。

於玆、予は若山牧水氏にいふ。氏が予の『諦念』八首『折にふれて』八首を讀んで、何の感興をも惹かないとか、力が足りないとか云つたのに向つては、予は何ら云ふ事は無い。氏は予の歌風とその發育史に論及し、『どつちつかず』といふ如き言葉を用ゐて予の歌風の獨立性を認めない點に論を歸着せしめてゐる。予はその結論に對し、其を下凡と觀、不用意と觀、間違つて居ると觀た。氏の予の歌風に對する結論と其の結論に對する予の結論とについて、そのいづれが眞實であるかを出來るだけ審諦の域に進めなければならない。

69 二たび牧水氏の言

予は前言に於て、若山氏が予の歌を評して『どつちつかず』といふ言葉を用ゐたのに對して、その不徹底を難じた。ところが、若山氏は、その『どつちつかず』を次ぎのやうに説明し註を加へた。『小生は北原君と長塚氏との歌の趣きが非常に變つてゐるものであることを述べて、そのいづれにも屬してゐない、中間に貴君の歌のあることを云つたに過ぎない』といひ、なほ、『その時の貴君の作に對する不滿は簡單ではあつたが云つておいたつもりである。それも充分貴君の

獨立性を認めたればこそ相當の敬意注意を拂つていつておいた』と云つてゐる。かく若山氏は予の歌風に獨立性を認容すると明言した以上、予はこのうへ若山氏の言を追及しようとは思はない。予の歌が强ひて若山氏によつて賞讚されることを幸福としないからである。たゞ一言ことばの感覺についていつておからうと思ふ。いつたい邦語の『どつちつかず』といふ言ひあらはし方は、一定の方嚮を執らざる『漂動』の情調を伴つてゐる。つまり一定の信念のもとに行動せずして左往右往して歸著するところなき語感を有してゐる。摸倣によつて漂動しゐる『非獨立性』を暗指してゐる。予が若山氏の言責を問うたのはこれがためである。然るに若山氏は、『どつちつかず』を以て、『中間に位してゐる』意味であるといつて居る。かゝる粗笨なる言語感覺を有しながら、易々として予の歌の發育史に論及しようとするのは、すこしく大膽すぎるであらう。

70　子規の言葉

明治四十四年子規忌記念に作つた牛喆文庫の端書に子規手蹟の寫眞版がある。『發句ハ丁寧ニ取扱フベシ。發句ノ下手ナモノハ發句ヲ麁末ニ取扱ヒ字ノ下手ナモノハ字ヲ麁末ニ取扱フヲ常ト

ス。字ヲ丁寧ニ取扱フハ字ノ上手ニナル一法ナリ。發句ヲ丁寧ニ取扱フハ發句ノ上手ニナル一法ナリ。病子規識。』といふ文句である。「アララギ」の投稿歌のうちには作つた本人さへ分かるまいと思はれるやうな歌が幾つも竝べてあつて、然かも字も假名遣も甚だ亂暴なのがある。自分の歌ならばもつと可哀がつたら好さ相なものだと予はいつも不思議に思つてゐる。

子規いはく、『募集の俳句は句數に制限なければとて二十句三十句四十句五十句六十句七十句も出す人あり。出す人の心持はこれだけに多ければ、どれか一句はぬかれるであらうと云ふ事なり。故に之を富籤的應募といふ。かやうなる句は判者四五句讀めば終迄讀まずとも其可否は分かるなり。いな一句も讀まざる内に佳句なき事は分かるなり。凡何の題にても俳句を作るに無造作に一題五六十句作れる程ならば俳句は誰にでも容易く作れる誠につまらぬ物なるべし。そんなつまらぬ俳句の作りやうを知らうより糸瓜の作り方でも研究したがましなるべし』。健康な體を有つてゐる「アララギ」編輯同人が三人四人で投稿歌を選ぶのとは同一には論じられないが、それでも、今少し作るのに苦心して呉れたならと思ふ事は毎回ある。

『讚められた』といふ事が動機になつて、その讚めた者と深い結縁を遂げる例はある。短歌雜誌などで會員を多く集めるには、讚め方の上手下手といふ事が大關係がある。但し此は天品であ

づて予等には如何とも爲難い。そして讃め方の下手といふ事は決して自慢にはならない事だ。

短歌を主とする文藝雜誌は東京だけでも五六種はある。日本全國では二十種を下るまい。驚くべき事だ。不謹愼だと思ふからあへて嘴を容れないが、「アララギ」に歌を投ずる人でゐて、なほ五六種の短歌雜誌に歌を投じてゐる人がある。さういふ人は恐らく眞に「アララギ」を愛敬しては居まい。ところが該人は「アララギ」を愛敬して吳れると明言する。どうも不思議である。いざといふ場合まで突つめた者にかういふ事が出來るものだらうかと思ふ。是樣な事を念に有つやうになつたのは、或人が投稿歌の優待法を唯一の武器として或人を口說落した話を聞いた以來の事である。今まで苦勞に苦勞を重ねて來た「アララギ」である。いゝ加減なものゝ集合所にされてたまるものか。

「アララギ」に萬葉集の短歌を解釋したり、良寛法師の歌を紹介したりするのは、せめてあゝいふ類の歌を多く詠んで貰ひたいからである。然るにさういふ萬葉調の歌が一向集らないで、蜻蛉のつるむ歌や。戀人が怨めしい歌や、無暗に淚をこぼす歌ばかり集つて來る。生命の、生活のと鼻息ばかり荒くしたつて、物が物なら何にもなるものではあるまい。

71　曉臺句集より

いつか曉臺句集秋部から自分だけ感心した句を拔書して居た事がある。『大祇蕪村一派の諸家其造詣の深さ測るべからざる者あり。曉臺・闌更・白雄等の句遂に兒戯のみ』と子規から言はれて見ると其とほりだかも知れない。予の感心は例により覺束ない感心であるかも知れないが、こころみに書きつけ置く。

（1）蠅ただに死ぬ日を見たり秋ぐもり
（2）鹽負うて山人とほく行く秋ぞ
（3）道のべのいなごつるみす穗のなびき
（4）三日月の光さしけり精米　六祖讃
（5）鱗のこころは深し初しぐれ　漁火讃

第一の句の『ただに』は『直に』であらうと思はれる。さうすれば非常な偉い句だと思ふ。萬葉集などには散見する副詞であるが、蠅ただに死ぬといへば又別種な力が出て來る。第二の鹽負

うての句で思ひ出すが、蕪村が死んだ時俳人が集つて作つた連句の中に佳棠といふ人の『鹽負ひかへる土肥の山人』といふ句がある。その時曉臺も居合せてゐた。

72. 上田秋成

醫を業とし「雨月物語」で名のある秋成は『かぐ山の尾上に立ちて見わたせばやまと國原さなへとるなり』とか『この夕べ雁なきわたる山城のふしみの早稲田刈やそめけむ』とか『河内なる狹山の池の廣ければ稲葉かりつむ舟も見えけり』などの歌を作つた事は誰も知つてゐるが、本月の「藝文」に載つてゐる文は又面白い所があるから書いて置く。

『秋の雲風にただよひ行く見れば大はた小幡妹がたく領布、といふ歌を詠んだはと人に談りしかば、都鄙の歌よみの皆惡しく云よし。遠くの人は知らず我が處へ來る人の中にも誰も此歌の味の知れる人が無い。古體じやの今體じやのと、また人のいふは中世の古い所じやと云はれると、口眞似ばかりの狙どののみ。腹に何にも無いから此の歌の味が知れてたまるものか。小家かりきた小庵かりていつかどの商せらるゝ歌よみの命の中には知れまい

ことじや。さして佳いと云ふのではない。古意にし古體にし等類ないかと思ふたのなり。

秋風吹白雲飛と云ふをちと面白がらせたのみ。調の高き事は自まんじや』（假名を漢字に直した所もある）

この不平でゐるところが面白いのである。蘆庵には秋成の歌が分からなかつたらしい。千蔭や春海も左程とは思つて居なかつたかも知れない。然かも本人は矢張り偉いと自信してゐた。現世でも皆々みづから天下一のつもりでゐる。子規の句に『木の下に新體天狗つどひけり』といふのがある。

73 誠拙禪師歌集より

大體に於てあまり優れた歌は無い。高僧だからというて、歌が皆優れてゐるといふ訣には行かない。抱一は畫家としてよいが、俳人として駄目なのと同樣である。無暗に人間とか生活とかを云つても、歌は矢張り歌の修行を積まねばならない。若し惡歌しか作れなければ未だ修行が足りないのである。禪師の歌は多くの佛典の句の直譯みたやうなもの大に悟つた樣な澄ましたものの中に稚い平淡な歌が交つてゐる。それが比較的面白いと思ひ、鈔出する氣になつたのである。

（1）きさらぎの中の十日に嵐やま花ははじめてほころびにけり
（2）山路來て峰より谷を見おろせば咲きにけるかな山吹のはな
（3）大江山ふもとの雨をしのぎかねしばし生野にやすらひにけり
（4）ならび立つ天のかぐ山うねび山はるか向ひに見て通りけり
（5）この冬は餘程さむさの身に染みて夜の尿通の數ぞ增しける
（6）山里のしるべ尋ねて行く道は同じ流を三たび越えけり
（7）茶の花も咲そめにけり露じもに奈良の山山もみぢするころ

禪師の歌集は全體で百四十首ある。香川景樹の跋もある。『わびしとも何か思はむいつよりも心しづけき夜半の春雨』や『雲おりの坂の麓に聞く雨はみどりの池にたつけぶりなり』などの歌もある。大正二年五月鎌倉圓覺寺內佛日庵藏版。非賣品。（十月十七日）

74　傘松道詠

道元禪師の「傘松道詠」を見たが、矢張り道歌がおほく、「あなたふと七の佛の古言を學ぶに六

の道を越えけり』などは先づよい方である。

都には紅葉しぬらむおく山は夕(ゆふべ)も今朝もあられ降りけり

こころなき草木も秋は凋(しぼ)むなり目に見たる人愁ひざらめや

の二首を拔いた。予は僧侶の生活に興味を有つてゐた。本當に女人をいだかないといふだけでも予には尊いと思つてゐた。そこで其の歌にも必ず尊い處があると期待して居た。ところが實際になると、普通の歌人の歌と違ふ點は道歌の數が多いといふ事だけである。行誡上人の歌なども矢張り其とほりである。おもふに皆餘技であつたからであらう。餘技は妓の五目竝べにひとしい。

（十月十七日夕記）

75 俳書より

いつぞや曠野員外部から、若干を鈔したことがある。こよひも元祿俳書から漫然と引きぬいてその各を獨立したものと看て、聯想から來る寂(さび)、にほひ、栞(しをり)などの說からしばし離れることにしてゐる。

（1）晝眠る青鷺の身のたふとさよ　芭蕉
（2）こそこそと草鞋をつくる月夜ざし　凡兆
（3）蚤をふるひに起きしはつ秋　芭蕉
（4）霜月や鸛のつくつく並び居て　荷兮
（5）冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
（6）ひるの水鷄の走る溝川　芭蕉
（7）かしらの露をふるふ赤うま　重五
（8）朝鮮のほそり薄のにほひなき　杜國
（9）日のちりぢりに野に米を刈る　正平
（10）しらじらと碎けしは人の骨か何　杜國
（11）日は寒けれどしづかなる岡　芭蕉
（12）負うて大津の濱に入りにけり　且藁
（13）まじまじ人を見たる馬の子　荷兮

俳諧を作ることを能くしない予の鈔出した以上のやうなものは、俳諧を作つて專心に苦勞し、

また新傾向新々傾向とあわたゞしく推移してゆく人々の目よりみればいかにもをかしいに相違ない。けれども以上のやうなものを予は好きなのであつて、また西洋藝術の取入れにいそがしいなかに、『日は寒けれどしづかなる岡』とか、『晝の水鷄のはしる溝川』などの境まで行きついた祖先の作を味ふと、予の心にこよなきものを感ずるのである。

76　梁塵祕抄より

明治四十四年の秋に和田英松氏が文行堂から梁塵祕抄二冊を買つて、それが和田、佐佐木諸氏の盡力で大正元年八月に單行本になつた。和田、常盤、佐佐木諸氏の親切な解説がついてゐる。僕はその書物から好きな歌、句を拾つて書きつけておく。

（1）佛はさまざまに在せども、まことは一佛なりとかや。藥師も彌陀も釋迦彌勒もさながら大日とこそ聞け。

（2）佛は常に在せども、現ならぬぞあはれなる。人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見えたまふ。

（3）空よりは華降り動き。

（4）平等大惠の地の上に、童子のたはぶれ遊ぶをも、やうやく佛の種として、菩提大樹ぞ生ひにける。

（5）いにしへ童子の戯れに、砂を塔となしけるも、佛になると說く經を、皆人たもちて緣むすべ。

（6）をさなき子どもは幼し。三つの車を乞ふなれば、長者は我子の愛しさに、白牛の車ぞ與ふなる。

（7）醉ののちにぞ覺りぬる。

（8）寂寞おとせぬ山寺に、法華經誦して僧居たり。普賢かうべを撫でたまひ、釋迦は常に身を護る。

（9）遊びありくに恐なし。

（10）地より湧きたる菩薩だち、皆これ金の色なりき。

（11）娑婆に不思議の藥あり。

（12）迦葉尊者の石の室、いるにつけてぞ耻かしき。緣執つきざる身にしあれば、袂に花

こそとまるなれ。

(13) 龍女はほとけになりにけり。

(14) 崑崙山(こんろんさん)には石もなし。玉してこそは鳥を打て。玉に馴れたる鳥なれば、驚く景色(けしき)ぞ更になき。

(15) 三身佛性具せる身と、知らざりけるこそあはれなれ。

(16) 我等は何して老いぬらむ。思へばいとこそあはれなれ。

(17) これより南に高き山、沙羅の林こそ高き山、高きみね。

(18) 熊野へ參らむと思へども、徒歩(かち)より參れば道遠し。すぐれて山きびし。馬に參れば苦行(くぎやう)ならず。空(そら)より參らむ羽(はね)たべ若王子。

(19) 衆生ねがひを滿てむとて、空には星とぞ見えたまふ。

(20) よむ人きくもの皆ほとけ。

(21) 妙法習ふとて、肩に袈裟かけ年經にき。峰にのぼりて木も樵りき。谷の水くみ澤なる菜も摘みき。

(22) ひとり越路(こしぢ)の旅にいで、足打(あしうち)せしこそあはれなりしか。

梁塵祕抄より

(23) 春の燒野に菜を摘めば、岩屋に聖こそ座すなれ、たゞ一人。野べにて度々あふよりは、いざ給へ聖こそ、あやしのやうなりとも、妾等が柴の庵へ。

(24) 冬は山伏修行せし。庵と賴めし木の葉も、紅葉して散果てて空さびし。憎と思ひし苔にも、初霜ふり積みて、岩間に流れ來し水も氷しにけり。

(25) みそめざりせばなかなかに、空に忘れてやみなまし。

(26) 百日百夜は獨寢と、夜妻はいなじせうに欲しからず。宵より夜半まではよけれども、曉、鷄なけば床さびし。添詞。何爲。

(27) 我をたのめて來ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ。さて人に疎まれよ。霜雪あられ降る水田の鳥となれ。さて足冷たかれ。池の萍となりねかし。と搖りかう搖り搖られ步け。

(28) 遊びをせむとや生れけむ、たはぶれせむとや生れけむ。あそぶ子どもの聲きけば我身さへこそゆるがるれ。

(29) 王子の御前の笹草は、駒は食めどもなほ繁し。主は來ねども夜殿には、とこのまぞなき若ければ。

（30）我子は二十になりぬらむ。博奕してこそ歩くなれ。國々の博徒に。さすがに子なれば憎かなし。負い給ふな、王子の住吉西の宮。

（31）舞へ舞へ蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹶させてむ。踏み割らせてむ。まことに美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせむ。

（32）かうべに遊ぶは頭虱、頂のくぼをぞ極めて食ふ。櫛の齒より天降る。麻小笥の蓋にて命をはる。

（33）山伏の腰につけたる法螺貝の、丁と落ちていと割れ、碎けて物を思ふ頃かな。

（34）賤の夫が、篠折り掛けて干す衣、いかに干せばか、乾ざらむ乾ざらむ、七日乾ざらむ。

（35）おぼつかな鳥だに鳴かぬ奥山に人こそ音すなれ。あなたふと修行者の通るなりけり。

（36）盃と鵜の食ふ魚と女子は、はうなきものぞいざ二人ねむ。

佛典を日本語に翻して微妙に到つてゐる。七五調とそれから雜調を織り交ぜて、なかには獨特の有情滑稽もあつて、和歌の潮流とは別途に、徳川の俳諧に通じ、後世俚謠の卑俗を一飛にして明治大正の長詩に交流してゐるやうなところがある。動亂の世にあつて、なほ人心の靜寂希望の

おもかげは、定家あたりのむづかしいものよりも、此等の直接のものにあらはれて居よう。そして、『こそ哀れなれ』『こそ哀れなりしか』と云つて、奈何に『あはれ』といふ語に愛憐の心を寄せたかが分かる。

77 佛足石歌體

佛足石歌の體は一寸萬葉集にもある。それが神樂歌になると著しい。『茂りあひにけり茂りあひにけり』と第六句を第五句の繰返にしてゐるのもあり、また、『いはひつるかな。いはひたてたる』『水さびにけり。水草居にけり』『宮の鉾なり。宮のみ鉾ぞ』といふ具合に少し變へて繰返したのとある。聲あげてうたひ禮讃するやうな場合の、特に合唱には是非かかる結句の落付が大切な役目をするのである。

ヤ。あかがり踏むな。後なる子。
ヤ。我も目はあり、先なる子。

この繰返は又運動しゆく體によい。古代の長歌でも、西洋の詩でも、この手法を用ゐてゐるの

は、これに萬有相本來の性質に本づいてゐるのである。

この佛足石體の歌は、德川時代にも、明治の新らしい歌壇にも流行しなかつた。たゞ根岸派の一部の歌人が此を試みたぐらゐであつた。そのうちで、香取秀眞さんの『佛を讚ずる歌』といふのが、雜誌新佛敎に載つたことがある。これは出來のいゝものであつたやうに思ふ。

この佛足石歌の體にしろ、旋頭歌の體にしろ、短歌の體に比べて流行しないといふのは、何も國民性がどうの、時勢がどうのといふ訣合のものではあるまい。謂はゞ流行の心理に歸着せしむべきものである。こゝに、ひどく偉い詩人が出て、一生佛足石歌の體ばかりを作つたら、それが歌の雜誌間の流行になるに相違ない。そこに何かの熟した機緣でもあるやうに理窟をつけるのは、世の學者だちの自己滿足に過ぎない。誰か自負心のあるものは、旋頭歌なり、佛足石歌の體なりを、拵へて見たならばおもしろいであらう。

78 生活の歌

『生活を歌へ』といふ事は、餘程以前から聲を大きくして叫ばれた事である。然るにこの頃特

に我等に向つて『生活を歌へ』と言つて吳れた人が居る。そこで予はいろいろ考へて見たが、此生活を歌ふといふ事は、自分の每日の暮向の報告をしろといふ事であるらしい。階段を昇つて見たり、降りて見たり、算盤を彈いて見たり、虛僞を言つて見たり、妻を叱つたり、鼻の穴を掘つたり、こぼれた飯粒を祕と拾つて口の中に入れたり、偶にはお酌と巫山戲たり、といふのを歌に詠めといふ事である。

けれども我等はそんな事は否ぢや。「七番日記」に眞實な筆をおとした一茶の交合記錄も、一茶は之を生前に板にしようとは爲なかつた。我等が暮向きの輪廓は如何にも見すぼらしい。ただ我等のやうなものでも微かながら『深所のいのち』がある。此『いのち』純に凝つて一草一莖を包む事がある。此が我等の歌心の發初である。此方が我等に直接である。暮向きの上邊な報告よりも我等には直接である。かういふ性質を有つてゐる我等に向つて、生活云々と云つたところで、それは無駄である。

それから、圖に乘つて、只今は飛行機といふものがある、其を詠め。經濟狀態が變つて來た、其を詠め。女人の髮の結方が變つた、其を詠めといふ。それも面倒ゆゑ我等は否である。さういふ煩瑣な事を一々短歌に作らなければならん天則があるならば、己は頭から歌など詠まん。我等

の歌はさういふ專門の學書みた樣な面倒なものでは無いが、ぎらりと光る一色の冴えを希求してゐる。これを憧うて苦勞を重ねてゐるのだ。朝鮮國の一留學生が日本國下宿屋の女中を口說いた。其れを二十首あまりの短歌に作つた歌人が居た。己は違ふ。

79 口語短歌

『口語短歌』といふのが此ごろ世の中に見える。我等ならば『けるかも』で行く所を『であつた』で行つて居る。そんな歌も己は否である。どうしても『けるかも』で無ければならん。短歌の結句に『かな』『けり』『かも』『も』『や』などが何故多いか。普通の談話の切目に、何故、『よ』『わ』『の』などを付けるか。『ます』『です』などを付けるか。そんな事も少しく考へて見たいのだ。俳句の切字の『や』『かな』が堅い約束の下に長い間破れずに來たのは、必ずしも下凡者間の約束に止まつて居たとのみ解すべきでは無い。古への俳人は『語勢のひびき』などいふ熟字を案出して句を味ひ且つ談じて居る。今の口語短歌は無理心中未遂の姿である。

80　建部涼帒の語

建部涼帒著はすところの「南北新話」に『拔て作る句法』といふのがある。『長き趣向を云ひほどくに、是も云ひたく彼(かれ)も云ひたく、果(はて)は十七字の短くて思ひ立ながら止む事多し。麥林(ばくりん)これに工夫を付けて、句作を拔いて言葉をつゞめ能く聞えたる手づまを作る。至つて怪しき句法なれば、或は仕損じて繼にもなれど、此處を學び得ずんば、いつも儂夫の談の如く無用の言葉のみ多からん』と說いてゐる。俳人・歌人は句や歌の詩形の短い爲めにいろいろ工夫して洗練と單純化に努めてゐる。ただ予等が今考へてゐる單純化の『一心を凝らす』といふに至らないで『句法の省略』の程度に留まつて居たやうに見うけられる。句法の省略にとどまるならば予等が考へる眞の『單純化』では無い。碧梧桐の新傾向句の一部も此弊に陷つて居る。與謝野晶子女史の中ほどの歌もこの弊に陷つて居る。是等先達の句なり歌なりが予等をして考察せしめて吳れる點は難有い事である。

かつて『春雨を聞きつつ居ればさ夜ふけて寂しき馬の足搔は聞こゆ』といふ歌を詠んだ。この場合の足搔は、馬が前足で板又は馬屋の土間を搔く意の積りであつたのである。然し足搔といふ語は一般に、馬の歩みの足取のさまに用ゐられてゐる。たとへば、『武庫河の水尾速みか赤駒の足搔くそそぎに濡れにけるかも』(萬葉集巻の七)『鵜坂河渡る瀬多み吾が馬の足搔の水に衣沾れにけり』(巻の十七)『赤駒の足搔はやけば雲居にも隱れ行かんぞ袖まかん我妹』(巻の十一)『さわたりの手兒にいゆきあひ赤駒の足搔を速み言問はず來ぬ』(巻の十五)『青駒の足搔を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて來にける』(巻の二)などである。古來より『馬奔走貌』と解してゐるから、予の歌の場合には適當でない。それかと云つて適當の語を知らない。そこで不安を承知の上、字義に重きを置いて『足搔』として置いた。もつとも予の心の不安の中にも、古事記の『足も阿賀迦邇嫉みたまひき』を本居宣長が古事記傳第三十五で解して『足搔貌にて足摩などし給ふ貌を云るなり』と解したのや空穗物語の『手をあがき祈り願立てさせ給ふ』などの文を例に有つてゐて幾分の慰があつたので

ある。

これ等の歌を發表してから、態々予の歌を批難しようと思つて精讀して與れた人も居たが、つひ此歌の『足搔』には氣が付かなかつたのは不幸であつた。さうして他の予の歌の『遠けども女の音す』は『遠けれど女のこゑす』或は『女の足音す』でなければならぬとか、『轟ゆるがし地震ふり來る』の『ゆるがし』は大袈裟で本年の東京の地震はさうひどくは無かつたなどと云ひ、あとは只身上ありたけの惡口に用ゐる語彙を予に冠らせたに過ぎなかつたのは予の甚く失望するところである。然し予の歌の缺點は發表後間もなく斯る難者を待たずに補充することを得た。

ことことと前搔く馬や朝さむみ　　鷗外

これは「歌日記」所載の俳句で、馬屋に馬が二頭ゐるところの繪もついてある。そこで予の歌を『春雨をききてあが居れば馬屋ぬちに馬は寂しく前搔きにけり』と訂正した。あまり上等の歌ではないが、意味ぐらゐは通じさしたい念で書付け置く。さうして感謝の念をささげる。又俗に朝鮮馬といふが、あれも何といふか知らない。和漢三才圖會の繪の騾馬に似てゐるし、「歌日記」にも『犢、驢馬、騾馬、つねの馬、ひとつ轅につながれて挽く荷車の……』とあるゆゑ騾馬とも思ふが判然しない。（大正四年七月九日）

82　言葉のこと

今年一月ごろ『黄に照るや小竹林をそがひにし出で入る息をいつくしみ居る』といふ歌など八首ばかり作つたことがある。突然父上に病氣になられて人身生命の事に就いて深く感じてゐた時の作である。この歌を「アララギ」二月號で發表した當時、或人が葉書を以て此歌の『いで入る息』といふ句は北原白秋氏の、『麗らかや、出で入る息の、わがのぞとおもへば、息の、麗らかや、はれ。』（白金の獨樂）の泥棒である。北原氏を摸倣しないなどと廣言して置きながら此態たらくは醜いと言つて呉れた。予は恐縮したが此言には服し難かつた。けふ歌の言葉に就き書いたから次手に此詞のことも書きつけておかうと思ふ。『出で入る息』の句は俊恵法師の『後の世と言へば遙かに聞ゆるを出入る息の絶ゆる待つ程』などにもある如く、昔から一句になつてゐるものと見える。かの時同時に予は『竹林に近づき來れば現なり我が出づる息いる息を忝む』と詠んだが、『出づる息いる息』の句は、歎異鈔の『人のいのちは、いづるいき、いるいきを待たずしてをはるものなれば』の句や、行誡上人の數息佇心のこころの歌『み佛のみ名かぞへつついづる息いる

息またぬ世を過さばや』などから採つたのである。また次手に書く。『朝はやく溜まる光に耀きてえも言はれなき微塵をどるも』の歌の結句は、鷗外博士の「青年」中に二ヶ所ばかりある『細かい塵が活潑に跳つてゐる』の句からお蔭を蒙つてゐる。

去年發表した『海濱守命』以下數十首の歌言葉のなかには佐佐木氏和田氏等の盡力になつた、「梁塵祕抄」からお蔭を蒙つてゐるのがある。『入日には金の眞砂の搖られくる』は『こゆりさんの渚にはかねの眞砂ぞ搖られくる』や『こがねの眞砂は數しれず』から採つた。『命をはりゐる』の句は「梁塵祕抄」中の『めいをはる』の句と法華經の『命をはれる後忽然として化生す』から採つた。

お蔭を蒙つた言葉はなるべく明記して置きたいと思ふが忘却してゐるのが多い。予が萬葉集の言葉を借用するに就いては特に明記する必要がないから書かない。これ迄予の使つた歌言葉のうちには隨分古來からの慣用例と違つたのがある。無智のために知らず識らず誤り用ゐたのもあるが、承知の上に用ゐたのも可なりある。「赤光」の中で『黃淚餘錄』と詠んだ事がある。此は三部經か何かの『佛黃なる淚を流し給ふ』の意を採り少し氣取つて使つたのであるが、其後『黃なる淚』などの歌を詠む人が出て、黃疸の人ではないかと心配した事がある。ゴオホの繪などを見

て其れに感奮して『廻轉光』などと詠むと直ぐ『廻轉光』と歌に使つて呉れる人もゐる。予の用法が極めて正しければよいが、若し大なる誤謬でもあつた場合には困ると思つてゐる。

83 『わだち』の用法

『わだち』は轍と書き、車の過ぎたる輪の痕（あと）（言海）とやうに一般に解してゐる。さうすると『入りつ日の冬野に長き轍のあと深くくぼみて凍りたるかも』（横山重）の歌や、予の『汗たらし朝坂のぼる荷車の轍おもひきり霜柱つぶす』の『わだち』の用法が穏當でないことになる。然し此等の用法は森鷗外博士の考證に從つたのである。その考證は「つき草」第五百二十頁にある。そして轍は車迹也といふ用法は普通であるが、轍の迹でもよからうと言つて支那の轍迹の用例を示してある。又『わだち』を轍迹を作るべき車の部分卽ち車罔と解し得ないだらうかと云つてゐる。そして『元とわだちは輪立にて車輪の立ざま若くは立つところに候はんか』と云ひ、信實朝臣の『小車（をぐるま）の道の小野松はやともせ轍も見えず日は暮れにけり』の歌を引いて居る。予の歌の場合は勿論車迹の意であるが瞬間の光景であるから車の部分も目に入つて來る用法である。（七月九日）

84　しやを

嘗て愚庵和尚の『吁吁しやを未だかも吁吁いまだかもしやを吁吁今しかも』の歌で『しやを』を解し得なかつたのは殘念である。これは古事記の『あゝしやこしや』や日本紀の『今はよ今はよあゝしやを未だにも吾子よ未だにも吾子よ』などから採つたので、罵り笑ふ時の間投詞と見るべきものである。賀茂眞淵解して『をかしやをかしや』と云つてゐる。（日本紀和歌略註上卷三）

85　命ふたつ、居たりといふ結句

『ちひさけど命ふたつの光らめと』とか『命ふたつしんしんとして相寢らく』とか詠んで、この『命ふたつ』が些少得意であつたのである。歌つくりはこんな小ぽけな事に得意でゐるほど果敢なきものであるかも知れない。ところが今月の十八日夜大塚甲山編「芭蕉俳句全集」中に

水口にて廿年を經て故人土筆に大仙寺に逢ふ

命ふたつ中に活たる櫻かな　芭蕉

といふ句を發見した。それから結句に『居たり』と詠んだのは予を以て始まると、自負してゐたところが、明治三十二年四月廿五日竹の里人が香取秀眞氏に送つた歌に『薄衾堅きが上の床ずれの痛や痛やに選歌忘れ居たり』といふ歌があつた。(七月廿一日)

86　一種の『かも』

『停車場に旅びととして我が姿ほこりかにして立てりけるかも』(古泉千樫)此歌は大正元年十月發行「アララギ」所載のものであつて結句の『立てりけるかも』といふ用法が特殊のものである。かかる用法はおほかた古泉千樫に始まつた樣である。その後、予が此の句法を眞似て『ゐたりけるかも』などと用ゐたことがある。次いで赤彥も憲吉もかかる用方を爲し、引いて一般の歌壇のなかにも往々斯る用法が見當るやうになつた。(白秋氏の歌の一部哀果氏の歌の一部等參照)由來言語は私すべきものでないことは誰でも識つて且つ實行してゐる。併し言語を以て表はすべき藝術、ことに短歌のやうな小さい形式のものにあつては、一つの動詞、一つの天爾遠波がすでに

重大な役目を果すのであるゆゑに、始めて或る特殊の言語を短歌に詠み込むといふことにはすでに人しれぬ苦勞が要る。生命と言語との緊密合體が要る、それ故にかかる程度のプリオリテート問題も、短歌の境内にあつては決して輕んずべきものでなくなつて來る。そこで縱ひ小さい事でも瞭然と書きとどめて置く必要を感ずる。この必要を感ずるものは、ひとり予ばかりでなく、古人の家集などを熟讀せし人々の等しく感ぜざるべからざる性質のものであるに相違ない。

87 『かうかうと』といふ副詞

『かうかう』と假名でなど書く副詞の用方が予の歌にある。『かがやける一本の道はるけくてかうかうと風は吹き行きにけり』は大正二年十一月中の作で大正三年一月の「詩歌」紙上に載つたものである。『一心にさびしくなりてかうかうと行く松風をききにけるかも』は大正三年二月の作で讀賣新聞紙上に載つたものである。そこで此の『かうかう』が奈何して予の心の中に入つて來たかを書いて置く方が氣持よい。

予がかつて永機、雪人兩氏の校訂した芭蕉全集を讀んでゐたとき、芭蕉句集、冬の部に

かうかうと折ふし凄し竹のしも　芭蕉

といふのがあつた。その時予の聯想は小さい時分に祖父から聞いた酒顚童子退治の物語に連なり、六人の武者が大江山に入つてゆくと谷川の水がだんだん赤くなつて來る。松風が吹いて、近い松風はごうごうと音がして、遠い松風はこうこうと音するといふのである。計らず芭蕉の句が機緣になつて『かうかう』といふ副詞が予の心の中に入つて來たのであるが、芭蕉の句中の『かうかうと』は竹林の音響と色とに關聯した何物かを暗指してゐるやうに思つて此句を味はつてゐた。

その後偶ま正岡子規子の獺祭書屋俳話中の芭蕉雜談を讀んでゐると、各種の佳句といふところに

からからと折ふし凄し竹のしも　芭蕉

といふのが載つてゐる。そこで予は前の『かうかうと』は『からからと』の誤寫ではあるまいかと思ひ、心中に一種の癢さを感じた次第である。その後坊間に賣つてゐる芭蕉句集を注意してゐると、『かうかうと』としてゐるのもあり、『からからと』としてゐるのもある。一體句としてどちらが優れてゐるかと、渡邊草童君に質したところが、無論『からからと』の方を取るが、いづれが本當であるかの考證は出來ないと云はれた。それ以來予は『からからと』として芭蕉の句を

味はつてゐるが、『からからと』はもう予の心のなかに入つてしまつてゐる。

88　和讃中の二句

島木赤彦氏このごろ佛教和讃を讀んで妙句を諳誦してゐる。その中の二つを收錄する。

（一）人間無常とどまらず山水よりも甚し。

（二）親は鬼神で子はほとけ。

和讃を讀んでみると佛典の詞語がそのまゝ入つてゐるのが多い。また無常物語を詠じたもの態谷直實とか石童丸などになると分かり易いやうに俗語になつてゐる。そして殆ど盡く七五調である。あはれに響くのは今様あたりの影響で、それに佛語が入り俗語が入るので、織りまぜて深い暗指性の句となることがあるのである。『人間無常』といつて『とどまらず』と續けたなども期せざる妙である。『山水よりも甚だし』に至つては稚拙の妙はかるべからず。予等の表はし方は未だ未だとほい氣がする。

89　一種の『かも』補遺

『立てりけるかも』の如き『かも』の用法は、おほかた古泉千樫に始まつた樣であると前言したが、これは『少なくも近時の歌壇に於ては』とことわる必要がある。さうでないと、

久米朝臣廣繩作一首

奈泥之故波。秋咲物乎。君宅之。雪巖爾。左家理家流可母。（萬葉集卷十九）

があるから、予の前言は嘘になつてくる。前言に此の萬葉集の一首のことを書かなかつたのは、全く予の不用意のためである。さうして予が萬葉集短歌の結句の『かも』全體を分類して置いたものを見返すことなく、急いで知つた振りをした爲めである。いまは騷揚の後の寂しさ、饒舌の後の寂しさに似し、一種の寂しさを感じながら、この補遺を書いてゐる。廣繩の一首は天平勝寶三年正月に作つたものである。萬葉集以後『けるかも』を使つた歌人も間々居たが、『咲けりけるかも』の如き句法が流行せずにしまつた。さうして大正年間になつて始めて復活して來たといふことは興味ある現象である。

90　しんしん

『しんしん』などを歌に餘計もちゐて、友達から笑はれた。用ゐるときは用ゐないとどうも濟まぬので用ゐるのであるが、後でながめると、自らにも一寸をかしいのもある。そして先進が如是の用法をした事があるかどうかを少しく注意してゐたところが、二つばかり見付つたから書いて置く。

しんしんと梅ちりかゝる庭火かな　荷兮
しんしんと空山はるのみづを吹く　飄亭

はじめのは曠野集卷八にある。あとのは「ホトトギス」第二卷第六號にある。

91　主ある詞

和歌を作る法を說いたなかに、制禁の詞といふ事を書いて後進の使ふ歌詞を制限した時代があ

つた。かういふ事はあまり人目の好い事ではなく予もまた厭である。併しこの事を單に勿體ぶる陋策に過ぎないと云つてしまへば簡單であり、それを否定することは出來ないが、その一面にはなほ藝術を尊び詞を愛しむ底の同情すべき心理があると解するのは必ずしも非ではあるまい。たとへば『ぬしある詞』といふ如きも興味ある言方である。この言方は、後鳥羽院八雲御抄第六用意部中の『近き人の歌の詞をぬすみとること』を難ぜられた言から發してゐるさうであるが、これなども自己のいのちを尊ぶことを暗指してゐると思ふ。後人その心理を諦めないで制禁として之を強ひたのは不徹底である。同時にその心理を諦めないで徒らに開放を怒號したともがらの爲事も不徹底である。正岡子規子は萬葉集の詞を濫りに使ふのに對つてさへ泥棒は爲方がないと云つてゐる。それから亡くなられる前月に長塚氏に歌について訓誡を與へてゐる。そのことを長塚氏は香取氏に報じてゐる。

眞似ゐならばあからさまに眞似るがよい。眞似ない振りをして眞似るのはよろしくないといふのは先生の小生に諭されたる處にして實に八月十三日小生を枕元に呼よせての御話に候。（明治三十五年。「心の花」第五卷第十一參照）

おもふに、同時代の人の歌詞をことわりなしに取つて用ゐるのは眞似るといふよりも盜むので

ある。しかし盗み手はいつの世にもある。國歌大觀の索引部を見ればいかに同じ句が多いか。八雲御抄のなかの『近き人の歌の詞を盜みとること』といふ個條は決して偶然に出でたものではない。（九月九日）

92　詞の吟味と世評

かつて作つた予の歌のうちから、或る詞を抽き出し、生物發育の學でもきはめるやうな氣持で魂のなかに入つて來た詞の由來、もつと主觀的に云へばお蔭を蒙つた詞の由來をさがし考へ整理しようと努めてゐると、耳邊に嘲笑のこゑが聞こえる。その聲はこんなことを云ふ。茂吉の短歌を作る有樣がいよいよ分かつた。茂吉が近來の作歌は內から湧き出るのでなく外からくつ附くのである。內部の生活を究めるのではなく外面の材料を探してゐるのである。いろいろな詞からお蔭を蒙る努力のために自己の感動を逸して變形されたものになつてしまふのである。由々しきことである。

こゑの主は土岐哀果君である。酒に醉ばらつてゐるのではないかと思つて見るとさうでない、

いつものやうに清明な目をしてゐる。そこで予は驚いた。土岐君は予の製作機轉と詞の吟味行爲とを混同して結論してゐるからである。予の短歌製作の衝動と詞の由來吟味の動機とを同一だと見てゐるからである。土岐君も予の作歌衝動に對しては眞の理解が無いまでも別に不思議とは思ふまい。詞の由來吟味に至つては土岐君等の夢想だも爲なかつたことであらう。そして土岐君も眞に生命と詞に對する醒覺があつて予の如く詞の吟味に著手したとしても其の詞數の多きの煩に堪へないに相違ない。おもふに現代の歌つくりの中で詞の由來吟味に就いて公言し得る資格のあるものは予を措いて幾人もあるまい。土岐君の目を清明だと見たのは錯であつたかも知れない。若しその明眸が魚鱗を以て蔽はれてゐたなら土岐君は自らの手をもつて其れを去らねばならぬ。

（九月十二日）

かつて驚いた予の心も今は少しく內省の心に變つてゐる。苦しむ事を知らない土岐君は最愛の妻子を側に今ごろは安眠してゐるであらう。ひとの安眠を妨害してはわるい。予はひとり予の短歌製作の機轉をかへりみる。予の歌は近ごろ如何なる場合でも外面からくつ附けて作つてなどはゐない。これは何等の豫感を前廷に立たしめない予の正直な自己觀察が證據だててゐる。ここに正直といふ語は予の自己觀察が土岐君の揣摩忖度よりも確かであるといふ自信を背景として成立

つてゐる。あのゴォホの油繪は一筆一筆に塗つてゐる。ゲーテの抒情詩も一語一語に書いたものである。この意味で予の歌も外からくつ附けたと謂つても可い。けれどもそれでは具眼者は承知しない。ゴォホの繪は內生命汾涌の繪だとしてある。予の短歌製作に對する自己觀察の結論もこの意味に根ざして居る。

予の心が興奮し集中して來て、本氣に歌を詠まうとする刹那はまさしく一腔の火炎である。うちに漲り切つた力の一團である。けれどもこの火炎力團も未だ言語そのものではない。多力者に苦あり非力者には苦あることなしの一語はこの際いちじるしく光を放つてくる。苦惱と歎息との裏にあらゆる障礙を焚燒し盡すとき、予の命はぽつりぽつりと言語に乘りうつつて來る。妙歡喜ここより始まる。予はエクスタジーなどとは云はない。多力者の苦惱と凡俗の有頂天と同一視しされることが如何にも惜しいからである。

それゆゑに予は詞を愛しむ。さうして予が心身の源なる父母を愛し尊ぶやうにお蔭を蒙つた詞を愛し尊ぶ。ここが土岐君の爲方と選を異にするところである。この予の心を理解して呉れる人は現在に幾たりゐるであらうか。かう言つて一種のうら寂しさを感ずる。（九月二十四日）

土岐君は予の近來の歌が予と云ふものゝ生々しさが無くて一種の衒氣が纏りついて居ると評す

る。予の生命は常に加速度をもつて進轉して居て馬鈴薯のやうに轉がつては居ない。それゆゑ昨の標準を以つて今を律すると間違ふ。衒氣と云ふことに就いてもさうである。一首の結句に『わが愛する妻』と云ふやうに使ふ土岐君の歌を讀むと活動寫眞の辯士が『おゝ浪さん』といつて居るやうに聞えてならない。予等の歌は日常茶飯の外邊に興じて居るよりも、もう本質諦觀の域あるひは、Wesensschauen の域に達しようとして居る。衒氣と見えるのも這般の相違に本づくのであらうか。

予は詞の由來吟味に對する土岐君の非難言を讀んでそれに興味を持つよりも何故土岐君は近來『けるかも』の歌を作り、赤彦調の歌を作るに至つたかに對しての自己内省の告白を聞くことに興味を持つ。（九月二十五日）

93 街上漫語

少し威張り過ぎて丹田のへんが癢くはないか。己の友だちの中には己のことを思つてはらはらして呉れる者もゐるかも知れない。君のいふ事はなかなか厭味だ。己もさう思つて苦しい。難ぜ

られて緘默を守つて居るのは己も一番氣持がよい。併し反省することなら己はひと一倍出來るに相違ない。それならたゞ反省して默つてゐたら好からう。それもさうだが己には矢張り言つて見ることが大切だ。さうでないと直ぐそこに安住して仕舞ひたがる。ぼんやりしてゐて人の難言から暗指を受けて沈滯して仕舞はないとも限らない。さうなることが如何にも氣味が惡い。己は今あぶないところに立つてゐるのだから、負けるといふ事を自ら認容してはいけない。併しぶんなぐられて微笑してゐるのは美だらう。さうか、いまの己にはそれが禁物である。いまの己は己に迫つて來るあらゆる障礙を反撥してしまふだけの意力が大切なのだ。さうでなくとも周圍に漂ひたがる性質が己のなかにある。己は其れを斬つて棄てなければならない。それを斷行する爲めにもの言ふのである。

あまり變なことを言つて仕舞つて、それに囚はれて動きが取れなくなりはしないか、それが氣味わるくないか。それより氣味わるいのはおとなしく納まり返つてしまふ事だ。かつて短歌形式の打破といふ事も唱へられ、それを實行した人々も居た。歌は現代口語で作れと唱へた人も居た。而して己達の歌を難じた。すべて宣言は派手に都合よく出來てゐる。己だちはその時餘程がん張つた事は君も記憶してゐるだらう。人はあぶないあぶないと言つて呉れた。囚はれて今に動きが

取れなくなるだらうと傍觀してゐたものもゐた。意地には緊張が伴ふ。一重二重乃至十重二十重の殼ぐらゐは內からはじき破るだけの力が出來るのを常とする。いかなる障礙も迫つて來て見るがよいと言つて見たい。

己だちのものいふのは多くの場合に凡俗の蒙を啓くためなどではない。自分を出來るだけはつきりさせて見たい爲にもの言ふのだ。默つてゐるのは如何にもいゝ氣持だ。それはもう幾度も味はつて來た。けれどもおとなしく納まり返るのは氣持が惡い。己には弱いところがある。己は油斷してはならない。（二十五日）

94 二たび詞の吟味と世評

詞のことを調べてゐると、詞ばかり切り離して論ずるのは生命と何等の交涉なき邪道だなどゝ云ふものがある。それは間違つて居る。一體歌の詞を調べるのに詞ばかり切り離して物質のやうにしてなどは誰も調べては居ない。己は橘守部等の歌格論ですら死んだ爲事とは思はない。己だちの爲事はまだまだ進んでゐる。一首短歌中の一つの動詞一つの助辭を吟味するにしても、それ

は一首全體と離るべからざる關聯があり、從つて作者の生命と緊密の交渉があるのである。こんな明白な事理をも洞見し得ないで、たゞ安々と有頂天になり得るともがらは甚だしく多幸である。

ニイチエの詩に "Ein todtes Wortein hässlich Ding" といふ句があるが、己も短歌の詞を論ずるのに、死語は醜いぐらゐの事は言つてもよい。ただ死語といふ概念は世の言語學者などが頭に有つて居る概念とは違ふのである。又己だちの歌のなかから萬葉集時代の詞を見付け出して死語の羅列に過ぎないなどゝ云ふ短歌論者などが頭に有つて居る概念とも違ふのである。己にとつては死語と古語とは必ずしも同一でない。現代語歌とか口語歌とか謂ふもののなかにも幾らも醜い死語がある。要は短歌中の詞が、もつと云へばその詞から組立てられてゐる一首が、生きてゐるか死んでゐるか、命の產物か眞似の借物か、確かゝあやふやかに問題がある。己が一口に萬葉調といふのは、己には萬葉調でなければいけないのだ。己の命は新古今調にも桂園調にも向かないのだ。さういふものでは命が承知しないのだ。君のいふ萬葉調とは一體どんなものかなど云ふものもあるが、それは己の歌の出來のいゝ一つ二つを見れば最も直截に分かる。出來の惡いものを見てもさう直截には分からない。己の行く道は間違つてはゐない。無ろん苦險道であるから時時へたばる時がある。けれども己は步兵のやうに步む。道ぐさ食ひながら安樂道を步む人々とは

ちがふ。いかにも安樂さうな人の顏付を見ると美しいと思ふ心の湧く時もある。けれども心の魂が矢張り承知しない。もう凡俗がいくら饒舌を振つてもみな反撥してしまはねばならない。己は自分が大切で爲方がないのだ。己の眞似などは爲ないがよからう。

95　三たび詞の吟味と世評

齋藤君はいろいろな詞からお蔭を蒙むる努力の爲めに、しばしば自己の感動そのものを逸することはないか。それの變形されたものになつてしまふことはないか。……意識的にか無意識的にかこのやうな詞の上の動機によつて或は一首となる迄のプロセスに於て自分の『もの』を疎かにする爲めではないか。……

これは土岐君が己の短歌制作に關して忖度して言つた言である。土岐君の言は眞實か本當に己に當嵌まるものかどうか。これを議論にしようと思ふと一首々々の實際例がなければ駄目である。それならば土岐君の言に感服するか否かといふ事になるとそれに就いて己の感想を言ふことが出來る。己は土岐君の言などはちつとも信用もしないし又感服もしない。

土岐君は己の歌が內から湧くのでなくて外からくつ附くのだ。己は詞ばかり氣にしてゐるなどといふ。これをもつと細かく短歌制作の機轉に當てはめて言ふと先づ詞をさがして置いてその詞に都合のよいやうに一首の短歌を製造してゆくといふ事になるかも知れない。併し現在の己に向つてこんな事いつたところで何の利目もないのだ。今ごろこんな言ひぐさを考へて居るやうでは土岐君と己の距離はもう大分大きい事を覺悟しなければならない。こんな言ひぐさは土岐君本人には利目があるかも知れないが、己に對しては自然に撥ね飛ばされて仕舞ふだけである。過現未を通じてゞもよい。土岐君のいふやうな輕業藝當で己の歌ぐらゐなものを作り得る者が若し居たら己は心からそれを見たいものだと思ふ。己が命の細るを覺えて作り得たものを、そんなに安値に手輕に土器でもいぢくるやうにして作り得るものが居たら、ひよつとしたら己は感服するかも知れない。それまでは土岐君の言などは己にとつて何の値打もないものである。

次ぎに一首となるまでのプロセスに於て感動が逸されたり變形されたりするといふが、こんな事は少しく眞面目に藝術制作にたづさはつて居る者の常に等しく經驗することであつて必ずしも土岐君の注意を必要としない。さうして斯ることは眞に自己の感動を愛し尊ぶ徒にとつては如何にも殘念なことであり齒痒いことに相違ない。多力者に苦ありと前言したのは此の點である。己

は如是の齒癢き狀態を經驗してゐる。けれども何時もその狀態にへたばつて仕舞ひはしない。短かい歌の如きは思ふ存分棄て壞し直し新たに作ることが出來るものである。こゝで己の感動の逸失變形などいふのは單に虛つぽなもの似而非なものに詞の衣裳を著せて一首に仕立てることを意味しない。(さういふ意味の事ならば土岐君らの住む世界の人に任せる)まだ本物が表はれないといふ事である。さうしてこの現象は己の經驗によると、決して詞からお蔭を蒙る努力の大なるになどは原因して居ない。寧ろその努力の小なるに因して居る。言を換へていへば言語包藏の不足に因して居る場合が多い。制作に苦しんで苦しみぬいた擧句にぽつりぽつりと道の開けてくるのは誰しも經驗する。その時は詞が命の奧からしぼり出されたやうな氣がする。命の泉から涌いたやうな氣がする。生命から放射されたやうな氣がする。その氣持に醉つて居ればおめでたい。その實、ことばは空虛からは涌いて來ない。己が分かる限りに於て出典を明かにする所以である。おもふに生命を尊重する歌人は紅血流通の詞を飽くなく貯へて置かんことを欲する。西人の謂ふ"hat Blut in sich"の詞を包藏しておくのである。詞について勉强し典籍からお蔭を蒙ることは決して多力者の恥づべきことではない。己は未だまだその努力の小なるを恥ぢてゐる。このへんは無技巧とか日常言語とか言つて安住してゐる土岐君の未だ理解し能はざる生命運動の境地で

あるに相違ない。一體、『生命をはなれた技巧』などいふ熟字を誰から教はつて來たか知らんが、そんなことで己だちの『技方』を論ずるのは見當ちがひである。目ざはりだから以後は廢めてもらひたい。

それから己が己の歌のうちから或る詞を抽き出してその出典を明記すると、すぐ『齋藤君の歌には獨立自營ならぬ言葉が甚だ少なくない』などゝいふ。それが尊敬の意味でなく嘲笑の意味で云つてゐるのだから溜らない。さうして言者の歌には獨立自營の詞が甚だ多いと思つてゐるらしいのだから猶更たまらない。獨立自營の詞とは魯鈍で母から教はつた詞を自分で發明でもしたもののゝやうに思ひ込んで居る者のいふ詞か、乃至は狂者の新作の詞に限るものかも知れない。なかなかおもしろい。

96　短歌作者

歌つくりなどが生命とか本態とか云つて居るのは餘り見よいものでないかも知れない。一體さういふものは藝術の根本義で、論としては汎論の部に屬してゐる。そして文壇の先進が幾度もさ

う云つて呉れてゐる。己だちはさういふ事をいふよりも天爾遠波の分類でもしてゐた方が自分の爲めにもなり藝道のためにもなる。然るに『俳諧に遊ぶ』の『遊ぶ』を承知することの出來ないほど詞に對する感じが粗笨になつてゐる世の中である。さうして生活といへば錢貨を算へたり脫糞したりすることゝのみ思ひ込んでゐる世の中である。動詞ひとつうまく使へないものが無技巧、生命ある言語、生活また生活などゝ叫んでゐる世の中である。

トルストイ、ベルグソンなどを己だちに紹介してくれた中澤臨川氏の如きが、たまたま短歌論をして呉れて難有く思つてゐると、鳴海うらぶる氏とタゴールを同位置にして論じたりする世の中である。『囚はれたる文藝』の猛者なる島村抱月氏が熱火の如き戀をしてどんな歌を作るかと目を瞠つてゐると至極あまい書生向のものに過ぎなかつた世の中である。本邦自然主義唱道者のひとりなる田山花袋氏が歌を論ずると、『鶯の氷れるなみだ』といふ古今集の歌が純一な作であつたり、歌をつくると、平面描寫か、Plattennaturalismus か知らないが、廓のとほりを色眼をつかつて素通りするやうな歌ばかりでちつとも自然主義にはなつてゐないやうな世の中である。

なんだ歌よみか。三十一文字か。歌のことなどにかゝづらふのは廢めたまへ。第一思想家としての、評論家としての値打にかゝはる。こんな聲もきこえる世の中である。歌は詠むが乃公は歌

人ではない。歌人でなくて人間である。歌よみのくろうとであつてはいけない。若い身ぞらで宗匠づらの態たらくを見ろ。こんな聲もきこえる世の中である。

みんな歌つくりの罪だ。さう思ふと同時に周圍に向つてもつと stolz でなければならないと思ふ。芭蕉などの社會上の位置はどんなものであつたらうか。佐々博士の說に據ると極めて地味な寂しいものであつたらしい。おれの目から淚が湧いてくる。勿體ないと思ふのである。

（十一月八日夜）

97　土岐哀果の「秋風裡」

婆娑として秋の風きこゆ街上の四邊に樹樹はあらざりにけり。

常凡の徒は此歌を讀んで一寸いゝ氣持になるかも知れん。かゝる讀者はあぶない處へ導かれようとしてゐる。予が鑑賞力に從へば、如是歌作者の心的活動は淺薄不徹底乃至虛漫である。自然を諦觀することなく、自然の本質に突入ることなくして、古來常凡の徒によつて幾たびも概念化せられた『秋風』などいふ言語の前に直ぐほろりとなるほど作者の心は虛漫であり浮傷である。こ

れを基底とせる作爲成心から成つた「秋風裡」八首はその根本に於てすでに深甚の衝迫に因つて居ない。そのまゝ甘い虛漫な作に墮した所以である。

『婆娑として秋の風』など云へば一種の氣持はある。然し縱ひ『婆娑』が從來の慣用法と幾分の差があるとしても、要するに文語粹金の作例の氣持である。『婆娑』の如き成語の、馴致すること甚だしければ、成人行步の無意識運動に近づくが如く、人間は知らず識らず心の外殼を以て之を蔽ふに至つてほろ醉ひ機嫌の安樂に墮する。これ斯る成語の間投詞あるひは感情音と異るところであることを知らねばならない。それでも此作者は此『婆娑』に生命が籠つてゐると思ふならば作者は低級な言語に對する感覺しか持つてゐないのであり、或は煮え切らない自己錯誤の狀態に安住してゐるのである。『街上の四邊に樹樹はあらざりにけり』など云つて一寸とした味を遣つてゐる。併しこんな事で自然が欺かれるものでない事を知らねばならぬ。婆娑として物音が聞えたから、樹でもあると思つたのであらう。さもないと『樹樹はあらざりにけり』の利目がない。それにしてもこんな事を思ふのはもう不徹底である。不徹底といふ意は、作者は低級な漢詩や俳句などの古くさい趣味から脫することが出來ないで、たゞ頭の中に秋風秋風と繰返しながら目をつぶつて步いてゐたのであらう。そこで風の音などに一寸驚いたのであらう。そこで味を

やるつもりで目を開いたばかりで直ぐと漢詩流の甘い詠歎をやつたのであらう。そこを云ふのである。

この樣に自然に對して虛僞の多い、空つぽの上の空の歌であるのに、衣裳には婆娑とか街上とか四邊とか樹樹とかの氣取つた語が含まれてゐる。それゆゑに一首の調べには純眞朴實の響がなくて、日々野雷風門人の詩吟流の氣取さがあるのみである。予の衒氣といふのは此歌のやうなものであることを實際例の一つとしてベトーネンして置く。

この歌は極めて低級で下品の作のゆゑに、流俗の間には分かり易い歌であらう。それゆゑにかういふ歌の存在してるのもまた一興である。

とかくして不平なくなる弱さをばひそかに怖る秋のちまたに

とかくして此作者は、『不平』といふ事を玩具の如く弄んでゐるらしく見える。歌集の『不平なく』『街上不平』などの題がみんなそれだ。だんだん無關の狀に退化して眞に怖ろしければ戰くがよい。妥協が惡らしければ苦鬪する筈である。それを經たのちの、自己の弱さの悲しみならばまだ力がある。さうして『秋のちまたに』などで態々怖れなくともいゝのである。そこが在來趣味の取つて附けるところである。さうして『不平なくなる弱さをば』などと云つて仕舞つていゝ

氣持になつてそれに甘えてゐるのである。甘えた後はそれで滿足が出來なくて人に見せびらかしたくなるのである。

少し立入すぎて工合が惡いが、此歌には相當の心持は出て居る。たゞ上辷りで、大ざつぱで、氣持の輪廓だけしか出て居ないのが憾である。それから『秋のちまたに』などの突然で必然性の少ない點もよくない。つまりは素通りの歌で内性命汾涌の歌ではないといふに歸する。調子がだれて延びて然かも脆いのはそれを證明してゐる。

秋の風、マリー、スクロフの追放の物語こそ身につまさるれ

マリースクロフの追放物語の表紙にでも此の歌を書いて置くのなら幾分の興味もあらうが、獨立することの出來ない歌である。『身につまさるれ』と言つても少しも響いて來ない。スクロフとか、追放物語とか、露國とか言へば、たゞそれだけで直ぐセンチメンタールになつて、そんな事だけに興じたがるのである。總じて此作者の歌が淺薄で概念的な惡いところに墮してゐるのは這般の消息に由來してゐると思ふ。かういふ歌を活かすためには、『マリースクロフ女史の追放物を讀む』と題して、眞の內心を吐露するにある。さうして『身につまさるれ』などと世話ものめいたことは斷じて言はないにある。初句に『秋の風』といつて讀點を打つたところ妙藝である。

わかくして宗匠となる歌つくり多きをにくむ秋の風かな

暇をつぶしてこんな歌を作つて居るのは、勤勉な宗匠となつて添削の責任を實行するものより、餘ほど惡（にく）む價値のあることを土岐氏は知らない。

水晶の玉ほしと言ひし啄木のこゝろかなしも秋風ふけば

『秋の風かな』とか『秋風ふけば』などいふが、みんな古くさい趣味に過ぎない。こんな緊密でない句に逢着すると、春風ふけば嬉しくなつて、夏の風ふけば懶くなるのかと質問でもしたくなる。この歌も啄木遺稿の上にでも書いて自分だけで慰んでゐるべき性質のものである。茫々たる流轉相のほんの一角（アイン・エックヘン）に啄木といふ男がゐたのは多少の意味があるとしても、これだけでは特殊相の背景が少しも分からない。水晶玉を欲したことなどは何にもならない事である。水晶玉などは白癡童子でも之を欲する。こんな特殊相のない些少のことに興味を持つのは眞に啄木を識る所以でもあるまい。獨立した短歌として値打のないことは無論である。

秋の風、あすより職を失はゞ、この街上のかなしかるらん

『この街上の悲しかるらん』が手柄なのであらう。さうして油斷して居ると一寸氣をそゝられる句である。しかし實は甘い句で、その氣取にごまかされるのである。さうして初心の者の感心

するのは斯るところにある。街上を歩いてゐて失職の事を自分で思つたとしても、常に職業問題、勞働者問題、社會問題について切實に考及してゐるものなら、『この街上のかなしかるらん』の代りに『洋服賣りて食ふべかるらん』と言つた方が直接な心的活動である筈である。然るに生活の歌などゝ叫んで居ても矢張り、『この街上の』などゝ云つて艶を附けたいところが興味あるのである。

秋の風、金借りに來し中學の舊師の髯もおろそかならず。

『髯もおろそかならず』と言つても作者の心持が分からない。つまり一首が何の爲めに言つてるのか分からない。こんな歌ならもつと明快に出來さうなものである。中學の舊師のうちで髯が一番大切に切實に思へたのかも知れない。金の貸借といふ重い事件などは、もうそつち除けである。顧みて他を言つては困る。髯などはどうでもいゝのである。金の事は一體どうして呉れるつもりなのか。

大隈のきつとむすべる唇に挨なげつくる秋の風もあれ

つまり大隈氏の體の中の顏面の中の唇に挨なげ附けて呉れろと言つて秋の風に賴んでなどゐる。これが謂ゆる「生活の歌』かと思つて、かしこまつて讀んでも、どうも可笑しくてたまらなくな

づて來る。

そんな樣に思ふのは俗人のやる事である。歌人の（實は歌人ではない相だが）いふ事は俗人には分からないのだと云ふかも知れない。髯と云つたり居と云つたりするのは修辭學上の代表法である事を知らないのかと云ふかも知れない。いかにも承知した。それならそのやうに代表させて全體をあらはすやうにしなければならない。此等の歌ではたゞ故意が目に立つばかりである。縱しんば下等でも俗謠あたりの『かのこの振袖が』の方がまだ代表法らしい。詩人の力は大したものだ。宇宙を使役し征服しうるものだ。お前には分からないのだと云ふかも知れない。いかにも承知した。それならばそのやうに、いはゆる『人性の究竟多力』の境に至らねばだめである。“menschliche Machtvollkommenheit” の大緊張、大威力がなければだめである。あるひは、『燒き亡ぼさん天の火もがも』の切實がなければだめである。こんなへなへな調の歌では、秋風と雖こまるであらう。幾ら『きつと』のところで力瘤を入れても、結句の『秋の風もあれ』のへなへなでは困るであらう。

自らは内から湧く歌を作ると信じ、予の歌を外から附くと思ひ、萬葉の内的尊重者を以て自ら任じ、予等の萬葉尊重を外的だと思ひ、アララギの同人と全然異つた立場にゐて作歌すると公言

する人の歌の、かくの如きものなることを知つた。予の言の稍輕佻にながれたのは自分で讀んでも餘りいゝ氣持はしない。たゞ此等の歌の前にどうも嚴肅な心になれないのを悲しむ。

（大正四年十二月十七日記）

98　腎氣

けふは氣が少し落付いてゐる。腹下しを痊したくて阿片を呑んだせゐである。和漢三才圖會をひろげると目錄のところに素問云、腎作巧之官、技藝出於此、則欲嗜諸藝者、先宜健腎氣。と書いてある。これは面白いと思つて本文の處を繰つて讀むと、腎は兩枚ありて形豇豆の如しとか、脊の兩傍に附くとかいふことが書いてある。このへんは兎も角實地について見てゐる。それから腎帶が脊髓にゆき腦にゆいて髓海に連るなどゝ云つてゐる。かうなるともう目がとゞかない。それから、腎は作强の官にして技巧これより出づ。北方の水に屬して精を藏してゐる。精は有形の本たり、精盛んに形成れば卽ち作用强し、ゆゑに作强の官となす。水は能く萬物を化生す。精妙測る莫し、ゆゑに技巧これより出づと云ふなどゝ云つてゐる。つまり腎の機能は主として

性慾の發動、生殖の機轉に關係してゐて、泌尿の官であることはちつとも云つてゐない。益軒の養生訓もこれを踏襲して、腎氣動く。養生の道腎を養ふことを重ずべし。若年にして精氣を惜しみ。しばしばにして精氣を泄すべからず等と書いてあるのはみんな腎の性慾に關係してゐる事を證してゐる。性慾は人間の最も活潑なる慾動であり、生殖は最も微妙なる作用であつても、精妙測り難きがゆゑに技巧が生じて、そして諸藝術の因となると云ふのは論理がをかしい。をかしいが其は論理の點であつて、是等の結論に到るには表面の理窟よりも、深くひそんでゐる一生の經驗よりの感得が知らず識らずのうちに是等の結論を導いてゐる例しがあらう。そこで興味ふかいのである。さう云へば近頃西洋の醫學者が藝術家の性的生活を研究したのがある。勿體つけてくどくどと云つてゐる。ビードルの『内分泌』の書物を種にして、『ホルモーン』の說で素問の語を釋くものが將來出て來るかも知れない。それから、藝術製作の根本因について、從來からの遊びの說、表出(アウスドルツクステオリー)の說などを否定し、〝die erotische Sehnsucht〟などの語をもつて、愛戀の說を樹てゝゐるマヨールとかいふやうな人もゐる。もつとも此の人の愛戀には性慾が這入つて來なくも濟むといふのであるが、鷗外先生の『キタ・セクスアリス』のなかには、何とかいふ學者が、すべての藝術は Liebeswerbung である。口說くのであると說いたと書いてある。さう云へば日

本の神も、『あなにやし、えをとめを』と云つて口說いてゐる。素問の說も棄てられなくなつて來さうである。さうして、この說は、口說き歌專門の吉井勇君には容易に當はまりさうであるが、己には一體どうであらう。さうして己の腎氣の强度はどうであらう。明日からはまた多忙である。こんな事おもふ暇がない。（大正五年一月八日）

99　鷗外とオイケン

森鷗外と、ルドルフ・オイケンなどゝ書くと大袈裟であるが、何の事はない二人の顏相が肖てゐるといふのである。眼と眉と額と鼻の工合が肖てゐるのである。己がこんな事をいふと、何をいふかと世人がいふかも知れんから、Combe（コンム）や Carus（カールス）や Gall（ガル）などの骨相學に本づかないで、漢土、本邦の觀相書に達してゐる相人の直覺によつて、何とか言ふのを聽きたいやうな氣がするのである。（大正五年一月八日）

100　藝道

己が歌の事を云々した際に、『藝道』といふ語を一度用ゐた。ところが或る人（西村氏）がそれを讀んで、『藝道といふ言葉はどうも我々には承認しかぬる言葉に候。承認しかぬるは、短歌を藝道とは（世間言ふ意味の）心得をらぬために候』などゝ云つた。『藝道』などいふ語は、坊間に賣つてゐる字書にも載つてゐて、藝術のみち、藝術の法などゝ釋いたのさへある。世間一般を對手にして物言ふ場合でもさう不思議ではない語である。さうして、その字書の釋の『藝術』といふ語は、『師答へて曰すべての上手名人の行ひ本藝術といへるは皆その如くにて初心の眼に及ばざるものなり』（八文字屋自笑）の藝術や『藝術のみを好みて本をしらざるは物をもてあそべば志を喪ふの類なり』（益軒武訓）の藝術の意味でなく現今いふ『藝術』の義を含んでゐることが直ぐ分かる。

一體、『藝道』などゝいふ語は、なにがしの俳優から、入道雲右衞門などでも言つて居よう。それは言つたつてかまはない。『藝道』に相違ないからである。己の『藝道』といつた『藝』は、廣義に於ける『藝術』といふほどの意である。本來の意味から云つて、『歌』を『藝術』と云つて少

しも差支はない。又時にとり『藝』と云つても差支はない。周禮に敎二之道藝一とあつて、藝謂二禮樂射御書數一と註してゐる如く、藝を以て道學（哲學）に對せしめてゐる。談二九流之洪藝一の藝である。芥舟學畫編の『境の極にして藝の絶なり』『畫は藝事といへども』の藝である。六藝藝能の藝である。古の俳人が『詩歌連俳の藝』などと云つてゐるのは、藝字本來の意味に本づいてゐるのである、若し『藝』を以て小土佐、雲右衛門の專用語とするならば、詩歌繪畫彫刻を『藝術』とは云へなくなつてくる。縱ひ現今用ゐる『藝術』の語が、〝Kunst〟あたりの譯だとしても、『藝術』といふ熟字が古い時代からあるのである。さうして此場合は『術』を『道』に對せしめて使つてゐるのである。詩歌音樂等にのみ『術』字が附いて、踊、淨瑠璃、浪花節などに『術』字が附かないといふのもをかしな話である。しかし此は約束の上である。かゝる相待上の約束である以上、短歌を云々するに藝道と云へば、短歌道のことであり、俳諧を云々するに藝道と云へば、俳諧道の事であるぐらゐの義に取るの用意が大切である。また、〝藝術（クンスト）〟一般から見渡すと、六藝、藝能、文藝、藝文、技藝、鄙藝、遊藝、藝術、藝人、藝妓、の『藝』はみな同一に歸するのである。短歌を云々するのに、『藝道』の語を用ゐたを見て、おどろいたりするのは淺い。

次ぎに己が『藝道』の『道』と云つたのは、『藝術的活動の總和』を意味してゐる。もつと狹く

義を取つて例證を求めれば、技道、文道、畫道、歌道、俳諧道、淨瑠璃道、風雅道の道である。なほすゝんで儒釋老莊揚墨道の道である。一道建立の道である。『非道にしてしかも道にあへる道芝』の道である。士農工商道の道である。己の『藝道』の二字の使用法の必ずしも低級なる流俗に從はない所以である。

己が『藝道』と使つた訣は以上で盡きてゐる。ついでに少し書添へて置く。今でこそ、踊、芝居などに『藝道』などといひ、相撲年寄などがよく相撲道などゝいふが、昔は『道』の字を尊んで、さう濫りには附けなかつたものらしい。芝居音曲などは、鄙藝、卑藝、遊藝と唱へて、道などゝは勿論言はなかつた時代もある。貝原益軒なども、武道と武藝と區別してゐる。『文學は本なり文武の藝は末なり』などゝ云つて、學や道を一段高尙なものにしてゐる。これは六藝の義は知つてゐても之を道學、宗教に對せしめるから、藝を何となく一段下のやうに思へたのである。今でこそ『柔道』などといふが、もとは『柔術』といつたものである。それでは肩身が狹いやうな氣がして、『劍道』などから思ひついて、嘉納氏あたりが『柔道』と云つたのであらう。役者が藝道を云々したり、浪花節かたりが藝道を云々したりするのも、恐らく、傳習的な難有味から離れられないで、『道』をくつゝけたものであるらしい。もつとも『道』字にはすでに『藝』の意味

もあるのである。（一月十六日）

101 言語包藏

かつて言語の事を云々した際に、『包藏』といふ語を用ゐた。ところが或る人（西村氏）がそれを評して、『齋藤君が紅血流通の詞を包藏しておく、といふ餘裕ある態度は生にとりて曾て心付かざりし珍らしき一事にして、これは學ぶべき態度にや否や、兄と倶に面晤の上ゆるゆる研究してみたき一事に有之候』と言つた。文中の兄とは第三の或る人（土岐氏）を指すのである。今ごろは二人がゆるゆる面晤して研究してゐる事とは思ふが、恐らくは研究の方法が分かるまい。そこで少しく機微を漏らしてやつてもよいと思ふ。『紅血流通』は譬喩である。西人といつたのはニイチエの事である。ニイチエの文を讀んで此語の心持を感得するがよい。それから、『包藏』の用法の妄でない事を知るには、『記憶』の心的活動に就いて思惟すること。ブローカやウエルニツケなどの『失語症の理論』を知ること。言語と腦に占位する言語中樞との解剖學上乃至生理學上の要約を知ることが必要である。さうすると、己が『包藏』と使つた語の用法の、必ずしも妄でない事が

分かつて來る。或る人だちは、己の言の核心を評し難くなると、それでも詞尻を捉へて難癖を附ける事を忘れない。その難癖はいかにも感服しかねるものばかりである。（一月廿三日）

102 歌と生活

しばしば言つた歌の概論は、さう今更に繰返さなくもよい。今おれだちの云々してゐる事は前の論の連續と看做すべきものであるからである。例へば己だちが『作者の生活即ち歌』を唱へたのは、明治四十年である。（日本新聞）ところが近ごろになつて、己だちの歌から作者の生活を思ひ起す事が難いといふ者が出て來た。（大正三年十月生活と藝術）己だちが自らの歌を、生活即ち歌であると明言してゐるのに、それを認容しないとなれば、『生活』といふ語の概念を取りちがへて、解釋してゐるに相違ない樣に思つた。その人は己だちの歌を敍景歌に傾いてゐると言つた。逃路の多い言方で困つたが、前後の關係と、その人の作物とを綜合して、その人だちの謂ふ『生活』とは、家常茶飯の瑣事のみのことで、『生活の歌』とはその上邊のみを報告する事だと思つた。さうでないと、己だちの『生活即ち歌』を否定する理が成立しないからである。それを己は當時の童馬漫筆で書

いた。

ところが其人は困つた樣子で辯解した。（大正四年一月生活と藝術）その言を鈔すると、『僕は歌を詠む時に僕の現在の日常生活を詠む。日常生活に於て感じた事を詠む。……僕が都會に住んでゐるものであるから、自然と相對してゐることよりは人間と相對してゐることの方が多い、從つて人間だの社會生活だのが僕の對象となる場合が多い。……然し旅行でもする場合には直接自然と相對して感じ入つた、自然の歌を詠む場合もある。……もとより歌にはなにを詠まなければならぬといふ制限はない筈であるから、各人は自由に自分の思索の對象となり、自分の興味の中心となるべき最も緊密な對象に就いて歌ふべきは當然である云々』といふのである。いかにも都合のよい言で、この言に據ると、自然を詠んでも、『生活の歌』になるのである。それならば己だちが既に實行し、論じてゐる事で、何も事新らしく、己だちを難じなくもいゝのである。かうなると、最初に己だちの歌に就いて、生活を思ひ起す事が難いとか、敍景歌に傾いてゐるなどと折角云つたのが、何の役にも立たなくなる。それならば最初から何にも云はない方がよいのである。

それでも云ひたいならば、先づ『生活』の義を明かにし、（辯解言に含まれてゐるやうな都合のよい言でなしに）次ぎに、なぜ己だちの歌が『生活の歌』でないかを明かにし、次ぎになぜ生

活の歌でない歌の難ずべきかを明かにせねばならぬ。そこに至つてはじめて、その人達の信念が具體的に確立するのである。ちなみに云。己だち以外に『自己の生活を歌へる短歌』を論じたのは前田夕暮氏であつて、明治四十三年十月の事(學生文藝)である。(一月廿三日)

103　雜言

今用ゐてゐる『藝術』の語は獨の『クンスト』あたりの飜譯であらうと前言した。『藝術』といふ熟語は遠からあつても其語の意味が今よりも狹く、『藝』字本來の心持が變化してゐた。道學は本で心の働きを意味し、藝術は末で手足の技を意味するのである。その心持で此語を用ゐてゐた事は、益軒の用語例や、歌學提要の『歌詠む事を技藝とひとしく思ふ人もあなるはあまりにわいだめなきことならずや』(西村氏の說に似てゐる)などの文を見ても分かる。ところが西洋學が渡來する樣になつてから、同一熟語の『藝術』も自づから其概念と心持が變化し來つてゐる。現今の思想表現に使ふ語彙が幾多のお蔭を蒙つてゐる西周氏の心理學書に、『思慮の慣習に於ても藝術の練磨に於ても』『天然の風景に於ても藝術の諸作に於ても』などとあるのを見ても分かる。併し此書に於

ても『藝術』の語はさう活潑に用ゐられずに、寧ろ『巧藝』の方が多く用ゐられてゐる。（アートとファインアートの區別譯とは思はれない）ところが栅草紙時代になると、『藝術』の語は『美術』などの語と共に甚だ活潑に用ゐられる様になつて居る。予の前言はこんな處に本づいてゐるのである。

明治十四年刊の井上有賀兩氏の哲學字彙を見ると、art：技術 藝 技倆 とある。『藝道』などの用法の下町あたりの流俗と必ずしも軌を同じくしないといふ予の意志の突ぬけ得る事を證してゐる。

Aesthetik を『美學』とも翻してゐるが、これは『美妙の學』『美妙學』ともいつてゐた。また、『審美學』とも翻した。『象徴』などの語も、もとは、シムボル、シムボライズなどのところに、『標徴』『表徴』『表象』などと當てたりして一定してゐないやうである。また、『表象』を獨の Vorstellung の譯としても通用してゐるが、もとは『觀念』とも翻した。獨の Vorstellung は英の idea から由來してゐるからであらう。（一月廿四日）

104 沈痛

いつか自分の心持を書いて見たいと思つてゐて出來なかつたが、たまたま米菴墨談を繙いてゐていゝ文章を見つけた。文章は、『竹雲いふ。漢唐の隷法體貌殊りといへども、淵源自づから一なり。要は古勁沈痛を以て本と爲べし。筆力沈痛の極、骨髓に透入すべからしめ、一旦渣滓盡きて淸虚來り、すなはち能く超脱す。ゆゑに曹全を學ぶものは正に沈痛を以て之を求むべし』といふのである。文は書の眞髓を說かうとしたものであるが、移して短歌を思ふの栞としてもよい。

（大正五年二月五日）

105　深處の生

己は嘗て歌を論ずるのに、『深處の生』といふ詞語を使つた。これは、Tiefpunkt des Lebens といふ誰やらの洋語（翻して生の深點と謂ふべきか）を思ひだして、そして側ら、自臨₂釣石₁汲₂深淸₁といふ東坡の煎茶詩を解いた文中に、『深處取₂淸』といふのから暗指を受けて、自分で作つてみたのである。家常茶飯の外邊を報告することのみを以て、作歌の能事とするともがらの說を否定せむとして造つた語である。然るに家常茶飯の外邊報告を以て作歌の能事となすともがらが、

いち速くも此造語を取つて、勝手な概念を附加して、あべこべに己だちの說を難ずるの資料となしてゐる。具體的の例は、西村陽吉君の「生活と藝術」中の文章を讀めば明白である。このこと稍興味あるゆゑに書きとゞめおく。（大正五・二・一〇）

106 長詩

（長詩は何故に發達せぬかといふ時事新報文藝部の問の返答）現今長詩壇が振はないといふのは、恐らく映々しくないの義に相違ない。一見映々しくないのは作者が銘々自己の性命に立脚して靜かに制作をするに至つた爲めであらうとも思はれる。いよいよ醒めていよいよ寂しく甜俗の群に入ることを厭つて自づから Autismus の狀になるのかも知れない。周圍の雜音から遠離して眞の衝迫に由る抒情詩本來のいゝところを漏らしてゐるのかも知れない。由來、驅步して慌しいイズムの運動に參ずるよりも苦力して內に徹せむとするのは詩人の面目であらねばならぬ。現今長詩壇の映々しくないといふのは恐らくは表面であつて本質ではあるまい。こんな見方も出來るやうにおもはれる。

俳壇とか歌壇とか長詩壇とかになると、大勢の共同遊歩場のやうなものである。結社とか運動とか潮流とか命名したところで詰りは其れである。遊歩場の賑かになるには喇叭吹も鼓手も囃子も要る。多くのエピゴオネンの徒が要るといふのである。昔から俳諧、和歌などになると宗匠と門徒との關係があつて、賀茂眞淵でも香川景樹でも人を導くのに多大の勢力を費してゐる。現今の長詩壇になるとさういふ事はむづかしい。みんな面倒がつてばかりゐる。そこでたまたま長詩通信教授の看板を懸けても來者が尠い。また雜誌の頁數の都合上、さう澤山の應募長詩を掲載することが出來ない。それゆゑ、文章世界とか秀才文壇などの雜誌で長詩を募集してゐるのが目につく位である。それから銘々自分の行歩ばかりに執心してゐるから、未來社とかマンダラ社とかが折角出來ても永續しない。つまり特に光る權威者もなければそれにむらがる門徒もなく、正岡子規が謂つた『新體天狗』で胡坐をかいてゐるのである。こんな見方も出來るかも知れない。

詩人が撚斷數莖鬚底の刻琢苦力して性命をしぼり出しても實は幾錢にもならないのであつて、加ふるに詩など作つてゐてもさう偉いとは思はれない。小說で以て何々情話と題し甘いものでも書けば藝者類に持てるかも知れない。ところが詩集などの發刊は書肆でも澁る。時には傲慢に斷わる。縱ひ佳詩が世に出でても、世人は不經濟な組方で物體ない位にしか思はない。そこで詩人

の方でも、何だ流俗か、Hundsgemeineか、といふやうになるのである。小說批評は每月續出してゐるのに長詩批評は此頃一つも無い。歌壇の事などに大人がかまつて吳れぬとて別に私は癪に觸らない。却て物體ないぐらゐに思つてゐる。しかし長詩となるとかまつて吳れてもよい樣な氣がしてゐる。ところが日本の批評家は詩の事などを云々すると値打が降ると思つてゐるのかも知れん。偶に批評が出ても反響が少い。いつぞや文章世界に出た柳澤氏の『最近の詩壇』中の北原、三木二氏の評價などに對しても異見が出ると爲めになるのであるがちつとも有力な異見が出ない。上田敏博士とか森鷗外博士などが折々洋詩を譯して吳れても世間はひつそりしてゐる。詩人を遇するの力がなくて徒に國民性とか國民の好尙とかを云々するのは末の末である。こんな見方も出來るであらう。

抒情詩は馬鹿でも出來るとバアブが其戲曲論で云つた相である。思想や哲學が餘り役に立たない短歌などならば此言も當嵌まりさうであるが、長詩などになると此概念で律することは出來まい。馬鹿でも出來るぐらゐに長詩を見てゐるなら其はちと違ふやうである。そんな見方の人も日本には居て、そこで詩などを云々しないのかも知れない。

それからも一つ、遊步場に集まるものは、遊ぶのに同じ形式を要求する。評價に『比較』が必

要で其で極りがつくからである。俳諧や短歌の流行するのは此既成形式の關係もある。ところが長詩になるとさう樂には行かない。きしのあかしや調とか北原白秋調とか三木露風調とかいつて輩出したところで組合がさう樂には行かない。短歌と長詩が多勢と無勢の有様になるのは此が爲めである。詩人の側から云へば無勢でも構はぬし、詩壇が映々しないからと云つて些も構はぬに相違ない。併し映々しない有様を云ふなら、先づざつと右の如くである。

私の如上の言は疾病論なら原因論を云はずに證候論の一部を云つたかの觀がある。此は門外の私の考察の足りないためである。若し國民の目が益々開き一方に偉大な魄力を有つてゐる詩人が輩出するなら、こんな問題は火炎上の微塵にひとしいのである。(大正五年六月十三日夕)

107　古代の諺と近頃の俳句

予は俳句を作らぬからして、近頃の俳句の價値、碧梧桐氏に謂はせれば『哲學』が全く分からないのであるかも知れぬ。分からなければ予の恥であるけれども、どういふものか矢張り十七字調の芭蕉あたりの方がよい。しかし必ずしも十七字調でなくもよいが近頃の俳句の言ひぶりが、

その語氣が說教じみて、諺語くさくて不滿足に感じてゐる。それに就いて思ひ起すのは我邦古代の諺として傳へられてゐる二三のものの言振りが近頃の俳句の語氣に似てゐるといふことである。

堅石も醉人を避くる　（應神紀）

神の神庫も樹梯のまゝに　（垂仁紀）

海人なれや己が物から音泣く　（應神紀）

これは『諺にいはく』としてあるものであるが何となく他の歌謠の語氣とは違つてゐる。どう違つてゐるかと少し吟味してみると、例へば、片歌の、『愛けやし吾家の方よ雲ゐ起ち來も』あたりでももう違ふ。つまり歌謠の方は何かに切に訴ふる、古人のいはゆる『詠歎』の語氣があるのに、諺の方は何處かに堅い冷たいそして幾分氣取つた說教のやうなところがありはしないだらうか。ことに結句でその特徴を認めることが出來る。一番痛切に響く結句にそれがおのづからあらはれてゐるといふことは予の興味を牽くのである。『詠歎』の意味が近ごろ惡い意味に取られてしまつてゐるから、碧梧桐氏などのやうに『僕らの俳句の哲學』などの語は少年間に好いかも知れないが、短歌や俳句では、うつたふる語氣と、その響とがおのづからなる性命ではあるまいか。人間切實の表出運動はさういふ短歌なり俳句なりに落著くのではあるまいか。予は記紀の歌謠を

讀んでそんな氣がし、蕪村の句に何かの不滿の感あるのも、近ごろの俳句の大體の傾向を好かないのもさういふ理由に本づくのではあるまいか。Sinnspruch heisst: „Sinn ohne Lied" とニイチエが歌つたのもこれであると思つてゐる。

108　俳句寸言

いま俳句のことをいふのは少し恐ろしいゆゑ、もし間違つてゐたら怒つて呉れてよい。正岡子規のした爲事は、あれは苦力の結果だ。芭蕉や蕪村の藝術に就いて開眼したのも、みんな自力でやつたのだ。そして子規は、獺祭書屋俳句帖抄上卷の序で『自分が十年でやつた程のことは今の人は半年で達するやうになつてをる。後生畏るべしといふもおろかなわけだ』と云つた。子規は死んで、生殘つた俳人にも、それ以後に現れ出た俳人にも、子規のこの悲痛の言が胸にこたへないやうに見える。そしていち逸くも子規の句は芭蕉や蕪村の模倣に過ぎないと公言して、ひとりで育つたやうな顏付をして、己が獨創家だといふやうな顏付をして、もう少年の前に教師氣取でゐる。何といふ恐ろしい態で、何といふあわたゞしい態であらう。子規が途中でへたばりへたば

りしたのは、あれは自力でやつたからだ。そして默つて復た自分で立つて歩いたのだ。その面影が今の俳人の頭に浮んで來ないやうに見えてならない。さうして、

若竹や橋本の遊女ありやなし　蕪村
筍や目黒の美人ありやなし　子規

道のべの木槿は馬にくはれけり　芭蕉
道のべの木槿にたまるほこり哉　子規

瘧落ちて朝顏淸し蚊帳の外　几董
瘧落ちて足踏のばす蚊帳かな　子規

こんなところで、子規が承知のうへでやつた事を、鬼の首でもとつたやうに嬉しがつて結論を急ぐのは淺薄で、かういふ類句があるから全體が模倣だといふのは凡俗の類である。實朝の如きも本歌取があるために凡俗からは全く模倣者だと見られた。それに等しい。

僕は歌つくりだが俳句についても獨斷言を有つてゐるから、それを次に少し書かうと思ふ。

五月雨や上野の山も見飽きたり　子規

これは子規の晩年の句だ、そして子規自身でも棄て去るべき句ではないと思つて居ただらう。

門間春雄君所藏の五月雨十句の軸の書きぶりを見ると、それがよう〻分かる。僕の獨斷言によると此は佳句であつて棄つべきものではない。そして、『雞頭の十四五本もありぬべし』などと同じく、これから子規の進むべき純熟の句がはじまつたのである。もう寸毫も芭蕉でも蕪村でもないのである。そして、『夕顏の棚つくらむと思へども秋まちがてぬわが命かも』などの晩年の和歌に比すべく、かうなれば俳句も和歌も一如だと僕は思ふ。然るに此句は碧梧桐虛子選の子規句集に收錄されてないばかりでなく、俳壇にゐるほかの人も眞に此句を論じたことはない。子規を祖述すると云つても何を祖述するのか。僕にはどうも變に思はれる。また『子規なんかもう古いよ』などゝいつて妙な風な日本語でないやうな日本語を竝べて納まつてゐるのは僕にはどうも變に思はれる。（大正五年十一月廿九日夜。石楠のために）

109　語勢の響

伊藤左千夫先生は、晚年に、『叫びの歌』を唱道し、計らひなき直截な生の叫びを短歌に要求した。その幾つかの論文のなかに、言語の聲化。叫びの發露。叫びのこもり。生の叫び。感歎の

響。聲調の響。語勢の響などの語があつて、『叫び』を論ずるに當り、聲化された詞の『ひびき』といふことを力說してゐる。そこで『叫びの歌』の說の詞論の一面は、『ひびき』の說であると謂つてもよいと思ふ。『韻文の上でいふところの叫びは、韻文が聲調の響を性命とせるものであるだけ、叫びの意義が散文に比してより多く具體的でなければならぬ』『叫びは聲の調を通して叫者の心を傳へるものである』などの斷片を讀んでも其心が分かる。

このごろ、「日本歌學史」を讀んで、海野遊翁の、『ひびきの說』を知つた。彼は晩年に香川景樹の歌論に心服して、景樹の『調』の說によつて、『ひびき』といふ思想を案出したのださうである。彼はかういふ。『古今の序に、歌とのみ思ひて其さま知らぬなるべしとあるは。一うたの調のひびきをいへるなり。さまとはひびきなり。入る息出づる息によりて、歌のしらべのひびきあり』（伊勢の家づと）

またこのごろ、菅茶山の「筆のすさび」のなかに、『詩歌語勢强弱』の說いてあることを知つた。そして、『あら海や佐渡に横たふ天の川などいふ發句、興象は論なし。語つよくおもみありてたけ高く、今の人の句、語弱くかろく、格ひきく。僅十七字にても、その體のわかるること、語勢自然の妙處なり。云々』。なほ、「桂園大人詠草奥書」や「歌學提要」あたりにも、此事を論

じてゐるのがところどころに散見する。

から集めてみると、互に聯鎖があるやうであるが、さうでない事を明記して置くのである。芭蕉あたりが用ゐた、『にほひ』が、「愚祕抄」あたりの『にほひ』より恩賴を受け、芭蕉らが用ゐた『ひびき』が遊翁の『ひびき』に働き掛け、遊翁の『ひびき』が、左千夫の『ひびき』の礎をなしてゐるとは必ずしも謂はれない。少なくも、左千夫の『ひびき』の說は遊翁の歌論の恩蔭を蒙つてゐないことを斷じておく。

それから、先進の歌論を讀んでみると、概論に於てみんないいことを云つてゐる。そしていざとなつて、個々の作物に當ると非常に違つたものになつてくる。同じく『ひびきの說』でも、いざとなると、遊翁あたりは矢張り「古今」を宗とせねばならぬのである。左千夫の『ひびきの說』とちがふ所以である。

110　寫生、象徵の說

予の作は、根岸短歌會の血脈を承けてはゐるが、周圍文壇のイズムの運動に參ずる必要は毫末

もない。しかし人ありて强ひて予の作を或る『流』に分類したくば、予の作は、『實相流』である。また『寫生流』であると謂つてもよい。そして予が眞に『寫生』すれば、それが卽ち、予の生の『象徵』たるのである。この意味で、予の作は『象徵流』だと謂つてもよい。

ここに謂ふ、『象徵流』は、西洋の〝Symbolismus〟とは必ずしも合致しない。予の謂ふ『象徵』は、『假二外丹一以徵二內象一所レ謂外丹成卽內丹成也』（芥舟學畫篇卷之二）の意味であつて、予の場合は計略をもつて――予の目から見れば一つの計略である――『象徵主義』らしい作を造るの必要を認めないのであつて、自然を法爾に體し『わがはからはざるを自然とまうすなり』の境にゐておのづから予の生の『象徵』は成るのである。予の『象徵流』が流俗の說とちがふのはここだ。

或る人がゐて、芭蕉の句は『象徵流』だと謂つた。或る人また其を評して、それは間違つて居る。近代藝術上の『象徵主義』はそんなものではないと謂つた。この批評は西洋特に佛蘭西あたりに興つた、一つの運動だけに限局せしめて『象徵主義』を考へてゐるのであるから、それはそれでよいが、芭蕉句象徵說には當嵌らないのである。芭蕉句象徵說は、ぼんやりで幼稚な說のやうでゐて、痛切に自らに卽せしめて考へた說であるから、單なる西洋だふとびよりは深いのである。

111　足搔

かつて予の歌の中の、『足搔』を『前搔』に改めたことを書いた。このごろ「遠野物語」を平瀬泣崖君から借りて讀むと、遠野鄕の獅子踊の歌が載つてゐて、少しく參考になることがある、『馬屋ほめ』といふ歌。

○まゐり來てこの御臺所見申せやめ釜を釜に釜は十六。○十六の釜で御代たく時は四十八の馬で朝草苅る。○其馬で朝草にききやう小萱を苅りまぜて花でかがやく馬屋なり。○かがやく中のかげ駒はせたいあがれと足がきする。

112　はひり

『はひる』と書くか、『はいる』と書くかといふことがこのごろ出てゐたが、これは、「言海」などにも、『門より入りて家に至る間の地』と說明がついて居り橘曙覽の歌に『賤がいへ這入せ

ばめて物うる畑のめぐりのほほづきの色』といふのがあり。「後撰集」躬恒の歌に、『妹が屋のはひりに立てる青柳に今や鳴くらむ鶯のこゑ』。また「堀川百首」に、『柴の家のはひりの庭にたく蚊火の烟うるさき夏のゆふぐれ』とある。齋藤彥麿の「傍廂」に、『今の世の人の詞に外より内へ入る事を、はひりといへるは這入の事として犬猫のたぐひにいひ馴れたる詞なるべし』『門の入口を波比利（はひり）といふなり』とあつて、これらの歌を引いてゐる。

113 あらし

「縣居雜錄」にいふ。『山下風。是は三字にて、「山のあらし」と訓むべし。萬葉「山下風」とあるを、「やましした風」と訓むべき假字書（かながき）も有りしとおぼゆ。卷十一に、「まどごしに月おし照りて足引の下風吹夜は君をしぞおもふ。」此「下風」は必ず「あらし」と訓むべし。さらば、所によりて訓むなり。「あらし」は和名抄に山下出風と書けり。實（まこと）、山の隈などより吹出す山氣なればば山下風とも書き、又略して下風とのみも書くは萬葉の例なり』。「圓珠庵雜記」に云ふ。『あらしと、おろしと同じ。萬葉集に下風と書きて、あらしとも、おろしともよめり。』眞淵の頭註に

いふ。『眞淵云。嵐は和名に山下出風と書き來れるを、又漸くに略して、山下とも下風とも書きしなり。然れば皆あらしと訓むべきを、やまおろしなど訓めるはいかにぞや。三吉野の山下風の寒けくにとあるも、山のあらしと訓むべきなり。いま山下の風と訓めるはわろし。』眞淵は此說が少しく得意であつたと見え、ところどころに書いてゐる。「雜錄」のは、自分の覺書のやうなものであつたのであらう。そこで文章も練つてゐない。萬葉では、『山下風』と書いて、『山の嵐』と訓ませたのかも知れないが、後世の歌人は、『山おろし』『山おろしの風』などと、さかんに歌に詠んでゐる。富士谷御杖の、「北邊隨筆」に云ふ。『元良親王御集に、怨みつつ歎きのかたき山ならばおろしの風のはやく忘れぬ。といふ歌ありこの「おろしの風」といふ事、ものにもみぬ詞なり。「山おろし」といふべきを山の字を上に詠みとり給へればなるべし。むかし人は、かく拘はらぬ詞ども多し、畢竟自在の詞づかひぞかし』。言語變遷の迹をみるに、前人の作例を誤り傳へて、それがとどめがたき勢をなすことがある。けれども言語は一つの約束であるから、通ればそれでよいのである。予がここに眞淵の說を書きとどめるのは、眞淵が『嵐を巧みに用ゐられしは後なり』（金槐集欄外評）などといつて、嵐を迅猛風のみに限らしめようとした、その氣稟に興味をもつが爲めである。

114　三井氏の鈍說

三井甲之氏いふ。『長塚節は正岡子規門下の歌人であつた。（中略）そして彼は所謂寫生文から小說に進んで夏目漱石の推奬の下に小說「土」などを書くに至つて愈此の傾向がつのつて過勞のために若くて死んでしまつた』『又伊藤左千夫も子規門下の歌人で抒情詩的氣分を有して居つて長詩から劇詩の創作に向はむとしたのであつた。しかし彼は、漱石はだめだ、といひつつもその名聲に誘惑せられて小說の濫作に耽つて過勞のために死んでしまつた』。かういふ腹を痛めない說も世の中にはあるが、ちつとも予の爲めにはならぬ。かういふ魯鈍言を易々と吐くよりは、少しく氣をしづめて兩人の『病志』でもしらべた方がよいのである。（以上大正五年十二月）

115　かうかう 續き

『かうかう』といふ副詞を歌に用ゐたのは予にはじまることを書いた。白秋氏の雲母集には、

これが多く用ゐられてゐる。みな予よりも後に用ゐたもので、『かうかうと金柑の木の照るところ』『かうかうと今そこの世のすけなしぬ』『またかうかうとよろめきにけり』『かゝかうと金の射光の二方に』『木はかうかうとよろめきにけり』『金色の木をかうかうと見はるかす』などである。同じく北原氏の『かうかうと風の吹きしく夕ぐれは金色の木々もあはれなりけり』といふ歌は大正三年十月發行の地上巡禮第二號に載つたものであるが、『これらは三崎の舊作なりうめ草に抄出す』と註してあるのはどうか知らんと思ふ。なぜかといふに北原氏の三崎居住時には予の『かうかう』は未だ發表されてゐないからである。なほ大正三年十月の「アララギ」には『かうかうと西吹きあげて』云々といふ予の歌が載つてゐる。そして大正五年十一月の海紅には、『かうかうと西吹くまゝに株は葉落ち』といふ菫哉氏の俳句が載つてゐる。

116　良寛の流行

予が良寛の歌を論じてから、このごろの歌界に良寛ばかりの歌が出たやうにおもふ。そして、それらの歌の作者自身も恐らく良寛の歌から影響されたと自覺し、しかも自身の歌は良寛の歌に比

較してもさう劣りはしまいと思つたことであらう。

しかし予が讀んだところでは、それらの歌は奈何にも『ぞんざい』であつて、態と無造作に作つたものが多かつたやうである。無技巧・天眞・純朴などをたゞ概念だけ承知してゐて本質に味到することが出來ないと、無技巧らしく天眞らしく純朴らしく、『たくらむ』に過ぎないことになる。恐ろしいことである。

ロダンの語錄のなかに、『單純で、充ちてゐる』といふ事がある。（高村光太郎氏譯によつたがそのまゝではない）短歌は單純ではあるが、充ちてゐなければ腑拔けである。

我が園に咲きみだれたる萩のはな朝な夕なに散りそめにけり

良寛のこの歌は、單純であつて、そして充ちてゐる。これと腑ぬけ歌と、その區別だけは餘程はつきり予にも分かつて來た。これも一方には良寛ばかりでゐて、空つぽで充ちてゐないものが今の世に出てくれた御蔭である。これから、考が予自身のものに戻つて來る。いくたびもいくたびも額に膏汗をかいて考へねばならぬのである。ひとごとは冷めたくとも濟む。自分に對する考は炎を潛つた鐵のやうにあらねばならぬ。しかし寂しいのは、かう思つただけで疲勞を感ずるほど現在の予は弱いのである。

117 蟾蜍

秋立つてからまだまもない或る日の暮れがたに、小石川富坂上の停留場から江戸川行の電車に乘り大曲で降りて、江東橋行の電車の來るのを待つてゐた。電車が響をたてゝ眼前に近づいたと思ふと、一疋の大きな蟾蜍が線路を横切らうとした、僕がはらはらして見ると、やはり僕とおなじく電車を待つてゐたひとりが、下駄でその蟾蜍を除けて呉れようとしたが間に合はなかつた。電車に乘つてから、あの蟾蜍は電車に轢かれはしまいかといふ心配がなかなか頭を去らない。それでもあゝいふ動物は敵を免れるのに何か都合のよい本能を有つてゐるに相違ない。あの蟾蜍も電車に轢かれずに濟んだゞらう。かう思つて、幾分か心の落着を得て家に歸つた。明くる朝、病院に勤めるために電車に乘つて小石川區駕籠町で電車を降り線路を横切らうとしたら、一疋の大きな蟾蜍が、めちやめちやになつて電車に轢かれゐた。なるほど蟾蜍は少しのろいかも知れんと寂しい心をいだいて病院の門をくゞつたことがある。

118 海上胤平

海上胤平翁が死んだとき、雜誌「わか竹」が追悼號やうなものとして發行した。翁が『三句切は歌にあらず』などといつたのを、海上は最初は三句切をどしどし用ゐてゐた。それを、橘守部の「短歌撰格」を讀んで遽かに變說したのだと云つて居る。下田義照氏はその證明までしてゐる。さうすると海上翁はいかにもづるいことになる。それから、橘守部の歌格の研究は、小國重年の「長歌詞珠衣」あたりの影響だといふ說がいま有力になつてゐる。さうすると橘守部もづるいことになる。此は文獻を明記しない罪であつて、づるいと云はれても爲方がないのである。さもなければおのれの無智を表白するに過ぎないことになる。併し茲に注意すべきは、關聯がなく時を隔てゝ獨立して等しい考に到達することが可能である。短歌の『三句切』の問題の如きも、竹の里人がよく云つたものである。竹の里人は胤平の說も守部の說も讀まずに說を樹てたのである。先進者があるから、說のプリオリテートの問題は竹の里人に許し難いが、同時に竹の里人をば剽竊者とは云ひ難いのである。ゆゑは竹の里人が時を隔てて獨立に唱へた說であるからである。一

體、歌の『三句切』の問題などは、大切な問題ではあるが、少しく歌にたづさはる者にとつては直ぐ氣の付く問題なのであつて、實は誰でも氣付くといつてもよいのである。海上胤平翁の場合も、以前に持してゐた說をば、守部の「撰格」によつて確め自信を强めたぐらゐに解する方がよからうと思ふ。翁と生前に劇しく論戰することなく隱忍してゐて歿後いちはやくも、かゝる批評を聞くのは、予には快くない。

119　歌評を讀む

雜誌「常磐木」の朱雀氏が、結城哀草果氏の『土藏の二階に一人かくれて書物讀み休み日の今日も暮れにけるかも』を評して、『私は十一月のアララギを讀んで此の歌位嫌味が多く而も馬鹿馬鹿しく感じた歌はない。何となれば休み日に土藏の二階に隱れて一人で本を讀んでゐたらもう日が暮れたといふ丈けの事ではないか。』などゝいつて、いろいろ此歌を難じて居る。僕はこの批評を讀んでも爲めにならなかつた。第一、この評者は、どうして作者はかういふことを歌ひたくなつたかといふ、『衝迫』について少しも理會がなく、さればといつて虔しくなつて硏究しよ

うともせず、『それ丈けの事ではないか』などと云うて高飛車に出ようとしてゐる。そして、かういふ歌に對つて、『烈しく戒める』といふてゐるが、それは當がはづれてゐるかも知れない。たゞ興味あるのは、此歌を、『氣取つてゐる』『嫌味である』といつて再三念を押して居ることである。眞實眞實などといつて似而非眞實者の過多を周圍に持つものは、眞の眞實者にさへも反感を抱くものである。その心理に興味があるのであるが、さういふものは僕の爲めになるやうな言説を吐くことは出來ないのである。（大正五年十二月）

120 あよむ

阪口多濊津氏は、大正五年九月一日發行の雜誌「詩歌」のうへで、先づ自作の『春日山馬醉木の間をあよみよわりたわやかひなを依する汝はや』中の『あよむ』といふ動詞は阪口氏の新造語で、自然に湧出した言葉で、近ごろ雜誌に散見する『あよむ』の語はその模倣踏襲だと云つた。ついで、辭書ことばの泉を繰つて草根集に『しるかりき里がよひしてまじれども旅ゆく人のあよむ姿は』の例や、予の歌集「赤光」中の『飛びあよむ蠅のおこなひ』の先例のあることを發見し

て前言を訂正してゐる。この語は前出の僧正徹の集にすでにあり、また宇治拾遺あたりに『鬼はあよびかへりぬ』などとあるから、近ごろの新造語でないことは確かである。ただ近ごろ誰が此語を復活させてそれが雑誌などに散見するやうになつたかを書いて置く方がよいとおもふ。

此語の復活は恐らく先師伊藤先生の『石ふみてあよむはくるし肉太のわがゆく道に石なくもがな』の歌に始まつてゐるらしい。少なくも此歌が原動となつて近ごろの雑誌などに散見するやうになつた事は正確である。此歌は觀潮樓歌會の席上吟であつて、また日本新聞の募集歌の選者吟として載つたものである。それは明治四十年で今から約十年を經過してゐる。その時先生は『足讀む』とも書いて他の歌をも作つてゐる。その『足讀む』が予等に珍らしかつたのでさかんに模倣した。それが引いて當時の日本新聞、馬醉木、アララギなどになかなか多く見えるやうになつた。『あゆむ』といふべきところにも『あよむ』と使つてゐる。それが現在のアララギの作者にも殘つてゐるのである。そのアララギの用例が知らず識らず他の雑誌に影響を及ぼしたのであることも確かである。われら仲間では『あよむ』などは陳腐になつてしまつたために投稿歌中の、『あよむ』などは『あゆむ』と直すことがなかなか多い。「赤光」を編むときも『あよむ』を『あゆむ』と直したのがある。それでも一つ二つ殘つてゐたものと見える。つまり阪口氏自身では新造

語と思つても、一度はアララギか何かでそれを讀んだのを忘れてしまつてゐて、ある機會に浮んだ此語を自然に湧出した造語と思ひ込んだものと見える。さういふことが人間にはある。阪口氏は『勿論確かに既往に於て此言葉をみた事がない』と造語說を固執しても其は駄目である。

それから、『あよむ』の語は萬葉集、古事記あたりにあるかどうかといふに、それは無いらしい。古事記の『不得歩』は『えあゆまず』と訓んでゐる。なほ『安由賣安我古麻』(萬葉十四)『安由賣久路古麻』(萬葉十四)『馬之歩』(萬葉六)『歩黑駒』(萬葉七)などであつて、『あよむ』の音はどうも無いらしい。

古事記傳廿八に、『自其處發。到當藝野上之時詔者。吾心恒念自虛翔行。然今吾足不得歩』の『歩』を解して、『歩は足讀の意の言ならむか、物の數を讀さまと似たればなり。吾が伊勢の國の山里人などは阿余夫といへり』とある。伊藤先生の『足讀む』は本居說あたりから由來してゐるのかも知れない。本居說では『あよむ』が古いらしく聞こえるが、古事記萬葉集に『あよむ』がなくて、後世に至つて却つて用例のあるところは少し都合がわるい。谷川士淸は、『あゆむ。足緩の義成べし』といふが此は少し變である。かういふ分析語源說などは餘り當にならぬから、『あゆむ』は古く、『あよむ』はその轉と見ておけばよいやうである。

附記。大正五年十一月發行の雜誌「海紅」に、

子供あよませてはなしゆく稻の道かな　菫哉

といふのがある。『ことば』の傳播はこんな工合にしていつのまにか、おもひがけないところに及んでゐる。『造語の創作權』などをしらべることの困難なのはこれを見てもわかる。歌壇などではいにしへも今もことわりなしに取つて使ふのを例としてゐるが、暇があり良心があつたら書きつけておく方がよいに相違ない。

121 やまかひ

予はときどき『やまかひ』と使つたが、實は『かひ』『山のかひ』『はざま』『山のはざま』などいふのは普通である。予のは意識してさう用ゐたのであるが、それがだんだん廣がつて行つて、今の歌壇では普通になつた。

このことを正宗敦夫氏に話した。其時氏はこれは『やまがひ』と下を濁つて讀むのであらうと云つた。ついで、氏から通信があつて、萬葉集卷十七の『夜麻可比爾佐家流佐久良乎』といふの

がある。これが『山かひ』といふ言葉の物に見えた始かとおもふ。そして「類聚古集」にも「元暦本」にも『夜麻我比』とあるところを見ると、『やまがひ』と濁つて讀む方がよからうと云はれた。予は正宗氏に感謝してゐる。

122　歌論

賀茂眞淵の、『丈夫ぶり。直くひたぶる』の說。小澤蘆庵の、『ただごと歌』の說。香川景樹の『調べ』の說。かういふものを讀んでみると、みななかなかいゝ事を云つてゐる。そして、精しく讀んでみると皆おなじことに歸著してゐる。いひかへると歌の原論になると皆おなじことを云つてゐるといふことになる。

しかし原論は一つあれば足りる。何も先進の見に異を樹てる必要はない筈である。それにも拘はらず、蘆庵も景樹も眞淵に對して繼ぎつぎに異を樹ててゐる。これは與味ある現象であつて、また予にとつて極めて大切なところである。

原論をいふ時は、みんなそれ相應の理を附けて、もつとものの事をいふ。併し制作實行の點に逢

著すると原論だけでは役に立たぬ。自己の性命を本位とするなどと立派な事を云つてはゐても、なかなか實際の役には立たぬ。そこで何時の間にか彼等の心の中に、具體的の作物が豫想せられて其がおのおのの樹てた原論と結びつく。つまり各の佛體が出來たのである。その一つは萬葉集の歌であり、一つは古今集の歌であつた。

作家であつて見れば、一たびは此境を通過するのは自然である。和歌のやうな特殊の形式と歷史とを有つてゐるものに於て特にさうである。眞淵は若年の頃の考を全く棄てて高いところに目をつけた。彼の言論には野心家のつけ込み得る隙はあつても、確かなものを目がけてゐた。蘆庵も景樹も、自己自己と叫んでゐながら平俗なものに落著いて終はつてゐる。此等の關係を予は何時も忘れないと思ふ。

123　平明

ちかごろ評家は、『平明』といふ熟語を用ゐる。平淡明晰あるひは平直簡明の意である。そして此熟語は近世の本邦人によつて造られたものであるらしい。予も嘗て此語を襲いで用ゐたこと

があつた。ところが當時予の親しい友の一人が、君は近ごろ『平明』などといふ熟語を用ゐるが、あれは高濱虛子の眞似で餘り見好くはない。かう云ひ越した。それは高濱虛子氏が、雜誌「ホトトギス」第十五卷第十一號で、『平明の句』と題して、『君子の道は何とやらいふ事がある。眞理は簡明である。立派な文學は判り易いものである。芭蕉の文學も判り易く子規の文學も判り易い。諸君は平明の句に安住しなければならない』と云つてゐたからである。その時予は、己の用ゐた、『平明』は何も虛子の眞似ではない。『平明』などはもうみんなが使つてゐる。かう答へて置いた。これは大正元年秋の事である。

その後間もなく「詩人玉屑」を繙いてゐて、『平明』の語に逢著し、試みに字書をひいて見ると、朝旦の義だとしてある。此はおもしろいと思つて、「佩文韻府」をみると、矢張り朝旦の義だとして用例が抄してある。その用例は、『漢七年長樂宮成諸侯群臣朝十月儀先平明謁者治禮引以次入殿門』(漢書叔孫通傳)。『平明拂劒朝天玄薄暮垂鞭信馬歸』(李白詩)。『平明鞭馬出都門盡日行行荊刺裏』(韓愈詩)。などである。こんな些細な事でも知ると快感をおぼえる。そこで予は、「短歌私鈔」を出す時に校正しながら幾つかの『平明』といふ熟語を除いてしまつた。

しかし此語は、もう「とほり詞(ことば)」になつてゐる。そして現今の我等のこころに何となく親しく

響く。考へずに平直簡明の義にとれるのである。おもふに和成語としてはよい方に屬すべきものであらう。若しこれも舶來語であつたら、予の如上言は一文の値うちも無くなつてくるのである。

124　定家の歌一首

藤原定家の、『みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ』といふ歌は、「新古今集」三夕歌の一つで古來有名な歌である。予は今まで何の注釋書をも見る必要を感ぜずに自分の解釋をつけて居つた。その解釋は、『遠く見渡すと、もう花も、また紅葉もない。うちわたす秋の海濱に、苫ぶきの漁家があちこちにあるばかりで、日も暮れがたである。まことに寂しい光景である』といふやうなものであつた。ところが本居宣長の「美濃の家つと」を讀むと變なことが云つてある。此は面白いとおもつて試に參考書をみると、なるほど說がある。

「八代集抄」に『此歌を三條西殿御說に、源氏明石卷に云。はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、中々春秋の花紅葉の盛なるよりは、只そこはかとなう茂れる陰どもなまめかしきにと云々。此詞を浦の苫屋の秋の夕暮と取なされたる又深重なると「細流」に見えたり。是につき

て兩儀有り。此浦の苫屋の秋夕を見渡せば花も紅葉もなきにいふよしなき景氣有といふ說あり、又此浦の苫屋の秋の夕の景には花も紅葉もいらずとの心と云々。然れども始めの說感深しと師說也』とある。つまり、誠に言ひ難いほどの好景だといふ說と花も紅葉も要らぬ程の好景だといふ說である。

本居宣長の「美濃の家苞」には、『二三の句、明石の卷の詞によられたるなるべけれど、けりといへる事いかが。其故はけりといひては、上句、さぞ花紅葉などありて、おもしろかるべきところと思ひたるに、來て見れば花紅葉もなく何の見るべき物もなき所にてありけるよ。といふ意なればなり。そもそも浦の苫屋の秋の夕べは花も紅葉もなかるべきは元よりの事なれば今更なかりけりと歎ずべきはあらざるをや。我ならば、見わたせば花も紅葉もなにはがた蘆の丸屋の秋の夕ぐれ、などぞ詠まゝしとぞ或人はいへる』とある。宣長の直覺では、此歌を寂寥の秋夕景と感じたのである、が、「抄」の說に囚はれて脫することが出來ない。どこまでも此歌を矢張り面白い好景であると解する念が纏つてゐる。この矛盾を解決するために、あべこべに此歌の表はし方が下手だと言放つた。他人の說にこびりつく者の陷る弊を明示した一例である。

石原正明の「尾張の家苞」に云ふ。『一首の意は、浦の苫屋の秋の夕暮を見渡せば、花紅葉の

事も忘れて哀れにをかしき景色ぞと也。俗に謂はゞ、花も要らぬが紅葉も要らぬといふ程の事也しか心うつす趣は、詞のうへにはなけれど、浦の苫屋の秋の夕暮といへる哀れなるさま言外に浮びて見ゆるなり』。さうして浦の苫屋に花も紅葉も無いのは當然だと云つた、師の宣長の說を、辯護しながら訂正してゐる。それは、『浦の苫屋だといつて花紅葉の無いと極まつた事はない、からいふ事を云はれると磯山浦わの櫻楓共は面目を失つたと愁ふるであらう。しかし此歌は七月か八月の夕暮の景色であるから、花無きは勿論のこと紅葉も未だ染めあへぬ程の時である』といふのである。正明の說は「抄」の第二の說を採つたので、おとなしいが惜むらくは宣長ほどの直覺をも持つてゐなかつた。

故鹽井文學士の「新古今和歌集詳解」も、正明の說を再び踏襲したものであつて、『定家ほどの大家が、花も無ければ紅葉もないなどと、當然きはまる平凡な事をいふ筈がない』といふ意味の事をいつて、正明の說を確めようとし、そして此歌を褒めてゐる。

以上の主要な參考書に失望した予はもう參考書など見まいとしたが、念のため鴻巢文學士の「新古今和歌集遠鏡」を見た。すると『遙ニ遠ク濱邊ヲ見渡スト花モ無ク紅葉モ無カツタワイ。海邊ノ苫葺キ小家ガ立ツテキル秋ノ夕暮ノ景色ハ誠ニ淋シイ』と解いてあつて「抄」の二說をあげ、

『二説孰れを可とも言ひ難し。飜つて思ふに、秋の夕をおもしろしと説くは此時代の思想なりや否や。現に前の二歌(西行の歌寂蓮の歌)共に淋しみを歌へるにあらずや。然らばこれ亦淋しき方に見るべきにあらざるなきか。卽前人の說を悉く退けて前述の解をなせり。敢て識者の高教をまつ』と云つてゐる。鴻巢文學士の說は予の解と合致するものである。ただ氏は前人の說を識つてゐたが爲めに、何も識らない予よりも苦勞するのである。

なぜ前人は此歌の解を誤つたかといふに、歌そのものに據らずに、「源氏物語」などを云々するからであつて、「源氏」の『なまめかしきに』の句に據處を置いたから、すでに出發點を誤つてゐる。そして平凡な解釋者が幾人出ても、皆前人の說に囚はれてゐるから、どこまで行つても同じである。宣長の直覺が危く前人の誤を訂すところであつたのであるが、力足らずに變な事を云つて終をつげた。第二の誤つた原因は、みんな此歌を買かぶつてゐた事である。極めて平凡な分かり易い歌であるにも拘はらず、幽玄體の歌だと謂はれてゐるし、幽玄とか有心とかいつた定家のことであるから、何か意味があるであらうといふので、いろいろ考へてゐるうちに變なものになつてしまふのである。明治になつて鴻巢文學士によつてはじめて前人の誤が訂されたと謂つてもよい。それを今まで知らずにゐたのは濟まないやうな氣がせぬでもない。

予らの解釋の方が、前人の解釋よりも此歌に對して寧ろ同情ある解釋だと思ふ。それでも予は此歌は大した歌ではないと思つてゐる。寧ろ平凡な幼稚な歌だと思つてゐる。『花も紅葉もなかりけり』の大づかみは上の空である。この詠歎は極めて平俗な思はせぶりである。一首の聲調は、大どかで、ゆるやかで、おどけてはゐず、うつとりとさせるところはある。尺八の一流しの趣をもつて、それが此歌の取柄ではあるが、それがやがて滑に失してゐる所以であつて、滲みいづる沈嚴の響きも迫りきたる魄力も、これを聽くことが出來ない。かかるものが『幽玄』ならば、むしろ『幽玄』の冒瀆であると思つてゐる。またかかる程度のメロディーにうつとりとして、かかる歌境に安住せむことは、予にとりて恐るべく悲しむべきことである。屏風に向うて歌を作り、「白氏文集」の句を誦して歌をつくるは、尊ぶべからざる如く、此歌の前にはかうべは下らないのである。冷然として此歌を見放たばよし。少しく己れに卽せしめて物いふと、斯る見となるのである。

125　三山乃歌

萬葉卷一中大兄皇子作「三山御歌」の『高山は畝火雄男子等耳梨と相爭ひき』で、香具山が女山で畝火山と耳梨山が男山だといふ說が「仙覺抄」に稍くはしく、「拾穗抄」「代匠記」「考」「燈」「略解」などが此を踏襲し、疑問さへ挿まなかつた。そして『高山は』の『は』は『をば』の意だとか（代匠記說）『を』に通ずるものだとか（燈說）いつて兎も角も解釋をすませて置いた。然るに眞淵門下なる大神眞潮が、『高山は畝火を愛しと』と訓み、香具山と耳梨山と共に男山で畝火山が女山だといふ新說を出し、「古義」がこれを襲いで、力說し、「檜嬬手」も此に從ひ、その間に木下幸文が「亮々草紙」で同說を出し「犬雞隨筆」などが其を贊してゐる。景樹の「捃解」に幸文と同說に云つてあるのは恐らくは幸文との交通によつて知つたものであらう。此新說の先主權は眞潮にあるので、佐佐木博士も此を認め、井上通泰博士は最初幸文を以て先主權者としたが、佐佐木博士の指摘によつて、眞潮の先主權者たることを認めたのである。

此の歌なども、定家の『秋の夕ぐれ』の歌の解と同じやうに、直ちに歌の調によつて味ふことなしに文字面に拘はつた爲めに仙覺のやうな天才でも能く解き得なかつたのであらう。そして智慧の細かい契沖でも直覺力を有つてゐた眞淵でも、前人の說を讀んでゐたが爲めにつひその說に陷つて安住してしまつたのであらう。此句を盡く平假名に直して書き其を幾度も吟じてみると、

いかにも順直な歌で直ぐ頭に來ねばならぬ歌である。流石に眞淵の直覺力を承けた眞潮が之を解き得、餘り學問が無く從つて前人の說に拘はらなかつた幸文が之を解き得たのは幸と謂はねばならぬ。

折口信夫君の「口譯萬葉集」には、『昔女山なる香具山が、同じ女山なる耳梨山と、畝火山を男らしい山だと爭ひ合ひをしたと云ふが』と解してある。此はまた新說であつて、香具山を女山としたのは仙覺說と同樣だが、畝火山を男山として、耳梨山を女山としてゐるのである。此解は句法の上からいへば、眞潮說と同樣であるが、香具山は女山だと斷じたのが前提となつてゐるから勢ひ耳梨山も女山だといふ工合に成つたのであらうとおもふ。

予の現在は眞潮の說に從つてゐる。今後あるひは仙覺說に還元することがあるかも知れんが、折口氏說には容易に贊成しないらしい。いま鳥獸合精のありさまを觀、その能働と所働の因緣に思ひ入ると、おのづから、折口氏說に疑問が生じて來る。女性の精態も實は W+m だと謂つても、變態（メタモルフオージス）のありさまにならなければ、さう容易に能働と所働の因緣の引くりかへるやうなことはないやうに思はれる。女人の男子爭ひは、それはあるが普遍のものとは謂ひ難い。ことに上代人のあひだの神話・傳說には、人性に最も普遍的なものが多く、特殊的なものは少ないと觀ねば

ならぬ。山水を人格化する場合でも極めて原始的な普遍性を帶びたものであつたに相違ない。「古事記」の『畝火山の美富登』などとあるのも其山皺谿谷などの女陰相似の形態から來てゐるに相違ないのである。「反歌」の、『香具山と耳梨山とあひしとき』の解にも說あれどこれを省く。

126 楸樹

森博士の、「伊澤蘭軒」第二百九十四、第二百九十五に、『楸樹』の考證があつて、有益をおぼえたゆゑに、その考證を書きとどめる、博士は蘭軒醫談を閱して『楸はあかめがしはなり』といふ說に注意し、ついで、說文・爾雅と辭書とに據つて、『楸、古言あづさ、今言あかめがしは』といふ說に歸著したが、植物學書を繰つて、一、楸はカタルバ・ブンゲイである。二、あづさはカタルバ・ケンプフエリ。きさゝげである。三、あかめがしは、マルロツス・ヤポニクスである。かういふ工合になつたために、牧野富太郎氏との相談によつて次のやうに考證を落著せしめたのである。

一、楸は本草家が尋常きささげとしてゐる。カタルパ屬の木である。

二、あかめがしはは普通に梓としてある。マルロッス屬の木である。

三、あづさは今名よぐそみねばり又みづめ。樺木屬の木である。

なぜ右の考證が予のためになつたかといふに、いつぞや、金槐集私鈔を書いてゐて、『うちなびき春さりくれば楸生ふる片山かげに鶯の啼く』といふ歌に逢ひ、『楸』のいかなる木なるかを知らうと思つて、言海、日本大辭林などを見ると、可なり明快な説明がついてゐて、和名抄に、楸は比佐木なること、又木ささげの別名あることが書いてある。これで略わかつた。ついで萬葉集に、『ぬば玉の夜のふけ行けば久木生ふる清き河原に千鳥しばなく』といふ歌のあることを見つけ、試に萬葉集品物解『ひさき』の條をみると、決して明快な説明ではない。貝原篤信の説を引いて、楸はひさきとも、かしはとも、赤目柏ともいふとあり、又小野博の説を引いて、楸は木さゝげで赤目がしはは梓であるといつてある。しまひに、『凡そ梓楸の名、和漢名とも混れて分明ならざること多し、委しくきはめむと思ふ人は本草家の説を考べし』と云つてゐる。

予が森博士の考證を讀んで有益をおぼえたのは、かかる事に關聯してゐるのである。

127　三井氏の歌評

三井甲之氏が近ごろ己と赤彦の歌を評してゐた。その歌評の公表された雜誌は、大正六年六月一日發行の「日本及日本人」である。こころみに己の歌、『ものこほしく家をいでたりしづかなるけふ朝空のひむがしくもる』『赤坂の見付を行きつ目のまへに森こそせまれゆらぐ朝森』についての評を抄してみる。

これらの歌は雜誌の始めの方に掲載せられてあるものであるが、同誌中でも殊に惡傾向を著しく示したものであり、隨つて同派の特色を遺憾なく示したものであらう。まづ第一首は、『ものこほしく家を出でたり』と概括的にいつたならば全體を同じ態度でまとむべきを『朝空のひむがし曇る』と景色を敍して居る。それ故に一首に統一がなく一語づつばらばらになつて散布的印象を與へる。そして肉體を部分的に强調しようとする化粧又は服裝の人の目につく如きものである。それ故に一般の理解には容易である。

そのために一般歌壇からは超然として居た正岡子規系の末流としての「あららぎ派」は一般歌壇の流行と步調を合せるやうになつたのである。殊に途中に『けふ』といふ一語を挿入して呼吸をゆるめて思想を區劃して部分を强調するところは、作者の冥想的傾向から自然に生れた俗受のする技巧である。……第二

首にしても『行きつゝ』とか『行けば』とかいはずに『行きつ』と切つて、次に『森こそせまれ』と強めて文を切り、又次に『朝森』と名詞止にして、一首を三つの文に分つて居る。『ものこほしく』とか、『朝森』とかいふ言葉についても評すべきであるが、今は歌の解釋をするよりも、その作風の根柢に横はる思想をきはめようとするからして、すべて一々の言葉づかひは大目に見て置く。

先づ大體こんな工合のものである。そして、『大部分は與謝野晶子氏を開祖とする明治の俳諧歌の風が傳染したものだ』などと云つてゐる。

己は己の分身たる歌を愛しむによつて、現今峻烈なる批評を加へつつある。己の自歌に對する不滿また寂しさなどに較べれば、彼のありたけの身上である惡口などは、まだまだ甘い上の空の代物である。ただ己の『生』の發育の道程に於てかういふ批評に逢著したといふことは一寸おもしろいから書いておくのである。己はあれ等の歌をどう直したかは今はいはぬ。又彼と爭ふともせぬ。それほどこの評言を眼中に置いてゐないからである。ただ彼の批評を讀過した際己は腹の中でどう思つたか。彼の評言は、いかにも器械的で、二二が四的で、公文書的で、海上胤平の歌評などよりも粗雜で、明治四十一年頃彼が己の歌を評した時の評言そのままそつくりで、歌壇も流轉してゐるのに、明治四十一二年ごろの夢を今ごろみてゐるのだと、かう思つたのである。彼

の言と己の感とどれが確かか、この審判は誰かにまかせる。

128　與謝野氏の語

與謝野寛氏は「伴奏」第三輯で次の語を吐いた。

『田の草を除くことが他日の收穫のためになるなら、俳句と短歌とを詩壇より驅逐することを望む』『短歌と俳句とは上品な浪華節の外の何物でも無い。曾て予の路づれであつた其等の作者達よ、怒つてはいけない、予が之を云ふまでには八年の日月を苦痛の中に費した』

與謝野氏は、明治四十一年十一月に、『うれしくも萬葉に次ぐ新歌を師の御名により世に布けるかな』と歌つてゐる。それから明治四十三年十一月に、『歌の友柴舟に告ぐみづからを歌の亡ぶる證にはすな』『さかしらに歌の亡ぶと言ふは誰ぞ自が歌なきを忘れんとして』と歌つてゐる。後の二つは、明治四十三年十月發行の雜誌「創作」で尾上柴舟氏が『短歌滅亡私論』を唱へたときそれに對して詠んだものである。

このたびの與謝野氏の語は、予に悟り臭く響く。自ら悟つたとおもふものは、恐らくものが馬

鹿げて見えるであらう。ふふんと鼻で息して浪華節を輕蔑するがごとく短歌俳句を輕蔑するに至るのは自然のゆき方であるに相違ない。予はかつても與謝野氏の『路づれ』でなかつたゆゑに、與謝野氏の語に接して怒の心が湧かない。そして短歌の體にたいして輕蔑心のおこらないのは、路傍に汗をふく歩兵のこころに似てゐる。

129　三井氏に

君が伊藤左千夫・長塚節に言及したなかの、『小說をつくつて、過勞のために死んでしまつた』といふ言が『魯鈍言』であるといふことを、もう一遍はつきり云つておく。君はもはや此の君の言について、言訣も補充も修飾も訂正も爲すことを要せない。君の言の『魯鈍言』なることの證は僕は前言においてその大綱を君に告げた。さしあたつて二たび犬の如くに爭ふ要を見ない。かつ勝負はあわてなくもよいものである。暇があつたら、おもむろに勝負を極めよう。さもなくば、僕と君の二つの言を、『時』の批判、『劫運』の批判のまへに立たしめるのである。（六月五日）

130 デエメルの語

リヒアルト・デエメルが、演說中に、『詩人といふものは、一體世界觀を持つてゐる者ではない。Goethe だつて思想の大なる Sammelbecken である』と云つたさうである。己はこれをいつぞやの「椋鳥通信」で讀んだ。つまりゲーテにしろ思想を溜めて置く大きな器（うつは）か、或は大きな貯水池ぐらゐに過ぎなかつたといふのであらう。これから思出すと、デエメルは全集第一卷、卷頭詩で、讀者のために、Vor allem: such keinen "Grundgedanken."! といつてゐる。これは、「歌日記」卷頭の、『ねぎごと』の詩みたやうなものである。己の詩から根本思想などを捜してくれるなといふのである。なほ、kurz ich erlebe meine Gedichte. Und kein Erleben geschieht aus Gedanken. しかじかとある。要するに、おれはおれの詩で體驗してゐる。そして一體『體驗』は單に『思想』などからは來ないものだ、といふほどの意であらう。

詩人でそして思想家である方がなほ好い。己がデエメルの語を聯想したのは、『思想』を表に浮ばせることの困難な短歌の體にあつて、その制作實行上の覺悟において大切ことをな含んでゐ

るからである。與謝野氏などが、『そや理想こや運命のわかれ路に』などと歌つて陷つた弊を切實に指示してゐるからである。己は自己辯護をなして安眠してはゐぬ。

131　賀茂翁家集

「賀茂翁家集」といつても、ここでは賀茂眞淵の歌集の一端に對する雜感を書かうと思ふのである。眞淵は明和六年十月晦日、とし七十三で歿した。生前自選の歌集が刊行せられず、かつ二度も火難に逢つて歌稿が燒亡せたのである。眞淵の歿後、門人の村田春海が主として遺稿を輯めて刊行したのは賀茂翁家集である。家集の例言を春海が寛政三年十一月に書いて居り、序を橘千蔭が享和元年十月に書いてゐるから、家集の編輯すらも、眞淵歿後三十有餘年を經過してはじめて出來たのである。編輯の苦心も、刊行の難澁であつたことも、ひしひしと我らの心に響いてくる。書物の刊行の割合に容易な現代に生きてゐる我らには何となく濟まないやうな心が起つてくる。それのみではない。眞淵の歌の集は二三種の異本として傳はり、なほ復活し得ない秀歌が此等の歌集のほかにあつたといふことを思ふと、眞淵のためにも眞淵を尊敬する我らのためにも甚

く殘念であらねばならぬ。

橘千蔭が序文で『うたのさまは、はじめと中ごろとすゑと、三つのきざみありき。はじめのほどは、物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまにかよひて、はなやぎたよわきさまなりしを、中ごろよりみづからの一つの姿と成りて、みやびにしてしらべ高く、しかも雄々しきすぢをよみいだされ、よはひの末にいたりては、いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、たれも心のおよびがたきふしをのみ作られき』といつて居るのは、眞淵の歌風の眞を傳へてゐると思ふ。東滿の歿したのは眞淵の四十のときである。それからだんだん自分で目ざめて來て、自力で萬葉ぶりの歌を詠まうとしたのはどうしても五十歲以後あたりからであらうと思ふ。しかし自ら步む道は苦艱道である。眞淵の萬葉ぶりの歌も、その間に幾多の消長と低徊と行惱みとがあつたに相違ない。しかし眞淵は七十三歲の高齡まで自分の目ざすところに牛の如くに步いた。そして若し彼にもつと生を與へたなら、やはりその牛のやうな步みを續けたに相違ない。彼の歌風は環境に漂つて、カメレオンのやうに變るやうなことは無かつた。彼の目ざすところは、高く、直き、ひたぶるなる、丈夫ぶりの歌の一途であつた。併し彼の一生では彼の目ざすところまでは行著かずにしまつた。中途で死んだのである。彼自身さう思つて死んだだらうと予は思つてゐる。

眞淵は古學三大人の一人として尊敬せられてゐるから、彼の歌を論ずるものも多い。そして彼の歌として尊敬せられ、有名になつてゐるのは次のやうなものである。

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷲の翼もたわに吹く嵐かな

うらうらとのどけき春の心より匂ひいでたる山さくら花

播磨がた迫門の入日の末はれて空よりかへる沖のつり舟

夕されば海上がたの沖つ風雲井に吹きて千鳥なくなり

橘のかをれる宿のゆふぐれに二聲なきてゆくほととぎす

雪はるゝあさけに見れば不二のねのふもとなりけり武藏野の原

をつくばもとほつあしほ尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらん

かういふ歌も惡いことはない。千蔭が、『みやびやかにして調べ高く』といつた趣はある。當時の歌壇からこれまでに拔きいでたのは並大抵のことでは出來ない。しかし彼の目ざすところまでには行つてゐない。いまだ『趣向』で動いてゐる。『調べ高き』といふ艶をつけてゐるところがある。かういふ歌の一部が、千蔭春海らの門人に傳はつたのであつて、眞淵の眞の精神は田安宗武たゞ一人に少しく形が變つて傳はり、時を隔てて平賀元義によつてよみがへつたほか、又期

せずして僧良寛によつて新たに生れたほか、いはゆる門人によつては傳へられずにしまつたのである。

九月十三日夜縣居にて

秋の夜のほがらほがらと天の原てる月影に雁なきわたる
こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清しとふ人もがも
あがたゐのちふの露原かきわけて月見に來つる都人かも
こほろぎのまちよろこべる長月の清き月夜はふけずもあらなん
にほどりの葛飾早稲のにひしぼりのみつゝをれば月かたぶきぬ

この歌は縣居に宴を催したときで、眞淵六十八歳のときの作だと思へる。前に出した歌に比して、古拙になつて艶がとれて、幾分、しらべ高きとねらつたところがあつても、純一なところが出て居る。いよいよ萬葉調になつてゐる。彼の歌風はかういふところから眞に進むのではなかつたらうかと思はれる。それにしても、彼がこの域に達するまでには約三十年を經過してゐると思はねばならぬ。そしてなほ彼の目ざすところまでは行著(ゆきつ)かぬのである。

（大正六年八月、處女文藝のために）

132　三井甲之氏に答ふ

君の、「齋藤茂吉氏に」(潮音第三巻第三號)を讀んだ。君の意を尊敬して、後ればせだが少しく應へようと思ふ。

(1)　君は僕に與へた公開状でかう云つてゐる。『僕の言葉はトルストイの思想と生活とを引合に出して夏目漱石を論じた數頁にわたる比較的長い論文の一部文です。僕の言葉は全體の論と切はなして理解せらるべきものではありませんから、一部分引用するならばその部分の全體に對する關係を說明して、そして僕の言葉が魯鈍であることを說明していただくと結構であつたと思ひます』。一應の理である。僕がさうしたならば君も滿足であつたであらう。そして若し僕の心中に數頁にわたる君の論文全體について論じようとする衝迫が起つたならば或はさうしたかも知れぬ。ところが僕の心にはそんな衝迫は起らなかつたのである。そこで僕の言は君の全體としてのトルストイ論にも、夏目漱石論にも、伊藤左千夫・長塚節の藝術の價値論にも一言觸れてはゐない。ただ僕が特に三角の標を打つて注意した、『小說士などを書くに至つて愈々此の傾向がつ

のつて過勞のために若くて死んでしまつた』『小說の濫作に耽つて過勞のため死んでしまつた』の二文に就いて一言いひたい衝迫を感じたのである。すなはち僕の言は、君の書いた全體の文中から、この二つを抽出して、それを獨立せしめて、そして僕の言の對象としたのである。こんなことは特にことわるまでもない。また考察の對象をきめるに、" Abstraktion " の意義奈何は君も熟感のことであらう。よつて、僕が君の論文全體を論じなかつた事が、僕が抽出した此二文の結論の非の辯護にはならぬ。また此の二文が飽くまで非獨立性で、全體の夏目漱石論の寄生としてのみ意味が辛うじて存在し得るほどな弱々しいものであることを、書いた當の君が自ら認容するならば、それならば速かに除去するがよいのである。無價値を自認して、なほそれを棄てることの出來ないのは不徹底である。

（2）　僕が抽出した二つの文を評して僕は『魯鈍言』であると云つた。この評言が君の道德的感情を害した樣子で、さうしても少し道德感情に從順し禮儀を守ることを君が僕に要望してゐる。そこで僕はこの『魯鈍言』に註を加へ、次いで僕の見を述べる方がよいと思ふ。『魯鈍言』といふ語は、『精到言』の裏であつて、その言說が笨鈍で、しかも其笨鈍なることに少しも氣が付かず、取り濟ましてゐるほどの無邪氣さに向つていつた語である。『魯』は『樸』に通ずる。『魯鈍

言』は、言說の是非にその態度をもひつくるめて批評した熟語で、僕の內的要求に順じた不動の語である。流俗間の挨拶でないかぎり僕の漫言のやうな種類のものにあつては、自己の內的要求に順ずる語をもちて表現するのは當然である。僕がみだりに我を張ると思ふと間違ふ。

この『魯鈍言』といふ語は、君の道德感情を害したといふ。それは少しく悲しいことである。若し單に從來慣用された、淺薄言とか妄言とか虛妄說とか僻見とか邪說とか、みだり言とかひが言とかそら言とかしひ言とか云つてゐたならば、或は君の道德感情を害さずに濟んだかも知れぬ。けれども僕の內的要求はそんなことでは承知しない。そこで『魯鈍言』といつた。しかし君にして若し言語の Gefuehlslage に對する受納用意がもつと細かく敏くもつと調熟して居つたなら、決して道德感情を害するなどいふ無駄な心的機轉は要らぬのである。君は、『魯鈍などいふ言葉はつかはぬだけの敏感』を僕に要求してゐるが其はあべこべである。元來、ことばの言語感は單一性のものでないことは君も感じて居る筈である。また Begriffsuebertragung の可能であることも君は首肯せねばならぬ筈である。しかるに君は、『魯鈍』といふ語は人間の資稟のみに冠らせるといふ甜俗の既成謬習感に囚はれてゐるらしい。そこで言說に冠らせた『魯鈍言』に向つても道德感情などを害するに至るのである。あだかも『交接』の語に接して直ちに色情肉感を發

するのに似てゐる。少しく所謂 Bedeutungswandel の例を云はうか。資性魯鈍といへば魯鈍は資性に繋つてゐる。運筆魯鈍といへば魯鈍は運筆に繋つてゐる。磊落・沈著などの語は人物月旦にも使ふが、筆迹磊落、調格沈著といへば書畫詩の道の評語として受取らねばならぬ。交接虚實之處といつても直ちに色情感を起すのは不徹底である。耳根及顴骨交接處を讀むときこれを解剖學上乃至人物畫論上の語として受取らねばならぬ。古人の書いた學說の論文中に、をこ言、おろか言、たはれ言、しれもの言、なまさかしら言、たは言などとあるのに逢つて、一々道德感情を害してぷんぷんするのは未だ徹せざるの徒である。かかる通俗事を君に向つていふのは少し物足らぬのである。序だから茲でいふが、君は『低能』の語をいたく氣にし、今迄僕に向つてばかりでなく幾たびも云つた。そして文藝上の議論などに用ゐるなといふのである。しかし近來用ゐられる此語は獨の „minderwertig" の譯であるから、そんなに氣にしなくもよい。要は使ふものと受納れるもの丶態度奈何によつてきまるのである。

（3） 頭から『魯鈍言』などと結論をせずに、因果關係を分析せよと君はいふ。これも一理はある。僕は獨逸流の自然科學上の論文に於てかういふ論法には割合に親しんでゐる。けれども僕のあの漫言ではそんなことをする必要を認めなかつたのである。僕のあの言は論理上の過程を拔

きにしたのである。目的がちがふからである。僕は自明の理をことごとしく書聯ねて僕の言を無理に君の穽に落ちさせようとはしなかつた。それまでである。必要とあらば因果の分析も辭せない。しかし論理上過程を拔きにしたからと謂つて結論が間違つてゐるとは謂へない。君は僕に向つても先づ理由を云へなどと息卷き、『說明なしの結論だけの批評が漫罵に陷る』などといふが、漫罵とばそんなことを謂ふのではない。漫罵とは根柢なき毀謗憤悱を謂ふのであつて論理上過程を省いた正當な結論と漫罵とは截然と區別すべきものである。

（4）以上は行がかりのうへの詰または前置または從屬言と觀るべきものである。そして此項を本旨として觀ねばならぬ。君は伊藤左千夫・長塚節の『死』を論じた。君の言中の『死』の概念は、普通娑婆界に於ける、人間生機の絕ゆることを意味してゐるのは明かである。よつて僕もそのつもりで論ずる。君は二氏の死を論じ、その死の唯一の因を『過勞』に歸し、も一歩さかのぼつて『小說を書いたこと』に歸してゐる。僕おもふに、二氏の死の因を考察しようとするには、先づ最も近い因であつた筈の二氏の疾病について考へねばならぬ。醫は現代醫學の立脚點にゐて二氏の疾病を診斷した。一つは結核症であつて、一つは腦卒中症である。この診斷の歸納的論據はいまはいはぬ。僕はここで君に向つて診斷學の通俗講演を行ふことを欲せぬからである。いま

此二疾病の診斷から逆に溯つて、その causa efficiens を考察するに當つて、あらゆる可能の Faktoren を考へる。この因子のうちには、內的と看るべき遺傳・體質・素因もある。年齡もある。それから大づかみに謂つて、あらゆる外界の要約と惹起刺戟のあらゆる Bedingungen がある。刻々の生活狀態も無論これに這入る。僕はこれまで折に觸れて二氏の疾病の因について考へて、これらの因子を念中に有つてゐたが、いまだ考究を遂げないによつて之を公表したことはないのである。然るに君は二氏の死因をば einheitlich なるがごとくに看做し、小說を書いて、さうして、過勞のために死んでしまつた、といふやうな論法を執つてゐる。また、『過勞』といつても、Ermuedung か Ueberanstrengung の差別をも考究してゐない。かういふ君の言に向つて『魯鈍言』と評し去つたことを僕は妄であるとは思はぬ。なるほど、疾病原因の因子中には小說を書いたことも含まつては居よう。それを僕は否定せぬ。ただそれを唯一の因として考察する笨鈍の說を公表するほどな無邪氣さを難ずるのである。二氏と『隨分親しく交際した時がある』といふ君は、二氏の生活全體は決して小說ばかりを書いてゐなかつた事は知つてゐよう。明白なこの事實は旣に君の考察結論の『魯鈍言』なることを證するものである。如何。

ここで、君は或はかういふかも知れん。君の言はあれは疾病論ではなく文藝論であると。また

から云ふかも知れん。縱ひ死因のあらゆる因子について考察はしてゐたが土臺が文藝論であるから除去法の論法を採つたのであると。さうして、このたび「齋藤茂吉氏に」でいつた如く『あなたも御存じの通り、伊藤長塚兩氏とは僕も隨分親しく交際した時がありますから、その時に得た直接經驗を土臺として、その後の文學的作品に現れた二氏の思想を檢して、そしてあなたが魯鈍說として引用されたやうの結論に達したのです』と註したやうに、兩氏の思想問題を論じたのであると。それならば先づ『過勞のために若くて死んでしまつた』『過勞のため死んでしまつた』は之を除去しなければならぬ。君が僕の言を機緣として君の言の非を改めるならばそれでよいのである。ただし僕が抽出した此二文に對する僕の言を、心理學上・美學上・方法論上から打破し得るといふなら、試みるのもよい。

133　二たび三井甲之に與ふ

こんどもいふか、君が伊藤左千夫、長塚節に言及したなかに、『小說をかいて過勞のために死んでしまつた』といふのがある。それを僕は『魯鈍言』であると明言するのだ。そして此言を直

に攻めるのだ。その、『魯鈍言』なることの證は前言に於てその大綱を君に告げた。そして少しは反省と考究の餘地を殘してやつたのだ。餘り殘酷だからである。しかるに君はその僕の言を『嚴しく論破してしまつた』と己惚れ、『それは大綱の幻影だ』などゝ妄想してゐる。これらの事がだん／＼瞭然としてくるであらうから、慌てなくもよい。

僕は、直ちに、『小說をかいて、過勞のために死んでしまつた』を攻めるのだ。この僕の攻擊にむかつて、全體の文章を讀めとか、前後の關係を顧慮しろとか、醫學上の見地から云つたのではないとか、苦しくなつてくると、そんな事を云つた覺えはないとか。そんな女々しい回避的な逃口上は、防禦力として何の役にも立たぬと思へ。堂々と正面から僕の言に對すべきだ。そして補充と訂正とで逃げずに、赤裸々に君の『原文』を以て僕の言を防禦するのが、『男らしくない回避的態度』にあらずといふものだ。餘計な事をいふ必要が無いとおもへ。

僕は論點を集注せしめてもの言つてゐるのに、『齋藤茂吉氏は少しも論の重心に觸れぬ見當違ひの論をして』などと、をかしな事いつて逃げようとするからして、もう一遍論點を明かにして置く。

若し、伊藤左千夫、長塚節が、小說をかいて、過勞のために死んでしまつた。といふ事が事

實と符合しない場合には、君の言は僕の謂ふ『魯鈍言』であつて、論は君が負だ。若し事實と符合してゐるならば、論は僕が負だ。

この論點の定めには逃げる餘地がない筈である。若し逃げる餘地がありとせば、君の唯一の武器である、『醫學的見地から論じたのでなく、道德的見地から論じたのだ』などと繰返してゐるだけである。そして類推法を示してゐるぐらゐに過ぎない。その類推法はかうである。『かういふ實例がある。宿醉に惱んで居る一人の友人を訪問した一醫學生は、それは急性胃加答兒だといつた。その場合に當人は、それは酒を飲みすぎたからだと自分で知つて默つて居た。後者の立場は卽ち道德的見地からのそれであつて、それは醫學生の言葉と相容れぬものではない。』この場合の一醫學生の言は魯鈍言なのである。醫學上見地から見ても、宿醉は宿醉であつて、急性胃加答兒といふのは魯鈍なのである。なぜかといふに酒に醉つぱらつた、その宿醉の主證は急性胃加答兒の主證と必ずしも一致しないからである。こんな實例を以て僕の言を論破したと思惟してゐるのはつまり魯鈍なのである。また君はかういふ比喩をもいつてゐる。『醫者はばいどくだと診斷しても、それは品行がわるいからだといふ道德生活上の見地からの言葉も許容さるゝやうなわけです。』これも粗笨だ。惡品行と黴毒とは必ずしもイデンチッシュではない。且つ因と果と

の差別關係がある。こんな言で僕の言を論破したと思ふのは已惚だ。またこんな粗笨な考察で道德宗敎的原理などの分らう筈がない。この事は以下の僕の借問に答へてゐるうちに分かるから君は慌てるに及ばない。道德上見地などと稱してこんな粗笨な觀方をするよりは、人生の事實として考究すべきだ。從つて『醫學上から論じたのではない』などいふ薄弱な言は、防禦力として何の役にも立たぬと思へ。

これから氣長く勝負をはじめよう。君は左の僕の借問に答へるがよい。『男らしくない回避的態度』を取らずに、簡明に答へたまへ。僕の『問』だけに答へればよい。餘計なことをいふ必要がない。かういふ問答が數年續けば、おのづから勝負が極まるのだから、慌てゝ餘計なことをいふ必要がないのである。

（一）　長塚節は、結核症のために死んだと僕は君に告げた。然るに、君は、僕が事實を示さずに他をいふと誣ひた。そこで更めて君に借問する。長塚節が結核症のために死んだといふことを、君は人生の事實として認めるか否か。認めないとせばその證奈何。

（二）　君は長塚節について、『過勞のために若くて死んでしまつた』といつた。そしてその『過勞』とは『無理をした』こと、つまり『過勞働』の義だといふ。然らば君の謂ふ『過勞』

には作業の量上絶待の標準があるのか。或は個人性によつて違ふのか。或は作業の質によるのか。長塚節の場合に、和歌を作り、旅行を爲し、農事に努め、村里の主な一員として生活した、その作業の量と質と、小説を書いた作業の量と質との間に、いかなる差別があつて過勞と過勞でないこととの區別が定まつたか。その客觀的標準奈何。

（三）　長塚節作小説「土」の第廿七回、第廿八回の第一草稿は、明治何年何月何日に書かれたものか。その時の長塚節の『統覺波動』はいかなる狀態にあつたか。そしてその『統覺波動』と『作業波動』とを一致せしむるに困難なることを、根據のうへに立つて指示せよ。

此のたびは以上の三問にとどめておく。ついでおもむろに質問を出さう。今右の第三問に少しく註を加へておく。小説「土」の第廿七回、第廿八回を選んだのは、それが「土」の終末のものだから、過勞云々を講究するのに便利だからである。『統覺波動』などといふ學界に通用しない語を使つたのは、君の文章から取つたのだ。君の文章は『僕が過勞のためといつたのは、二氏の作つた小説を作ることが自然律に隨順して自然の生理心理的律動と相應するものではなくして、理智主義の構造小説を作らうとするからして、創作するにあたつて其の作業が生命の自然の律動を制御して、統覺波動と作業のそれとを一致せしむることが困難となるからして、自ら實生活上

にもこの不自然の作業に適應するために、人爲的生活法を案出するに至るのであつて』云々といふので、これが一面、『過勞』といふ語の説明なのだ。こんな工合に補充して逃道をつくるのは、弱者のすることだ。それゆゑ僕はこれぐらゐの事は『大目にみておく』のである。

それから、以上の僕の質問を、醫學上の立脚點にゐるものだなどと逃げてはいかぬ。『疾病をも包括する全生活に就いて考へるために疾病のことをも顧慮するのである』といひ、『醫學者でなければ死や疾病に就いて觀察し判斷し得ぬことはない』と豪語した君は、もはや、醫學上の見地からは云々せぬなどと逃口上はいはぬであらう。又、伊藤左千夫、長塚節の事を論じてゐるのに僕の歌の批難などをしてお茶を濁さうとするのは、顧みて他をいふの類で、弱者のしぐさだ。『男らしくない回避的態度』を取るものゝしぐさだと思へ。（七月十五日）

134　三井甲之氏の答辯

三井氏が長塚節を論じた中の『小說士などを書くに至つて愈々此の傾向がつのつて過勞のために若くて死んでしまつた』をば、予は『魯鈍言』であると評した。この予の言を立證するために、

そして問題を集注せしめる必要上、問答の形式を採つたのである。三井氏の言說は予の目には雜然として居て、主題をずらし移轉せしめ、烟に卷く如き言を行るを得意とするがゆゑに主題を瞭然とせしめる必要を生ずるのはおのづからなる行き方である。

（茂吉問）　長塚節は、結核症のために死んだと僕は君に告げた。然るに君は、僕が「事實」を示さずに他をいふと誣ひた。そこで更めて君に借問する。長塚節は結核症のために死んだといふ事を、君は人生の事實として認めるか否か。認めないとせばその證奈何。

（甲之答）　醫者が「某氏は某症のために死んだ」といふならば、それだけの事實は認める。しかし僕は長塚氏等が何病で死んだかは問題にせなかつたのである。たゞその病氣が生理心理的素質に基くものであることを知つたからして、長塚伊藤二氏の病氣は異つて居つたことを知つて居るが、その素質を生成したところの共通の道德的條件を論じたのである。

なほ、三井氏は、『綜合的』立脚地を閑却して、人生を單に醫學的見地からのみ觀察しようとする偏狹の態度と予の質問を評してゐる。予が『結核症のために』と明言するのは醫學上見地のみに限局せしめての言ではなく、人生の事實として何人も考へねばならぬことである。ニイチエは『精神病のために』死んでゐる。未だ疑問があるがメエビウスに從へば痲痺性癡呆である。そ

して『過勞のため』ではない。山本勘助は戰死した。外傷に因る致死であつて、『過勞のため』ではない。ファン・ゴォホは自ら短銃を以て射て死んだ。自殺である。そして『過勞のため』の致死ではない。かくの如き事がらは、醫學上とか道德上とかの狹い立脚點にゐて云々せなくともそれらの人々の『內生』を講究するに當つて何人と雖認めざるべからざる人生の事實である。

同樣に、長塚氏の內生を論じ、死を論ずるのに、『過勞のために』などと論じてはいけない。『結核症のために』といふ事が人生の事實として明白である以上、何人と雖これを承認しなければならぬ。特に『綜合的見地』を云々する者にとつて免すべからざる事實であるに相違ない。ニイチエを以て『過勞のために死んだ』と傳ふるのは誤であり、長塚節を以て『過勞のために死んだ』と傳へ評するのは謬妄である。人生の事實として『結核症』といふ事が明白であるのに、其を『道德的條件』『生理心理的素質』等の空漠たる無根據の前提の下に、『過勞』の文字を是非肯定せよといふのはいかに考察の不精到なるかを暴露する者である。綜合的立脚地を閑却して、道德的條件などの偏癖な觀方に蹲踞しようとするのは、いかに氏自身が人生の事實に忠實なる考察をなして居らぬかを證するものである。

氏は、『しかし僕は長塚氏が何病で死んだかは問題にせなかつたのである』と自白する。大切

な人生の事實を問題にせざるものが如何にして綜合的の考察を遂行し得よう。三井氏の言の『魯鈍言』なる證である。

『結核症』が人生の事實なる事を予は明言しておく。然るに三井氏は此は單に『醫學上の事實』で『道徳上の事實』ではないなどといふ。そして直ぐ、平然として『若くて死んでしまつたと制限を附していつたのは事實によつたのみである』と云つてゐる。長塚節が三十七歳の二月に歿したのを、道徳上見地から事實と認めるものが、長塚節が『結核症のために死んだ事をば、單に醫學上の事實だなどといふに至つては寧ろ『魯鈍言』の感を起さざることを得ない。

以上を以て予は、『長塚節は過勞のために歿したのでなくして結核症のために歿したのである』ことを立證し、あはせて、三井氏の『過勞のため』といふ言の『魯鈍言』なることを立證した。

これで足りる。

（茂吉問）　君は長塚節について『過勞のために若くて死んでしまつた』といつた。そしてその『過勞』とは『無理をした』こと、つまり『過勞働』の義だといふ。然らば君の謂ふ『過勞』には、作業の量のうへに絶待の標準があるのか。或は個人性によつて違ふのか。或は作業の質によるのか。長塚節の場合に、和歌を作り、旅行をなし、農事に努め、村里の主な一員として生活した、その作業の量と質と、小説を書

いた作業の量と質との間に、いかなる差別があつて、過勞と過勞でないこととの區別が定まつたか。

（甲之答） 過勞に就いて十分説明したからして、僕の説明を批評せずに提出された齋藤氏の問に答へる義務がない。

氏の『過勞』の説明は『十分』どころでは無く、曖昧不徹底なものである。元來『過勞』には Ueberanstrengung と Erschöpfung との兩義を含んでゐる。そこで予は其區別を解明する事を氏に注意した。さうすると氏は『疲勞のために死んだなどとは云はぬ』といひ、『無理したことだ』と説明をした。併し、『無理』といふ語は決して明快な內容を指示してはゐない。よつて予は假りに『過勞働』の義にとつて如上の質問を發したのである。

なぜ此質問を發したかといふに、氏は長塚節が、小說を書いた事に『過勞』の原因を置いてゐるからである。そしてこれも予の見によれば『魯鈍言』だからである。元來長塚節の生活は決して小說ばかりを書いてゐたのではない。長塚節には村里の主な一員として活動せねばならぬ骨の折れる生活があり、一家の主要な人として、家事上農事上、對他上の爲事を監督主裁せねばならぬ生活があり、屢々單獨旅行をなし、和歌の制作に熱心した生活があつたのである。特に明治四十三年八月に患つた痔瘻は Fistula ani tuberculosa であつて、長塚節の結核症は小說「土」執

筆以前數年に於て傳染したと看做すべきものである。そして彼の喉頭結核症は全く小說を書かなくなつてから半年餘日の後に始めてあらはれたものであるのは事實である。

玆に於て若し「過勞」の原因を小說を書いた事に置くことを主張するならば、他の上擧の生活が「過勞」の原因にならない事の實證をあげ、その Ausschliessung の可能を明示した上のことでなければならぬ。さもなくんば『小說を書いた事』に主原因を置かうとするのは無意味である。よつて予は三井氏に如上の質問を發したのである。然るに氏は『答へる義務がない』と稱して答へない。答へなしとせば、氏の言論は根から破れたものである。無意味に終はつたものである。『魯鈍言』の域を越えて謬妄言に終はつたものである。

三井氏は遁辭をなして云。小說を書くといふ事は坐つて執筆するをいふのではない。長塚節の小說は理智主義の構造小說であるからして、理智主義の構造小說を書くといふ道德的條件が『過勞』の原因を爲したのであると。いかにも承知した。しかし理智主義の構造小說などと謂つても具體的に、單行本「炭燒の娘」「土」所收のいかなるところによつて『過勞』の原因を成したかを明かにしなければ言は空論に終るのである。特に綜合論を主張して長塚節の生を論じ死を論じようとするものが、長塚節が單に理智主義の小說を書いたなどいふことばかりを念に置いて、大

切な他の生活を考察の對象としないのは、好んで『魯鈍言』を發する空想論者の特徴を暴露したものである。

（茂吉問）　長塚節作小説「土」第廿七回・廿八回第一草稿執筆時の長塚節の『統覺波動』はいかなる狀態にあつたか。そしてその『統覺波動』と『作業波動』とを一致せしむるに困難であつたことを根據のうへに立つて指示せよ。

（甲之答）　答へる義務がない。

答へる義務がないといふのは遁辭である。三井氏は自らの言責を重んじ飽く迄その言責を徹底せしむべき義務を有つてゐる。然らずんば予の評言なる『魯鈍言』の前に降伏すべき義務を有つてゐる。

なぜ予は如是の質問を發したか。三井氏は氏のいはゆる『長塚節の過勞』を說明して、『理智主義の構造小說を作らうとするからして、創作するに當つて其の作業が生命の自然の律動を制御して、統覺波動と作業のそれとを一致せしむることが困難になるからして』と云つた。しかも其は實相を根據としない不徹底空漠の言であるからして、その『統覺波動』が如何なる狀にあつたか。その『作業波動』が如何なる狀にあつたか。その二つの不一致は如何にして惹起したかの明

答を要求したのである。若し此の事項が闡明されなければ、事實に隨順して考察せざる上の空の半ば夢みながらの空論に等しくなつて來るからである。しかし三井氏が答へる義務がないといつて答へない以上、理智主義の小說。生命の自然律動制御不可能。統覺波動と作業波動の不一致。かういふ過程と結論の間にはいつまでも事實に本づく論理上證明が毫末も實行されない。首尾ことごとく魯鈍言に終はつた實證である。

（茂吉）『統覺波動』などいふ學界に通用しない語を使つたのは君の文章から取つたのである。

（甲之）齋藤氏は『統覺波動』を學界に通用しない語といふがそれは Apperzeptionskurve を多少畫的形容的にわかりよく言つたのだ。これらの言葉を學界に通用せぬなどといふのは現代醫學の知識と技術を誇示して他に臨まうとする齋藤氏の言葉としては自家撞著で奇異に感ぜざるを得ぬ。松本博士は多分、「統覺波」といふ譯語を用ゐて居つたかと記憶する。魯鈍無識謬妄等の氏等の好んで反覆する言葉は他人に對してのみ用ゐるべきものではないと知るべきだ。

『波動』ならば Wellenbewegung の義でなければならぬ。Kurve ならば通常これを『曲線』と飜せねばならぬ。濫りに『多少畫的形容的にわかりよく』等の自恣的理由のもとに斯る譯語を敢てするのは却つて難解混亂に陷らしむる基であり、通用せざる所以である。

『統覺』Apperzeption はカントの用語例に本づいてヴントの考定した概念に從つたと看て可いであらう。併し若し『統覺曲線』の語を活かす爲めには、graphische Darstellung の可能を豫想し肯定し約束することが第一の要約(ベディングング)である。そして此の「抽象」Abstraktion 法の可能肯定のもとにフエヒネルの精神物理學(フシコフイジーク)に於けるが如く、ヴントの生理的心理學、感覺講究に於けるが如く、長塚節が小說「土」を執筆した一百餘日間の長塚節の、『統覺』に就いて、それから、その『作業』に就いて Kurve (曲線)を表現し得ざれば、『統覺曲線』『作業曲線』などの語は無意味である。漫然として言放つた架空の語に過ぎないのである。予はあらためて、長塚節小說制作時の『統覺』をば、時間的變化に應じて具象的に表はすことを三井氏に要求しようと思ふ。

『波動』現象のあらはれた形、又は之を graphisch に抽象したものが『波』Wellen である。『波形』は之を曲線(クルフエ)にあらはす事が出來る。併し一般の曲線(クルフエ)は『波』とは必ずしも一致しないのである。予は松本博士の事は知らぬ。併し『統覺』は他の精神機轉の如く、"in jedem Augenblick fortwährend fliessende Erlebnisse" (ヴントに從ふ)だといふ事を肯じようが、ただ玆にいくばく「抽象(アブストラクチヨン)」を前提としても、『統覺』が所謂『波動』だと謂ふことは未だ無條件では肯じ得ない。『統覺』が『波動』であるといふ條件には、波長、振幅、週期などの概念が先づ豫想せられ、明示せられな

ければならぬ。精神科學の研究に『抽象法(アブストラクチヨン)』の無意味なことを力說した(日本及日本人六月一日發行)三井氏に、そして『科學的研究』を誇號する三井氏に、長塚節の『統覺』が『波動』なることの證明、從つてその波長週期を明示せむことを要求し、三井氏の言責の遂行せらるゝことを欲するものである。そして、『自家撞著で奇異に感ぜざるを得ぬ』などの言を弄する前に、すべからく反省し、言責を重んじ『齋藤氏は何も答へぬ』などの黑圈點附き連發を撤回するだけの『男らしき態度』を欲するものである。

以上を以て、三井氏の答辯の吟味、氏の言說の無根據なること、論を立づるに空想を以てし、精神生活を論ずるのに、漫然として力學の用語を使ひ、『道德的』とか稱する自稱立脚點に蹲踞するに止まつてゐて、綜合論と豪語しながら、實は『魯鈍論』に終つてゐることを立證したのである。さうして、この立證のもとに本項の目的が遂げられたのである。(九月五日夜)

135　平福百穗氏

太つて豐かな、おほどかな體のうちに、雋鋭な神經と氣魄とを藏して居つて、これが平福氏の

繪の基柢をなしてゐる。

氣に喰はぬ繪はみづから容易に破いてしまふところも、描線が肉體に似ず清痩で、あまくぶくぶくしてゐず、竹雲のいはゆる、一旦渣滓盡而淸虛來のおもむきあるところも、古畫の粉本をつくるを面倒となして、なほ直ちにその骨髓に觀入してゐるところも、容易に環境に漂ふことなく、獨り苦しむ傲岸なところも、色彩がぞんざいなるが如くであつて淸く、畫面に漂ふ一種の「品」も、みんなその基柢に本づいてゐると僕は思つてゐる。

平福氏は讀書してイズムの運動を知ることを面倒としてゐる。その暇に一草一莖に觀入し、あるひは大食して飽くことを知らない。それゆゑ、氏の繪は外邊の趣味からは來てゐず、實相觀入から來てゐる。「工夫」「騎馬巡査」より、「愛奴」「赤茄子と芋」「木槿」それから、「島の女」「茶の木」「鴨」「七面鳥」「朝露」と來て、「猫」「仔牛」「鴉」「羊齒」、題材のちがつた「田澤湖傳說」「三山傳說」「豫讓」、最近の「高山朝靄」に至るまで、それから「相撲」「大山大將」等數おほくのスケッチ漫畫に至るまで、その根調はおなじである。實相觀入の極、象徵に至らずば止まない。「鴨」「七面鳥」「朝露」より、「鴉」「高山朝靄」に歩んだのは興味あるところである。

出來不出來があつて、放奔で一氣で押してゆき、時にぞんざいで、不統一の繪もあり、描く女

人の顔容も頽廢性を帶びてゐず新鮮な性欲を思はせるのも、平福氏の兩頬の赤味のたまものである。若し氏の繪が、スケツチ、平面、達筆などの世評に本づいて、思はせぶりな甘味に行き物語に這入つたら、少しあぶないと僕は思つてゐる。「豫讓」が物語りに這入らないのは、樣式化の「能」に親しんでゐるためであらう。

むかし支那人は『遒勁流轉』の語をつくつてくれた。明治四十年に、國見峠にて、『ここにして岩鷲山の東の岩手の國はかたむきて見ゆ』と歌つた平福氏は、正にこの熟語を體驗してゐるらしい。そして齢四十を越してなほ時に『はにかむ』ことがある。純で、づるくない畫面の味はひは爭はれない。

平福氏の人物に就いては僕は書かない。ただ僕の先師伊藤左千夫先生、長塚節氏と親交のあつたことを書いておく。そして實はこれからであつて、これまでの繪は皆焚燒してしまつてかまはないのである。ここで安住してしまふのはあぶないのである。放奔であつて然も輕浮に至らず、常に實相をねらつて浮腫甘味よりは清痩酸味に、そして先進のいはゆる「沈痛」の域に到るのは平福氏の藝術であらねばならぬ。素人の僕は氏と親しきのゆゑを以て、敢てかゝる妄言をなすのであつて、その不遜の罪ふかきを知つてゐる。（大正七年一月、中央美術所載）

136　性命具足の詩

（東京日日新聞の國詩募集に際して。）募集課題の「國詩」といふのは、日本國語をもつてした廣い意味の「詩」といふのであつて、その中には、從來の長歌、今様、新體詩、長詩も含んで居り、それが七五調であつてよく、五七調であつてよく、八八調八六調種々の音律から成つてゐてよく、近來の口語體自由詩であつて無論よく、新形式の創造もいよいよよいのである。長短は白秋の眞珠抄あたりの一行詩から三行四行乃至五十行乃至百行云々であつてよい。從來のきまつた形式のものならば、十七字の俳句、三十一字の短歌、それから旋頭歌、佛足石歌の體であつてもよい。いはゆる破調であつても、碧梧桐、井泉水氏らの謂ふ俳句であつてもよいのである。詞もつまりは「日本國語」であつて、口語でも古語でも勝手次第である。

勝手次第であつても、いゝものは何處までもいゝに極まつてゐる。要は性命の具足不具足、魄力の甚深淺薄の問題に歸著すると僕は思つてゐる。藝術の根本義に立つて、文壇の主流だと謂はれてゐる小說脚本等の前に、そしてなほ東西にわたる優れた繪畫彫刻等の前に、豪然として自立

し得る底の「國詩」が集まるといゝと思ふ。詩はいのちの、直なる、なほくひたぶるなる、純なる、邪氣なき響であるに相違ない。

おもふに、現代の日本國は優れた詩人に乏しくはない筈である。然るに若し募集に應ずるものが、一部少年の徒に限られるやうなことがあり、集まる詩が低級膚淺のものに止るやうなことがあつたら、それは悲しいことに相違ない。いつぞや新聞で國歌のやうなものを募集した時、文壇の古手であつた山田美妙氏がそれに應じたことがある。僕は山田氏のその振らない、邪氣の無い態度に感じて未だに忘れずにゐる。現代の優れた詩人諸氏が、若し繪かき諸氏みたやうに『審査員の態度』不平などの常套語を發することを好み、ふふんといつて天の一方をにらんでゐるとすると、それは悲しいことのやうに思はれてならない。僕は未だ多力者ではなくして、時に極めて恣にゲーテの詩を選み人麿の歌を選んで居る。若し現身の僕の批判を受けるのを潔しとせないなら、僕の批判を多力神明の批判とおもへば別に癪にも觸らないのである。（大正七・一・長崎にて）

137

眞淵と宣長

幾邑、舜庵ふたりの問答を讀むと、幾邑が舜庵にむかつて、『攝の契沖、京の東丸など近世の豪傑、今の人は其恩頼を得る事なり』と云つてゐる。舜庵はそれに答へて、『契沖も東丸、眞淵など今時出たらむには左程にもあるまじき』と云つてゐる。

舜庵はすなはち本居宣長であつて、眞淵歿後に此の問答がなされたのである。宣長は眞淵を尊敬して隨處に『師』と云つて居る。しかし宣長は作歌の道については、そしてなほ萬葉集の藝術上價値については、つひに眞淵の心底を理會せずにしまつたのである。宣長が歌の批評を眞淵に乞うた時、『歌にあらず』とまで手嚴しく叱られたにも拘はらず、宣長は心中それには服せなかつた。そして依然として平俗な歌を澤山に遺し、古調と近世調と二とほりに分類して、歌の詠みわけまでして居る。

宣長は自己の信念に立脚して進んだのはよからう。そして、彼自身の言の如く、『必ずしも師の說になづまず』といふのも非であるとは謂はない。要は、『自己の信念』の正邪、是非の奈何に歸著する。劫運は、從屬的の第二次的の價値批判を洗ひ去つて正味のところを見せて吳れる。いま己が眞淵・宣長の歌を較べてみると、價値の根本がちがふ。宣長の歌の平俗はいくばくの同情を强ふるとも到底眞淵の歌の高調には及ばないのである。

人はかういふ。宣長は學者であつて作者ではなかつた。己はかういふ。宣長は作家でなかつたのではない。我に執してしまつて、近くの眼前に横はる眞淵が苦業して積みあげた眞理に接觸し得なかつたのである。『眞淵など今時出たらむには左程にもあるまじき』と內心に自負してしまつて、眞淵の苦業の跡を一たび體驗しようと努めなかつたのである。宣長を目して單に『作家ではなかつた』といふのは、その考察は未だ安易に過ぎよう。かく過去世の事を觀じて、そして己自身をふりかへる時、時に慄然として恐れざることを得ない。（大正七・二）

138　過程の說

妙悟は多言を要せずと謂ふが、それはすでに悟り得たものの立脚點にゐていふ言葉であつて、いまだ迷惑し苦力してゐるものには餘り爲めにならない。爲めにならぬばかりではない。妙悟を得たといふものが常に如是の言を發して取りすましてゐるなら、それは不親切者であり、見得坊であり、さうでなくば嘘衝きであるといふ氣を强ふるものである。なぜかといふに、妙悟は直觀的だと謂つても、忽然として證得すと謂つても、いはゞ結論であり、論の核心であつてみれば、

それに到る道程がなければならぬ筈である。その妙諦獲得の過程を抜きにして、單に『多言を要せず』と云つて除けるのは不親切者でなくて何であらう。但し安價な『苦心談』を鼻の先にぶらさげて横行するものはここには這入らない。これが說の一つである。

古人の簡淨語を早讀して、すぐに『是』もしくは『非』と片付けてしまふ現代人が居たら、これはひどくあぶないに相違ない。なぜかといふに現代びとのかかる論斷は、多くの場合に過程の批判を抜きにしてゐるからである。わが國の歌集で何が一番いゝかと問ふとき、それは萬葉集であると答へるものは、現代歌人の大部分を占めてゐるに相違ない。これはすでに有る古人の結論を是としたのである。しかしその結論に到つた過程を吟味し、すなはち萬葉集の中味を吟味して該結論と眞に共鳴するものは一體どれぐらゐゐるであらう。萬葉集尊重を力說してその言いまだ乾かざるに、萬葉調誹謗の言を放つて平然としてゐるものが相次いで起るはその證である。かかる萬葉尊敬を、『盲目の尊敬』といふ。尊敬言の側に誹謗言を置いて平然としてゐる奇現象はただの偶然とは云はれまい。此が說の二つである。（大正七年八月、合唱のために）

139　釋迢空に與ふ

君が歌百首を發表すると聞いたとき僕は嬉しいと思つた。いよいよ「アララギ」三月號が到來して君の歌を讀んでみて僕は少し殘念である。遠く離れて、君に面と向つて言へないから今夜この手紙を書かうと思つた。

つまり心の持方が少し浮いてゐないか。目が素どほりして行つて居ないか。歌ひたい材料があり餘るほどあつても、棄て去るのが順當だと思はれるのが大分おほい。苦勞して創めた『連作』の意義がだんだん濁つて來ると、あぶないと思つてゐる。

『萬葉調』は僕等同志の歩いて來た道であつて、又歩くべき道である。君の今度の歌は、なんだか細々しく痩せて、少ししやがれた小女（こをんな）のこゑを聞くやうである。僕はもつと圖太（づぶと）いこゑがいいやうに思ふ。おほどかで、ほがらかな、君のいつぞやの歌のやうなのがいゝと思ふ。「アララギ」調は流行したけれども、もとを云へば『擬古』と稱してみんなが默殺してゐたのは君も知つてゐる。そんなことにはかまはんで、忍苦して來たのは君も僕もそれから同志の面々である。と

ころが近ごろまた『萬葉迷執』などの形容詞を僕らの態度に冠らせて呉れる人も出て來てゐる。僕らは實のところまだまだ萬葉に執していゝのである。君のこんどの歌は古語は使つてあつても、萬葉調でないのが大分あると僕は思ふ。古語は使はんでも萬葉調であるがいゝ。それと反對である。

君はいつか『口語的發想』のことを云つたが、あれが一部分濁つて今度の歌に出て居る。リヅムと謂つても『阿房陀羅リヅム』に近きこと、新しき俳句と似てゐるやうであつて、短歌の形式に合はない。短歌では矢張り『遒勁流動リヅム』であるのが本來で、それが『萬葉調』なのである。僕が『形式』のことをいふと、外的、因習と他の人がいふと思ふが、短歌の體に處るのが本來で、短歌として優れて居ればそれが本望であらねばならぬ。これは諦念說どころではなくて、實は精進の到達點であると思つてゐる。短歌が阿房陀羅ぶしに化して何になる。

結句に四三調のものがなかなかある。それがどうも輕薄にひびく。僕は井上通泰さんのやうに、結句は三四調であるべきだなどとは云はんが、今度の歌の結句の四三調には肯んじがたいのがある。われ等の祖先の作に、『雲だちわたる』とか、『打ちてしやまむ』とか、『のどには死なじ』などの遒勁流轉の結句があるのに、君の歌のはなぜさう行かないのであらうか。

クルーベのエトルダの斷岩のやうな、海波圖のやうな、ロダンの考へる人のやうな、レムブラントの自畫像のやうな、あゝいふところに目を据ゑたこともあるが、力及ばずに了つてしまつて今おもふと恥かしい事がある。それゆゑ僕はこれを同志に望んでゐる。同志に望むのは一番自然だと思ふからである。君はさう思はないか。

僕は今二軒長屋のせまいところに住んでゐて、夜になると、來訪者のないときははやく床をのべてその中にもぐつて芭蕉や、「高瀨舟」などを讀んでゐる。壁一重の向う長屋には二夫婦がゐて、若夫婦が二階に寢てゐる。寢がへりするのも手にとるやうにきこえる。寂しい生活をしてゐると、官能が銳敏で鈍麻はしない。かういふときには芭蕉のものは割合にわかる。君のやうに性欲の淡い僧侶のやうな生活を實行してゐる人が、なぜこんどの歌のやうにさうざうしく瘦氣味の歌を作るだらうか。

『○、』などの切目が間々あるが、あれも短歌を三行に書くのと似てゐて少し面白くない。又今度の歌には少し小きざみに過ぎるやうなのが多い。また固有名詞でも、『思案外史』はまだいい。『金太郞』『お久米』『お花』『祐輔』などは、どうも歌調を輕くさせると思ふ。短歌一首は大體連續してゐて、そしてもつと圖太い調べであるのが本來のやうな氣がしてならない。粟粒數よ

りも多い世間並人は、少し古語でも這入つてゐると、すぐ古調とか、擬古調とか、萬葉迷執とか云つてしまふが、あれは僕ら同志の說とはちがふのであつて、僕らの『萬葉調』は言葉の『意味あひ』に止まつてゐず、『語氣』に注意してゐる筈である。君のこのたびの歌にはその『萬葉びとの語氣』と相通ずる點が割合に少いやうな氣がするが、君はどう思ふ。

それから世間びとはかう云ふ。『萬葉集に取るべき點はその精神であつて、その外形ではない』こんな事をいふ。かれ等の謂ふ『精神』といふのは、極めて抽象的な、肉體からふらふらと拔出で、佛壇あたりを迷つてゐる魂魄みたやうなもので、僕らには何の役にも立たぬ筈である。萬葉集の『ことば』を離れて、萬葉びとの『語氣』を離れて、萬葉集の『精神』を云々するのは道ぐさ食ひの說だと思ふ。そして眞淵の『丈夫ぶり』をば僕らは新らしい說として創造すべき筈である。これは君は確かに贊成して呉れる。

以上の言をもつて、『概論』を君に向つて說いたと取られると僕はひどく恥かしいのである。君はこのたび歌でいろいろの新しい『試み』をしてゐる。それは僕の此迄思ひ及ばなかつた諸點に到つてゐる。その努力には感謝してもその實質には贊し難いといふのであつて、僕は近ごろ、「萬葉集檜嬬手」を送つて貰つて君の守部論を讀んだ。そのなかに、『彼の文藝上の作物は、殆

後冬照の出版した橘守部家集に、長歌短歌とともに殘つてゐる。彼の一生の事業の中で、恐らく一番價値の少いのは、此方面の創作であつたのであらう。あれほどに記紀萬葉をはじめ、律文要素のある書物に沒頭してゐた人で、而も其影響が單に、知識或は形式上の遊戲として表れてゐても、内的に具體化せられてゐないのは噓の樣な矛盾である』といふのがある。此は君の守部論中で、僕にとつて、嘗ても現在も一番利いた文章であつた。守部の作歌と君の作歌とを同列に置くことは僕は死すとも能はない。ただ『あれほど記紀萬葉に造詣深い』といふことは君自身に冠らせることは虛僞ではあるまい。そして『一生中一番價値の少い』をば君の作歌に冠らせることが若し虛僞でなかつたら、僕は殘念なのである。

僕は長崎に來て、はじめて「水」の尊さを知つた。雨の降るのをしんから嬉しんだ。これは清淨な水に飽いて春雨の哀れを讃ずる俳諧趣味とはちがふのである。いまは借家の事で苦勞してゐる。それから女中が土地に馴れないので、食べものの事に苦勞してゐる。性欲の方はひと時苦しんだが、今は落著いてしまつてゐる。そして時に狩野享吉先生が面かげに立つたり、森博士作、「雞」が心に浮んだりしていゝ氣持になることもある。

長崎はいゝ處だけれども折々東京に歸つてしまひたくなる事がある。土屋君が諏訪に、君は小

田原に行つて、岡さんが忙しいだらうし、赤彦君と千樫君だけでは手が足りない。けふ畫伯からの書簡を讀んで忝いと思つた。門間君はどうだらうか。中村君も早く癒ればいゝ。以上餘りぶしつけで工合が惡くても君は堪忍するに相違ない。これから僕は寢ようと思ふ。

140 實朝の歌一首

玉くしげ箱根のみうみけけれあれや二くにかけてなかにたゆたふ

玉くしげ箱根のうみはけけれあれやふた山にかけて何かたゆたふ

第一の歌は群書類從本金槐集所載のものであつて、日本歌學全書、覆刻叢書、國民文庫、袖珍文庫の金槐集もこれに從つて居り、予の金槐集私鈔もはじめこれに據つた。第二の歌は貞享四年板行本の金槐集所載のものであつて、塚本氏校訂の有朋堂文庫、佐佐木博士校訂の鎌倉右大臣家集はこれに據つてゐる。但し佐佐木博士校訂のものは、第四句が『二くにかけて』となつてゐるが、予の所持する貞享本には矢張り『ふた山にかけて』となつて居る。それゆゑ佐佐木博士校訂本は假字ちがひなどの訂正は拔きにして、純粹の貞享本金槐集とちがふところがある。

この二つの歌は實朝がかく二ざまに詠んだものか、いづれかが誤寫か、その混合かの三とほりを考へることが出來る。そして、『みうみ』『うみは』のあたりは二樣に詠んだやうにも思へるし、『二くに』『ふた山に』のあたり、『なかに』『なにか』のあたりは、いづれかが誤寫であるやうにも思へる。貞享本を見ると、必ずしも誤寫の可能を否定しがたい感を抱かしめる。併し予はいづれが眞に實朝の作つたものかを極めるよりも、二つとも實朝の作つたものとして解釋して居つても、歌を味ふのに別に障礙にはならない氣がしてゐる。

第一の歌は、『箱根の湖は、心があるからであらう、このやうに二國にまたがつて、いづれに附くともつかず、その中ほどにゐて、ためらつてゐる』といふほどの意味に取る。第二の歌は、『箱根の湖水は、何か心あるからであらう。二つの山にまたがつて、なぜか、ためらつてゐる』ぐらゐに解してゐる。二つともその蒼古な音律のうちに古代民謠の氣分を漂はせてゐる。この『けけれ』は一種の戀愛的情調であつて、古代の住民が山水に魂をふき入れてその戀愛の心を漏したのに似てゐるのであつて、此二首にも實朝の氣禀が分かるとおもふ。『たゆたふ』の語は、天然相の、うごき、漂ふ意からはじまつて、人間心の、ためらふ意に通ふものである。『大船の泊つるとまりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の子ゆゑに』(萬葉卷二)の古人の解を鈔記してみると。『タ

ユタヒは末に猶豫不定とかけり。とやせむ、かくやせむと定得ぬ心なり』（代匠記）『たゆたは、ゆたゆたの略き、ヒは辭にて、タユタフともいへり。さて大船の波にゆらゆらと動くを物思ふ心に譬へたり』（考）『絶多日二は物のゆたゆたと動くを由多布とも由多比ともいふ故、體言に由多比ともいへり。又それに多の言をそへて多由多布、多由多比と云るなり。さてここは上よりの連は船の泊るとまりの、浪のゆたゆたと動く意にて、物念とうけたるは心うち動ぐよしなり』（古義）などである。なほ此語の用語例を少し拾つてみると、解釋がもつと瞭然としてくるとおもふ。雅言集覽の解は第一義に重きをおいて、『ユタノタユタともよみて、ユタユタなり。ヒは詞にて、タユタフとおなじ。ユタユタと動くさまをいふ』とある。

夕星のかゆきかくゆき大船のたゆたふみればなぐさもる心もあらず（萬葉巻二）

常やまず通ひし君が使來ず今はあはじとたゆたひぬらし（萬葉巻四）

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ波にたてる白雲（萬葉巻七）

白妙のわがころもでに露はおきぬ妹にはあはず猶豫にして（萬葉巻十一）

大船のたゆたふ海にいかりおろしいかにしてかも我戀やまむ（萬葉巻十一）

うらぶれて物な思ひそ天雲のたゆたふ心わが思はなくに（萬葉巻十一）

天雲のたゆたひくれば九月の紅葉の山もうつろひにけり（萬葉巻十五）
家にてもたゆたふいのち浪のうへに思ひし居れば奥が知らずも（萬葉巻十七）
ともしびのかぜにたゆたふ見るままにあかで散りなむ花をこそ見れ（和泉式部集）
ことにのみこんとはいひてくらはしの嶺の白雲たゆたひにけり（六帖）
あしびきの山べを見れば白雲の立ゐたゆたふ物をこそ思へ（萬代、雜、二、兼輔）
あさか山朝ゐる雲の風をいたみたゆたふ心われはもたらじ（續後拾遺光孝天皇）

貞享本の『何か』の意は、なに。何しか。何しかも。何とかも。何ぞ。いかなれか。などと通ふ語だと思ふ。親しみのある疑問語である。『何とかも汝のいろせ』『何ぞみましのいろせ』（古事記）などのほか、少し用例を拾ふ。

思ひたえわびにしものをなかなかに奈何か苦しくあひ見そめけむ（萬四）
夏むしを何かいひけむこころからわれもおもひにもえぬべらなり（古戀）
花にあかでなにかへるらむ女郎花おほかる野べにねなましものを（古秋）
はるがすみなにかくすらむさくら花ちるまをだにも見るべきものを（古春）

夢とのみおもひなりにし世のなかをなに今さらに驚かすらむ（拾賀）

東路のさやの中山なかなかになにしか人をおもひそめけむ（古戀）

をしまずばあだなる色もつらからじ何しか花におもひそめけむ（續後春下）

きかずしてもだもあらましを何しかも君がたゞかを人のつげつる（萬葉十三）

これらの語のおのおのの色調を區別して、そして作歌し鑑賞してもよいと思つてゐる。實朝の二つの歌中、『二國』は駿河と相模であるか、『二山』はいづれの山であるか、大正六年の初冬に蘆湖のほとりを歩いてゐたけれども、つい此歌には思及ばずにしまつたのである。誰かついでのをり實地にしらべて教へて呉れるなら忝いと思ふ。（大正七年九月八日）

141 良寛の歌一首

良寛僧が今朝の朝葉菜もて逃ぐる御すがた後の世まで遺らむ

良寛僧が今朝の朝け花もてにぐる御すがた後の世まで遺らむ

第一の歌は、西郡氏の良寛全傳所載のものであつて、予が良寛和歌集私鈔をこしらへた時それ

に據つた。西郡氏の註によると此歌は、良寛が老境に入り、五合庵より出で木村氏の邸内に移つてからの作で、ある秋の朝、朝餉を作らうと思つて近隣の民家の畑から菜葉を盗んで逃げるやうにして禪室にかけ込んだ時作つたものにしてゐる。予は此歌を讀んだ時ひどく感心したのであつて、特にこの歌の『朝菜菜』が面白かつたのである。『朝菜菜』といふ語は餘り熟してはゐないが事實が面白いのみではなく、此語の稚拙なところも氣に入つたのである。此歌は此儘、相馬御風氏編の「良寛和尙詩歌集」に入つてゐる。恐らく西郡氏のものに據つたのであらう。

第二の歌は相馬御風氏の「良寛遺跡めぐり」の、なかにある。「良寛遺跡めぐり」は早稻田文學大正六年十月號分と、相馬氏著「大愚良寛」の中にある。相馬氏が西蒲原郡國上村牧ヶ原の解良氏を訪うて、いろいろ良寛の遺物などを見て居るうちに、「今日莽雜記」といふものを見た。これは良寛と親交のあつた解良叔問翁の子三郎兵衞榮重翁の手記になつたもので、良寛の逸話が書いてある。その中に、

『上人一日山田の驛某が菊の花を折る。主人見とめて花盜人入りしとし其圖を繪に畫きて是に賛せばゆるさんと云ふ。上人筆をとりて良寛僧がけさのあさけ花もてにぐるおんすがた後の世迄殘らむ』

がう書いてある。つまり第一の歌の『朝葉菜もてにぐる』は『朝け花もてにぐる』になつてゐるのである。予は『花もて逃ぐる』の方が調子から云つて本物の樣な氣がした。良寬の此逸話は、「大愚良寬」の逸話の所にも引いてゐる。

大正六年十月に、箱根に滯在中、若し此歌の良寬自筆が現存してゐるなら寫取つてもらひたい趣を相馬氏に願つた。さうすると十一月六日附の返書に接して、相馬氏がわざわざ三島郡島崎村の木村氏に照會されて、良寬自筆の此歌の模寫を送られたのである。良寬の字は眞字の草體くづしであるが今それを活版字にしてみると、『良寬僧加氣散乃安散波那毛傳仁具流（けさのあさはなもてにぐる）おんすがたのちのよまでのこらむ』である。そして『安散波那』をば『朝葉菜』と讀んだのは西郡氏の讀錯であらうといふ相馬氏の意見であつた。これで見ると「今日萃雜記」中の『今朝の朝け』は『今朝の朝』になつてゐる。此は良寬自身二とほりに云つたやうにも思ふ。『波那』は『葉菜』でなくて、『花』の意であることは先づ先づ間違はない。箱根の湯を浴みて歸京すると、急に思ひまうけぬ長崎に來ることになつて、相馬氏の返書に接した頃はひどく忙しがつてゐた。そこで相馬氏の返書も荷物の中に押込んだ儘であわたゞしく東京を立つた。今夜此文を書きながら相馬氏に感謝してゐる。相馬氏に敎を乞うてから今夜まで滿一年を經過したのである。

以上のやうな經過によつて『朝葉菜』は『朝花』になり、野菜が菊花になつた。此は事實に相違ない。事實であるが、予は『朝葉菜』に未練が殘つてゐる。菜盜みは心にくいけれども、花盜人の畫贊では少しく殘念である。予は『朝葉菜』として此歌を味ひたいのであるのを予の偏癖として許すがよい。（十月十四日夜）

獨語と論爭

若山牧水氏の『赤光に就いて』を讀む

○

若山牧水氏は雜誌創作大正三年一月號誌上に、『赤光に就いて』といふ文章を書いてゐる。そして、

齋藤茂吉君の「赤光」を讀んで、その讀後感を可なり詳しく書いてみたのであつた。そこへ同君の「さすらひを讀みて」といふ一文が屆いたので、それを讀んでみたところ、前に私の書いた「赤光」評を發表するのがバカ臭くなつたから、やめることにした。

から云つてゐる。つまり、尾山篤二郎氏家集「さすらひ」を予が評した一文章が屆かなかつたならば、「赤光」評を發表するつもりであつたらしい。そして予の「さすらひ」評を讀むに及んで、それを『發表するのがバカ臭くなつた』のである。この實行を轉換させた心的過程を直觀すると、

予にはひどくおもしろいのである。いつたい、『バカ臭い』といふ語を聞くと、此語はどういふ事を意味して居るかゞわかる。そして此語を發せむとする際の心の色合をも感得しうる。心の張つてゐる、心の熱してゐる者は決して斯る語を發しない。自己の心熱に燃えてゐる者は、かゝる中途半端な投遣り乃至あきらめの語を發しない。

若山氏は「赤光」評を書いて其を世に發表しようとして居た。そして其志が『馬鹿臭い』といふ語を發して忽ち動搖したのである。予を以て見れば、かゝる浮薄にして間に合せの意志は輕蔑すべきものである。從つて予は斯る意志から出發した歌論乃至歌集評を尊敬しない。予は若山氏がかゝる意志によつて歌を論じ歌集を評してゐる事をいま知つたとゝもに、予の微小なる歌集が若山氏から斯る間に合せの意志によつて批評せられ其批評が發表せられなかつた事を氣持よくおもふ。

續いて若山氏は『齋藤茂吉君に一言しておく』と云つて、次のやうなことを云ふ。『君の牧水嫌ひも執念深いもので、アララギ誌上殆ど二年越しずゐぶん聞きづらいいやみやら罵倒やらが續いて來たやうである。』かう云つてゐる。『牧水嫌ひ』は、『牧水の歌の一部を嫌ふ』と云つた方がよい。予は嘗て雜誌アララギの歌壇月評の筆者として、又若山氏歌集「死か藝術か」の合評者

として、まづい歌を難じ、佳き歌を褒めたのである。さういふ予の言は短歌に對する予の信念の吐露であつて、利害打算上の私信ではない。若山氏は彼の歌の一部に對する予の讃言の如きは寧ろ當然であるといふが如き顔付をし、そ知らぬ顔をしながら、『聞きづらいいやみ』とか、『おしやべり』とか云つてゐるのは餘り下等な自負である。予は今若山氏を自らの競爭者とする程予の心は亂れてゐない。今までとても若山氏ぐらゐを目當にして進んで來ては居ない。茂吉は牧水を四時氣にして暗に競走しようとするのであらう位に感ずるならば其は淺薄な自惚心の所爲に他ならない。予の歌論は力の弱いものかも知れん。併し予の歌論は止むべからざる内部衝迫から出でたものであつて、そして若山氏の歌をのみ唯一の對象として論じて居る程予自身の内部衝迫が小さくはない。然るに若山氏は予の歌論を目して單に『おしやべり』だと云つた。予は重ねて云つておく。予の歌論は不敏といへども牧水輩に聽かせむがために書いてゐるのではない。『今度のさすらひ評も見やうによつては折からのさすらひをだしにして私に對するあてこすりを書かれたものだともとられる』から若山氏は續いていふ。予の直觀は果して誤つてゐない。一體『だし』とは何だ。『あてこすり』とは何だ。予の『さすらひ評』に於て牧水の名を出したのは二ヶ所であつて、そして牧水の名を擧げて明言してある。かの評の全篇は尾山氏の歌が主眼になつてゐるの

に對して、「さすらひ」を從屬的にして、いはゆる『だし』に使つて、而して牧水の歌を論じたと、若山氏は如何なる點から知り得たか。かゝる不純な看方をする者は現世に稀有であつて、又かくのごとく自惚强き者も現世に稀有であることを知つた。予が「さすらひ」を評するに當つては、牧水などは殆ど眼中になかつたのである。然るに若山氏は『さすらひ評』を讀んで、自らの事を『あてこすられ』たと思つてゐる。これぐらゐ御氣の毒さまの事が世にまたとあらうか。

『歌といふものにたいへんな知識確信及び忠實を持つて居られる君から色々云つていたゞく事は誠にありがたい事とも思ふ。然し君のおつしやる事は大體に於て私にも夙に解つてゐた事のみのやうに思はれる。若し私の希望が許さるゝならば暫くこのまゝ私を私の自由に任しておいてほしい事であるのだ』と次ぎにいふ。知識確信忠實などいふ語を予のうへに冠らせるのは隨意であるが、勉强ざかりの予にはさういふことは餘り利かない。又予の云ふ事の如きはとほの昔より若山氏に分かり切つて居るといふ言も隨意であるが、併し予の發表する歌論は、若山氏に宛てた私信ではないのであつて、若山氏を啓發し、若山氏に忠義を盡し、乃至怨嫉上罵倒しようと欲して書いてゐるのではない。これを天下に公表するに際して、縱しんば予の言陳腐にして若山氏にすでに無用であらうとも、默れと喝し去るほど未だ彼は多力者でない。然し予の評言に對して其短

歌上信念を以て猛然として肉迫し來る、それは是である。短歌上信念は毫末も吐露することなく、一種の『いやみ』を提げ來つて、『これで帳消しだ』と稱するに至つては其態度を怪まざることを得ない。一體若山氏は、歌の批評をば一種の道具と心得てゐるらしい。一種の進物ぐらゐに心得てゐるらしい。娑婆界に有名になる一の道具ぐらゐに心得てゐるらしい。そこが予の見とちがふ。それゆゑに、『私の希望が許さるゝならば私の自由に任しておいて』などの言も、實は利かないのである。若山氏は予の言を目して暴君のやうな態度で拘束し命令するかのやうに取るが、然しさうびくびくせんでもよいのであつて、予は若山氏の歌のみを相手にするやうな、そんな中途にはぶらついて居ないのである。若山氏の自由にするがいゝ。

『若しまた君がその私を見逃すに耐へかね、和歌忠勤軍か何かの大御旗を押し立てて私を叩きつぶさうとなさるなら、其は君の隨意である』から若山氏はいふ。いかにも予の隨意ではあるが、予はかかる事は夢想だもしたことはない。思うても見よ。予が牧水ぐらゐを叩きつぶして何するものぞ。また問ふに落ちずして語るに落つ。和歌忠勤軍の大將には若山氏が適當だといふことであらう。いかんとなればそれには家來も要るし、旗持も提灯持も要るからである。

『要するに個人同志の君と私とは全然別物であつて、おつしやる君の方でも云ひばえがあるま

いし、聞かされてゐる私の方でもくだらぬ煩瑣である』かういふが、其は論無しで、同じ巡禮でも若山氏と予とは同行の二人ではない。そこで予は玆で明かに、『君は僕の後を步むやうな事は斷じてあるな。僕も君の後へは斷じて步まない』とかう云つて置く。ただ今後或は幾たびも若山氏の歌を評するかも知れない。然し其は云ひばえの有無とも煩瑣感の有無とも無關係なのである。予は若山氏一人ぐらゐを眼中に置いて歌論をして居るのだと思ふと間違ふ。

あり態に云へば、予の如き者も時として憤怒の心に住む事がある。一見謙遜の假面をかぶり乍ら實は傲慢人の傍若無人の有樣に對するに及んで憤怒の心に住むことがある。若山氏は自らの歌を比喩を以て說明して『溪や溝におちこんでそのまま步いて行く私からは斷えず雫が落ちてゐる。君はその雫のみを見て私に喰つてかかつてゐらつしやる』と云つてゐる。溝水でびしよ濡れになつた、臭氣ぷんぷんな步行者は餘り體裁のいゝものではない。無論電車にさへ乘る資格が無い。かかる步行者はみづから恥づるがよい。然るに臭氣ぷんぷんたる溝水の雫歌が予より難ぜられて癪に觸つた揚句に、『聞きづらい厭味』とか『おしやべり』とか『罵倒』とかいふのは、謙遜の假面でなくて何であるか、それは未だよい。他人の歌の批評を讀んで自らの歌が罵倒されたと感じて癪に觸るのは、謙遜の假面でなくて何であるか。尾山氏は書牘を以て歌集「さすらひ」の評

を予に求めた。そして雜誌創作に掲載すると云つた。そこで予は評言約七頁餘を書き、そして念のため創作の發行人たる若山氏の意嚮をただした。さうすると、『七頁とは大抵でありませんでしたね。早速送つて頂きたい。尾山君も喜ぶことでせう』といふ意味の返詞が來た。そこで予は歌評を送つたのである。予には雜誌アララギがあつて、論を公表するのに創作の恩賴をかうむる必要を見ないのである。そんなに「さすらひ」をだしにしてあてこすられたと感じた汚はしい予の歌評言をなぜ返送しなかつたか。ゆくりなき受働的言として如上の感想を書きとどめておく。

（大正二年十二月三十日）

澤氏の歌、沼波氏の歌評

1　偶言

二月十九日の時事新報文藝欄で、沼波瓊音氏は、澤弌氏の歌に對する『余をして狂喜せしめたる一歌人』といふ感想を公にし、『私はこれを讀んで如何に共鳴し悦喜し敬慕したら醉つた樣に狂つた樣に私はなつた』と云つた。予は現世で短歌を鑑賞する人々の中に沼波氏の如き、予等と全く異る雰圍氣の中に住む人のゐることを知つていたく驚いた。予はすなはち澤氏の歌に對する予の信念を吐露せざるべからざる一種の衝迫を感ずる。

沼波氏は澤氏の歌に就いて、『生活と歌と一髮の隔なくピタリと一つになつて居る』といつてゐるが、予を以て見れば澤氏の歌の如きは家常茶飯の單なる輪廓の報告に過ぎないのであつて、毫末も『いのち』の滲透がない。正岡子規が痛切に輕蔑した雜報歌であつて、決して畢竟の義に於

ける生活の歌ではない。加ふるに巫山戯まはつて居り、然かも氣取つて居り、得意で居り、安つぽい安心に住してゐる。職人の駄洒落に比すべく、地口に比すべく、低級なる隱居藝に比すべく、苟も名人の域に到達せんとし『いのちの藝術』を唱道する我等にとつては澤氏の歌の如きは腑拔けからくり土泥にひとしいのであつて、從つて我等が約束する標準を以てすれば澤氏の歌は一首も予等の所謂『歌』ではない。澤氏の作歌態度をもつて觀れば氏は著しく低級なディレッタントである。

『いそのかみ春木町にてあがなひし我が聽診器神さびにけり』の、『いその上』は死んでゐる。『神さびにけり』は巫山戯て居る。駄洒落である。フモールなどの域に達するには其處にまだまだ遠い道程があつて、中ぶらりんに彷徨してゐるが、作者自身は得意で氣取つて納まり返つて居る。作者も、而して又『いそのかみや神さび等の古語が如何にもをかしく嬉しく用ひられて居る』と云つた沼波氏も、短歌の言語感覺 Sprachgefühl と抱合融化する點に於て、斯程迄予等と違つて居るかと思ふと、すでに無緣の有情なることを染々と感ぜざることを得ない。『大君の大みたからの一人なる我を驚かし自働車の行く』の歌で、『大君の大御寶』とは餘り戯れてゐる。不眞面目である。それに一種の穿ちの氣取があるために厭味に陷つてしまつてゐる。これに比す

るのは勿體ないが、萬葉歌人が『み民われ生ける驗あり』と歌へば其處に無量の力があり命の直接性がある。澤氏は皮肉的に旨く遣つて除けたつもりだらうが、苟も『いのち』から出發しようとする我等は、澤氏の歌に見るやうな巫山戲忠にこびり付いてゐる樣では決して『忠』の深點に觸れることが出來ないと信ずる。近ごろ獨逸の詩人デエメルは軍歌を作つて“Opfermut”と云つた。予はこれを『犧牲精進』と譯してゐるが、かかる態度でなければ『大君の』などと云ふ資格はないと信ずる。

『縮刷の徒然草がポケツトにあれど出しかね病歷をきく』作者はそんなに徒然草なんか讀みたいのか、こんな態度で病歷をきくのか。それはまだよい。表現に當つて何處か駄洒落の臭味を出すからして、輕浮讀むに堪へざるものになるのである。そして此等が沼波氏のいはゆる『生活の歌』といふのであるから、『生活』の意義も墮落したのである。橘曙覽の獨樂吟もすでにある。竹の里人の歌も石川啄木の歌もある。是等の歌と澤氏の歌との藝術上價値の鑑別ぐらゐは沼波氏とても少しは養生して感得する方がいゝと思ふ。

『浪花節趣味の程度を診察しその病人をいやになりぬる』この作者の趣味とは床屋の小僧の一寸川柳でもひねらうといふ位の程度のものであるらしい。それゆゑ通人ぶつて浪花節などを輕蔑

し、そんなかかりあひから浪花節の事をいふ病者まで輕蔑するに至るのである。『趣味の程度を診察し』に厭味を感ずるがよいとおもふ。『我が門の市をなす日は蜀紅の錦著せんと妻をなだむる』いかに女人が癡愚で見得坊であらうとも、作者の氣取方もあまりひどい。その言振りの下等さを見るがいゝ。

沼波瓊音氏は予の尊敬する長塚節氏の藝術の同情者であることを聞いた時予は嬉しいと思つた。然るに沼波氏は突如として澤氏の歌などを賞讃してゐる。予は機を見て、沼波氏は長塚氏の藝術（主として短歌）の如何なる點に同情してゐるかを聽かむと欲する。予は一心ならざる態度を輕蔑するからである。（大正四年二月、時事新報）

2　後　記

數年經つたこのごろ、自分の書いた以上のやうな文章を讀むと少し變な氣がする。澤氏の歌を今讀んでみれば、ただおのづから柳樽、狂歌、くだつて坂井氏の『へなづち』、池田氏の『へなぶり』あたりを聯想すべき性質のものであつて、さも重大事件でもあるかのやうに、心を興奮せ

しめて、そして『短歌』として論じようとしたのが自分ながら變な氣がする。おもふに博大な心の佐佐木氏が澤氏の歌を認容して雜誌心の花の優處にこれを掲げゐること、沼波氏がひどく狂喜してしまつて、萬葉の精神を體得した現世にも稀な歌人と公言したこと。同時に萬葉の歌も良寛、曙覽、長塚節の歌と澤氏の歌とを混同してただ狂喜したこと。それらが予の疳癪だまに觸つたものと見える。今ならば默つてゐてもよい。併し默つてゐなくともよいといふ氣は今でもある。

今でも一寸言つて置きたいのは、予が澤氏の歌、『縮刷の徒然草がポケットにあれど出しかね病歴をきく』を難じた時、曙覽、竹の里人あたりの歌と價値の鑑別が必要だといふやうな意味のことを云つた。さうすると沼波氏は、それに答へてかういつてゐる。

齋藤氏が引合に出した曙覽の、『たのしみはいやなる人の來りしが長くも居らで歸りけゝ時』『生れつき拙き人にまじらへばわかれて後もこゝちあしきなり』と同じ心持なり云々。

つまり沼波氏は歌の價値をきめるのに、歌のなかの意味即ち概念だけを抽象して來て、それをいろいろ竝べて論ずるのである。しかし短歌の價値はそんな概念的中味の奈何によるのではなくて、作者生命の滲透奈何によること、そしてそれが一首の調べとなつて讀者に迫つてくるもので、なくてはならない。沼波氏はさういふ大切な問題、微妙な問題にはちつとも顧慮してゐないやう

に見える。そして、『同じ心持なり』ですましてゐる。縱しんば同じ心持でも價値がちがふ。魄力の大小がちがふ。死んでゐるか活きてゐるかがちがふ。曙覽のこの二首は決して佳作ではない。安易境に辷つた缺點はあるが、それでも澤氏の歌と同列に置くべきものではない。一天爾遠波、一動詞でもその行りかた、心のするかたが違つてゐる。此等の差別點に予の論點が存するといふことを理解しなければ、予の言は徒なる怒號言として響くに相違ない。（大正六年四月）

3　沼波瓊音氏に言ふ

このたびの予の言は、澤氏の歌と澤氏の歌に對する貴君の評論と予に對する貴君の言論とに就きて、貴君に向つて物言ふのである（直接澤氏に對つて物言ふのではない）ことを言のはじめにことわつて置くのは予の內面上の責任である事を感ずる。『予に對する貴君の言論』とは俳味三月號所載の『緊張の上の笑』と時事新報所載『齋藤氏に答ふ』を指すのである。その言論に於て貴君は『あなた』と二人稱を用ゐて予に物言つてゐるが、それは甚だ一小部分で、他は全く餘事の饒舌に過ぎない。予は澤氏の歌と澤氏の歌に對する貴君の評論を對象として論じて居るのに向

つて、『その論は疵の入つた硝子のやうにギスギスして不愉快な鋭さに充ちて居た。それは廸も眞の藝術の人の筆とは思はれぬものであつた。何よりも先きにこれでは齋藤氏の人格にかゝはると思つた』などと云つたり、予の辯護をしたり、新潮記者がどうだの、井泉水氏がどうだの、又貴君が刑事巡査から泥棒と思はれて留置所に抛り込まれたと云つたり、又『墓の屍よりも醜きは人を罵る人なり』と云つたり、短歌の議論をしてゐるのに芭蕉の句を竝べたり、『堅いあなたには川柳はわからぬ筈です』などと納まりかへつたりなどしてゐる。斯る言に對してわざわざ物言ふ必要がないから、予の言は直ちに短歌論に進み折に觸れて其等の件に答へて行く。たゞ、貴君ぐらゐな程度にゐて藝術を云々するともがらから、『廸も眞の藝術の人』でないと思はれたり、予の人格を云々されたりする事は、正に當然のことであつて予の本望とする處であることを明言して置く。

○

同一の歌の評の繰返になることを厭ひ、かつて予が貴君の言（主に時事新報所載、齋藤氏に答ふ參照）に答へる積りで書いて置いた一文をそのまま此パラグラフに載せようと思ふ。（四月一日記）

▲前日の予の『沼波瓊音氏に』（時事新報）といふ題は原稿では『偶言』といふのであつた事、

從つて言の體は獨語の色調を帶びたものであつた事を明白にして置く。今回は直接貴君に對つて物言ふのである。予の前言の『いかに歌人が癡愚で見得坊であらうとも』は『いかに女人が』の誤植である事、女人には英獨あたりの國語なら定冠詞の附く場合であることを斷つて置く。

▲第一。貴君に從へば予は堅き人だ相である。そして其堅さでは澤氏の歌は解らないのだ相である。そして澤氏の歌の中の『笑』は日本特有のもので緊張を經たる上の笑だ相である。大に恐縮に存ずるが貴君の所謂堅い男の予も、澤氏の歌を讀んで其の歌に少しも『いのち』の滲徹が無く躍動が無く直接性が無いと解し得たことを記銘したまへ。又その『笑』とか謂ふものも全く意義なき惡巫山戲で、生命に根ざさない鼻の尖の生覺の笑に過ぎなく現世相を無理に構へて誇張した駄洒落に過ぎなく、悲痛な生からの泣笑でも哄笑でも嘲笑でもないと解し得た事を記銘したまへ。而して貴君の所謂堅い男の予も萬葉集卷十六の歌石川啄木の歌良寛の歌曙覽の歌集の中に於て眞に『いのち』からの『笑』を洞味し來つたといふ事と、藝術的價値の點に於て澤氏の歌などと截然區別し來つたといふ事を記銘したまへ。而して澤氏の歌は齋藤氏などには解るものかと云つた貴君が『余は「士」をも解す而して又澤氏の歌を解し得る者也』と納まり返つた事を忘却し給ふな。なぜかと云ふに、實は近頃になつて始めて澤氏の歌に注意して狂喜したといふ如き歌壇

の領域と歴史とに通ぜず、短歌の制作に於て「俳味」所載の程度のものを公表して喜んでゐる貴君と眞に歌論の勝負しようなどとは最早予にとつて一種の恥辱を感ずるのであるが、同年代の此世に貴君と予の如く全く異つた立脚點に立つて短歌を觀る者の居るといふ事は短歌學史上の一小材料であり又將來に於てゆくりなくも再び此問題に逢著せん曉に言を左右に托する事を許さないからである。

▲第二。『そもそも齋藤氏は澤氏の歌の文字上の意味をも解し居らず』とは大なる恐縮に値する。予は不敏といへども澤氏の歌の如きは（言葉の曖昧な點は除いても）予を待つ迄もなく文字上の意味位は誰にでも出來ると思つて居た。其故に前言には少しも澤氏の歌の解釋はしなかつた。『大君の大みたからの一人なる我を驚かし自働車の行く』の歌が『自働車に驚かされし憤り』を歌つたものである位は予にも分かると思ふが、自働車に喫驚し、『氣を附けやがれ江戸つ子だぞ』程の緊張もない煮え切らない諦めの氣持で、天皇の赤子だなんどと云つたつて始まるまい。貴君の報知に據ると某貧乏出版業者が途中でフィと可笑しくなつた相だが、それには自然性と直接性がある。『大君』の歌の場合は餘程經つてからの爲方なしの言葉である。『輕き笑もて包みたるなり』と貴君は辯護してゐるが、輕き笑とは老耄隱居の精の拔けた爲方なしのこじつけの笑たんだらう。

一首の調べがだらだらと延びて氣を付けやがれ程もピンと來ない。技巧の點から云つても如何にも間が抜けて、命と言語との間にちつとも交渉がない下品の歌である。前言に予は『忠』云々と言つたのは一面の信念と而して一面のイロニーであつたのだ。貴君には分かるまい。

なほ前言を證する爲め一言加へて置きたい。貴君は予を目して『笑』が理解出來ないなどと暗に嘲笑してゐるが、それは貴君の謂ゆる『笑』などは全く眼中に置かないのであるが、全然『笑』の本質を否定した例は無い。それゆゑに第一回の言に於て澤氏の歌を評した時に予は、『フモールなどの域に到るにはそこにまだまだ遠い道程があつて中ぶらりんに彷徨して居るのに作者は得意で云々』と說明さへ加へてゐる。貴君は予の此一文すら理解出來ないほど、鈍なのか淺薄なのか不用意なのか血眼になつて予の文を精讀も爲なかつたのかいづれかであらう。ゆゑ奈何と云ふに、予が『フモールなど』の『など』と複數の如き語を用ゐて、ユーモア等の眞の義の滑稽を肯定して論じてゐるのに向つて、『あなたは堅い人なり』などは虚空に向つて矢を放つ間抜さであるからである。

▲『縮刷の徒然草がポケットにあれど出し兼ね病歴をきく』の歌に就いて予が『そんな態度で病歴をきくのか』と云つたのに對し貴君は『いやいやながら病歴を聞く態度がひどく癪にお觸りのや

うですが、あなたには患者に對して全く好惡の情がありませんか。若しさうなればあなたは人間以上の方です。私どもには好惡の情があります』などと云つてゐる。人間に對する好惡の有無などよりも、予の問題にしたのは、此歌に表はれてゐるやうな中途半ぱな、生命の集中なき生命に根ざさない上の空の申訣の行動乃至言振（卽ち言語を以て表はすべき短歌）が果して眞に藝術と目し得るだけの價値ありや否やの點であつたのだ。貴君は『僞らざる生活吟』などと云つて、斯く事柄の輪廓を報告すればいゝと思つてゐるが、眞に自己を凝視し『いのち』に愛著し眞にそれを表現せんとする意力ある者にとつては、斯る『いのち』に根ざさない事柄の如きは恥ぢ悲しみ謙だらんと努力するに相違ない。態々三十一字に竝べて得意でゐるやうな虛慢の態度に出ない筈である。以上は作歌態度の根本問題に觸れてゐるのである。次に既成の此歌を觀るに、言語が粗慢で調べが卑俗で到底力ある藝術と認めることの出來ない代物である。『あれど出し兼ね』あたりの卑俗臭味が到底貴君には理解が出來ないのである。それから貴君は『あなたの御論で見るとあなたは徒然草の價値を御認めにならぬらしい。さもあるべき事と思ひます』と云ふ。人麿やミケランゼロ等の藝術を敬禮してゐる予に取ては、徒然草の如きは屁のやうなものである。さもあるべき事と思ふなら默するのが順當である。それから睹覽の獨樂吟の二首を引いてゐるが、貴君

の引いた二首は獨樂吟中でも低級な部類の歌である事を明言して置く。それでも澤氏の歌などよりは純一である。まだ生命の直接性が幾分表はれてゐる。ただ生命の集中が足りないからいけないのだ。それから貴君の歌評を所謂『知名の文壇の人』が贊成したと貴君が特に記してゐるが、そんな事は少しも積極的價値のないものだと知り給へ。（その人の歌論が公表せられざる限り）。知名とは一體何を意味するのか。平賀元義は生前決して一般的に知名では無かつた。貴君が大に同情してゐる長塚氏は歌人として決して貴君には知名で無かつたではないか。

▲『浪花節趣味の程度を診察しその病人をいやになりぬる』の意味を予は全く穿違へた相で復恐縮する。一體第一句で『浪花節』と切つて小休止を置く句法を作者も貴君も知らないのだ。其故に第一句は甚だ曖昧になつたのだ。此句の儘で『浪花節』とは病人が浪花節語か浪花節好の素人かの差別を貴君は解明し得るか。『趣味の程度を診察し』などの下品に至つては二たび云ふを欲しない。『我が門の市をなす日は蜀紅の錦著せんと妻をなだむる』の歌で、患者が多くて嬉しければ何故率直に純一に嬉しいと歌はないのであるか。貧苦中の吟ならば縱し滑稽でも中心に悲痛の響がなければならない。又眞に『僞らざる生活吟』ならば自づからにして其響が出る筈である。然るに此歌の何處にも全く命の滲徹の無いのは貴君の所謂『戲言』に墮してゐるからである。『戲

言』は到底優れた藝術ではない。問ふに落ちず、語るに落つとは貴君のことである。『門の市をなす』とか『蜀紅の錦』とかの漢熟語などを持つて來て得意でゐるのは言語に紅血を流通せしめ言語と魂と合體せんとする意力がなく、上の空で言葉を並べてゐる輩である。妻をなだめる隙あらば何故直ちに妻を抱かないか。善い加減になだめられてほくほくしてゐる樣な女人なるが故に予は『いかに女人が癡愚で見得坊であらうとも作者の氣取方も餘りひどい』と評したのである。解せりや。

▲第三。貴君が單獨に澤氏の歌に狂喜し陶醉し其の小天地に蹲踞し安眠してゐるのならば未だ其の稚や愛するに足る。然るに貴君は澤氏の歌を他の優秀なる歌と同居せしめ『氏の作歌は僞らざる生活吟である。萬葉の尊いのも良寬や曙覽の歌の妙味も又一茶の夥しい句の味も皆是れ僞らざる生活吟であるからである。萬葉の精神卽ち眞の歌の精神を體得した歌人は少い。それを體得すれば其刹那からどうしても僞らざる生活吟が生れねばならぬ。澤氏も必ず斯くして斯くなつたのであらう』などと云ふに至つては、貴君は萬葉や良寬や曙覽の歌に大なる冒瀆を加へた事を覺悟しなければならない。

次に予は直接貴君の人格そのものに對して『愚劣なる奴輩』と公言した事はない。貴君の短歌

に對する鑑賞眼（或は短歌鑑賞者としての貴君の人格のあらはれ）の淺薄不徹底を輕蔑したのである。砂礫と珠玉とを混同する不用意不眞面目を笑つたのである。又貴君は澤氏の人格の高さを云ひ醫として優秀なる技倆を有する事を云つたが、斯ることは直接予の歌論に無關係である。業は作者を賞むといふ俚諺を引いて鷗外先生が論じたのはすでに二十餘年の過去であることを知りたまへ。予は澤氏の短歌を對象として論じて居るのであり、或は短歌作者としての澤氏の人格のあらはれを論じてゐるのである。又帝國文學記者が貴君に賛成しようとしまいと「心の花」が賣れようと賣れまいと元富士見署の巡査が貴君を泥棒と思はうと思ふまいと、斯る事は澤氏の歌に對する予の信念には無關係である。貴重なる紙面を塞ぐを恐れ此問題はこれを以て打切とする。

終り。（三月四日夜）

〇

澤氏の歌に對する予の意見の大體結論は時事紙上の第一回言で既に云うた。其れを貴君は單なる罵倒だとしてゐる。於玆予はなほ數首に就いて予の意見を附記して置く。これは一面は予みづからの要求である。

風月の鶯餅をならべたる如き山あり湖の上

貴君に從へば此歌は獨特なる敍景歌だ相である。又山河に對する笑があつて、俳人一茶がやつた樣に自然を人間に引包んだ見方の歌だ相である。予の意見は違ふ。此歌は上の空の歌である。虛飾な穉がりの歌である。第一に眞に天然を見つめ天然と呼吸を等しうして、作歌衝動の湧いた場合に『風月の鶯餅』などの聯想が起るのは虛僞である。若し起るとしても餘程あとから起るのであつて恐らく作者も作歌當時に思付いた所謂得意な句なのであらうと思はれる。縱し直ぐ起つた聯想だとしても其れは低級である。『いのち』の直接性なき上の空のフワンと濟ました心の動であるからである。一體『如き山あり湖の上』ぐらゐで、どれだけ作者の命從つて自然の命が表はされてゐると思ふか。眞に天然に向つて自己を投入し生命合體の境に到る者ならば決して單に山を鶯餅に比較して興がり笑つてなどゐよう筈は無い。必ず緊張した調べの天然直寫の藝術を生むに相違ない。貴君はよく『日本特有の笑』だとか『緊張の上の笑』などと謂つて、其等の語の內容として澤氏の是等の歌をも盛つてゐるが、眞に左樣だとせば、貴君の『笑』などいふものは甚だ下劣な心的機轉であつて、決して一首の生命ある短歌をも生むことの出來ないものである。かかる低級な歌をも齋藤氏には理解が出來ないなどと云つて宗匠ぶるのは僭越であると思ひたまへ。なぜかといふに已に十年の過去に於て予の歌が斯る惡癖に陷り苦惱に苦惱を經來つた、その

予に向つて理解が出來ないなどといふのは僭越であり生意氣であるといふのである。

襟のごと重なり合へる山と山の内ふところにねむる古里

谷そこの水ぐるま小屋人といふもの汽車に乘り家の上を行く

『ふところ』や『ねむる』や『襟のごと』などと一寸氣取つて照應などさせて一種の比喩を製造したのであるが、お手際がなかなか見事である。から云つても予が賞めたと思ふと間違ふ。予はこんなからくりの歌に生命は全然認めないのだ。こんな歌に狂喜などする貴君が本當に此世に生きてゐるのだから奇妙だ。

第二の歌の『小屋』と第二句で小休止を置いたのは下手である。『人といふもの』などの氣取方はひどい。總じて作者も貴君もこの『いふもの』が難有いのであらう。生覺や形式などにこびり附いて、得意で居るのだからさもあるべきこと(貴君の言を借る)と思ふ。此歌の表はし方は非常に下手である。比較的平明自然にゆくべき所謂敍景の歌ですら此とほりである。

○

小さけれどかたき信仰むねに持つ櫻ン坊の如きひとかな

貴君が『櫻ン坊とは何等の好謔』と云つたのだ。成程床屋の小僧にでも云はせたら、中に小さ

ぎないのだ。歌などを作る者は大抵かかる邪道は一度は通つて來る。これで得意で居ればそれで終るのである。今のところ這般の消息は全く貴君には解るまい。それほど貴君は短歌鑑賞者として短歌作者としても低級なのである。予の見によれば此歌は極めて淺はかな事柄の關聯から來る平凡滑稽と語呂の上の興がりに過ぎないのであつて、毫末も一定の個人の生命が表はれてゐないのである。貴君の謂ふ好謔などいふものをば絶對に予は輕蔑すると思ひ給へ。

い堅い『タネ』がある、實によく穿つてゐるねなどといふかも知れない。然し此歌は駄洒落に過

毛氈の燃ゆる棧敷にならびけりわれこその女睨み合ひして

これが女に對する嘲笑吟だ相である。女人を嘲笑するその事に對しては予は言はぬ。ただその言振が如何にも得意で氣取つてゐて大に穿つて女人を嘲笑し得た積だらうが、こんな歌では却て女人から嘲笑されるに極つてゐる。こんな淺薄な觀方と粗末な言語の歌では到底洗練された裝飾を有つてゐる女人の敵ではないからである。自分の妻に向つて『蜀紅の錦きせん』などとなだめる程の者が、こんな事いふのは廢めるがよい。又貴君に從へば作者は『虛榮でくるまれてツンと濟まして居る女』が嫌ひだ相であるが、貴君には此作者のツンと濟ましかへつて居る臭味の程度が理解が出來ないで矢鱈に狂喜などばかりして居るのである。狂喜と理解とは必ずしも竝行して

ゆくものではない。

○

巫山戯たりつゝんと納まり返つたりしてゐる歌のみに就いて言ふのは氣の毒であるかも知れない。少しく悲痛嚴肅な事柄を歌つたものを吟味して見る。

死なであれ我がさびしさは忍ばむも兒等あはれなり死なであれ妹

今までの歌に比べると比較的に佳い。何處かに自然な命の流動があるからである。然し例によつて一首がだらだらと延びて無理に作爲したところが難點である。『我がさびしさは忍ばんも』などの無理な臭い餘裕は出來ないのが自然だ。『死なであれ』で澤山なのだ。生命の直接性といふ事を作者も貴君も到底理解が出來まい。

我が手取り額にいただき目禮し而して逝きぬ水無月五日

これが自分の妻の死んだ時悲しみ詠める歌である。生命のリヅムとは斯んなオツチヨコチヨイなものではあるまい。阿呆陀羅節ででもあればまだ承知が出來る。苟もリヅムを尊重し生命直寫の藝術に進向せんとする者には到底讀むに堪へられない代物である。

なき妻に身を殺しても育てんと誓ひし兒なり死なさじ死なさじ

これが唯一人の男の子の大病に罹つた時の吟である。『死なさじ死なさじ』と大切な結句で繰返したのは、東西東西といふやうなもので少しも悲痛の響がない。眞に病兒が可哀いなら、こんなだらだらと間の延びた物の言ひやうは出來ない筈だ。生命のひらめきがある筈だ。言語の冴えがある筈だ。調の緊張がある筈だ。

○

もう澤氏の歌のことを書くのを止める。眞を言へば澤氏の歌の如きは今まで予の心を少しも動搖せしめなかつたものである。又いくら言つたところで貴君と予の如く全く違つた線上に居て短歌を見てゐる以上、眞に心の融合するといふ事は難事であらう。貴君の思ふが儘に行きたまへ。直ちにさよならと言はうと思ふが、序に言ふ事がある。

第一。予がそもそも貴君の歌論に向つて物言つた動機は、貴君が長塚節氏の藝術（貴君の言に從へば「土」）の同情者である事を知つたからであつた。貴君は「土」を讀んで一週間も精進したと言つた。予は感動した。精進といへば恐らく肉食交合をも禁斷したことであらう。それ程熱心ならば長塚氏の短歌をも必ず崇敬してゐるに相違ないと思つた。なぜかと云ふに貴君は短歌をも詠んで其れを俳味紙上で發表して居るくらゐの人である。次に長塚氏の短歌『鍼の如く』の載つ

てゐるアララギが毎月貴君のところへ郵送されてゐる。長塚氏が死んだ時書架から「土」を出して客間の床上に立てて前に供物をした（貴君の言による）ほどの貴君が長塚氏の歌を知らない筈は無いと思つた。若し貴君が長塚氏の歌を尊敬して居るならば、その藝術的價値の點に就いて澤氏の歌とどう比較し區別してゐるか。若し貴君が眞に長塚氏の短歌を理解してゐるならば澤氏の歌などに狂喜する筈はないと思つた。なぜかといふに予は長塚氏の歌と澤氏の歌とは、性質の差よりも價値の差に於て霄壤の區別を爲すべきものであると信じたからである。そこで予は貴君に向つて二月廿一日郵便を以て長塚澤兩氏の短歌に關する貴君の意見を問うた次第である。（予が貴君の論の第一回だけを讀んで物言つた事を耻ぢたのは予自身に對つて恥ぢたのである。若し貴君に謝罪でもして居るならば彼の全文を謹みて取消す）。

第二。然るに貴君の返事には鑑賞には比較が要らないと書いてあつた。貴君は『比較する』といふ心的機轉が藝術鑑賞の過程に全然要らないと云ふのか。それならば貴君は未だ内省法を知らない程な鈍者である。それから貴君は長塚氏の歌は知らないと言ひ越した。然しあれほど長塚氏を云々してゐる貴君だから必ず早速長塚氏の歌を讀むに相違ないと思つて我慢して居た。然るに二月廿六日に書いた貴君の言（俳味三月號）によると未だ長塚氏の歌は知らないと洒啞洒啞して

ゐる。そして『今日では唯士の他は未知と云事を氏（齋藤茂吉のこと）も承知されてゐる。それで歌の鑑賞と云點から氏に一心ならざる態度を輕蔑される事は無くなつたであらうが』などと濟ましてゐる。よくもよくも斯る事が云へたものだと思つた。廿一日から廿六日までは少なくも五日間はある。なぜその間に徹宵し肉食交合を禁斷して長塚氏の短歌を研究しないのか。長塚氏の短歌は矢張り「士」の作者の命から生れたものである事を考へたまへ。さうして貴君は依然として『浪花節趣味の程度を診察し』の『診察と云語がいかにも面白いのです』などと云つてゐる。予にはをかしいのである。

第三。『私は長塚氏が今生きて居たら或は齋藤氏とかうして多少互に不快な感を起させ合ふ事は無くて長塚氏が間に立つてよく意志を疏通して具れたらうとフト思ひました』などは餘り蟲が好すぎる。そんな事は以ての外の事である。予の識つてゐる範圍の長塚氏の藝術觀から推察すれば、『齋藤君、沼波氏などには決して相手になるな。何時まで經つても分かりつこが無いから』と云つて除けたであらう。さよなら。（大正四年四月二日病床にてしるす）

4 生田氏の言

己はこのごろ澤弌氏の歌を評して駄洒落だと云ひ惡巫山戯だと云つた。而して己の文中に『フモールなどの域に達するには其處にまだまだ遠い道程があつて中ぶらりんに彷徨してゐる』と明言してゐるにも拘はらず、己を目して全くフモール（ユウモア）を解する事の出來ない人間であると結論する者が轉がり出た。可笑しくて溜らない。轉がり出た中に反響記者（生田春月）がゐる。そして『それを讀んで僕は齋藤氏のユウモアを解しない人なのを知つた』と云つてゐる。己の批評言の殆ど全體を只の此一語で評し去つた反響記者の言の中點は、要するに己が反對する沼波氏の說に贊成して己の說に反對であるといふに歸する。そこで己は此反響記者の短歌に對する考のもつと積極的な實例を見たいと思つて檢べたところが、該記者は反響の二月號で詩歌の月評をして、『新年に現れたあらゆる詩歌中最も興味深かつたのは實に瓊音氏の歌であつた』と云つて、『留守居して今日は我壯と笑ひ居れば廢兵院が物賣にくる』といふ歌と『我が妻は茄子の汁を一昨日も昨日も今日も明日も立つつ』といふ歌を特に揭げてゐる。

それで心が讀めた。彼が輩の意味するユウモアとは矢張り斯んなものかと思つた。鼠が鼠の屁を嗅ぎあふとは能くも謂つたものである。己がユウモアを如何に解してゐるかを積極的に明かにするために橘曙覽の獨樂吟や、竹の里人の歌や、石川啄木の歌やを揭げてゐる（それで足りなくば古いところで萬葉集卷十六の歌、新しいところで木下杢太郎氏の詩、北原白秋氏の詩竝びに短歌をも揭げる）それが全く彼が輩には分からない。分からぬならば分からぬでいゝ。豚に珠玉を與ふる勿れといふ言葉があるからである。ところが分からないで分かつた振をするのだから餘り見よくは無い。

次に該記者は短歌制作者として如何なる程度のものであるかを檢べた。該記者は次の樣な歌を作る。

政見を第一に立つ馬場孤蝶文士の中の文士なりけり
名にしをふ安成貞雄が參謀ぞあな勇ましや選擧運動
血眼と蚤とり眼のにらみあひあな勇ましや選擧運動
顏長きものも短きものも出るあな勇ましや選擧運動

先づざつと斯かる程度のものである。あはれあはれ己が行く道の足もとにも、こんな無緣の有

情が轉がつてゐたか。

○

己がデエメルの一語を云々せるに就き、反響記者（生田春月）が評して『齋藤氏の文中にデエメルの Opfermut（？）を犧牲精進（？）と譯すると云つてあつたのが何の爲めに云つたのか分らなかつた』と云つてゐる。己がデエメルの詩を引合に出して云々したのが澤氏の歌を論ずるに際して、何の爲めに云つたのか分からないと云ふ意味ではなく、デエメルの語を犧牲精進と譯すと云つてゐるのが何の爲めに云つたのだか分からないといふのである。つまり譯語に不審があるといふ事になる。獨逸語に（？）點を附けたのは博大な親切心を以て誤植ででもないかと心配したのかも知れないが野暮な心配である。己の譯語に（？）點を付けたのは誤植の心配ではなく、譯語に不審がある、をかしい、あやしい、まづい、誤譯だぐらゐの氣持であらう。この（？）點で該記者の心も略讀むことが出來る。

己が『予は之を犧牲精進と譯してゐるが』とことわつたのは、斯る譯語が少しも一般化されてゐない己自身だけの語に過ぎないからであつたのである。譯といふ字が不都合ならば己がデエメルの語の心を取つて日本熟字を作つたと謂つてもよい。獨逸の此一語が如何なる意味の語だぐら

ゐは皆知つてゐる。ただ此の簡淨遒勁の一語（詩句から切離して獨立せしめた）が如何にして日本語と合魂し得るかが問題である。“Opfer” は獻身か、まづい、殉國か、未だし、犧牲か、可である。捨命（しやみやう）か、可である。『大君の邊にこそ死なめ』か、冗長である。“Mut” は勇氣か、書生くさい。勇か勇猛か、稍可である、無畏か、不退か、未だし。或は『不動心あれば膽勇あり。膽勇あれば無畏心あり。無畏心あれば精進あり』の心をもつて、精進か、可である。漢士の僧侶がはるばる印度に留學し來つて譯した此の精進の義は、強い積極的な progressiv のものであつて沼波瓊音氏が只今用ゐるやうなものでは無いに相違ない。かう思つて犧牲精進としたのである。決して一般化された譯語ではない。飜譯のむづかしい事は己も染々承知してゐる。從つて己の此譯語を以て完全であると強ふる程、強ひ得るほど己は未だ多力者ではない。反響記者は己よりも、もつともつと多力者であるかも知れない。けれども實際を示して呉れない以上はどうだか分からない。いにしへ羅什三藏の舌が紅焔裏に五色の光を放つたと言傳へられてゐる。己の舌が紅炎裏に焚燒し果てるか、否か。反響記者の舌が焚燒し果てるか、否か。己（おれ）みづからも見たい。

口語短歌に就いて

1　西出朝風君に答へる

けふ（大正四年四月十三日）君から正に「明日の詩歌」を受取つた。そして『齋藤茂吉君に問ふ』を讀んだ。終末まで讀んで何を君が予に問うてゐるのか。質問の核心に觸れる事が出來なかつた。をはりの方の『更めて注意あり系統ある精細な口語短歌論に接する事を切望する』の一文は質問ではなくて願望に過ぎない。これで不滿足ならば言の次手に質問の核心の存在してゐない理由を少し書き添へよう。

（一）『口語短歌といふのが此ごろ世の中に見える。我等ならば「けるかも」で行く所を「であつた」で行つてゐる。そんな歌も己は否である。』と予は云つた。これは短歌作者としての予の信念の吐露であつて、漫筆の形式、獨語の形式を取つたものである。そして西出朝風などの固

有名詞は一つも入つてゐない。從つて直接君に對つて言つたものでは無い。又一定の實例歌をも引いて論じては居ない。此場合に予に問ふならば『口語短歌』とは如何なるものか、其實例及び其作者を敎へて貰ひたいといふのが至當である。然るに『最も早く現代語の短歌を創作したのが僕で』などの傲慢不遜なる態度に出て直ちに予の所謂口語短歌と君の所謂現代語歌とを同一だと斷ずるのは、決して『齋藤茂吉君に問ふ』の内容とはならない。若し予の口語短歌といふのは予が問題を隨意に築き上げて、近頃……見えると云つたのだとせば奈何。或は明治三十年八月九月に亙る與謝野鐵幹氏の俗語論、明治三十二年の正岡子規氏の口語の歌、服部躬治氏の俗謠論、與謝野寛氏の『詩話』、近頃では、青山霞村氏の歌、西出朝風氏の歌、若山牧水氏の歌、Uraburu氏の歌などの一群を考に入れて隨意に築き上げた、予の所謂口語短歌であるとせば奈何。君は單に『僕乃至僕等を對象として』云々と公言する資格はあるまいと思ふ。次に『そんな歌は己は否だ』といふのは短歌制作と短歌鑑賞とから得た予の信念である。君は『君一箇の嗜好論なら勿論僕の關はつた事ではない』といふが予の言は無論予自身の短歌制作上信念が根柢となつてゐるのである。君に關はつた事でないと信ずるなら、默るがよい。

（註）鐵幹氏の說は明治三十年の中學新誌第一卷八號九號にある。正岡先生の口語歌とは『風呂敷の包を解けば驚くまい

か土の鑄形の人が出た出た』などの歌を指す。

（二）『短歌の結句に、かなけりかもや、などが何故多いか……そんな事も少しく考へて見たいのだ』と予が言つたのは君に對つて問うたので無いのは明瞭である。常に結句に就いて考へてゐる予自身に對しての言である。その何故に然るかの解明が予自身未だ十全の域に達してゐないが爲めの言である。君は此文に對して『といふ問語はけるかもでなければならんと言ふ君の信條を確保する何者をも持つてないではないか』といふが、君の言は予の言に對する批評的斷定であつて、質問にはなつてゐない。それから若し既成の短歌の結句に『かな』『けり』『かも』『も』『や』などが何故多いか、いかなる必然性を有つて日本人が斯く製作し來つたかが眞に解明出來れば、短歌の結句が『であつた』（一代表句）よりも『けるかも』（一代表句）でなければならんといふ予の信念を得るに到つた理を敍述し得る一階梯となるのである。『君の信條を確保する何者をも持てない』などと平然として言放つ君は、恐らく此問題を眞に解明し得るのであらうから、予は君に借問する。『日本從來の短歌の結句に何故、けりかなかももやが多いか。』君の解明の言を俟つて徐ろに予の論（作者としての立脚點に立つに止まらず短歌論者として）を吐く事を豫約する。

（三）普通の談話の切目に何故『よ』『わ』『の』などを付けるか、『ます』『です』などを付けるか……そんな事も少しく考へて見たいのだ。から予は言つた。君に對つて言つたので無く、予自身に對しての問題提出である。この問題が眞に解明が出來れば、予の信念を得るに到つた理を敍述し得る一階梯となるのである。然し君は此予の言に對して『反つて君自身君の信條を裏切る結果になりはしないか』と論斷したが、君に此問題の解決が眞に出來るのか、出來るなら爲て見たまへ。それから此問題を解決し得ても予の信條を裏切るやうな事は毫末も無いから安心したまへ。予は普通の談話に考及しても俳句の切字に考及しても、その解明が眞に出來れば、予の短歌の說がその一步を進めるのである。短歌と普通談話と俳句と同一位置に置いて說くな。から云ふ程眞に物が分かつてゐるなら、斯程まで眞に短歌の特質が分かつてゐるなら、予の如く幾ら日本語を廣汎に見渡して考及しても、短歌論を裏切るとか何とかは云はれなくなつて來るものだ。この項にも予に對する質問が別に無い。

（四）次の段に移つて、『君の日本語—殊に其音樂的方面—の知識を危ぶむまいとしても危ぶまないわけに行かない』とか『君自身餘りに君の信條を裏切つてゐるぢやないか。君の日本語及び僕等の詩に對する知識注意が餘りに膚淺混亂を極めてるぢやないか』とかの理由を缺いた內容

なき言を予に對つて放つてゐるが、予に對する質問でも何でもなく、おれ獨り日本語を知つてゐるといふ顏付をしたり、おれは口語短歌の元祖で口語短歌はおれの獨壇だぐらゐな、廣告的な仕事師的な君等の口吻はなかなか面白くはある。併し斯る言に對して若し予の言を欲するならば、少しく敬虔であれ。君は予に對つて『注意あり系統ある精細な口語短歌論』を書けと切望してゐるが、書くも書くまいも予の任意である。併し謹んで眞に予の言を欲するならば、前言に述べた予の提出した問題を先づ解明し來れ。次に予の製作したこれ迄の短歌及び短歌に對する予の盡くの評論感想を基礎として、君が予に與へた內容なき漫罵に內容を附與し來れ。君にして然く敬虔に且つ熱心ならば予も君と言を交ふるであらう。

2　西出朝風氏の歌を評す

予は口語短歌に向つて、客觀的內容ある批評はかつて言はなかつたが、ただ一言『今の口語短歌は無理心中未遂の姿である』と云つた。『己の歌は口語短歌である』と名乘り出た西出朝風氏の短歌數首に就いて吟味し、予の言に客觀的內容を與へるは、予の內面上責任であるかも知れな

い。

酒のみの腦の圖に似た雲白く空一面にうごく。冬の夜。

『似た』だけが世にある短歌の語法と一寸違ふだけで他は特別な特徵は無い。『似し』と云つたところで別に短歌としての藝術的價値に大なる變動も無い。一般に五七五七七の調に行つてゐる。こんな事なら特別に口語短歌などと銘打つ必要は無い。『似た』と無理に變らせようとし、他は爲方なくて從來の短歌の語法で行つてゐる。無理心中未遂の姿が此處にも一寸見える。それから『酒のみの腦の圖に似た』とは一體何の事か。いゝ加減な事を云つて俗人をおどかしてはいけない。無理に事柄を變らせようとしてばかりゐるから、作者の心持も大自然の流轉相も、決して力強く響いて來ない。その筈である。予に向つて日本語を知らない。日本語の音樂的方面の知識が無いなどと納まり返つてゐる程の作者であるから、こんな歌を作つて生命のリヅムも遺憾なく表現されてゐると安住してゐるのである。さうして結句に『冬の夜』などと云つて特に獨立させる標點まで打つて得意である。予等ならばもつと重く鋭く一氣呵成に生命に波打たせて、もつとせつぱつまつて詠むところを、この作者は『酒のみの腦の圖』などを云々する程餘裕ある人である。そして麗々と『偉人今日の歩みは凡愚明日の歩みだ』と偉人氣取でゐる。

むづかしい借金とりの毒ぐちも馴れてはをかし。梅のさくころ。

成程『むづかしき』が『むづかしい』に成つてゐる。然し斯く音便にするのは此作者を俟つ迄も無く遠の昔に使つてゐる。『馴れてはをかし』は丸で從來の月並歌人の調子である。口語ならば『馴れれば可笑しい』と云はねばならない。結句の『梅のさく頃』は月雪花流の添景である。口語などと一方で威張つて居りながら、短歌の形式などにこ〻びりついて居るから、一方は口語、一方は月並歌人流と、無理心中未遂の姿になるのである。此歌は四月號の「明日の詩歌」所載のものである。

いつ逢へるわが子か、夏の朝すゞに、すやすや寢れば、さらにかなしい。

此歌は大正三年十一月「文章世界」所載のものである。成程『さらに悲しい』といふ結句である。壯士役者の口吻であるが口語には相違ない。『夏の朝すゞに』は昔の謂ゆる新體詩人の口調だ。それゆゑ結句が一首と調和が取れなくて極めて態とらしく聞こえる。もつとも此邊のところで、『僕らの詩に對する知識、注意が餘りに膚淺混亂を極めてる』と此作者が予に向つて言ふのかも知れないが、それはどうでもよい。予はこんな下凡な役者の臺詞みたやうなものに價値を認めないのだ。一方は壯士役者の口語、一方は新體詩人で、無理心中未遂が成立してゐる。

三十になつて子をおき、妻をおき、ゆくへも知らぬ旅に今日立つ。

これも「文章世界」の歌である。成程『三十になつて』と云つてゐる。口語に相違ない。而して、『ゆくへも知らぬ旅へ』などと云つてゐる。決して口語では無い。まさか酔興で無理心中未遂をやつてゐるのでもあるまい。この歌の作者よ、予に向つて幾ら威張つてもいゝから、もつと優秀な作を示して呉れ給へ。

では左樣なら、子よ、妻よ、品川の宿の夜あけの消えのこる灯よ。

成程『では左樣なら』口語に相違ない。『消え殘る灯よ』明星初期の葦歌人の面影である。こで無理心中未遂が成立つ。なんぼ何でも、これが偉人の口語短歌の代表作といふのだから溜らない。斯る歌を作つて日本語の音樂的方面を十全に體得するほどの智慧があると息卷くのだから溜らない。

人こふて領巾（ひれ）ふるやうに、初秋の、二階の障子やれ紙を振る。

『人こふて』は『人こうて』と書く方がよい。幾ら口語短歌の自稱元祖でも『人こふて』などと書いて、予に日本語を知らないなどとの廣言は出來まい。此歌全體が少しも口語短歌と銘を打つ必要のないものだ。別に本當に領巾ふる處を見た事もない作者が、古歌から御蔭を蒙つてゐな

がら口語詩歌も無いものである。『二階の障子やれ紙を振る』などの洒落は一體どんなつもりで言つたのか。日本現代の口語は決して斯る芝居めいた事は言はないぞ。口語詩歌が汝に眞に作り得るといふ自信があるなら、先づ元祖などの問題よりも制作の實行から取かからねばならない。

天才をもつて來た身か、妻ひとり、食はされない身か、どつちでもいゝ。

貧乏だといふ申訣に天才氣取はあつぱれである。かかる心的狀態を自惚の諦めと稱す。この作者は易々として偉人になつたり易々として天才になつたりする事の出來る人間と見える。幸福な人だ。『どつちでもいゝ』の結句は今まで評して來た歌の中では一番よい樣だ。『天才をもつて來た』といふ句も大分上等の日本語だ。予のこの『上等』の意味が、自稱日本語學者には分かるまい。

からつぽの聲ばかりして、さがしても見えぬ貴樣はなんの影等だ。

只今書棚をさがして「新詩歌と新俳句」を發見したから增補する。『影等』が可笑しい。『何の影だ』で澤山である。自稱日本語學者は特別にこんな事を言はねば、位が付かないと見える。現代のノルマールの日本人は『貴樣は何の影だ』とはいふ。複數の場合ならば『貴樣等は何の影だ』とはいふ。貴樣を單數にして影にばかり『等』などは附けない。此作者は無理に三十一文字にす

る爲めに『ら』を加へたらしい。この『影等』がこの作者その人の『日用語』（作者に據る）だとせば、ノルマールの現代日本人では無い。それならば幾ら日本語學者と自稱しても、甚だ無意義である。それから、『聲ばかり』は聽官に屬してゐる。『見えぬ』『影』は視官に屬した事柄だ。見えなければ『影』などとは云へないぞ。『かげ』といふ日本語を少しく知るがよい。此歌に對する予の言に反響があればもつと言ふ。

こそこそとささやき合ふは、亡靈の類か、鼠のたぐひのものか。

『亡靈の類か、鼠のたぐひか』ならば無駄なき日本語といつても先づ我慢はする。『たぐひのものか』とは一體何だ。こんな餘計な事を云はなければ、自稱日本語學者の位がつかないのか。わざわざ『ものか』を附けて三十一字にしたのか。御苦勞である。序に言ふ。

稼がないで儲けることをかんがへる人ばいふえて、村の秋立つ。

此は結城哀草果君の作である。此歌を西出氏が評して『方言さへ其儘入れた結城君の歌は卽ち當然をしただけですが現時の歌壇に向つては特に擧げて示す價値を持ちませう』などと云つてるが、成程自稱日本語學者は奇拔な事をいふものだ。結城君は予の鄕里なる山形縣南村山郡の住人である。同地方では斷じて『ばい』などとは日用語（特に氏の用語を借る）に用ゐない。『ばり』

は普通に使ふが『ばい』ではない。決して當然ではないのだ。同じ方言でも『ばい』は結城君の方言ではない。氏は『り』を『い』に勝手に直して得意でゐるのだらう。こんな事も知らないで、圖々しく日用語とか、方言とかが言へたものだ。をかしとも、をかし。

萬葉尊重、詞の吟味に就いて

1　土岐君に答へる

○

貴君の言の大要を鈔するに當つて僕は貴君の言の一部を改作した。そして『齋藤君あわてゝはいけない』と貴君から云はれたが、僕は別に悲しいとは思ひません。言論は感情の微妙なニユアンスよりも意の明徹を尊びます。これが言論の中心を鈔し得る所以であります。詩は句を抽拔いて味ふことがあつても、中心を鈔することはむづかしい。短歌などは特にむづかしい。感情のビブラチヨン乃至ニユアンスが重大な役目を爲してゐるからである。反之、言論に對する Referat の存在は貴君とても全然認めないことはありますまい。

『君は魯鈍である』『己は君が魯鈍に思はれてならない』『君は魯鈍ではないか』の三つは言ひ

方の差である。言ひ方の差は感情の色調に本づいて起る。直叙法、強調法、疑問法などの起る所以であるが、意味の點について云へば、主は『魯鈍』にあるのである。他は從屬である。『己は君が魯鈍に思はれてならない』と『君は魯鈍ではないか』を『君は魯鈍である』と改めて鈔したのは意の存する處を主としたが爲めであつて、僕が短歌の天爾遠波を吟味するのとは趣が稍ちがふのである。濫りに怒ては不可ません。

貴君は僕が貴君の言の語尾を改めたのを怒りその理由として、『君は君、僕は僕であるから僕が君の作歌の動機を斷定的にかうであるとすることはできないわけである』と云はれます。『萬有は己の寫象に過ぎない』といふやうなもので貴君の哲學を聞いた氣が致し、難有うございました。たゞ貴君は常に此の哲學觀に立脚して日本語の『である』『ではないか』『思はれてならない』を區別して使用してゐますか。それなら結構です。それにしてはよく古歌の讀人しらずなどの生活の研究が所謂内的に出來ますね。

○

正直をいふと貴君の僕に對する『警告の聲』とかいふものを、僕は醉つぱらひの聲かと思ひました。誠にすまないが、餘り淺薄だと思つたからです。淺薄だと思つた理は大凡童馬漫筆で書い

た筈です。ところが貴君はそんな事を思ふのは『第一禮を失したことである』と申されます。『人の言を聞くべき心得ではない』と申されます。或はさうかも知れません。けれども貴君はよく貴君のいはゆる『警告の聲』といふものゝ内容を考へて御らんなさい。どこに峻嚴な威力がありますか。警告などいふに足る内容がありますか。僕は迅雷の前に戰きます。そして額を垂れます。貴君の警告にも若しこの迅雷底の威力があつたなら僕のかうべは自づからその警告の前に垂れたでありませう。殘念なことをしましたね。

〇

貴君は僕を思ひあがると云つて笑はれます。いかにも慚愧にたへませんが、ひとつ如何なる程度の内容を有つ言に對つて僕の額がおのづから垂れるかを試してみる必要があります。いまのところ貴君の『歌壇警語』に對しては殘念ながら僕の額は垂れません。また垂れないのが至當だと信じます。一首の歌を作るにしても人知れぬ複雜な心的過程を經來つてゐます。その過程の何處に難があるか、『外的』とは何を意味して居るのか、一首の既成の歌を通してもつと細かく解明しなければ、何等積極的の效果がないと思ふ。そこが貴君の言に對する更めての要求であります。

〇

『詞を愛しむ』といふ點では貴君も僕も同じだが、僕は『父母の詞で時代の新しい自分を現はしうると思つてゐるし』（貴君が僕の言論から鈔した結論）貴君は『僕は僕自身の脣から僕自身の詞を發しようと期してゐるのである』の點がちがふと貴君は云はれる。

なる程この二つを竝べて見れば貴君の說の方が正しい。しかしそもそもの議論の出發點はかういふ概論にあつたのではないといふ事を今一度考へなさい。貴君が僕の言論から鈔した結論には錯誤があります。

僕は作歌する時には無論自分の生命に直接な自分の詞を以て作歌します。こんな事は幾たび繰返しても同じです。又この點は單に言の上では貴君の說と僕の說は同じことで別に論ずることはありません。僕は一步すゝんで今はいかにも自分の詞になつて居るが、もとは或ところから入つて來たのである、つまり御蔭を蒙つたものがある。作歌當時には知らずに居ても吟味すれば其れが分かつて來る場合がある。そのお蔭を蒙つた本源を明らめて愛し尊敬しようといふのである。それが僕自身の內的要求であり、眞の生命に愛著する所以であり、又摸倣、剽窃の多い現歌壇にあつてはそれが特殊の爲事の一つであると信ずるのである。然るに貴君はそんな必要はない。唯我獨尊でいゝといふのであります。さうして僕の爲事に對して『警告』を發したのであります。

そこが貴君の說と僕の說のちがふ主要點である事をよく御考へなさい。論の主要點さへ分かれば幾らでも論じませう。さうでなくて無理に議論するのは、いやな事です。童馬漫筆で單に僕の腹の中を言つて除けたのは、論の主題(テーマ)が無いからです。

僕は童馬漫筆で貴君の『警告』を全然否定しました。それは事實である。二人の言のいづれが是かいづれが非か、論にならない今にあつては、その裁判は劫運の力に任せるより爲方がありますまい。實朝を難じて得意で死んだ景樹の言が、劫運力によつて奈何の裁判を受けたか、先づさういふ裁判を爲てもらふのです。いかがですか。

それとも論の主題をお互に約束して定めて、生きてゐる中に氣長に論じ合ひませうか。いづれでもよろしいのです。

○

貴君の歌に、近來『けるかも』が多くなり赤彥から影響をうけた、僕の謂ふ『赤彥調』の歌があるのは事實であります。貴君の第一歌集「泣わらひ」から最近の集の「街上不平」まで、それから以後の一行に書下すやうになつてからの作を、系統たてゝ吟味して來て、赤彥の「切火」などゝ比較して御らんなさい。僕の言の必ずしも妄でないことが分かります。僕の赤彥調といふの

は、單に結句の『仔犬は知らず』とか『何にも知らず』ではありません。（無ろんそれも含まつてゐますが）僕の結論を貴君は贊成しますか贊成しませんか。贊成しなければ、それまでゝず。僕は貴君の鈍眼を笑ふだけです。

贊成するとせば、縱ひ赤彥調であつても貴君を輕蔑はしません。貴君のものになつて居れば實に結構です。たゞその場合に赤彥の歌に向つて感謝するのかは、尊敬するのかは、愛しむのかは、明記して置くのは、間違つたことですかどうですか。それが僕の言の主眼であつたのです。それでも唯我獨尊などゝ云つて居ますか。いかゞです。

僕の質問に（質問としては不徹底のきらひがあるが）答へずに却つて僕に對つて反問などを發するのは、顧みて他を言ふといふ論法でよろしくはありません。

○

貴君には僕らの萬葉尊重といふことが極めて外形的に思はれてならない相である。而して貴君は『歌は詞のコンビネーションではない。萬葉集の本質は詞のコンビネーションや趣味ではわからない。人間のいのちはそれの現はれたことばのいのちは、全體としての生活に彼我冥合統一したところに逆つて來る』と云つてゐる。いかにも立派な言であります。けれども斯んな概言は何

の役にも立つものでないといふ事を御承知下さい。先づ僕らが昨年萬葉卷二から輪講し始めた、あの短歌から始めて、僕らの言と全然重複することなしに、一首一首の本質を解明して御らんなさい。議論はそれからのことです。

一體萬葉集の本質などいふ問題の研究は、あらゆる學問の各の優秀な專門家が分擔して研究しても一朝一夕では出來ないと信じます。僕らの萬葉研究は極めて微かなものであります。けれども僕らの先進の研究から一歩を進めてゐると信じてゐます。それは短歌としての價値、表現の方、制作の衝動因、分かる極に於ての實際生活との交渉など、いろいろの點に關し折に觸れてベリュウレンしてゐます。要言すれば先進の研究よりももつと内的な研究に入つたのです。僕らの到達點を云へば今の爲事などはまだまだ初途にあるのでありませう。けれども行方は間違つてゐないと思ふ。僕らの爲事を全然外的（原文は極めて外形的に思はれてならないといふのである）だと感ぜられる貴君のいはゆる内的な研究がはやく見たいのであります。議論はそれからのことです。僕は萬葉集の歌は暗記こそしてゐないが萬葉集尊重者の端くれである。貴君の内的研究に向つて質問を發するの光榮を有つの日の一日も速かならん事を祈ります。さよなら。

土岐君は、『一體、短歌とか歌壇とか、單にさう極限された一つの場合の內で『けり』がどうとか『かも』がどうとか論じたところがそれだけでは寔に下らんことである。僕等のやうな忙しいものが、とりたてゝ問題とするにはたらない。』といふ。土岐君はさういふ事は忙しいから問題としないでもよからうが、我等の先進にはさういふ事を極めて眞面目に取扱つたのがゐる。我等もそれを眞面目に取扱つてゐる。（たゞ我等の場合は『それだけでは』が當嵌まらないのである。）それを輕蔑するのは惡い。赤草紙所載の蕉翁句作の有樣を讀むと、決して我等の態度の邪でないことが分かる。それから、土岐君の歌を讀んで見ると極めて小心に、極めて器用に矢張りこの『けり』や『かも』を氣にしてゐるのが分かる。歌が三行になつたり、句讀點を打つたり、字餘りやら、字足らずやら、それが決して天爾遠波などはどうでも可いといふのではなくて、矢張り意識して氣にして居るのである。たゞさういふ事を口外しないだけである。自家撞著の說に陷つてゐてなほ自から慢してゐるのである。一首の鑑賞に就いても土岐君は直ちに一首の生命、全體としての人が分かる樣に言振らしてゐるが、しかし眞に一首全體の分かる人ならば必ずその過程に於て『けり』や『かも』の吟味を實行して居るに相違ない。その吟味してゐる心の運動を自分自身で意識してゐない人は或はあるかも知れない。意識してゐないからと云つて、その吟味

が下らないとは云ふことが出來ないのである。土岐君の說の淺薄なる所以である。

（大正四年十二月五日。アララギ一月號所載）

2　土岐哀果に與ふ

○

土岐哀果君。君はこのごろ雜誌「生活と藝術」に『歌壇警語』を書き、それに對して反響を要求し（十二月號十二頁）、挨拶を要求してゐる（一月號廿一頁）。僕は雜誌「アララギ」で『童馬漫筆』を書いてゐる（十一月號及十二月號）。若し君が僕の『童馬漫筆』中の言を、君の言に對する『挨拶』であると思つてゐるならそれは間違だから止めて呉れ。それから、若し君が僕の言を、君と僕との間に於ける『相互議論』（君の使つた熟字に從ふ）であると思つてゐるなら、それも間違だから止めたまへ。『童馬漫筆』の中の僕の言は君が僕に與へた君の所謂『警告の聲』を讀んで、僕の心に動いたものゝ一部、要言すればその時の心的活動の一部を少しづゝ纏めようと努めながら、最も我儘に書棄てたものである。つまりその時の僕の腹の中を書いたものである。それゆゑ固有名詞（君の名）が入つて居り、君の言がそ

の儘引用されてあつても、挨拶にもなつてゐなければ相互議論にもなつてゐない。その事を僕は瞭然と明記してある(アララギ十二月號)。また僕の言は君の言ばかりを對象としてものを言つてはゐない。三たび言換へれば氣兼なき獨語である。

一體僕は我儘であうて、氣兼ない獨居の際には勝手な事を思ふ。君の大切な『警告の聲』を醉つぱらひの聲と思つたり、淺薄だと思つたり、撥ね飛ばしたりなどする。何と云つても爲方がない。正直を言へば先づそんな訣合(わけあひ)のものである。それを君に對する『挨拶』だと思つたり、『相互議論』だなどと思ふから、僕に向つて『慌ててはいけない』とか、『虚勢をはつた不遜な態度』とか、『蒙を啓いておく必要もある』とか、『反省を求める必要』とか、『禮を失した事だ』とか云ふ樣になるのである。かういふ言葉は折角だが僕には不要だから持つて歸りたまへ。

なぜ僕が君の言に挨拶せず、議論しなかつたかと云ふに、僕の腹の中には、『童馬漫筆』に書いたやうなことが溜まつてゐても、挨拶するとなれば、『左樣(さう)か。然し己の考は違ふ』の一語で濟む。議論しようとすれば主體(テーマ)が見つからない。そんな事をするよりも、『童馬漫筆』の原稿でも書かうと思ひ、ぽつぽつ書いては放棄し、しばらくして復た書き、出來上つたのが、僕の謂ふ『腹の中を書いた』あの一文である。

ところが次の月に君は、僕の其言に『齋藤君の駁論』などといふ表題を附けて、今度は一々僕の言を『　』附で引用して喰つてかかつてゐる。君の周圍の人も、一般歌壇の讀者もこれを見て、論爭だとし、喧嘩だとし、『相對論』だとしてゐるらしく見える。かうなれば默つてゐると誤解を招くかも知れん、と思つてはじめて君に挨拶の言を呈した。『土岐君に答へる』（アララギ一月號）が卽ちそれである。それから、かうなつた以上は餘り氣乘がしないが一つ議論をして見てもよいと思ひ、君にむかつて、『來年は何か一つ主題を約束してきめて論じ合ふではないか』と端書をやる序に言つてやつた。ところがこの提議を申込んだ動機を、君は、僕が僕の『童馬漫筆』の言について自ら反省し悔いた結果だと思つてゐる。實に察しのいゝ人だ。『主題を約束』してと云つたのは君の『警告』には主題がないからである。『客觀的內容の少ない言はあとで讀んで面白くない』と云つたのは、君が僕に向つて放つた、虛勢とを、不遜とか、あわててはいかんとか、さういふ言の少ない方がよいと思つたからである。『賣言葉に買言葉になつて面白くない』と云つたのも同樣の訣合である。君は賣言葉に買言葉などにはならないと明言してゐるが、それは自己觀察が足りないので、もうその狀態になつてゐるから僕は云つて遣つたのだ。以上は前置である。

これから僕の時間と力のゆるす限りに於て、『相たい論』をはじめようとする。

○

第一。大正四年九月、君は僕の歌に對して『警告の聲』を發し、『齋藤君の近來の作歌は、内から湧きでるのでなく、外からくつ附くのであるやうに思はれてならない』と云つた。この言を大體として心の中に入れ『童馬漫筆』で僕の感想を述べた際は、君の此一言を補充し訂正してそれを對象とした。どう訂正したかと云ふに、『思はれてならない』を、『のである』とした。ところが君は『齋藤君あわてゝてはいけない。あわてずにもう一ど僕の感想を精讀したまへ』と云ひ、『君は君、僕は僕であるから、僕が君の作歌の動機を斷定的にかうであるとすることはできないわけである』と云つた。そして、『齋藤君、九月十二日は君のアタマのよほど惡い日だつたと見える』などと云つて居る。僕を冷笑したのである。

僕おもふに、日本語の『思はれてならない』は『思はれる』よりも非斷定的である。若しくは逡巡動搖を示してゐる。(抒情詩に於て切實心を抒べる場合でも此の語は矢張りさういふ色調を有つてゐる)。『思はれる』は『である』よりも非斷定的であつて、顧慮、内省の相を暗指してゐる。然るに君は、『である』『思はれる』を使はずに、思はれてならない』を使つたのは、『君は君、僕は僕であるから……斷定的にかうであるとすることはできないわけである』ためであると

いふ。併し理由を缺いた『思はれてならない』では相互議論の題目とはならない。

僕二たびおもふに、藝術の批評は、つまりは主觀的である、個性的である。先賢のいはゆる能相的評價である。さうして、『君は君、僕は僕』の關係に立つてゐてなほ、『である』若くは進んで『ねばならぬ』と論ずることがある。人性は、かかる言方乃至斷定を認定すべき可能性を有つてゐる。それを否定して、僕を嘲つてゐる君は、何ゆゑに前田夕暮氏の歌を評して、『すこしも透徹したところがない』『平面的な記述である』『感動などは藥にしたくもない』と斷定し去つて、『あるやうに思はれてならない』『ない樣に思はれてならない』と明言しないのであるか。論の主題を得るためには、此點に對する君の解明が必要である。奈何。

次ぎに、『齋藤君の近來の作歌は』の『作歌』といふのはどういふ意味であるのか。萬葉集の歌の詞書にある、『作歌（つくれるうた・よめるうた）』の意味で、僕の既成の短歌を指すのか、（僕はさういふ風に解した）。或は『作歌の機轉（フォールガンダ）』を指すのか。（外からくつ附くのであるやう云々の言を讀むとさうも取れる）。いづれなるかを明かにしない。そこで僕はこれを既成の短歌を對象として論じてゐるのだと思つてゐたのに、君は、『君は君、僕は僕だから、僕が君の作歌の動機を斷定的に云々』と云つてゐるところを見ると『作歌』といふのは『作歌の動機』を意味してゐる（こんな不徹底な言

葉の使ひ方は許し難いのであるが）ことが分かつた。

そんなら、動機が內から湧く、外からくつつくとは奈何の義か。主として內機緣に因るか、外機緣に因るかの義か。もしさうとせば、何ゆゑに內機緣に因るを上品とし、外機緣に因るのを下品とするのか。議論の主題を得るためには此點に對する君の解明が必要である。奈何。

次ぎに、君が僕に與へた此の警告の成るに至つた過程には、僕の近作が含まつてゐるのが明瞭である。論の主題を得るためにはそれを拔去る事は無意味である。併し僕の近作にも幾つかある。よつて假りに論點を集注せしめるために君が僕に警告を發した月（九月）の前の月（八月）に公にした作の最初の一首を抽出して、これを議論の對象のなかに入れる。（このことは作者自身の僕としては、主觀的に云つて心ぐるしいのであるが。）そして次の件についての君の解明を要求する。それが論の進め得る所以であると思ふ。奈何。

ま夏日のひかり澄み果て淺茅はらにそよぎの音のきこえけるかも　茂吉作

（一）君の謂ふ『作歌の動機』の概念を說明すること。

（二）此歌の作歌の動機を說明すること。

（三）作歌の動機の、內から湧くとは奈何の義か、外からくつつくとは奈何の義か。

（四）此歌の作歌の動機が外からくつ附くとは何によつて之を知り得るか。それを難ずるの理奈何。

○

第二。僕の大正三年一月作、『黄に照るや小竹林をそがひにし出で入る息をいつくしみゐる』の『出で入る息』といふ句は、僕の發明ではなく造語ではなく、俊惠法師の歌から由來してゐるつまり御蔭をかうむつてゐると明記した。ところが、君は『いろいろな言葉からお蔭を蒙る努力のために、しばしば自己の感動そのものを逸することがないか云々』と云つた。然し君のこの言そのまゝでは議論の主題となりやうはない。そこでその以後の君の言（生活と藝術）をも加へ綜合してもう一應次の事を説明してもらふ。それから論を進める。

（一）君は日本國に生れて、どうして今君が使つてゐる詞をおぼえたか。君の歌のなかの詞をどうして用ゐ得るやうになつたか。

（二）僕の歌のなかの詞は、由つて來つた因がある。（僕が盡く新たに造つた詞ではない）それを明記するのはなぜ難ずべきことか。

（三）僕の此歌の『出で入る息』の句は、なぜ僕の感動を逸したと思ふか。その證明奈何。

君の言の『逸することがないか』は『ないか知らん』の意で君が獨語してゐるのか、それならば無論挨拶の必要はない。『ないか奈何』と僕に向つて詰問するのであつたら、挨拶は『そんなことはない』で濟む。君の言に些少の理由（君の結論に至つたまでの論理上過程）がないから、議論になりやう筈がない。一體、君はこんなあやふやな言を發して置いて、そして反響とか挨拶とかを人に要求するのは不遜なのである。僕があらためて問題を提出した所以である。

（注意）　問題の（二）を以て、言語を以て表現する作歌活動そのものと混同してはいけない。論點はそんな處に存するのではないからである。前言（『土岐君に答へる』參照）で『僕は作歌する時には無論自分の性命に直接な自分の詞を以て作歌します。こんな事は幾たび繰返しても同じです』と明言した如く、僕は此の問題ならば幾度もすでに、僕の信念を發表してゐる。（アララギ所載、短歌雜論、短歌小言、童馬漫筆、金槐集私鈔、折々の歌評等を參看せよ）言を左右に託し、顧みて他を言ふが如きことは止めねばならぬ。論の主題を明かにするために注意しておく。

○

第三。君は、『一體齋藤君等アララギ諸君の萬葉尊重といふことが、僕等には極めて外形的なものだと思はれてならない』といふ。併し例によつて『思はれてならない』では論をするのに困

る。ところが此言には相當の理由が書いてあるから少しく都合がよい。君は、『歌は詞のコンビネーションではない。萬葉集の本質は詞のコンビネーションや趣味では分からない。人間のいのちは、それのあらはれたことばのいのちは、全體としての生活に彼我瞑合統一したところに迸つて來る』と云ふ。併しこれだけの理由では、君の萬葉尊重が内的で、僕の萬葉尊重が外的だといふ證據にはならない。證據にならない以上は論にはならない。そこで内的である、外的であるといふ證據が必要になつて來る。然るに君は今まで、萬葉尊重の内的であるといふことの證據を見せて居ない。そこでこれからその證據を見せてもらつて、僕の爲事と比較して、事を決めるのである。そこで前言（アララギ一月號）で、萬葉集卷二の僕らが輪講しはじめた歌からはじめて、僕らの説と全然重複することなく、一首一首についていはゆる内的尊重の實をあげることを要求した次第である。しかし其要求は少しく無理で、議論をいそぐ場合には適當でない。そこで要求を極小につゞめる。

渡津海乃。豐旗雲爾。伊理比沙之。今夜月夜。清明己曾。　萬葉集卷一

この歌について次の問題を釋いてもらふのである。

（一）　外的尊重、内的尊重の概念（ベグリッフ）奈何。

（二）　此の歌をいかに訓むか。

（三）此の歌をいかに解釋するか。

（四）此の歌は『詞のコンビネーション』であるか、ないか、ないとせばその證明奈何。

（五）此歌と、君の謂ふ『人間のいのちは、それのあらはれたことばのいのちは、全體としての生活の彼我瞑合統一したところに逆つて來る』との交渉いかん。此歌の作者の『全體としての生活』とはいかなるものか。『ことばの命』と『全體としての生活』と彼我瞑合統一してゐるかどうか。若ししてゐるとせばその具體的證明奈何。

（六）此歌に就いて、君の謂ふ『本質』とは奈何。

先づ以上の六問題の解明の實行を君に要求する。なぜ此歌を選んだかといふに、此歌は有名な歌でポピユレールになつて居り、從つて論ずるのに比較的樂だとおもつたからである。此歌がしまへば他の歌に移る。

以上で大體、問題の提出が終はつた。今度からは『童馬漫筆』のやうに漫言ではなく、相對論（あひたいろん）をするのである。君といへども僕のこの提議を無（む）にするほど自他に對して不忠實ではあるまい。さうして、もう言を左右に託し、若しくは言を枝葉にわたらせてはいけない。また自ら進んで、『歌壇警語』を發してゐる君にとつて、僕のこの提議にむかつて解決を與へるのは、正しく君の

本望とするところである筈である。僕とても相對論をしようと覺悟した以上は、もう君に、『齋滕君のやうにかういふ唯カッとなつた心ではとても他と議論をすることはできない。こまつた人であると思つてゐた』といふ如きなまぬるい繰りことは言はせぬつもりである。

（大正四年十二月卅一日）

3　二たび土岐哀果に與ふ

一

君の『言葉の問題』（この一篇を茂吉君に與ふ）（生活と藝術二月號）といふ一文を讀んで二たび君に一言を呈し、君の返答を要求するの運に到つた事を不快とは思はない。君は、予が嘗て作つた歌の中から一定の詞を抽出し、その由つて來つた出處を考覈し、それを明かにしたる其事を唯一の理由として予の作歌（作歌の動機）を評價し、（イ）自己の表現を他の表現に待つの態度（ロ）內から湧きでるのではなく外からくつ附く、といふ二つの結論をしてゐる。予は君の論の妄なる事を屢々云つた（童馬漫筆並びに土岐君に答へる）にも拘はらず、**君は予の其等の言に對して、解剖し批判することなく、依然とし**

て論理上過程を缺いた結論を固執しそれを繰返してゐるに止まつてゐる。論を進むるに眞摯なるものは決してかかる態度であつてはいけない。そこで今回は予の前言中より主なるもの五六を鈔し、論點を明かにして二たび君の返答を要求しようとするのは必ずしも邪ではあるまい。

（一） かつて作つた予の歌のうちから或る詞を抽き出し、生物發育の學でもきはめるやうな氣持で、魂のなかに入つて來た詞の由來、もつと主觀的に云へばお蔭を蒙つた詞の由來をさがし、考へ、整理しようとしたのである。（アララギ十一月號）

（二） 僕は作歌するときには、無論自分の性命に直接な自分の詞を以て作歌する。かういふ事は幾度繰返して言つても同じである。作歌する刹那はいかにも自分の詞になつてゐるが、もとは或ところから入つて來たのがある。つまりお蔭を蒙つたものがある。作歌當時には知らずにゐても、吟味すれば其れが分かつて來る場合がある。そのお蔭を蒙つた本源を明らめて、愛し尊敬しようといふのである。それが僕自身の內的要求であり、眞の性命に愛著する所以であり、又摸倣、剽竊の多い現歌壇にあつては、それが特殊の爲事の一つであると信ずるのである。（アララギ一月號）

（三） 予の近來の作歌（作歌の動機）が『內から湧きでるのでなく外からくつ附く』といふ土岐君の結論は、予の歌の詞の由來吟味の公表をば唯一の論據としてゐるのは、土岐君は、予の短歌製作發轉と詞の吟味行爲とを混同して結論してゐるからである。予の短歌製作の衝迫と詞の由來吟味の動機とを同一だと見

てゐるからである。これが土岐君の結論を誤謬に導いた所以であつて、論の出發點に於てすでに錯誤がある。」（アララギ十一月號）

以上の三箇條は正しく、君の『自己の表現を他の表現に待つの態度』『内から湧きでるのでなく外からくつ附く』といふ二つの結論を根本から否定したものである。君の結論をして二たび有意義ならしめん爲めには、予の是等の一々の言を打破らなければならぬ。それには證明の利刃をひつさげて來なければならぬ。さうして女人の怨言に類する、『ラフな頭、カッとする心、虛勢を張つた不遜な態度』などの形容語を、幾たび予の言上に浴びせ掛けようとも依然として予の言の破れないことを覺悟しなければならぬ。

二

いはゆる予の『詞の由來吟味』の文（アララギ八九十月號）は簡單を極めて居り、いはゞ表のやうに出來てゐる。そして單に、『採つたのである。お蔭を蒙つてゐる。借りてゐる。由來してゐる』などと云つてゐるに過ぎない。かく簡單であつても、予の作歌活動そのものと詞の由來吟味行爲とを混同して論ずる事を予は許さない。それで物足りなければ予は以下に於て、『詞の由來吟味』の有樣に註を加へてもよい。斯る迂路の言を敢てしなければ君には理會が出來ないに相違ないからで

ある。

『詞の由來吟味』はどんな工合にして爲たかと云ふに、かつて作つた予の歌を一とほり目を通して、出典の分かり相な句に標をつけ、それから書物をさがし帳面をさがし、やうやくあれだけ整理したのである。『詞の由來吟味』を思ひ立つたのは、大正四年七月で、作歌した當時とは大分時間上の距離がある。動機に於ても二つが混同せらるべき性質のものではない。從つて、『詞の由來吟味』を公表した事を唯一の論據として予の歌を難ずるのは、妄論にあらずんば戲論である。

なほ進んで、予の『詞の由來吟味行爲』と『短歌製作の活動』とを混同するを許さない證を實例について擧げてもよい。實例は、君が君の言を保證する爲めに引用した予の歌三首ほか一首に就いてである。これならば君といへども不服とは云ふまい。

(一)　『朝はやく溜まる光にかがやきてえも言はれなき微塵をどるも』といふ予の歌は、大正四年四月の作で、架空の作でなく、實際に觸れての寫生の作である。作つた當時は斯る表現の方以外に予の力が許容しなかつたと信ずる。製作活動は絕待であつてそれに當つて他を待つを要しない。從て此歌の中の言語は無論予の生命に最も直接なものであつたのである。この予の實際の作歌經驗をかへり見た言を、若し否定

が出來るなら否定して見たまへ。つぎに『詞の由來吟味』を思ひ立つたのは大正四年七月である。その時結句の『をどるも』は確かに森博士の「青年」の中の句から影響を受けてゐると思つた。然し「青年」の中の句は瞭然(はつきり)とは記憶してゐなかつた。そこで、「青年」をはじめから讀み返して見て、『細かい塵が活潑に跳つてゐる』の句を發見し、それを予はお蔭を蒙つたと明記したのである。由つて來つた本源を明かにして感謝したのである。

(二)　『竹林に近づき來ればうつつなり我が出づる息いる息を忝(かたじけ)なむ』の歌は、大正四年一月突如父上の病氣に會して人身命の常無きを深く感じた時の作である。この歌などは最も容易に何の顧慮もなく自由に出來た歌である。この歌の詞は予の性命に最も直接なものと信ずる。然し、大正四年七月に詞の由來吟味を企てた時は、『我が出づる息いる息』の句は行誡上人の歌にある事が直ぐ分かつた。嘗て鄕里の和尙から行誡上人全集を讀んで貰つてゐたからである。上人の歌は『み佛のみ名かぞへつゝいづる息いる息またぬ世を過さばや』といふのである。次ぎに予は行誡上人の歌に此句がある以上、此句はなほその上(かみ)の僧侶の文にあるかも知れんと思つて、眞宗聖典を讀むと果して歎異鈔に、『人のいのちは出づる息いる息を待たずしてをはるものなれば』といふ文があつた。この二つを予はお蔭を蒙つた詞として明記したのである。思ふに歎異鈔からお蔭を蒙つて上人は自己の詞として一首を成してゐる。それからお蔭を蒙つて予は予の詞として一首を成してゐる。從つて表現に際しては必ずしも他を待つの態度ではない。ただ予は予の性命を如實に表はし得たのは正(まさ)しく、上人の歌のお蔭であると信ずるがゆゑに、感謝の意を表して明記し

たのである。かゝる場合に行誠上人の歌を明記したるがために、予の歌が『外からくつ附く』のであるなどとは云へない。又明記したるが爲めに、予の歌の表現が他の表現に待つの態度であるとは云へない。(注意。若し予の歌が上人の歌からお蔭を蒙つてゐるが爲めに、自己の表現を他の表現に待つの態度云々といふのであるならば、問題が少しく違つてくる。これは項を更めて後段に論じようと想ふ)。

(三)『海此岸(かいしがん)に童子音すなりうらうらと我が眼より泪(なみだ)こぼるも』の歌は大正三年八月の作である。大正四年七月、『詞の由來吟味』に著手した當時は、北原白秋氏の『空みると強く大きく見はりたるわがつぶら目に涙たまるも』からお蔭を蒙つたと思つた。然し瞭然としないが爲めに、八月に訂正增補してゐる。そして予の歌は恐らく白秋氏の『滴るものは日のしづく靜かにたまる目の涙』から影響を受けたかも知れんと云ひ、なほ『今朝ひとり泪をこぼす火鉢かな』といふ這萃の句なども、はつきりと意識閾の上にのぼつて來なかつたまでも、何時のまにか予のなかに入つてゐたものと思はれるとさへ書いてゐる。

(四)『ちひさけど命ふたつの光らめとをさなごも照る磯に著きたり』の歌は大正三年八月相州三浦郡の海濱に籠つたときの作である。當時は『命ふたつ』などの句は予の心の集注されてゐた時偶然出來たもので、前人の用語例にあるかどうかも分からない。又そんな事を思ふ暇もなかつたのである。その以後も自分の性命に最も直接な予の造語と信じてゐた。ところが詞の事をいろいろ檢べて其れを纒めようと注意してゐた頃の大正四年七月十四日の夜(童馬漫筆に明記してある)赤彥君の室で、大塚甲山子編の芭蕉俳句全集を何の氣なしに繙いてゐると、『命ふたつ中に活たる櫻かな』といふのが見つかつた。その時予は驚

いたのである。第一に『命ふたつ』の句は予の造語であると信じてゐたのに、もう過去に芭蕉が用ゐてゐるのを知つて失望したのである。第二に飜つて思ふと、予などの造語には日本語として間々不適當なのがあつて不安な場合がある。さういふ場合に若し先進の用ゐた例でも發見したときには、先進の用例は正に予の用例の妄でない事を保證して呉れるやうなものではあるまいか。かう思つて一旦失望した予の心もいい氣持になつたのである。第三に、一體『命ふたつ』の句は予の造語であると信じてゐたのに、もう芭蕉が用ゐてゐる。さうして予は『命ふたつ』の歌を作つた以前に、折に觸れて芭蕉句集を讀んだ事がある。さうすれば一度は芭蕉の『命ふたつ』の句は予の心のなかに這入つてゐたのではあるまいか。今は予自ら其れを意識はしてゐないでも、それが客觀的の證據にはならない。そこで一群の詞のなかに入れて書き記したのである。以上のやうな訣であるから、土岐氏の結論が無論當つてはゐない、と予は信ずる。

序にいふ。大正五年一月の土岐氏の歌に、『はつきりとふたつの命ありて尊し、かれはかしこを飛びわれはこゝに立つ』といふのがある。この歌の中の『ふたつの命』の句を抽出して考へれば、明かに予の歌の句から影響をうけてゐることが分かる。土岐氏はそんな事は意識しないといふかも知れない。然しそれは口實とはならない。予とても『命ふたつ』の歌を作つた當時は全然、影響云々の事は意識してゐなかつたからである。それから、このやうな場合に予ならば『お蔭を蒙つた歌』として明記しようとするのであるが、氏はそんな必要がないと云つて、氏の『獨立自營の言葉』だとして洒唖洒唖としてゐよう。併しそれならば明記した方の側の作者の歌が、『外からくつ附く』ので『自己の表現を他の表現に待つ』事になり

明記しないで、偉さうな顏をし、自分一人で言葉を發明したやうな顏付をしてゐる側の作者の歌が『內から湧く』ので『自己の表現を他の表現に待たない』事になるのであらうか。土岐氏の結論の如何に膚淺にして妄なるかを思はなければならない。

以上の實例に於て、予の行つた『詞の吟味』と『製作の活動』と混同して論じてはいけないといふ積極的な例を示した。君の言を飽くまで樹立させようとする爲めには、以上の予の言を打破して掛らねばならぬ。それには、若し予がお蔭を蒙つた詞を明記せず、知つても知らん振して默つてゐたとせば、突如として外的が內的に變化し、他の表現に待つの態度が突如として自己の絕待の表現に變化してしまふか、否かを先づ第一に明かにする必要がある。予は精到にして銳き君の辯明言の來るを切に待つものである。

三

顧ると先進の作物（性命）が予のうへに働掛けることがある。刺戟に對する反應として予は其れを反撥することもあり、受納することもある。受納するもののなかに『詞』があることがある。もつと細かくいへば一句一語の性命が予のなかに這入つて來ることがある。知らず識らず受納れることもあり、意識して受納れることもある。そのうちで特殊なものは明記して置きたいといふ

心願を有つてゐる（その理由は前言に盡く）。その一部はすでに實行した。その實行に就いての君の批難言に對する、予の否定論斷は略前言に於て盡くしたと思ふ。

ところが改良した君の言（生活と藝術二月號）を讀むと、詞の由來を明記したそのことでなく、詞の影響を受けるそのこと。詞の性命のお蔭を蒙るそのこと。もつと具體的に云へば、予の『竹林に近づき來ればうつづなり我が出づる息いる息を忝なむ』の歌が、行誠上人の『み佛のみ名かぞへつゝいづる息いる息またぬ世を過さばや』からお蔭を蒙つてゐる（予の云ふ意味にて）といふのが、自己の表現を他の表現に待つの態度で、作歌が內から湧かずして外から附加くのである、と論じてゐるらしく見える。若しかうならば問題は少しく別になつて來る。項を更めて茲に論じようとするのはその爲めである。君は此たびは（生活と藝術二月號）珍しくも少許の理由を附してゐる。その殆ど全體を掲げてそれを論じよう。

（甲）　齋藤君は「お蔭を蒙る」といふ言ひ表はしによつて、自家の作品の中に使つたものに對する過去現在の他の人々の用語の影響を調査探究してゐるのであるが、それの出典と齋藤君の謂ゆるお蔭の蒙り方とは、よほど密接な關係になつてゐる。そしてしかもその出典なるものは、單に一の言葉として見るべきものではなく　或は一の思想・或は一の情景として、すでに他の表現したものなのである。すなはち……いづ

れも齋藤君が自己の表現を他の表現に待つの態度ではないか。北原君のと云ひ、歎異鈔乃至行誡上人のといひ、森博士のといひ、いづれも一の思想一の情景の表現であつて、謂ゆる『主ある詞』なのではないか云々。

予論じて云。お蔭の蒙り方とその出典が密接な關係に立つてゐるから、自己を表現するに當つて、自己の表現を他の表現に待つの態度と必ずしも結論する事は妄である。予が『お蔭を蒙る』といふうちには、すでに『密接な關係』のある事を指示してゐるのである。眞の性命の交流なくして、密接なる性命の相互關係に立たずして徒らに外形を取るは、賤奴の模倣である。古來の偉大なる藝術家の生長の歷史を見るに、あらゆるもの（必ずしも先進の作物とは云はない）からお蔭を蒙つてゐる。然かも深甚の性命の交通があつて然るのである。お蔭の蒙り方とその出典と密接な關係に立つといふ事は寧ろ予の言の辯護とはなつても、非難の理由とはならない。君の作、『孤島抄』が島木赤彥の『八丈島の歌』に類してゐるのは、密接な性命の交流なくして然か成つたのであるか。然らばあれは賤奴の模倣とひとしい。

次ぎに、『一の思想』の情景として既に他の表現したものの中から一定の詞の影響を受けるが爲めに自己を表現するに當つて自己の表現を他の表現に待つの態度』と結論することが出來ない。

縦ひ獨立した思想情景を他が既に表現したものであらうとも、その一部のみ影響し得ないといふ事はない。その部分からお蔭を蒙る可能性を人類は有つてゐる。さうしてその部分を全く自己のものとすべき可能性を人類は有つてゐる。自己のものとなつた以上は表現に際して絶待の態度を取り得る可能性をも人類は有つてゐる。『一の言葉』として熟語字典に載つてゐるものからお蔭を蒙るのも－の情景を表現した一首短歌の詞からお蔭を蒙るのも、この點に於ては全く同一である。（ただ絶待の製作活動を離れて既成の作物を反省する時、言語用法の歴史的問題が起つてくる。予が出典を明記した理由の一つは正に玆に存してゐる。また君は『主ある詞』といふ語の概念を知つてゐない。少しく古人の書を讀む事を要す）そこで、一の思想一の情景を他が既に表現したものからお蔭を蒙ることが唯一の根據となつて、自己の表現を他の表現に待つの態度であるなどと論ずるの膚淺にして妄なることが分かつたであらう。又同時に、反對に『一つの言葉』としてすでに辭典に載つてゐるものからお蔭を蒙ることが、自己の表現を他の表現に待たない態度と論ずることの膚淺にして妄であることも分かつたであらう。

予は、縦ひ他が既に一つの思想一つの情景を表現したものからお蔭を蒙つても、自己の表現に際しては飽くまでも絶待の態度を取り得ること、決して必ずしも自己の表現を他の表現に待つの

態度でない事を明言した。それを著明なる例をもつて證明しようと思ふ。

（イ）予がお蔭を蒙つた行誠上人の『み佛のみ名かぞへつゝいづる息いる息またぬ世を過さばや』の歌は、すでに一つの情景思想を他が表現した歎異鈔の『人のいのちはいづる息いる息を待たずしてをはるものなれば云々』の文章からお蔭を蒙つてゐるのは明白である。若し上人が予であつたらその出典を明記すべき所である。かく上人の歌が一つの思想を表現した、文章の一部分からお蔭を蒙つてゐても、一首として獨立した價値を有つてゐる。歌としても相當の歌である。これをも他の表現に待つの態度などと云つて難ずることを得るか否か。

（ロ）若し『須磨は暮れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞ吹く』といふ古歌があるとせば、芭蕉の『あかあかと日はつれなくも秋の風』の句は此歌からお蔭を蒙つてゐることは明白である。併し予は正岡先生の評語の『芭蕉は之を剽竊したるに過ぎずして此句は一文の價値をも有せざること勿論なり』には從はない。寧ろ梅丸の『ただ彼妙此妙自然の吻合をしらしむるのみなり』に從はうと思ふのである。此古歌は朱紫にも茜堀にも芭蕉句選年考にも引用してゐない。又國歌大觀にも見つからない。そこで獺祭書屋俳話に引用した句解大成の引用歌に從つたのであるが、若し今この古歌の存在を假定して論ずる場合に、芭蕉の句は單に剽竊模倣のものであるといふ事を予は否定するのである。

（ハ）源實朝の『世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小舟のつなでかなしも』の歌は、萬葉の『河上のゆついはむらに草むさず常にもがもな常少女にて』『世の中は常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見

れば』古今の『みちのくのいづくはあれど鹽がまのうらこぐ船のつなでかなしも』などの、一つの情景を既に他が表現したものからお蔭を蒙つてゐる事は明白な事實である。かゝる場合に、一つの情景云々のみを唯一の根據として、實朝の此歌の價値を否定したならば、奈何なものであらうか。

その他かういふ實例は幾らでもあるが今は割愛する。かく論じ來ると、君の言は甚だ力の弱いものになつてくる。それでもなほ君の結論を固執せんとならば、破壞された薄弱なる君の立言を立證しなければならぬ。若し挽回の出來る自負心があるなら挽回して見ることを要す。

つぎに第二の君の理由を錄して論じようと思ふ。

（乙）單なる一つの言葉、日本のもつてゐる言葉と、それが一人の心を透して生命を得た結果のものとはその間にデリケエトな、しかも大きな相違のあることを承認しなければならない。一つの言葉は一つの言葉として存在してゐる。けれどもそれが一人の心を透して、その言葉が一個の思想を傳へ一個の情景を現はすものとして使用されるや、それはもはや單なる一つの言葉ではない。藝術に於て言葉の尊重すべきはこの點である。言葉のいのちはこゝに發するのである。云々。

いかにももつともな言である。併し君は君の結論を確立しようとして是等の言を云つてゐるのか。或は予の結論を助けようとして云つてゐるのかが不明である。君の是等の言は予の言を補助し辯護することには役立つても、君の結論を確立することには役立たないと思ふ。すなはち、予

の歌の『いづる息いる息』の句は、日本語であり、行誡上人の歌、歎異鈔の文のなかにもある句であるが、この句が予の心を透して一つの情景を表はした（君の句調を借る）一首の短歌中にあつては、『それはもはや單なる一つの言葉ではなく』全く予の詞となり了せたのである。から論じて來ると君の言の如何に力弱いものであるかが分かるであらう。

附言。予は『春雨を聞きつゝ居ればさ夜更けて寂しき馬の足掻は聞こゆ』といふ予の歌の『足掻』が適當でない爲めに、森博士の俳句に據つてこれを『前掻』と改めた事を明記した。つまりお蔭を蒙つた詞を明記したのである。然るに君は、この事を評して、『この語に對する熱心なる態度は敬重すべきだと思ふ』『忠實な心がけは僕等も亦た以て範とすべきだと思ふ。言葉の尊重といふ事は正にかかる點に於て眞の努力を要する』『この點に於て僕は齋藤君を尊重するに吝なるものではない』等と云つて予を賞めて吳れてゐる。予は思ひがけなき光榮を感ずる。然し『前掻』といふ語は、一つの情景として既に森博士が表現してゐる獨立の俳句中の語であつて、それから予の歌がお蔭を蒙つてゐる事は否むべからざる事實である。然らば、矢張りその他の『詞の由來吟味』と同一に取扱つて、この歌も『內から湧いた歌でなく外から附加へた歌』であり、お蔭を蒙つた態度が、『自己の表現を他の表現に待つの態度』であるといふ結論に達する訣である。

從つて予は君の賞詞を虔しく受納するに躊躇せざるを得まい。予は君の此の賞詞の前に、君が予の近作一般に蒙らせた、『內から湧きでるのでなく外からくつ附く』『自己の表現を他の表現に待つの態度』といふごとき、縱しんば疑問であり忖度であつても、苟も性命を尊重する人間にとつて、根本の侮辱であるべき是等の膚淺語を中心から破壞し盡さんとする予の意志を鈍らせようとは思はない。

四

予が君の最初の一文のなかに議論の主題を定めるのに難澁し、主題が無いと云つたに對し『あの一文を冷靜に、漫心と邪氣と無しに熟讀すれば最初から分かつてゐたに違ひないのである』と君は云つてゐる。君の言の不備を蔽ふ爲めに、僕の上に任意に冠せた、漫心とか邪氣とかの概念を以てするのは、甚だしく女性的である。それから、又『ラフなあたま、カッとする心、他をおさへて高く止まらんとする態度のものには、それの核に觸れることがおぼつかない。一つの言葉、一首の歌の研究にも、僕等は謙遜でなくてはならぬ。ひとへに他をおとさんとして急ぐ心の中に、何等の鑑賞も起るものではないのである』から君は云ふ。君の態度は可良である。けれども予の聞かんと欲するものは、斯る修身談にあらず、理の究盡にある。理の究盡を遂げずして徒らに粗

策なる結論を他に強ふるが如きは、予の欲せざるところである。

土岐哀果君。君は、『僕が茂吉君の近作を考察したのは、すこしも齋藤君の近作を詈つたり、ケチをつけるためでは無い』と云ふ。そして予が君に對つた態度について、『眞に痛切に情ないといふ氣がした』といふ。或はさうかも知れぬ。然し君が予の結論を根柢から認容し得ん曉までは君の是等の言を信じない。なぜかといふに縱ひ君の予に對しての言の言振が丁寧であつたとしても結果に於て予の性命を侮辱したと信ずるからである。若し君の言が是であつて予の言が非ならば予は何時でも君の言にあやまるであらう。若し君の言非にして予の言是ならば君は予の言にあやまらねばならぬ。それを定めん爲めに、長年月を期して相對論をなし、君の返答をも要望してゐるのである。

君は從來予を親愛し敬重して呉れたといふ。予にしみじみ感謝の念が湧く。然し今にして思ふに、親愛といひ敬重といふ語は單に無理會裏に予の身邊を廻轉してゐたものに過ぎなかつたのではあるまいか。さも無くんば、予の近作一般に對し、予等の萬葉尊重に對し、全くの無緣者間に於てのみ發せらるべき性質のかの如き評語をば下し得ないと信ずるのである。無理會の親愛、敬重は予にとつて寧ろ苦痛である。併し現在に於て君と予とは縱しんば無緣の狀にあらへども、な

ほ現世に於て結緣の絕待否定を言明する事は未だ早いかも知れぬ。若し相互間に理會の道の開けん時あらば、その多幸なるものは單に予のみではあるまい。とき嚴寒に際す切に心身を愛しむことを要す。（二月五日六日十一日）

『なむ』『な』『ね』の論

1　『なむ』『な』『ね』に就いて

○文　法　の　說

ことばあれば、そのなかにおのづから文法が具はつてゐる。それを學者が法則として整理するのであつてこれが『文法』である。それゆゑことばが變移すれば從つて文法も變移する。そのことばの變移のうちには、ある一人の謬智のために、自ら知らず識らず先代語法を破ることがある。その破つた語法をまた周圍の徒が模倣して、それがひろがつて一つの語法をかたちづくるに至ることがある。これは意識して語法を創じめ革めるのと趣がちがふ。知らずに好い積りでゐるのである。

三井甲之氏の『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』の、『なむ』の用ゐざまなども謬妄から來て居る。この誤謬は三井氏に限つたことではない。よく少年の徒の陷る誤謬の一つである。この誤謬を久保田氏から指摘されて、三井氏はそれに服せない。そしてさも意識して、萬葉歌人などの用ゐざまをよくよく呑み込んでの上の用法であるが如くに云つてゐる。これは瘦我慢と謂はむよりは寧ろ妄執である。武者小路氏の文章にむかつて『君らの日本語が』などといつてその語法の變則をわらつた三井氏が、こんどはあべこべに自分の誤謬に我を張つてゐる。このぶんに行くと、『新文法を創造して見せる』などと息卷くに至るかも知れぬ。創造もよい。それには『中心性』が要る。そしてその『中心性』は群盲に取り卷かれるといふごとが先づ第一の要約であるに相違ない。

〇萬葉集中の『なむ』の用例

むかしの文法學者だといつても、さう二二が四的にばかり行つてはゐない。たいがい用例から歸納したものである。その證據を示すために、萬葉集中から少しく用例を拾つて見よう。さうすると、『咲かなむ』『有らなむ』を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは平安朝以

後であると做し、萬葉集へ溯つて自由な言葉を求めよなどいふ三井甲之氏の言がいかに萬葉集に無關係であるか、又その言がいかに謬妄であるかは、おのづから分かつてくるのである。

海津路乃　名木名六時毛　渡七六　加久多都波二　船出可爲八（萬葉集卷の九）

この歌を古來、『海つ路の和ぎなむときも渡らなむかく立つ波に船出すべしや』と訓んでゐる。この訓方は既に定說である。そして連用言から受けた『なむ』と、將然言から受けた『なむ』の二つを一首中に含んでゐる例である。古義でこの歌を解して、『歌の意は浪風靜まり、海路の平らかに和ぎたらむ、時を待ちて、海上の方へ渡り行き賜はなむ。かく風高く浪荒き時に臨(なり)て、船(ふな)發(で)したまふべき事かは、今暫く時を候(うかがひ)て、船發(ふなで)し賜へとなり』と云つたのは正しい。これは高橋蟲麻呂が鹿島郡苅野橋で大伴卿に別れる時に詠んだ歌であるから『渡らなむ』は大伴卿に對する願望なのであつて、萬葉集ですでに、連用言を受ける『なむ』と、將然言を受ける『なむ』の間には意味のうへで截然たる區別があつたのである。

筑波ねにかか啼く鷲の音のみをか奈岐和多里南あふとはなしに（萬葉集卷十四）

打靡く春ともしるく鶯はうゑ木の木間を奈伎和多良奈牟（萬葉集卷二十）

第一の歌の『鳴き渡りなむ』は、『鳴いて居るであらう』の意である。第二の歌の、『鳴き渡ら

なむ』は、『鳴いてくれればよい、』で、他に對する願望である。第二の歌は、庭に植木を植ゑて、その祝宴に際して詠んだ歌であつて、鳴いてくれと鶯に對して願望の意を表はしたのである。三井氏の說の謬妄なる證である。

ほととぎす奈保毛奈賀那牟もとつひと懸けつつもとな我を哭し泣くも

ほととぎす此處に近くを來啼きてよ須疑奈無のちにしるしあらめやも

この二首の例歌は共に萬葉集卷二十に所收のものである。そして、同じやうな形の二首の中に、將然言を受ける奈牟と連用言を受ける奈牟とを含んで居る。この二つは、元正天皇（先の太上天皇）と、薩妙觀との應答の歌であるが都合のよい例である。第一の歌は杜鵑に對する願望の意である。古義の著者は、『奈伎那牟と宣はずして奈加那牟とのたまへるは鳴けかしと希ひたまふ御意なればなり』といつたのは正しいのである。第二の歌の『過ぎなむ』は無論他に對する願望でない。

まどほくの野にも安波奈牟こころなく里のみなかにあへる背かも（萬葉集卷十四）

今までの例の他に對する願望は、行爲に關した動詞の場合でないからだなどと詭辯を弄する者が居るかも知れないから、『逢ふ』といふ動詞の例を引いておく。この歌の『安波奈牟は逢へか

しとの意なり』といふ古義の解は無論當然である。拾穗抄の著者が、『里にて逢へば人目有用心もなくと也』と云つたのは、この歌を理會した言である。この歌を解するには『心なく』に心をとめなければならぬ。この歌は、男の方から不用心にやつて來て女を引出して逢つた趣であつて、『心なく』は、萬葉集巻一の、『大和戀ひいの寢らえぬに心なくこの渚の崎に鶴なくべしや』などと同じく他に對する不滿をあらはしてゐるのである。そこでこの歌の『逢はなむ』は女の方で『逢ひたい』または、『逢はう』といふのでなくて、『逢つて呉れればよいのに』と男に對する希望すなはち他に對する希望をのべた『なむ』の例である。苦しまぎれに我執の解釋をつける者も居ないとも限らないから、少し委しく說明するのである。

あらたまの年の緒ながく照る月の厭かぬ君にや明日別南（萬葉集巻十二）

よそのみに君を相見てゆふたたみ手向のやまを明日か越將去（萬葉集巻十二）

この場合の『別れなむ』『越えなむ』は將然・連用同形であるが、この歌の場合は連用言を受けたものであることは、一首の意味の上から充分わかる。それゆゑに他に對する願望ではないのである。

かくだにも妹を待南さ夜ふけていで來し月のかたぶくまでに（萬葉集巻十一）

この歌の『待南』は『待ちなむ』であつて『待たなむ』ではない。他に對する願望の意でないからである。自己の行動をあらはす動詞でも、『待ちなむ』と『待たなむ』と截然たる區別があるのである。なほ次の例を見よ。

情有南畝（卷一）　梶之母有奈牟（卷七）
後毛將鳴（卷八）　久志呂爾有奈武（卷九）
渡七六（卷九）　時母鳴奈武（卷十）
衣丹有南（卷十）　奈保毛奈賀那牟（卷廿）

これらは將然言から受けた『なむ』の用例であつて、悉く他に對する希望の意があるのである。

和何余須疑奈牟（卷五）　許布夜須疑南（卷五）
阿我和加禮南（卷五）　伊能知周疑南（卷五）
故非和多里奈牟（卷十）　孤悲和多利奈牟（卷十七）
知利賀須疑奈牟（卷廿）　宿受屋奈里奈牟（卷十四）
波夜久奈里那牟（卷十七）　名木名六時毛（卷九）
須疑奈無能知爾（卷廿）　知里奈牟能知爾（卷廿）

知里奈牟山爾　（卷十五）　都藝奈牟毛能乎　（卷十四）

阿須波吉奈武遠　（卷五）

これらは連用言から受けた『なむ』の用例であつて、他に對する願望の意のない場合である。これらの例は、訓方に異見の這入る餘地のないものゝみを選んだのである。『面忘南』『戀度南』『相別南』『我藻將依』『我者將依』の類を書けばまだまだ多い。

百人一首にある『み幸待たなむ』の例は萬葉集のものでないにしろ、その用法は萬葉集のと違はない事は以上の實例を以て解明する事が出來る。この項の連續は來月號にて發表することにした。

○願望の『なむ』の用例　續き

萬葉集卷十七の『ほととぎす來啼かむ月にいつしかも波夜久奈里那牟うの花のにほへる山を外のみも』云々の用ゐざまが一寸變つてゐるやうに見えるところから本居宣長なども疑問をさしはさんでゐる。

これは「ならなむ」といふべき格なるを、「なりなむ」といへり。但し上に「いつしかも」

とあれば、いつかならむと思ひて待つ意としても見るべし。そのときは、つねの「なむ」なり。

この『なむ』の用例はよく味つて見ると、矢張り推量が主で他に對する願望ではない。宣長が『いつしかも』に目をつけたのは注意ふかい。かう實例を集めて見ると除外例だも無くなつて來る。古人は予を欺かない。

以上、萬葉集中の用例のほかに古今集以下のものを少しばかり拾つておく。これも參考になると思ふ。

さくら花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の來ても見なくに（古今集卷の二）
さつきまつ山ほとゝぎす打はぶき今も啼かなむこぞのふるごゑ（古今集卷の三）
今よりはつぎて降らなむ我が宿のすゝきおしなみふれる白雪（古今集卷の六）
たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ（古今集卷十二）
わすれ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜はおかなむ（古今集卷十五）
月夜にはこぬ人またるかきくもり雨も降らなむわびつゝもねむ（古今集卷十五）
春日山をのへの雪も消えにけりふもとの野べの若菜つまなむ（新葉集卷の一）

小倉山みねのもみぢ葉心あらば今一たびのみゆき待たなむ（拾遺集卷十七）

わが宿の櫻の色はうすくとも花の盛りは來ても折らなむ（後撰集卷の二）

雁がねぞけふ歸るなる小山田の苗代水のひきもとめなむ（後拾遺集卷一）

この將然言を受ける願望の『なむ』は、散る、降る、啼く、などの人間以外の働きに多く用ゐる動詞の場合でも、また、待つ、行く、折る、貸す、などの自己の行爲にも他の行爲にも用ゐる動詞の場合でも、縱ひ一首上各特殊の色調はあつても、同樣、他に對する希望の意味なる事は萬葉以來の用例を見れば分かる。新葉集卷一の『若菜つまなむ』などは特によい例である。

この將然言を受ける願望の『なむ』について、山田孝雄氏は、『自家の情的傾向を豫想的にあらはすなり』と說明するが、情的傾向などゝ云つても意味が瞭然としない。それよりも堀秀成などの說明の方が精細で且つ自然である。秀成いふ。『奈牟と成る時は、其願はしきことを思ふ意の辭となる。されど此はばやなどの如く切に願ふ意はなく、物の自然しかならむことを平和に願はしく思ふ意也。然るに世にはたゞ一向に願ふ意とこゝろえたるはいと粗漏ことなり』。秀成のこの說明は例の音義說に立脚してゐるのである。富士谷成章の解は後段に抄する。これを見ても、『待たむ』『待たな』と、『待たなむ』との間に根本の相違あることがわかるのである。なほ用例

を拾ふ。

垣越に散り來る花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ
白露のおくに數多の聲すれば花のいろいろありと知らなむ
わび渡る我が身は露と同じくば君が垣根の草に消えなむ
こずやあらむ來やせんとのみ河岸の松の心を思遣らなむ
散りちらず聞まほしきを故郷の花みて歸る人も逢はなむ
夏の夜の月は程無くいりぬとも宿れる水に影はとめなむ
秋の野にかりぞくれぬる女郎花今宵ばかりは宿もかさなむ
彥星の行合をまつかささぎの渡せる橋をわれにかさなむ
山櫻にほふあたりの春霞かぜをばよそにたち隔てなむ
よひのまも待つに心や慰むと今こんとだに賴めおかなむ

以上の引用例で、予は、『任せたらなむ』『嬉しからなむ』『久しからなむ』『君は來ななむ』『思はざらなむ』『うちもねななむ』などをしばらく除去しておいた。混雜するといけないからである。これも願望の意味である。それから所謂、『係のナム・ナモ』は無論こゝでは論じてゐない。

なほ、兒良波安波奈毛。世奈波安波奈母。などの奈母が原形で、奈牟はそれから轉じたのだと山田氏はいふ。また、雲谷裳情有南畝の南畝は恐らくは奈母で『牟』と『母』は瞭然區別せずに發音してゐたのかも知れんと云つてゐる。

この項のはじめに、萬葉集の長歌中の『なむ』を解釋するのに、本居宣長が『いつしかも』に注意したのは好いと云つた。それと關聯してなほ他の一首に就いて書きおく。

萬葉卷八に大伴家持が坂上家之大孃に贈つた歌に、『わが宿に蒔きしなでしこ何時しかも花爾咲奈武なぞへつゝ見む』といふのがある。この『花爾咲奈武』を舊訓では『花に咲かなむ』と訓んでゐて、考も略解もそれに從つてゐるが、契沖が先づ此訓方に異說を少しく出し、雅澄がそれを襲いで『花に咲きなむ』と訓むべきことを力說してゐる。予も契沖の說に從つて、『花に咲きなむ』と訓んでゐる。左に先進の說を抽出する。

咲奈武は六帖にも、サカナムとあれど、願ふ詞なれば、いつかと云にかけあひがたき歟。サキナムと點じ換べきにや。但後撰に、小野宮殿の歌に、『松も引若菜も摘ず成ぬるをいつしか櫻はやも咲かなむ』とあれば、今の點ひが事にあらず（代匠記）

此歌にてはサキナムならでは協はず。奈武は常の奈武の格なればなり。サカナムと云ときは、奈武の詞、

希ふ意となるが故に、上に何時毛(いつしかも)とあるにかなはざるなり。咲をサカナム、待をマタナム、逢をアハナム、摘をツマナム、有をアラナムなど、五音の第一位の阿韻よりつづけたる奈武(なむ)は、いづれも希ふ意の奈武(なむ)なる格なればなり。

しかるを、此歌をも、『いつしかもはやく花に咲けかし』と希ふ意と心得て、サカナムと訓は後世意なり。すべて希ふ意の奈武の上のかかりは曾也何等の詞をおくこと古に例なきことなればなり。（中略）しかるを、後撰集に、『松もひき若菜もつまずなりぬるを、いつしか櫻はやも咲かなむ』、拾遺集に、『いつしかもつくまのまつりとくせなむつれなき人のなべのかず見む』など、上にいつしかといひて、希ふ意の奈武(なむ)にてうけたるは古にたがへり。そもそも『いつしか』といふは、何時かとその時を待遠に思ふのみの意の詞なるより轉りて、いつの間にやらむはやく、といふ意とせるより、希ふ意の奈武にて、下をうくることになれるなり。さてそれより後には、いつしかといふ一の詞の如くになりて『いつしかぬるる』などやうに云ることの多かるは、又更(さら)に轉りたるなり。（古義）

しかし此訓方は未だ定説までには行つてゐないやうであつて、折口氏も『花に咲かなむ』と訓んでゐる。なほ雅澄は、源氏物語、紅葉賀の、『よそへつゝ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花。花に咲かなむと思ひ給へしもかひなき世に侍りければ』とあるのをば、『今の歌によりて書るものなり』と解釋してゐる。つまり、源氏物語の歌の詞書(ことばがき)中の『花に咲かなむ』を

ば、直接萬葉集の此歌を訓ちがひて、それから思付いて書いたやうに解釋してゐるのである。併し此は杜撰であつて、源氏物語のこの歌の『詞書』(實は歌に添へた消息文)のなかの『花に咲かなむと思ひ給へしも』云々は、萬葉集の此歌から來たと觀るよりも、後撰集の讀人不知の『我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつゝ見む』といふ歌から來てゐると觀る方が正しい。後撰集を天曆五年の撰とし、源氏物語の制作を長保の末から寛弘の初めとするとその間にも五十有餘年の距離がある。紫式部が萬葉集に親しんだとするよりも後撰集に親しんだとする方が、源氏物語所載の歌風から看て自然である。それゆゑ、紫式部が萬葉集の歌を勝手に改作して、『花に咲かなむと思ひ給へしも』といふ文章を書いたとみるのは杜撰である。後撰集の此歌は萬葉集の家持の歌が本歌であつて、『いつしかも』を削り、『なそへ』を『よそへ』とし、『蒔きし』を『植ゑし』として、當代風にしたのである。『咲かなむ』としたのは、意識してさうしたので、他に對する希望の意である。誤謬ではない。

○『な』と『なむ』の說

三井甲之氏の、『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』の『なむ』の用

法は、自分の意志をあらはすやうに使つてゐる。然るに日本語の慣用では、かゝる『なむ』は他に對しておのづと希求する意であるから、三井氏の用法は謬妄だと、萬葉びとの用例に據つて證明した。この事は島木赤彦氏もすでに論じてゐる。しかるに、その島木氏の説に三井氏は服せず辯解の説をなしてゐる。三井氏の説によると、『待たなむ』といつたのは、『待たな』といふつもりのところを、据わりが惡いから、『む』を足して、『待たなむ』としたのだと、かういふのである。つまり、『待たな』の代りに、『待たなむ』としたといふのである。予もおもふに、三井氏の説には理が無い。そして日本語尊重を力説しながら、予等が祖先の言語を根本から無視した説である。ゆゑいかんとなれば、

筑波根の裾わの田ゐに秋田刈る妹がりやらむもみぢ手折奈（萬葉集卷九）

たちばなの古婆の波奈里が思ふなむ心うつくしいで安禮波伊可奈（萬葉集卷十四）

八千くさの花はうつろふときはなる松のさ枝を和禮波牟須波奈（萬葉集卷二十）

八千くさに草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つゝ思怒波奈（萬葉集卷二十）

君の家に植ゑたる萩の初花を折りて插頭奈旅わかるどち（萬葉集卷十九）

いましらす國の都に妹にあはず久しくなりぬ行きて早見奈（卷四）

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつゝ阿素毗久良佐奈（卷五）

白波の千重に來寄する住吉の岸のはにふに二寶比天由香名（卷六）

玉つしま磯のうらまのまなごにもにほひて去奈妹が觸けむ（卷九）

わが待ちし秋萩さきぬ今だにもにほひに往奈をち方ひとに（卷廿）

天のがはあひむき立ちてわが戀ひし君來ますなり紐とき設奈（卷八）

雨もふり夜もふけにけりいまさらに君は行かめやも紐解設名（卷十二）

ほとゝぎすきけどもあかぬ網取に獲りて奈都氣奈かれず鳴くがね（卷十九）

高圓の尾花ふきこす秋風にひもとき安氣奈たゞならずとも（卷廿）

うつせみは數なき身なり山河の淸けき見つゝ道を多豆禰奈（卷廿）

消のこりの雪に相照る足びきの山たちばなを都刀爾通彌許奈（卷廿）

朝戸出の君が足結をぬらす露原早く起きて出でつゝ我も裳の裾閏奈（卷十一）

ぬば玉のこよひの雪に率所沾名あけん朝に消えば惜しけん（卷八）

生きの緒におもへばくるし玉の緒のたえて亂名知らば知るとも（卷十二）

以上の用例をよく吟味すると、將然言を受ける『な』は、盡く自分のことに繫つてゐる。たと

ひ周圍の者の行爲もそのなかに交錯してゐてもよいところがあつても、つまり自分の行爲に關して自希の意志をあらはしてゐる。しかるに將然言を受ける『なむ』は、盡く他の行爲に關して自然に希ふ意をあらはしてゐる。この自他の關係に立つて、『な』と『なむ』とは慣用上の區別があるのであつて、『なむ』を以て『な』に代用せしむる事は謬妄である。ことに古代言語を尊重すといひ、萬葉集の言語を云々する三井甲之氏のごとき人々にとつて、この二つの混同は許容せられない筈である。これが三井氏の說に理が無い證である。『待たな』のかはりに『待たなむ』といつた語法の謬妄な證である。

この『な』は『む』に通ふものだとしてある。ただ『む』は自他共に用ゐるが、この『な』は、『ただ自らしかせんとする事にのみいひて、他のうへをおしはかりうたがふやうの事にいへる例はなし。これ牟とのたがひめなり』と本居宣長も詞瓊綸でいつてをる。この項の例は、去來結手名。加射之爾斯弖奈。などの『な』は除いたのである。斯奈奈。伊奈奈もこの項に入れてよい。廣池氏の『な』と『なむ』混同說は謬妄なること玆でも明白である。

大槻博士が言海中に入れた語法指南で、『なむ。願ヒ又ハ吩咐フル意ヲイフ語ニテ、押さなむ。受けなむ。生きなむ。有らなむ。ナド用ヰル是ナリ。此語ハ語尾變化ナキノミナラズ、古クハ行

かな。言はな。トノミモイヒタレバ願フ意アル感動詞ナルベクモ思ハルレド尙文ノ末ヲ結べバ助動詞タルベシ』と云つてゐる。つまり、願望の『なむ』と、『な』の自他の差別を混同してゐるので未だ杜撰の言たるを免れない。そして此の大槻博士の說は、富士谷成章の脚結抄を踏襲したものである。しかし博士も最早廣日本文典では混同してゐないやうに訂正してゐる。

大槻博士の初期の文法の本をなした、富士谷成章の脚結抄に此の『なむ』を論じて、『里。テクレヨといふ。世にこれを願ノナムといひつけたれど、願にはあらで唯そとあつらふる詞也。チラバチラナムといへる詞をおもふべし。上世にはおほくナ とのみよめり』といつてゐて、『なむ』と『な』を混同してゐる。このへんになると用例に重きを置いた本居宣長の方が說に精しいのであつて、予の歸納說もそこに落著くのである。

〇ひとつの『な』の例

將然言を受ける『な』は自ら希ふ意なることを實例について證した。ところが唯一首、萬葉集卷十七に、『道のなか國つ御神は旅ゆきもしゝらぬ君を米具美多麻波奈』といふのがある。本居宣長はこの例について、『これを他のうへにいひて、たまはなむと冀ふ意に聞えたり。例なきこ

となり。もしは奈の字は尼か年かなどの誤にて、たまはねにはあらざるにや』と云つてゐる。これは萬葉集中のただ一つの異例である。佛足石の歌にも、和多志多麻波奈。須久比多麻波奈。とあり、なほ、續紀宣命にも、治賜波奈。とある。

萬葉集中には上記一首のほか盡く、『ね』である。麻乎志多麻波禰。咩佐宜多麻波禰。令變賜安米母多麻波禰。などがその例である。

此等の『ね』といふべきところを『な』といつたのは除外例である。そしてよく見ると、盡く『賜』に續けたもののみである。そこで、『賜』に限つて『賜はね』とも、『賜はな』ともいつたことがあるといふことに歸著する。しかもこの唯一つの訛の『奈』は、この儘の形としてみると、『奈牟』との流轉關係は無くして、寧ろ、『禰』または『牟』との流用と看做すべきものである。さきの『賜はね』の例のほかに、依賜將。御見多麻波牟曾。賣之賜牟登。などの例がある。もう一つの愚按に、萬葉の、米具美多麻波奈は一つの訛であつて、それが少しばかりの例の間に擴がつたに過ぎない。或は多麻波理の例があるからして、『賜はらな』といふところを、『良』の舌音の發音し難いところを省略したのかも知れない。此等の除外例に於てすらも、自他の行爲を混同した、『待たな』と『待たなむ』が同一でないといふことが明かである。

○三井氏の文法論

前項には祖先が使つた『なむ』の實例をあげた。ここには、三井甲之氏の『なむ』に對する辯護說、つまり一種の文法論を吟味してみる。いま殆ど全體の主要な點を抄記して予の考を述べる。

（1）　この『なむ』は『ぬ』の變化に『む』の連續したものではなく、『なむ』は分つべからざる助詞である。大槻博士は、『なむ』願ひ又は吩咐ふる意をいふ語にて、『押さなむ』『受けなむ』『生きなむ』『有らなむ』など用ゐる是れなり。此語は語尾變化なきのみならず、古くは、『行かな』『言はな』とのみもいひたれば、願ふ意ある感動詞なるべくも思はるれど、尙文の末を結べば助動詞たるべし。と云つて居る。『な』の代りに『なむ』を用ゐることは詩としての自由と語の音調を重んずる上から强ひて排するに及ばぬと思ふのである。

この『なむ』（將然言を受ける）は『な』に『む』の連續したものでなく、分つべからざる助詞だといふのは好い。三井氏は、先づ此言分を自ら忘却しない方がよい。次に大槻博士の字書言海中の言を引いて據どころとしたのは淺薄である。大槻博士の言は、自他の差別も、萬葉時代の用語例も無視した杜撰の言であるからである。なぜかといふに、博士は、『な』と『なむ』を同居せしめて論じてゐる。つまり古代の用例を無視してゐるのである。實際の用例を無視して初期の

文法說に賴らうとした三井氏の論は先づ第一の缺陷にはひつてゐる。次に、作歌に際して、『ななむ』を混同することは、本人が强ひて混同したくば混同したところでかまはない。本人が無理に混同しようとするのを排じたところで何になる。ただ祖先の用語例を正當と見て、それを標準とせば、その混同は謬妄だといふのである。通用しない作者本人だけの用法だといふのである。

（2） 萬葉の『吾が宿にまきしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む』の如きは言ふまでもなく『咲きなむ』である。源氏物語に、『花に咲かなむ』とあるは誤としてよい。何となれば、『ぬ』の變化ならば『咲かぬ』とはいはれず、自ら『咲かなむ』とは言はれぬ道理である。

萬葉の用例を認容したのはよい。源氏物語の文章の語法を『誤としてよい』といふのは勝手な謬妄である。源氏物語紅葉賀中の文章の『花に咲かなむ』は、あれは花に對して希望を抒べた句で作者がさう意識して使つた用法である。ところで予のさがしたかぎりでは、『花に咲きなむ』の萬葉の歌を『咲かなむ』と改作して引用した歌は源氏物語には無い。三井氏の『引用』は少しをかしい。ただ後撰集卷五に、『我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつゝ見む』といふ讀人不知の歌があるのみである。此歌は萬葉の歌に似てゐるが、一首全體の意味からみて『花に咲かなむ』は正當の意味を有つてゐる。萬葉のは推量のナムである。後撰集のは願望のナムで

ある。讀人不知の作者（或は後撰集の撰者）が意識して他に對する希望の意味に使つたのである。そこで『花に咲かなむ』が誤だといふ三井氏の説の誤であることが明白になつてくる。ことに、『花に咲かなむ』の誤だといふ説を樹てるに、『ぬの變化ならば咲かぬとはいはれず自ら咲かなむとは言はれぬ道理である』などといつてゐる。『ぬの變化にむの連續したものでなく、なむは分つべからざる助詞である』と九行前でいつたその脣の未だ乾かぬうちに、『ぬの變化ならば』と云々するに至つてはをかしいといはざることをえぬ。

もつとも三井氏の『奴の變化に牟の續いた奈牟』が連用言を受ける『なむ』であるといふ説には、種があるのであつて、山田氏なども複語尾相互の關係を說くところで、『ぬらむ』『ぬべし』などと同樣に取扱つて、『咲きなむ』は『咲きぬむ』だとしてあるのである。つまり『咲かなむ』と、『咲きなむ』は其の成立が違ふといふのである。大槻博士のは其と少しく違ふのであつて、『咲きなむ』のナムは、『ヌ』の半過去助動詞が、『ナニヌネ』と活用するからして、その將然段の『な』に『む』の添はつたものだとしてゐる。金澤博士などもこの説を踏襲してゐて、それゆゑ半過去未來のナムと稱してゐる。三井氏のは大槻博士の言を種としたのである。

かく『咲かなむ』『咲きなむ』の『なむ』の各二つが成立上から區別すべきものだといふなら

ば、源氏物語（後撰集の歌に由來した）の文章の『咲かなむ』の『なむ』を取扱ふのに、『咲きなむ』をもつて律して、『ぬの變化に』云々といふのは間違つて居る。特に『咲かなむ』を誤だといふに至つては言語同斷である。それが、將然言を受ける『なむ』は、分つべからざる助詞だと認容して置いて、直ぐ源氏物語の文章の、將然言を受けた『なむ』が誤だといふのだからひどい。予が前行で自らの言を自ら忘却するなと云つたのはここだ。

一體、『咲きなむ』の『な・む』は『ぬ・む』または、『な・む』または、『にあらむ』だなどといふのは、學者が文法系統を樹てるための知識欲の滿足としては興味があらう。しかし眞に詩を味ふうへからは、そんな事よりも實例を多く集めて、その一々の意味と情調とを吟味した方が好い。ことに一つの假說をば直ぐ採つて、謬妄の辯護に役立たせようとするのは不徹底である。

（3）　普通の文典では、『有りなむ』の外に『有らなむ』を希望をあらはす助動詞として說明してゐる。しかし、『有りなむ』『咲きなむ』で十分に希望の意をも現はすべきである。これは未來を示す『む』に連續する『ぬ』の性質から自然に推理せらるるのである。『ぬ』は動作の現實的完了を示すのであるから、それを未來に期待することは自ら希望の意味を帶ぶるに至るのである。

普通の文典では、『有りなむ』を希望だとはしてゐない。又、『有らなむ』の『なむ』は助動詞

として は說明してゐない。助詞或ひは感動詞としてある。大槻博士の如きも初期には、『助動詞たるべし』などと云つたが、今は感動詞としてある。この三井氏の言も魯鈍言である。

それから、『咲きなむ』で希望の意味を十分あらはし得るといふのも、單に理窟で、實際の用語例を無視した說である。又山田氏のやうに『なむ』（奴牟の變化といふもの）『奈麻志』（奴麻志の變形と謂ふもの）と、『ぬらむ』（奴と良武）『ぬべし』（奴と倍斯）『ぬらし』（奴と良志）と同一の發育史を有つやうに說くにしても、實際慣用例の、『なむ』『なまし』と『ぬらむ』『ぬべし』とは、『時』の關係を指示する心の持工合が大にちがふのである。こんな形式上からでなく、實例に逢著すると思ひなかばに過ぎるものがある。

かういふ形式的な文法論をば據どころとして、『む』は未來をあらはし、『ぬ』は動作の現實的完了だから、自ら、未來に期待するやうになる、そこで『咲きなむ』の『なむ』は充分希望の意味をあらはし得るといふやうな三井氏の說は、極端な音義說よりも珍なる說である。かういふ分解論が好きなら、將然言をうける『なむ』をも分つべからざる助詞だなどと諦めずに、その分解論を試みるはうが好からう。說を樹てゝゐる人もゐるからである。

（4）　『咲きなむ』の『なむ』は客觀的狀態を主としていふのであつて、『咲かな』『咲かなむ』の『なむ』

は直接に主觀の意志を表示するのである。それ故に二つの『なむ』が異つた意味を現はすといふ從來の說は杜撰であつて、一は助動詞として狀態に關する希望を、一は助詞又は感動詞として主觀の意志を直接に現はすのであるから、同じく希望の意味を現はす場合に前者よりも後者の方が意味を强く言現すのである。

先きに、源氏物語の『咲かなむ』が誤であると謂つてよいと明言した三井氏は、こゝでは『咲かなむ』の『なむ』は直接に主觀の意志を表示するものだなどといつて、實に濟ましたものである。さきに否定して未だ唇の乾かぬうちに又其を肯定してゐる。自家撞著などいふ、もろこし人の造つた熟語を、このごろ忙しいので忘れてゐたが、三井氏の言を讀んで端なくも思出した。なほ、こゝでも三井氏は、『咲かな』と『咲かなむ』とを一緖にして論じてゐる。そして、この『な』『なむ』は直接に主觀の意志を表示するものだとしてゐる。直接に主觀の意志といふと、花ならば、花自身が直接に主觀の意志を發表して、『花咲かな』といふことになる。つまり花自身が自ら、『花咲かう。咲きたい』といふことになる。そんな屁問なことがあるものか。それゆゑ上代にはこんな例はないのである。それから『咲かなむ』が若し假りに花自身の直接意志をあらはすと假定したならば、やはり萬葉集の『啼かなむ』は鶯自身の直接意志を表はして、鶯自身で『啼きたい』といつた事になる。こんな勝手なことはない。こんな事では萬葉集の將然言を受

げる『なむ』の一つも解釋することが出來ない。これを他に對する願望の意に解して、『咲いて呉れればよい』『啼いてくれればよい』と解して始めて條理が立つのである。三井氏は『待たな』と『待たなむ』とを混同して用ゐ、それについて妄執を敢てしようとするから、かかる苦しまぎれの哀れむべきところに落入るのである。さきに、『咲きなむ』『咲かなむ』の『なむ』の二つに根本の相違あると說いた三井氏は、ここでは、『咲きなむ』『咲かなむ』を異つた意味だとする從來の說が杜撰だといふに至つては驚かざることを得ない。烟に捲くやうなあやふやな事をいつて人をごまかしてはいけない。

(5)『な』が『なむ』と混同せしめられたのは主として音調の上の要求からであらう。『殺さな』といふ此の『な』は『む』と同じ意味で『殺さむ』といふと同じだと本居宣長は言つて居る。しかし彼も『なは自ら然せむと欲ることとのみ用ひて』といつて、それが主觀の意志を直接に表示するを認めて居る。それ故『待たなむ』は『待たな』と同じ意味で『待ちなむ』とは全く異つて居る。

『な』が『なむ』と區別せられずに混同せられたのは、上代には『賜はな』の一異例が少し問題になるのみで、全く無いことである。次に、本居宣長の詞瓊綸の言を引用するのは好いが、宣長の言は三井氏の說の辯護にはならず却つて反對なのである。宣長は、『なは自ら然せむと欲す

ることにのみいひて』といふのであるから、三井氏が前に引いた『咲かな』の例とは合はない。また詞瓊綸の將然言をうける『なむ』の條を見ると、盡く他に對する願望の意に解して例を引いてゐる。宣長は『な』と『なむ』で自他をはつきり區別してゐる。そこで宣長の說を味方とし、『それゆゑ待たなむは待たなと同じ意味で』とはいへぬ。『それゆゑ』が辻褄が合つてゐない。それから前言で、『待ちなむ』と『待たなむ』の二つの『なむ』が異つた意味だとする從來の說は杜撰だと云つた三井氏が、ここで、『待ちなむ』と『待たなむ』とは全く異つてゐると云つて居る。ここで『全く』といふのは字義どほりに『全く』と解してよいのであらう。予は何がなし狐にでもつままれた樣な氣がする。

要之。三井氏の『待たな』『待たなむ』同義說には、何等の根據をもみとめることが出來ない。

わすれてゐたが、三井氏の論の公にされた雜誌は、大正六年四月十五日發行の「日本及日本人」である。予は自分の都合の好いやうにばかり、三井氏の文を抄出しなかつた事を證する爲めに、雜誌の名を明記しておくのである。（大正六年六月二十五日）

○連用言を受くる『なむ』

予が『なむ』を論じたのは、三井氏の、『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』の『待たなむ』の用ゐざまの謬妄なること、それからこの歌の『待たなむ』は『待たな』といふべきところを口調のうへから『む』を加へたのであるといふ三井氏自身の說明の無根據なることを、予らが祖先の用例、主として萬葉集の用例を標準として證したのである。

それゆゑ、主題は、將然言を受くる願望の『なむ』にあるのである。しかし『なむ』にも種類があるから、混同しないやうに、そのをりをりに注意して來た。そして先づ、連用言を受くる、『なむ』の萬葉集中の用例を對照として揭げた。ところが、七月十三日の時事新報文藝欄をみると、三井氏はかう云つてゐる。

次に、『なむ』に就いての論ですが、僕は助動詞『ぬ』と『む』とが連つて成立つた『なむ』と、係の助詞『なむ』『なも』感嘆詞『なむ』から類推される『なむ』或は希求の助詞『な』と同じ意味の助詞としての『なむ』とを分つて論じてゐるのですから、ここへ御注意願上ます。『なむ』の種類や成立に就いて考へずにただ『なむ』の例のみを擧げて御論じにならぬやう願上げます。

○右は時事新報の文を三井氏自身の改正したのに據つた。

このたびの予の論を讀めば、かういふことは云へなくなつてくる。予は「アララギ」前月號で、

『なむ』の論がいまだ未完であることを明記しておいたのに、そこを注意しないところに三井氏の言說の特徴があらう。

予は連用言を受くる推量の『なむ』の成立に對する先進の說にも顧慮してゐる。それは前言で明かである。しかしなほ念のために玆に一まとめにしてもよい。

（1）脚結抄のいはゆる、『去倫のなむ』であつて、この『なむ』は『ぬ・む』からいでてゐる。俚語でいへば、『テシマハウ』である。人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでなむ。は『色ニ出テシマハウ』である。

（2）山田孝雄氏の說は、成章の踏襲で、『ぬ・む』からいでてゐる。心は花になさばなりなむ。は『ナツテシマフデアラウ』である。

（3）大槻氏の說は、ヌの活用なるナに未來のムを連ねたもので、『な・む』である。半過去のナムと稱してゐる。多くの普通文典が之に從つてゐる。

（4）岡澤鉦次郞氏の說は、『にあらむ』の約合であつて、『ら』音の省かつたものである。推測の義であつて、『デアラウ』である。

先づざつとかうである。予は三井氏みたやうに大槻氏說などにのみは賴つてゐない。且つ予は、

推量の『なむ』の分解說などには餘り重きを置いてゐない。半過去、半過去未來といふことが念中にあるから、理窟上、テシマハウ。或はナッテシマウデアラウといふやうになり、又三井氏の說のやうに此の『なむ』にも希求の意があり得るなどいふやうな事になるのである。ところが實際の例を吟味すると、希望の意などは無論無く、テシマハウ。ナッテシマウデアラウ。などでは解けないものがあり、寧ろ、デアラウと翻した方がよい場合がある。『物の自然しかなり行むと思ふ』意で、『雨は降りなむ』は、『雨は降るべく思ふ』意だとする秀成の說で足りる場合がある。予が成立上の分解說などよりも、實際用例の此の『なむ』の含む概念と情調とに重きを置くのはこれがためである。予はわれらの祖先が用ゐた、連用言をうけた『なむ』に主概念主情調として、希求の意の無い事を明言しておく。つまり三井氏の說を根本から打破するのである。

（七月十四日朝）

〇將然言を受けし『なむ』の一例、折口氏の說

古事記の倭建命に答へたてまつつた美夜受比賣の長歌に、『高光る、日の皇子。安見しし、吾が大君。璞の年が來經れば、璞の月は來經ゆく。諸な諸な。君待ちがたに、吾著せる、襲の襴に、

都紀多多那牟余』といふのがあつて、この『月立たなむよ』の『なむ』は普通の用法と違ふといふのが先進の說である。

『都紀多多那牟余は、月將立ョなり。契沖、後の歌ならば多知那牟余と云べしと云り、信に後には多々那牟とては、立テョカシと希ふ意になるを、古へは多知那牟の意にかくも云けるなるべし。立ツベキコトヨと云むがごとし』（古事記傳卷二十八）

『都紀多々那牟余は、月將レ立ョと云にて、立ツベキコトワリヨと云はんが如し。後世に多々那牟とは、立テョカシと希ふことにのみ用ど、此はタタザラメヤと云ふ勢ひなれば、必ず此如有べきことぞ、言語の弘きこと活きてあるが如し。活用など云ひて狹き論すべからず』（稜威言別卷之三）

以上の說では、つまり萬葉時代ならば『立ちなむ』といふべきを、倭建命時代には、『立たなむ』といつたこともあるといふ說である。しかし愚見はすこし違ふのであつて、この『立たなむ』は『立ちなむ』の意ではない。この歌は、甘えて、少しく拗ねて、親しい心を吐露したのであつて、『ふかくいひ契つてわかれてからだいぶ年日が經つた。久しい間の寂しさを辛抱してきて、まのあたりあうてみると、くやしい、うらめしいやうな思も湧く。もう經水の潮來するのも當然であつて、いつそのこと、その方がよいとも思ふ』ぐらゐの意を、女詞で、つゝましくいふので

ある。
つぎに、「君待ちがたに」は、媛自身が命を待兼ねてといふのではなく、『月水が待ちかね奉りて』（宣長）といふのであつて、それゆゑ、「月立たなむよ」は、『經水のあるのも當然である。むしろその方がよいとも思ふ』の意があつて、この『なむ』には、經水に對しておのづと期する意が含まつてゐるのである。つまりこの『なむ』には、他に對する自然的期待の意が含まつてゐるので、『立ちなむ』とは、語の情調がちがふのである。

守部の、『立たざらめやといふ勢ひなれば』といふ言は他に對する期待の意を否定するための言ではあるが、期せずして愚見と幾分通ずるところがある。愚見は此歌のうちの、『諾な諾な』と、結句の『よ』の調子に目を附けたのであつて、「月立たなむよ」を、『月立ちなむ』と解しては腑におちがたい。そこで、將然言を受けた、萬葉集中の『願望のなむ』は、すでに源をこのへんに發してゐるのではないかと思ふ。このことは、守部のやうに、『然る汚垢御姿にて大御盞を捧げ獻り給ふと思へりしにや』などいかめしく考へずに、兩性相親の流露語を念中にもつて釋くと無造做である。

予の如上言は或は牽强の說と嘲り去られるかも知れぬ。ただ、この『なむ』を、誤寫誤傳を否

定して觀るとき、言語はさう急劇には變化しないといふ事實も、予の說に幾分の補助となるのである。ちなみに云。熱田大神緣起所載のものには、結句が、『つきたちにける』になつてゐる。契沖も、宣長も、守部も、『立たなむよ』を、『立ちなむよ』だと、理窟のうへからは解釋してゐる。すなはち、將然言を受ける願望のナムとしては意味が通じ難いといふので、そこで『立ちなむ』の意としたのであらう。併し普通の推量のナムとしても通じないところが自然にあるからして、彼等もおのづから、立ツベキコトヨ。立ツベキコトワリヨ。立タザラメヤ。などと解釋してゐるのである。このへんは識者のをしへをあふぎたいと思つてゐる。

願望の奈牟は、奈母からいでてゐるといふ說があるが、これも妄ではあるまい。なほ溯つて、奈母は爾母からいでてゐるといふ說を折口信夫（釋迢空）氏がたててゐる。そして、萬葉集卷十四の、『あしがりのわをかけ山の穀の木のわをかづさ爾母かづさかずとも』の歌を例證としてゐる。この說が眞ならば、爾母。奈母。奈牟は相通ずるのであつて、願望のナムは分解し得るに至るのである。つまり、將然言を受くる『爾』は、『賜はね』の條で記したやうに他に對する願望の意であつて、それに詠嘆の『母』の添つたものとみるのである。さうみると、將然言を受くるナムに、他に對する自然的願望の意の出來たのも、無理でない發達の徑路をとつたとみることか

出來る。なほ折口氏は、東歌にかういふ古語の殘つてゐるのは、東歌の『訛語』以外に、當時すでに都では死語になつてゐても、ずつと以前に官人移殖民などが東國にさういふ詞語を傳へて、それが殘存してゐたのではあるまいかと談つた。

○意味のちがふ『なむ』の用例

日本語の奈牟の用法を定めるには、大體もつとも多く用ゐられた例に據るがよく、古事記の、『多々那牟余』などは興味ある一例として觀る方がよい。

なほ、萬葉集卷十四、東歌の、『おもふなむ』『潮みつなむか』などの『なむ』『戀ふしかるなも』『わぬに戀ふなも』『思ほすなもろ』『わをか待つなも』『わが心二行くなもと』などの『なも』は普通日本語ならば『らむ』といふべきところであつて、是等の例をもつて『なむ』の用法を律するのはわるい。

なほ、東歌中の、『夫に逢はなふよ』『忘れせなふも』『いまだ寢なふも』『籠にも滿たなふ』などの『なふ』は外形が『なむ』に似てゐるが、これは『なく』に通ふものであつて純粹のものと看做しがたい。ただし、かういふ同音の訛語も、單は訛語としてでなくその發育の徑路でも明ら

かにすることが出來るなら興味ふかいとも思ふ。

三井氏は、『咲きなむ』の『なむ』にも充分希望の意があると說いたとき、予はその說の謬妄を難じた。ところが、古人にもかゝる說をいつてゐるものがある。

○林圀雄の說

常葉居主人林圀雄といふ人が文政九年に書いた、『詞の緒環』上卷には、すべて『なむ』には願ふ意があつて、『行かなむ』『行きなむ』は、たゞ自他の差別に過ぎないと說いてある。例へば第一アカサタナ等を受くる奈武（なむ）は他のうへにかかり、第二音イキシチニ等を受くる奈武（なむ）は自の上にかかり、第四音エケセテネ等を受くるは他にも自にもかかると、かう說くのである。古今集の『堀江こぐたなゝし小舟漕かへりおなじ人にや戀ひわたりなむ』は『戀ひわたりタイ』と自ら願ふ意だと說くのである。しかし予は無論彼の說を信じない。彼の說はいかにももつとものやうでゐて實は用例から歸納した說ではない。

○常陸風土記の將然『なむ』の一例

常陸風土記、新治郡の條に、『古老のいはく古へ山賊あり。名を油置賣命といふ。今社の中に石屋あり。俗の歌に曰く。こちたけば小泊瀨山の石城にも率て許母郞奈牟な戀ひそ吾妹』といふのがある。この奈牟の用法は他の用例と違つてゐる。しかし此用例を以て日本語の奈牟の一般用例と看做すのはわるい。なぜかといふに此は所謂『俗の歌』であるから訛と考ふべく、萬葉東歌中の奈牟の用法に稍趣の違つたのがあると同樣である。加ふるに此歌には意味の點から謂つても少し怪しいところがある。それは結句の『な戀ひそ吾妹』と上の句との連續が不自然に思はれるところである。萬葉卷十六に『事しあらば小泊瀨山の石城にも隱らば共にな思ひそ吾背』といふのがあるが、これならば句法も意味も怪しい點がない。そこで若し常陸風土記の奈牟の用法を訛でないと看ると、『な戀ひそ吾妹』は『な思ひそ我背』の記憶の誤であるかも知れない。民謠には語法の訛と、一二句ちがつて傳播することは、稀有な現象ではないからである。

○萬葉の一首

萬葉集卷三の、『何處吾將宿たかしまの勝野の原に此日くれなば』を古くは『いづこにかわがやどりせむ』と訓み、代匠記、考などもそれを踏襲してゐる。ただ代匠記に『六帖云、ワレハヤ

ドラム』と註してゐる。久老の槻落葉には『イヅクニワレハヤドラム』と訓み、千蔭は略解にて『イヅクニカワレハヤドラム』と訓んでゐる。然るに、雅澄の古義では、『イヅクニカアハヤドラナム』と訓んでゐる。これは雅澄の『なむ』の將然言を受くる格に對する思ひ違ひであらねばならぬ。若し『なむ』と訓みたければ『ヤドリナム』とせねばならぬ格である。かういふ思違ひの訓方が普通の假名がきにされて傳搬され、それが萬葉の一つの用語例だなどといふやうになると惡いとおもふ。

○古事記、神樂、催馬樂の歌謠中の『なむ』『な』『ね』の用例

なほ以上のほか、古事記、神樂、催馬樂あたりから『なむ』の入つてゐる歌をひろつておく。

青山に日が隱らば、ぬばたまの夜は出でなむ、朝日の咲榮え來て（古事記神代卷）

八田の一本菅は、子持たず立ちか荒れなむ、あたら菅原（仁德天皇卷）

妹が門や夫が門、行き過ぎかねてや、わが行かば肱笠の、ひぢがさの雨もや降らなむ、郭公雨やどり笠やどり、やどりてまからむ、しでたをさ（催馬樂）

葛城や、渡る久米路の、繼橋の、こころも知らず、いざかへりなむ、朝かへりなむ（神樂）

以上を見ても大體、將然言を受くるものと連用言を受くるものとの間に意味の區別がある。一二例の異例、誤寫の疑あるものを根據として此二つの混用可能說に我を張るのは惡い。ついでに、『な』『ね』用例を幾つか拾つておく。

網はり亘しめろよしによしより來ね（紀）

島つ鳥鵜飼がとも今助に來ね（記紀）

味酒三輪の殿の朝戶にも出でて行かな三輪の殿戶を（紀）

味酒三輪の殿の朝戶にも押し開かね三輪のとの戶を（紀）

貴人は貴人どち賤奴はも賤奴どちいざ會はな我はたまきはる內の朝臣が腹內は砂石あれやいざ會はな我は（紀）

いざあぎ五十狹茅宿禰たまきはる內の朝臣が頭槌の痛手負はずは鳰鳥の潛せな（紀）

いざあぎ振熊が痛手を負はずは鳰鳥の淡海の海に潛せなわ（記）

三栗の中つ枝のふほごもりあかれる孃子辛さかはえな（紀）

三栗の中つ枝のほつもり赤ら孃子をいざさらば吉らしな（記）

雲雀は天に翔る高行くや速總別鷦鷯取らさね（記）

隼は天にのぼり飛び翔り五十槻が上の鷦鷯捕らさね（紀）

大前小前宿禰が金門かげかく寄りこね雨立ち止めむ（記）

道に會ふや尾代の子天にこそ聞えずあらめ國にはきこえてな（紀）

如上の例の示すが如く、將然言を受ける『な』『ね』には同じく希望でも自他の區別が大體きまつてゐる。紀の、『朝戸にも出でて行かな』『朝戸にも押し開かね』などは最も明瞭な用例である。萬葉卷一の『家聞かな名のらさね』などよい參考例である。同じく卷一の『いざ結びてな』『草を刈らさね』など、卷一以下の數多の用例あるが、今は純粹形のみを拾つて置くこと前言にことわつた如くである。

○古事記文中の『なむ』『な』等

古事記の歌謠中の『なむ』『な』『ね』などの用例はすでに手鈔した。いま古事記文章中の用例を拾つて置かうと思ふが、文章中のものは歌謠のやうに、奈牟、那牟、南畝などとは書いてゐない。漢文で書いてゐるのを後世の學者が『なむ』と訓んだのである。例へば、古事記上卷の、以二爲請二將罷往之狀一をば、『罷往りなむとする狀を請さむと以爲ひてこそ』と訓み、答二白各字氣比

而生子をば、『各誓ひて御子生まな』と訓んでゐる類である。かくの如き例を古事記傳に從つて少しく拾はうと思ふ。

（1）汝、此間にあらば、遂に、八十神に滅さえなむ』と詔り給ひて。（神代の卷）

（2）須佐能男命の坐します、根堅洲國に、參向てよ、必ず其の大神、議り給ひなむ』と詔り給ふ。（神代の卷）

（3）『賤奴が手を負ひてや死なむ』と男叱して（白檮原宮の卷）

（4）今、天より八咫烏をおこせむ。故、其の八咫烏、導引きなむ（白檮原宮の卷）

（5）疫病さはに起り人民うせて盡きなむとす（水垣宮の卷）

（6）神氣起らず、國安平ぎなむ（同上卷）

（7）天の下平ぎ、人民榮えなむ（同上卷）

（8）「あれ、御子に易りて海中に入りなむ。御子はまけの政とげて、」（日代宮の卷）

（9）吾は汝が命の御妻になりなむと思ふ（高津宮の卷）

（10）後世の示すにも足へなむ（近飛鳥宮の卷）

（11）僕は一日に送り奉りて還り來なむ（神代の卷）

（12）其の鰐魚返りなむとせし時に（神代の卷）

（13）然らば吾も奇異と思へば見に行かな（高津宮の卷）

右には、萬葉集に於てした如く、係の『なむ』『なも』は拾はない。『本つ國の形になりてなも産むなる』とか、『沙沙那美に出でてなも悉に其の軍を斬りける』などは拾はないのであつて、さういふ他の種の『なむ』『なも』は別に論じようと思ふのである。

2　三井甲之に與ふ

君の催促によつて、七月十五日發行の「日本及日本人」中の君の僕に宛てた文章を讀んだ。一體なんの事だ。僕の言の核心を突いて來ないで、『下品な言葉づかひ』などと、詞尻をとらへて女々しい事をいつてゐるに過ぎない。『男らしくない回避的態度を取つて』などの言は君には適當であるから、持つて歸るがよい。そして今すこしく堂々として來れ。僕が君の使つた『なむ』の謬妄なることを論じたのは、なにも島木赤彦氏への助太刀などではない。僕が勝手に君にむかふのだ。いつたい、『助太刀』などの必要なのは君の事だ。また、『助太刀』などの語を聯想せね

ばならぬのは君に限るのだ。この語も持つてかへりたまへ。
このたびは『なむ』に就いていふ。先づ僕の、『なむ』の説を精讀したまへ。そして、餘計なことを言はずに左の件について明答が出來るならしたまへ。
(1)『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』といふ君の歌の、『なむ』の用ゐざまは、吾等の祖先、主として萬葉びとの用例を標準として觀るとき、謬妄なる用法であるか。謬妄ならざる用法であるか。萬葉集とそれ以前の用語例に據つて、君の用例の謬妄ならざる實證をあげ得るか。
(2)若し、萬葉びとの用例を標準とすることを肯んぜずとせば、『吾等は萬葉集へ、またそれ以前に溯つて自由な言葉と思想を求めて居る』といふ君の言はこの儘でよいか惡いか。君は此言に言責を有ち得る自信があるかどうか。
(3)將然言を受くる『なむ』が他に對する希望の意味に用ゐる實例は萬葉集中にあることを僕は明示した。然らば『平安朝以後に於て、咲かなむ、有らなむ、を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは』といふ君の言は、謬妄か謬妄でないか。訂正するだけの男らしさが君にあるか。

（4）君は、君の使つた『待たなむ』は『待たな』といふところを一音足りないから、口調の上で『む』を足したのであると、自ら說明してゐる。然るに萬葉びとの用語例は、『待たな』『待たなむ』の間には慣用上自他の區別がある。君はこの事實を認容し得るか。若し認容し得る能がありとせば、君の說の謬妄を訂正するだけの男らしき態度を君は有つてゐるか。

（5）萬葉集の『わが宿に蒔きし撫子いつしかも花に咲きなむなそへつゝ見む』を『花に咲かなむ』として源氏物語に『引用』して居ると君は繰返して斷言してゐるが。それは本當か。

（6）僕は君の歌の『待たなむ』を、『待ちなむ』とせよとは未だ嘗て論ぜぬ。その僕に向つて、『それならば僕が此場合、待ちなむ、を拒んだ理由を破るべきだ』といふのは一體何事か。この言を撤回する正直さが君にあるかどうか。

（7）僕は、君の歌の『待たなむ』の謬妄を主題として論じたが、その他の種類の『なむ』の存在を否定してゐない。且つ僕が先月集めた實例は、將然言をうける願望の『なむ』と連用言を受ける推量の『なむ』に限局されてゐると明言してゐる。それに向つて『なむ』にも種々あるとか、同じ『なむ』にも素性があるとか、『も一度研究しなほして見るべきだ』などの言を君は自ら恥かしいとは思はぬか。

先づ右の問に明答するがよい。僕から君の言說が『謬妄』だといはれて、いやに氣にする君の言は、僕には『男らしくない』くさつた女人の言を聯想せしめる。かういふと『人格』に對する漫罵だとか、『誣ひた惡口を吐くのは、それは社會の道德的感情の悲しむべき一面を反映したのである』などと復云ふだらう。しかし僕はそんな上品や下品やの言葉づかひの問題、くさつた女人のやうな仲間の道德問題などはどうでもよいのだ。まさしく戰鬪の活動を思ふべしだ。もう現在の僕の覺悟はそんな老耄公卿じみたところにぶらついてゐないのだ。それゆゑ今後いつても無駄だ。それども、『さうせぬに於ては僕は齋藤茂吉氏の態度に道德的批判を加へて社會的良心の判斷に訴へようと用意してゐる』などと、用意などばかりしてゐずに速かに斷行するがよい。

（七月十四日夜）

3　三井甲之氏の答辯

三井甲之氏は、彼の文法論の謬妄なることを予から指摘されて、なほ妄執を敢てしてゐるからして、その謬妄なることの實證を尙ほ瞭然（はつきり）とさせ、併せて彼の妄を少しくひらいてやらうと思つ

て、アララギ八月號に於て七箇の質問を彼に向つて發した。

然るに彼は、九月一日發行の雜誌「日本及日本人」に於て、『齋藤氏は僕の問のうち重要なる多數には答へられぬと見えて答へぬが、今同氏が八月號でまとめて僕に向けた問には僕は悉く答へる』と圈點づきの前置をおいて殊勝にも答へてゐる。その『齋藤氏は僕の問のうち重要なる多數には答へられぬと見えて答へぬが』などの窮策文句は、予の文章を讀まぬ者の前には辛うじてごまかしも利かう。予の文を知つてゐるアララギの讀者には何の要もなきものであるからして、かかる文句の批評は見逃してやつてもよい。そして、直ちに彼の答辯を檢査しよう。

（茂吉問）『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』といふ君の歌の『なむ』の用ゐざまは、吾等の祖先、主として萬葉びとの用例を標準として觀るとき、謬妄なる用法であるか。謬妄ならざる用法であるか。萬葉集とそれ以前の用語例に據つて、君の用例の謬妄ならざる實證をあげ得るか。

（甲之答）僕の歌の『待たなむ』が誤であるとするならばそれでよいと既に言つた。（日本及日本人八二頁下段一三行）

『待たむ』又は『待たな』といふべき場合に、綴の都合上、歌や詩では『待たなむ』といつて惡いと申さるゝならばそれでよいのです。僕は詩にはそのくらゐの自由を許してもよからうと思ふのです。（同じく八二頁下段一五行）

彼の答中、『誤であるとするならばそれでよい』『悪いと申さるるならばそれでよいのです』といふ文句がある。

これは予が『謬妄なる用法であるか』と問ひたるに對して、『謬妄なる用法である』と承認した答と觀て可からう。すなはち彼は自らの謬妄用法を自認したのである。ここに於て、論戰は予が勝つて彼が負けたのである。もともと此が論戰の主題であつたのであるから、活動寫眞流にいへば、『牙城陷落の光景』であるといふぐらゐのところであらう。『そのくらゐの自由を許してもよからうと思ふのです』などは敗戰後の泣言に過ぎないのである。かつ、『謬妄なる用法である』とはつきり男子流にいはずに、『それでよい』『それでよいのです』などと、ぼかすところが女人流なのである。

（茂吉問）若し萬葉びとの用例を標準とすることを肯んぜずとせば、『吾等は萬葉集へ、またそれ以前に溯つて自由な言葉と思想を求めて居る』といふ君の言はこの儘でよいか惡いか。

（甲之答）用例に拘泥するよりもその言語と思想との精神を攝取すべきだ。

かう答へて、その次に阿部氏の「ゲーテ詩抄」のことなどを書いてお茶を濁さうとしてゐる。「ゲーテ詩抄」の事は別に論じてよいものである。『なむ』の論をしてゐるのに、ゲーテの詩の

ことなどを持出すのは『魯鈍』である。

彼は萬葉集以前の言葉を求めてゐるといふから、萬葉びとの用語例に據つて彼の用語例の謬妄なることを明示したのである。さうすると彼は、用例に拘泥する必要はないといふ。實に可笑しい。いつたい萬葉集の言語の精神を求めるのに、萬葉集の言語の用例に據らずに何に據るのか。彼は空論をしてゐる。そして如何に答辯に窮してゐるかを見よ。

（茂吉問）將然言を受くる『なむ』が他に對する希望の意味に用ゐる實例は萬葉集中にあることを僕は明示した。然らば、『平安朝以後に於て、咲かなむ。有らなむ。を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは』といふ君の言は、謬妄か謬妄でないか。

（甲之答）此の場合の『咲かなむ』の『なむ』は助動詞としての『なむ』である。これは最初から齋藤氏等が助詞と助動詞との區別を注意せず、『將然言を受くるなむ』とのみいつて居るが、それにも、『助動詞のなむ』と『助詞のなむ』とを分つべきだ。

これも答になつて居らぬ。彼の歌の『待たなむ』は自分の事にかけて使つてゐるから、將然言を受ける『なむ』は他に對する願望の意だと注意したのである。さうすると、彼は、平安朝以後にさういふ語感を作つて來たといつたからして、平安朝よりも以前に、即ち萬葉集で既に他に對

する願望の意に用ゐてゐることの實證を擧げて彼の説を破り、あはせて『平安朝以後』といつたのは誤かどうかと糺問したのである。それには答へて居らぬ。又答へられる筈がないのである。

次に、『咲かなむ』の『なむ』が平安朝以後では、助動詞であるといひ、又、此の『なむ』には助詞と助動詞と二とほりあるといふが、これも謬妄であつて、『咲かなむ』といふ工合に將然言を受けた『なむ』は、平安朝以後でも、正當な用例は盡く感歎辭（あるひは助詞）であつて、決して助動詞ではない。予は、『咲かなむ』で助動詞に使つた正しき例を見たく思ふ。大槻博士などども初期の「語法指南」では、『助動詞たるべし』などと云つたが、「廣日本文典」では瞭然と訂正したことをことわつてゐる。德川時代の文法家ですら、助動詞として取扱つてゐない。三井氏は謬妄言を發することを好むと見える。

それから、予が『なむ』を論ずるのに、助詞・助動詞の區別を樹てなかつたと彼がいふが、そして此事が予の言に向ふ彼の今の言としては唯一の武器であるらしく、ほかの處でも『齋藤氏は最初からナムの論に就いて助詞と助動詞との區別をして居らなかつた』などと大きな黒い圏點をつけて云つてゐるが、これもをかしい。將然言を受けるナムは感歎辭（あるひは助詞）で、連用言を受けるナムは助動詞であることは當然の事である。予も亦かく云つてゐる。（アララギ八月號一〇六―一〇九頁）

又、成章の去倫のナムは助動詞であることを彼は知らない。又、『連用言を受けるなむ』と云へば助動詞であることぐらゐ理會が出來なくて予と論戰しようとするのは無理だ

（茂吉問）君は、君の使つた『待たなむ』は『待たな』といふところを一音足りないから、口調の上で、『む』を足したのであると、自ら說明してゐる。然るに萬葉びとの用語例は、『待たな』『待たなむ』の間には慣用上自他の區別がある。君はこの事實を認容し得るか。若し認容し得る能がありとせば、君の說の謬妄を訂正するだけの男らしき態度を君は有つてゐるか。

（甲之答）これは（1）と全く同じ內容を有するものである。

これも答になつてゐない。又第一の問題と此問題は內容が全く同じなどではない。第一の問題は、『待たなむ』が謬妄か否かと問うたのだ。ここの問題は、『待たな』と『待たなむ』が同じ意味かどうかと問うたのだ。この差別が彼には分からぬと見える。それゆゑ、『待たな』と『待たなむ』とを混同などしてゐるのである。そして予からその謬妄を指摘せられたのである。

（茂吉問）萬葉集の『わが宿に蒔きし撫子いつしかも花に咲奈武（さきなむ）なそへつつ見む』を『花に咲かなむ』として源氏物語に『引用』して居ると君は繰返して斷言してゐるが、それは本當か。

（甲之答）『引用』といふ語の意義を齋藤氏の如く狹義に解する必要はない。今の論では和歌が民謠的傳誦によつて、その言葉と意味とを變化せしむる徑路に就いて論じたのではなく、單に例を萬葉や源氏から

拾つたのみだ。

これでは答になつて居らぬ。予は『本當か』どうかと問うたのである。すなはち、源氏物語紅葉賀中の、『よそへつゝ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花。花に咲かなむと思ひ給へしもかひなき世に侍りければ』の『咲かなむ』は、實は後撰集の讀人不知の歌『我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつゝ見む』の間接變形の『引用』なのであつて、萬葉集の大伴家持の歌の『引用』ではないのである。若し萬葉集の歌の引用であつたならば、源氏物語の歌も、『なそへつゝ』といふ筈である。要するに彼は、雅澄の古義の文句を鵜呑にして少しの考察も研究もなすことなく、天下の人が何も知らないやうな口吻で、引用、引用と五たびも繰返したのである。そしてその謬妄を予から指摘されて窮した擧句に、『引用』といふ語を予の如く狹義に解する必要が無いなどといふ。廣義も狹義も無い。まるで謬妄なること予の證明した如くである。彼は群盲のまへにごまかす癖がついてゐると見えて、淨玻瓈の前に立たせられても『あやまつた』といふだけの正直さが無い。彼の言說は皆かくの如くである。

（茂吉問） 僕は君の歌の『待たなむ』を『待ちなむ』とせよとは未だ嘗て論ぜぬ。その僕に向つて、『それならば僕が此場合、待ちなむ、を拒んだ理由を破るべきだ』といふのは一體何事か。この言を撤回する

正直さが君にあるかどうか。

（甲之答）　齋藤氏は『待たなむ』を『待ちなむ』とせよとは言はなかつたといふ。しかし島木氏が『待ちなむ』と訂正したのに僕が抗議しての論であるから、齋藤氏が島木氏の說を否定するのであるならば何故にそれを明言せぬか。明言せぬ以上同誌上で僕と島木氏との論に加入したのを助太刀と見、島木氏と同じ立場にあると見るが自然である。

予は彼の歌の『待たなむ』を謬妄であると論じた。しかし『待ちなむ』とせよとは論ぜぬのである。それに向つて、『待ちなむを拒んだ理由を破るべきだ』などと苦しまぎれの餘計なことを云ふから反問したのである。彼も予の文章中から、『待ちなむ』とせよといふことを捜すことが出來なかつたと見えて、『しかし島木氏が』などといつて、ごまかさうとしてゐる。『ごまかす』と評されて悔しければ、積極的に予の文章中より實證をあげ來るがよい。それが出來なければ降參すべきだ。

（茂吉問）　僕は、君の歌の『待たなむ』の謬妄を主題として論じたが、その他の種類の『なむ』の存在を否定してゐない。且つ僕が先月集めた實例は、將然言をうける願望の『なむ』と連用言を受ける推量の、『なむ』に限局されてゐると明言してゐる。それに向つて『なむ』にも種々あるとか、同じ『なむ』にも素性があるとか『も一度研究しなほして見るべきだ』などの言を君は自ら恥かしいとは思はぬか。

（甲之答）（茂吉いふ。ここの答はごたごたしてゐるから主要點を鈔する）（一）僕の歌に用ゐた『なむ』は『助詞のなむ』である。『他の種類のなむ』の存在を否定せぬにもするにも『助詞のなむ』と『助動詞のなむ』との重要の區別に氣づかぬのであるから否定も肯定も問題にならぬ。

助詞、助動詞の問題などは當然の事であつて、そんなことは初等日本文典でも明快に書いてある。こんな事で予の說を破り得ると思ふのは寧ろ哀れむべきだ。

彼が、將然言を受くる『なむ』が助詞（若くは感歎辭）であることを知つてゐるのは別に惡くはない。併し彼の此知識は器械的あるひは盲暗記に過ぎない、それゆゑ彼はその用法を知らない。用法を知らず自他を全く顚倒して使つてゐるやうなものが、助動詞、助詞などと幾百千萬囘繰返したところで何になる。彼が日本語を論ずるのに、いかに初等文法程度に、しかもそれすらも理會せずに、ぶらついてゐるかを見よ。彼が自ら自告する如く、『中學校で四年間も文法を敎へたといふ一つの事實からしても……機械的にもおぼえねばならぬのだ』どほりに、機械的に盲暗記をして、助詞、助動詞を繰返しても、用法を知らねば無益である。

（二）『將然言をうける願望のなむと連用言を受ける推量のなむに限局』とは何のことであるか。正則には、將然言又は未然形を受ける『なむ』は『助詞のなむ』で、連用言又は連用形を受ける『なむ』は『助

動詞のなむ』である。此の區別を明にすれば十分である。

『何のことであるか』とは彼が魯鈍にして理會が出來ないのである。『なむ』の用法には、この二つ以外にもあるから、『限局』せしめたのである。それから、『將然言をうける願望のなむ』といふ本邦語學者の慣用語は無論、中學校文法の、『助詞のなむ』を意味してゐるぐらゐ分からなくて、予に對ふのは少し荷が重すぎよう。況んやこんな事を予に講義しようとするに於てをやである。彼は、助詞のなむ、助動詞のなむ、の區別を明かにすれば十分だといふが、こんな區別などは初步文法に餘るほど書いてある。嘘だと思ふなら大槻氏の文典以來の諸文典を見るがよい。予の言の主點はそんな平凡なところに在るのではなかつた。先づ、彼の歌の『待たなむ』の謬妄をいひ、それを萬葉びとの用例に據つて實證するにあつたのであつて、それを成し遂げたのである。この點について彼は一言をも言ひ得ない苦しさに、助詞助動詞などと言ひ出して來たのであるが、助詞助動詞で十分だなどといつても、用法も知らなければ十分ではあるまい。それから彼は『願望のなむ』『推量のなむ』などいふのは舊式で幼稚で不正確で、こんな言方をして今日文法を論ずるのは大膽すぎるなどといつて居る。實にをかしい。予は先進の慣用法に從つたまでであつて予の發明した言方ではない。かういふ『命名』の問題は直接ここに要のないことである。

終止言といふか、截斷言といふか、第三階言といふか、終止段といふか、などの問題と等しく、項をあらためて論ずべき性質のものである。

（三） 元來齋藤氏が『推量のなむ』といふのは、『時の助動詞』であつて、推量や期待の意味は第二次のそれである。又『他に對する願望』等いふのも不正確の考方である。『他に對する』は全文の文脈と内容とによつて規定せらるるので『願望』はどこまでも『主格の願望』であるを氣附くべきだ。

『推量のなむ』『常のなむ』などの慣用語を『時の助動詞』に分類したところでかまはない。これは先進も既にいつてゐる。『去倫のなむ』『いなむのなむ』『半過去のなむ』『半過去未來のなむ』などの命名は時の助動詞であることを明示してゐるのである。この命名のことはアララギで既に鈔してゐる。今更『時の助動詞』などと予に說くのは迂である。

『他に對する願望』といふ慣用語も、『主格の願望』であるのは無論であつて、今更何を夢みて居るのだ。ただこれは、『主格の他に對する願望』の意であつて、『他に對するは全文の文脈と内容とによつて規定せらるるので』などでは無いこと、予の證明によつて明かである、彼は何處まで行つても魯鈍言を發することを好む。

『待たなむ』といへば、主格の願望でも、その願望は他のものゝ行爲に對する願望であつて、

何も『他に對する』は全文の文脈と內容とによつて規定せらるる必要はないのだ。『待たなむ』は、主格が自ら『待ちたい』といふのでなく、第二者すなはち他者に對して、『待つてゐて吳れ』と願ふのである。それゆゑ『汽車を待たなむ』とはいへぬのである。どこまで行つても彼の言は到底予の言の敵ではない。

以上彼が『僕は悉く答へる』と豪語して答へたからして、少しは手答があるかと思ふと、誠にへろへろに終つてゐる。かつ、問題の中心である『待たなむ』の謬妄なることを徹底的に實證し、彼自身をして『それでよい』と自白せしめた以上、即ち勝負で勝つた以上、このうへ、『なむ』について彼と言合ふ必要を見ない。よつて此問題の言合を打切る。併し彼は腐つた女人言の如くに今後も或はくどくど書くかも知れない。それは予の闘する所では無い。（九月三日）

4　『なむ』の論餘言

〇

三井氏の作、『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』の『なむ』の用ゐ

ざまの謬妄なることを主題として論じたところが、三井氏は此問題を、いつの間にか、ずらし、移轉させ、混亂に至らしめて、不用意な讀者には、いづこに『主題』が存するかを見付けるのに困難な如き觀を呈した。そして、今では、助詞、助動詞などいふ文法學上の命名、分類の問題が主點であるかの如く見せかけてゐる。この『問題を移轉させること』は三井氏得意の戰法と見える。けれども直ちに本營を突かうとする予はこんな小方略には顧慮しない。そして主題については徹底的にその用法の謬妄なることを實證してしまつた。かくなるに及んで、枝葉の苦裏方便言の如きは向くべき心の要を見ないのであるが、餘言として、三井氏の論戰の態度のいかに小方略を弄してゐるかを暴露させて見る。はたし合で一命をおとせばそれで勝負がきまつたのである。骸骨が『まだ負けない』と云つても勝者は顧慮しない。

○三井氏の作歌態度

三井氏の作歌態度の不徹底を見逃してゐたが、三井氏が予を目して『知らぬ振してゐる』といふから、今暴露させよう。

▲汽車をし待たむ。汽車を待つべし。汽車を待たむとす。待ちてむ。待たばや。待たむゑ。等も此場合適

當でないから。止むを得ず、『なむ』を用ゐた、

▲又『待たばや』等此の場合に用ゐらるべき言葉を數多列擧してそのいづれもが不適當であるからして、『待たなむ』を止むを得ず用ゐたことを反覆說明したのであるが、齋藤氏は此の點に關しては知らぬやうな眞似をして默つて居り。

『知らぬやうな眞似をして默つて居り』などいふのは餘り三井氏に取つて殘酷である。『汽車をし待たむ』などが適當でなく、『汽車を待たな』が一音足りないゆゑに止むを得ず、自他上全く意味の違ふ『待たなむ』を持つて來たといふに至つては殘酷である。かういふ爲方なしの妥協で詩の言語を使ふやうなら詩などは作らぬがよいのである。詩の言語は『止むを得ず』などを絕した、絕待唯一のものでなければならぬ。期せずして三井氏の作歌態度が暴露して寧ろ殘酷である。

○『待たな』『待たなむ』同義說

『待たな』の代りに、爲方なしに『待たなむ』としたといふから、『待たな』『待たなむ』の間には願望希求でも慣用上自他の差別があり、『な・なむ』同義說は謬妄であることを萬葉びとの

用語例によつて實證したのである。さうすると三井氏は苦しまぎれに、同義說などは述べぬと言放つた。その經過を明記しよう。

▲僕も、聲調上の要求から、『待たむ』『待たな』の代りに『待たなむ』としたので（七月十五日號日本及日本人）

▲『な』の代りに『なむ』を用ゐることは詩としての自由と言語の音調を重んずる上から强ひて排するに及ばぬと思ふのである。（四月十五日發行日本及日本人）

▲それゆゑ、『待たなむ』は『待たな』と同じ意味で、（同上）

▲希求の助詞『な』と同じ意味の助詞としての『なむ』。（七月十三日發行時事新報文藝欄）

かく明記した如く、三井氏は、『待たな』『待たなむ』が同じ意味だと繰返して云つてゐるから、予はその『同義說』は謬妄であると論破したのである。又『代りに』といふ以上、代用の任務を果すだけの言語でなければならぬのは當然である。然るに、意味の全く違ふものを代用せしめては『代用』にはならぬ。その謬妄を予は論じてやつたのである。さうすると三井氏は、

▲僕は齋藤氏が誣ふるやうに、『待たな』『待たなむ』同義說などは述べぬ（九月一日日本及日本人）

▲『な』と『なむ』と同じだとはどこでも申しません（七月十五日同上）

かう云つて、同義說などは述べぬと、空々しいことをいふが、現に述べてゐること上に明記し

た如くである。

『同じ意味』と『同義』とどう違ふか。予に對つて誣ひたなどゝ、群盲の前に自己の言をごまかさうとしてゐる。予は三井氏のこの圖々しき態度を書きとゞめ置くのである。

○『咲かな』

三井氏は、『咲かな』を直接主觀の意志を表示するものだと云つたから、おもしろいと思つて予は、

直接に主觀の意志といふと、花ならば、花自身が直接に主觀の意志を發表して、『花咲かな』といふことになる。つまり花自身が自ら『花咲かう』咲きたい』といふことになる。こんな屁間なことはあるものか。それゆゑ上代にはこんな例はないのである。(アララギ八月號參照)

と論じて置いた。然るに三井氏は予の言を理解し得ないで、あべこべに、予が『主觀』といふ語の概念を理會し得ないやうな口吻で、『また哲學的考察に於て齋藤茂吉氏や島木赤彦氏と論をするのは一々詳しく說明して示さねばならぬから非常に面倒である』などゝ云つて、さうして、主觀といへば認識する主觀であつて、花は認識せらるゝ客觀である。主觀と客觀との區別をも明瞭に理解

せぬこそ『へマ』とでもいふのだらう。（九月一日日本及日本人）

と云つて居る。三井氏は四年間も中學校の少年を相手にしたと自告する如く、虚慢の癖が附いてゐると見えて、予に對つて『主觀』の概念が分からぬなどゝ威張るのである。さういふ三井氏には『主觀』といふ飜譯語を誰が始めて日本で用ゐたか、その時どういふ概念に用ゐたかゞ分かるまい。若し分かるといふなら此の虚慢の語を引込ますがよい。

ところで主觀は認識する主觀であつて、花は認識せらるゝ客觀だといふのはよい。今三井甲之が花を見て居る。此場合三井甲之は認識する主觀(スブエクト)で、花は三井甲之の主觀から認識せらるゝ客觀(オブエクト)である。その場合に、三井甲之が認識する主觀の直接意志の表示として、『花咲かな』とは言はれぬのが日本語法の約束である。認識せらるゝ客觀に對つて、認識する主觀が、將然言を受ける自希の助辭『な』を用ゐるのは謬妄なのである。つまり『屁間』なのである。予は實例に就いてくどい程この事を既に説明してゐる。それにも拘はらず、それが理會出來ずに魯鈍言を敢てする如きものは到底予の敵たる價値の無きものである。主觀、客觀などゝ氣取つて盲瞎記的に羅列しても、緊要金目の『な』が理會出來なくば、何の役にも立つまい。

5　二たび『なむ』の論餘言

〇『待たな』と『待たなむ』

予は古人の用語例から歸納して、『待たな』と『待たなむ』とを混同するのは謬妄であると云つた。そして此二つを『同じ意味』だとする、三井甲之氏の『ナ・ナム同義說』の謬妄なることを論じた。さうすると三井氏は一面は巧みな、そして一面は窮した、そらぞらしき言說をもつて第三者の前に公表してゐた。それを次に書いてみる。

「僕が僕の歌で、『な』の代りに『なむ』を用ゐ、『な』と同じ意味に『なむ』を用ゐた。といつたのを茂吉氏は僕が『な・なむ同義說』を述べたといふから述べぬといつたのに對して、『代り』と『同じ意味』とを拾ひ出して飽くまで僕が同義說を述べたと強辯して『圖々しい』といふのである。文法上の定說として一般的法則として『な』と『なむ』は同義なりといふのが『同義說』だ。僕は特殊の場合、即ち僕の歌の場合をのみいつたのだ。それ故に此の特殊的言說と普通的法則との差別をも辨ぜずして、他人に對して

『圖々しい』などと云ふのは隨分圖々しい無反省の漫罵的偏癖として正常心理學的には研究するを得ぬものである」（大正六年十二月發行「詩歌」）

そして、『偏執狂』『天才のまがひもの』等の語を予のうへに冠らせようとしてゐる。しかし予は三井氏の此の巧妙な遁辭を肯んぜない。由來、『な・なむ』を論ずるに至つたのは、三井氏が、みづからの謬妄用法をば一般法則化しようとしたからである。三井氏は祖先以來の日本國語法をば肯定して置いて、そして自分の歌の場合だけの文法に就いて辯じたのならば、卽ち三井氏の歌の特殊の場合のみに就いて解說したのならば、予は只笑つて看過ごしたであらう。然るに三井氏は、日本國語法と彼の歌の特殊謬妄語法と同居せしめようとしたのである。そして『な・なむ同義說』を強ひて作つたのである。それを予より難ぜられて、ひだりに走りみぎりに遁げ、たうとう如上の言をなしたのである。三井氏は以前に次の言を公表した。

「僕は助動詞『ぬ』と『む』とが連つて成立つた『なむ』と、係の助詞『なむ』『なも』、感嘆詞『なむ』から類推される『なむ』、或は又希求の助詞『な』又は意志を現はす助動詞『む』と同じ意味の助詞としての『なむ』とを分つて論じてゐるのですから、ここへ御注意願上ます」（大正六年七月十三日時事新報）

この『なむ』の種類を羅列したのは、まさしく日本語の語法としての一般法則を云つてゐるこ

とは明らかである。そしてその中に、『希求の助詞ナと同じ意味の助詞としてのナム』といふのがある。これが『ナ・ナム同義說』でなくて何であらう。若し予のこの看方が偏して居たとせば予はみづから恥ぢようと思ふ。（十二月一日記）

〇對他論小感

昨年の春ごろ、かつて書き棄てたものを顧みて、もう「對他論」は爲まいと思つたことがあるところがふとしたはづみから『なむ』について三井氏と論じあふやうになつて、それが今迄續いた。これは對他論は爲まいと思つた予の心から觀れば不快であるに相違ない。然るに他と言合つたがために、新たに氣づいた事がある。それを少し書いておきたい。

其の一。『なむ』の文法にはすでに定說があつて事更に論じあふほどのものではなかつた。それゆゑ三井氏の『なむ』の用ゐざまに對しても單に『謬妄である』といふ最初の一言で足りたのである。しかし三井氏は予等の言に服せず、彼の特殊用法を一般法則化しようとし、予等の結論に對して、『理由を具せざる結論は漫罵である』などと云つて來た。そこで勢ひ予等の結論を證據立てることになつて、そして文獻を讀むに及んで、今まで知らなかつた事を知る事が出來た。

すなはち予は從來の文法書に書いてない多くの祖先の用語例を蒐めることが出來た。これは「對他論」の賜物である。おもふに、自らを欺くことなく、勝負を第三者に見せびらかすことなく、眞理を追求して對者の非論を打ほろぼさうとするところに、人間力の發現がある。

其の二。對他論には理の究盡に連れて主觀語の這入るのを常とする。これは對者の言の語氣に向ふ反應言であつて、怒り、雄たけび、吶喊のこゑである。これを第三者が看て醜しとなすのを常とする。對他論の目的を第三者に見せびらかすにあるとするものは、此等の主觀語のみを拾ひ出し、これを利用して第三者に媚ぶることを敢てする。予はしばらく三井氏と言合つてみて、いかに彼は第三者のみに見えを張ることの上手であるかを知つた。彼はその筆法を數種の雜誌に繰返してゐた。予の言を打破らん唯一目的にして、かゝる筆法を選ぶ必要はない筈である。

其の三。第三者はすでに對他言を、そして對他言中の主觀語を醜しとする。第三者は單に見物に過ぎないからである。その見物は、不可思議にも彼等の見て醜しとなす主觀語のみを讀んで、肝腎の理路の文を讀んでゐないといふことを予は知つた。いつたい見物たる第三者を目中に置いて眞の對他論は出來るものであらうか。この點が予の興味を牽く。

其の四。見物たる第三者は「論點」の大小を說く。『なむ』は一天爾遠波に過ぎない。血眼に

なつて論じあふ必要を見ないと、かういふ。幾ばくもなくして相互結論の是非に及ぶ。さうして、『その結論のいづれが正しきかを知らない』といふ。論じあふほどの要なき一天爾遠波だと謂つても日本國の言語である。日本國びとはその用法を知つてゐなければならない。論じあふ要を見ないといふうへは、その用法を知つてゐることを豫件とする。しかるに、予の結論と三井氏の結論といづれが是なるかを知らないといふ第三者の言を、予はいたく面白いと思つても、予は對他論をもつて一般第三者のために公表することを欲しない。予は予自身のためにそして對者のために、引いて予と心を同じうし得る現世來世の友のために予の言を公表するのである。

其の五。づるき對者は、「論點」をずらす事を知つてゐた。『なむ』の論がいつしか他の助詞助動詞の論となり、作歌の非難となり、ゲーテの詩の譯となり、顧みて他をいふに至つた。性欲に飽いたやうな面もちの第三者は、予の對者のかかる態度を讃じてゐる。第三者は多くの場合、論點を集中してそれを暗求することをしない。

其の六。論爭は醜い。甚大愛をもつてなぜ對者をおほはないであらうか。それはいゝ。けれども淺薄なる妥協の言はつひに愛染の心ではないと常に予はおもつてゐる。予はたとひ無數の第三者より醜しとせらるとも、對者の非論を亡ぼすことを以て、愛染のみちでないとは信ぜない。ゆ

ゐに第三者の瞳に予の言をうつすことを目的とせんよりは相互言論を浄玻璨のまへに立たしめんとするのである。（大正七年四月七日）

新版に際して

「童馬漫語」は大正八年春陽堂から發行して數版を重ねたのち、大正十四年私が外國留學から歸つた年にまた新しく組んで發行した。これは震災のときに春陽堂も燒けたからであつた。その後久しく絕版になつてゐたが、このたび、齋藤書店から「童牛漫語」が新に發行になつたので、その姉妹篇ともいふべき「童馬漫語」をも再發行してはどうかといふ意見に從ひ、やはり齋藤書店から發行することにした。

「童牛漫語」も「童馬漫語」も私の初期のもので、今更どうのかうのといふ程のものではないが、私の歌に對する考は、このあたりにすでに略定まつてゐたと觀るべきで、私の考を發育史的に觀られる人々には、やはり參考していただきたいとおもふものである。「童馬漫語」は芥川龍之介さんなんかも生前褒めて吳れられた。さういふ追憶もあつて見れば、この新版發行は私みづ

からにとつて難有いことに思はれるのである。

新版發行に際して、誤植誤記を訂し、「定本童馬漫語」にするつもりで爲事を運んだのであつた。さうして、「童牛漫語」同樣立派な體裁に作上げることが出來た。このため、齋藤書店の齋藤春雄、伊藤禱一兩氏から萬端の世話になつたことを感謝する。昭和二十二年秋彼岸、羽前大石田在住、齋藤茂吉。

童馬漫語

昭和二十三年四月十五日初版印刷
昭和二十三年四月二十日初版發行

定價貳百五拾圓

著作者　齋藤茂吉
東京都港區芝南佐久間町二ノ一〇

刊行者　齋藤春雄
東京都世田ケ谷區祖師谷二ノ一二三六

印刷者　大和印刷株式會社
內田作之輔

販元　齋藤書店
東京都港區芝南佐久間町二ノ一〇
會員番號A二一九〇〇二
振替東京　三一五一一

配給元　日本出版配給株式會社

（鈴木製本所）

＊落丁・亂丁の際は直接販元にてお取替へ致します